

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第100集

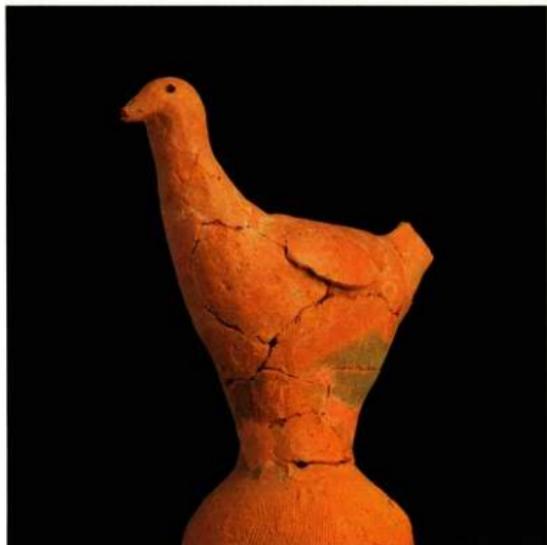
北埼玉郡騎西町

小沼耕地遺跡

県立騎西養護学校関係埋蔵文化財発掘調査報告

1991

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



第 1 号填出土水鳥埴輪



第 1 号填出土猪埴輪



第 1 号墳出土馬形埴輪



青 磁

序

小沼耕地遺跡は、埼玉県北埼玉郡騎西町に所在する遺跡です。この一帯は、利根川・荒川などの河川によって形成された、肥沃な沖積低地が広がっています。周辺には、国宝「金錯銘鉄劍」が出上したことで知られる稻荷山古墳を中心とした埼玉古墳群や、埴輪を生産した多くの窯跡が発見されている^{生出}塚遺跡など、数多くの大規模な遺跡が知られています。

また、小沼耕地遺跡の所在する騎西町上種足は、中世の豪族の館跡である^{故郷}種足城があった地域でもあります。この地に県立騎西養護学校の建設が計画されました。埋蔵文化財の取り扱いについては、関係機関が協議を重ね、当事業団が発掘調査を実施し、その記録を保存することとなりました。

発掘調査の結果、今まで全く存在の予想されていなかった古墳時代後期の前方後円墳や円墳、古墳時代前期の方形周溝墓、中世の掘立柱建物跡や溝などが発見されました。

特に、前方後円墳からは、多量の円筒埴輪とともに、水鳥や猪、馬や人物などといった様々な形象埴輪が出土し、古墳時代の葬送儀礼の中で動物埴輪の果たした役割を考えるうえでの貴重な資料を得ることができました。

また、中世の遺物としては、木製品や青磁・陶器など多くが出上し、この地に、文献により知られる種足城よりも古い時期の館跡があったことも確認されるなど、新たな資料を数多く提供することとなりました。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめた報告書であり、本書が今後の埋蔵文化財の保護に関する教育・普及さらに学術研究の基礎資料としてご活用いただければ幸いです。

刊行に当たり、発掘調査について調整をしていただきました埼玉県教育局指導部文化財保護課をはじめ、発掘調査から本書の刊行に至るまで御協力いただきました埼玉県教育局管理部財務課、さらに騎西町教育委員会および地元関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成3年2月

財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井修二

例　　言

1. 本書は埼玉県北埼玉郡騎西町大字上種足字4番地内に所在する小沼耕地遺跡(委保第5-176号)の発掘調査報告書である。
2. 調査は県立騎西養護学校建設に先立つ事前調査であり、埼玉県教育局指導部文化財保護課の調査を経て、埼玉県教育局管理部財務課の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
3. 本書にかかる発掘調査は、昭和64年1月から平成元年7月まで実施した。調査対象面積は約8,000m²である。報告書作成のための整理作業は平成2年度に受託し、実施した。発掘調査・整理作業の組織は第I章に示した。
4. 出上品の整理及び図の作成は田中正夫が担当した。
5. 出土上器の実測にあたっては、考古学実測図作成システム(PADRAS-M3D・株 パスコ社)を使用した。
6. 本書の執筆は、第I章第1節を県文化財保護課が、付編を除き他を田中正夫が行った。
7. 本書内の挿図における指示は次のとおりである。
 - X・Yによる座標表示は国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を表わし、方位はすべて座標北を示す。
 - 挿図類の縮尺は次の率を基本とし、それ以外のものは個別に示した。

遺構	方形周溝墓	1/120	住居跡	1/60	溝	1/400	古墳断面・溝断面	・掘立柱建物跡・井戸・土壤	1/80	
遺物	上器	1/4	埴輪	1/5	砥石	1/4	他の石製品	1/5	木製品	1/4
土器	1/2	金属製品	1/2							
 - 遺構挿図におけるスクリーントーンの部分は次のことを示す。



ローム地山



焼土

- 遺物挿図におけるスクリーントーン部分は、赤彩の範囲を示す。
- 土器の体部外面および底部にある欠印はすべてヘラケズリの方向を示す。
- 8. 土器観察表の凡例は以下のとおりである。
 - 口径と器高はcmを単位とし、() 内は推定である。
 - 重量はgを単位とし、完形に近いもののみ計測した。
 - 胎土は肉眼で観察した範囲で確認された混入鉱物を記載した。Bは黒色・Rは赤色・Wは白色、W'は白色透明、「褐」は褐色粒子である。また量の「多」「少」は相対的なものである。
 - 色調は「新版標準土色帖」(農林水産技術会議事務局監修1967)による。
 - 注NO.は調査時にとりあげた番号で、遺物に直接注記、あるいはラベルを付してあるものであ

る。

- 測NO.は整理作業において新たに付した番号である。この番号は遺物実測原図に対応し、図を掲載したすべての遺物に付してある。なお、測NO.は必ずしも連続した番号ではない。
- 9. 発掘調査時の写真は、西井幸雄、田中広明、田中正夫、黒坂祐二、岡木健一が撮影し、遺物写真は田中正夫が撮影した。
- 10. 本書に掲載した地形図は、建設省、国土地理院発行の50,000分の1地形図を使用した。
- 11. 付録とした木製品の樹種の同定は、第四紀古植物研究会にお願いしたものである。
- 12. 本書の編集は、資料部資料整理第1課職員及び田中が行った。
- 13. 本書にかかる資料は、平成3年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
- 14. 本書における遺構の略称は次のとおりである。
方形周溝墓 SR 古墳 SS 溝 SD 井戸 SE 土壙 SK
- 15. 本書に掲載した井戸古墳出土馬形埴輪は、大宮市教育委員会編『稻荷塚古墳周溝確認調査報告』大宮市文化財調査報告書 第23集（1987）から、また、生出塚遺跡出土馬形埴輪は、鴻巣市史編さん室編『鴻巣市史 資料編1考古』（1989）から再トレースして掲載させていただいた。
- 16. 本書の作成にあたり、下記の方々から御指導・御助言をいただいた。心から御礼申し上げます。
(敬称略)
浅野晴樹 太田博之 坂本征男 笹森紀己子 烏村範久 烏村英之 谷井 駿 塚田良道
中島利治 山形洋一 山崎 武

目 次

序

例言

I 調査の概要	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 調査の経過	3
II 遺跡の立地と環境	6
III 遺跡の概要	9
IV 検出された遺構と遺物	11
1. 古墳時代の遺構と遺物	11
(1) 方形周溝墓	11
(2) 住居跡	24
(3) 古 墳	25
2. 中世以降の遺構と遺物	91
(1) 掘立柱建物跡	92
(2) 基壇状遺構	101
(3) 溝	104
(4) 井 戸	114
(5) 土 壁	116
(6) 中世の遺物	120
(7) その他の遺物	154
V 結 語	155
付 編	163

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	4	第34図	円筒埴輪(1)	42
第2図	グリット展開網図	5	第35図	円筒埴輪(底部)出土位置図	43
第3図	周辺の遺跡	7	第36図	円筒埴輪出土位置図(1)	44
第4図	全測図	10	第37図	円筒埴輪出土位置図(2)	45
第5図	第1号方形周溝墓	12	第38図	朝顔形円筒埴輪(1)	49
第6図	第1号方形周溝墓出土遺物	13	第39図	朝顔形円筒埴輪(2)	50
第7図	第1号方形周溝墓遺物出土位置図	14	第40図	朝顔形円筒埴輪出土位置図	51
第8図	第2号方形周溝墓	15	第41図	ヘラ記号のある円筒埴輪	53
第9図	第3号方形周溝墓	16	第42図	ヘラ記号のある円筒埴輪出土位置図	55
第10図	第3号方形周溝墓出土遺物	17	第43図	形象埴輪(人物1)	57
第11図	第3号方形周溝墓遺物出土位置図	18	第44図	形象埴輪(人物2)	58
第12図	第4号方形周溝墓	18	第45図	形象埴輪(人物3)	59
第13図	第4号方形周溝墓出土遺物	19	第46図	埴輪片の部位(人物)	59
第14図	第4号方形周溝墓遺物出土位置図	20	第47図	形象埴輪(動物1)	65
第15図	第5号方形周溝墓	21	第48図	形象埴輪(動物2)	66
第16図	第5号方形周溝墓出土遺物	22	第49図	形象埴輪(動物3)	67
第17図	第5号方形周溝墓遺物出土位置図	22	第50図	形象埴輪(動物4)	68
第18図	第1号住居跡	24	第51図	形象埴輪(動物5)	69
第19図	第1号墳	26	第52図	形象埴輪(動物6)	70
第20図	第1号墳土層断面図(1)	27	第53図	埴輪片の部位(馬)	71
第21図	第1号墳土層断面図(2)	28	第54図	埴輪片の部位(動物)	71
第22図	第1号墳土層断面図(3)	29	第55図	形象埴輪(盾1)	74
第23図	第1号墳出土上器	30	第56図	形象埴輪(盾2)	75
第24図	第1号墳土師器出土位置図	32	第57図	形象埴輪(盾3)	76
第25図	円筒埴輪(1)	33	第58図	埴輪片の部位(盾)	78
第26図	円筒埴輪(2)	34	第59図	形象埴輪(その他1)	79
第27図	円筒埴輪(3)	35	第60図	形象埴輪(その他2)	80
第28図	円筒埴輪(4)	36	第61図	形象埴輪(その他3)	81
第29図	円筒埴輪(5)	37	第62図	形象埴輪出土位置図	83
第30図	円筒埴輪(6)	38	第63図	第2号墳	84
第31図	円筒埴輪(7)	39	第64図	第2号墳土層断面図	86
第32図	円筒埴輪(8)	40	第65図	第2号墳土師器分布位置図	86
第33図	円筒埴輪(9)	41	第66図	第2号墳出土土器	87

第67図 石棺、石室材	89	第97図 中世陶器(2)	123
第68図 墓丘上遺構図	91	第98図 中世陶器(3)	124
第69図 掘立柱建物跡位置図	92	第99図 中世陶器(4)	125
第70図 第1号掘立柱建物跡	93	第100図 中世陶器(5)	126
第71図 第2号掘立柱建物跡	94	第101図 転用陶器片	128
第72図 第3号掘立柱建物跡	94	第102図 墨書き石と鉄製品	129
第73図 第4号掘立柱建物跡	95	第103図 石製品(1)	131
第74図 第5号掘立柱建物跡	96	第104図 石製品(2)	132
第75図 第6号掘立柱建物跡	98	第105図 石製品(3)	133
第76図 第7号掘立柱建物跡	98	第106図 中世陶器片出土位置図	135
第77図 第8号掘立柱建物跡	99	第107図 青磁、石製品出土位置図	136
第78図 第9号掘立柱建物跡	100	第108図 鉄製品、石製品出土位置図	136
第79図 基壇状遺構	101	第109図 緑泥片岩出土位置図	137
第80図 基壇上の遺構	101	第110図 遺物垂直分布図	140
第81図 基壇状遺構下の遺構	102	第111図 角閃石出土位置図	140
第82図 第43分溝壇状遺構	102	第112図 木製品(1)	142
第83図 基壇状遺構土層断面図	103	第113図 木製品(2)	143
第84図 溝平面図の位置	104	第114図 木製品(3)	144
第85図 溝(1)	106	第115図 木製品(4)	145
第86図 溝(2)	107	第116図 木製品(5)	146
第87図 溝(3)	108	第117図 木製品出土位置図	150
第88図 溝(4)	109	第118図 その他の遺物	154
第89図 井戸位置図	114	第119図 生出塚遺跡・井刈古墳出土馬形埴輪	155
第90図 井戸	115	第120図 形象埴輪(人物・動物)出土位置図	156
第91図 土壙位置図	116	第121図 形象埴輪(看)出土位置図	157
第92図 土壙(1)	117	第122図 掘立柱建物跡・溝変せん図(1)	158
第93図 土壙(2)	118	第123図 掘立柱建物跡・溝変せん図(2)	159
第94図 溝、井戸、土壙、Grid出土遺物	119	第124図 掘立柱建物跡・溝変せん図(3)	159
第95図 磁器	120	第125図 緑泥片岩重量偏差分布図	160
第96図 中世陶器(1)	122		

表 目 次

第1表	第1号方形周溝墓出土遺物	15	第14表	石棺・石宝材	89
第2表	第3号方形周溝墓出土遺物	17	第15表	溝一覧表	113
第3表	第4号方形周溝墓出土遺物	19	第16表	井戸一覧表	114
第4表	第5号方形周溝墓出土遺物	23	第17表	土壤一覧表	116
第5表	第1号墳出土遺物	31	第18表	溝・井戸・土壤・Grid出土遺物	119
第6表	第1号墳出土円筒埴輪	46	第19表	磁器	120
第7表	第1号墳出土朝顔形円筒埴輪	52	第20表	中世陶器	127
第8表	ヘラ記号のある円筒埴輪	54	第21表	転用陶器片	128
第9表	形象埴輪(人物)	60	第22表	石製品	134
第10表	形象埴輪(動物)	71	第23表	縁泥片岩重量分布表	138
第11表	形象埴輪(盾)	77	第24表	木製品(1)	147
第13表	第2号墳出土遺物	88	第25表	木製品(2)	148
第12表	形象埴輪(その他)	82			

図版目次

- 卷頭図版 1 水鳥形埴輪
猪形埴輪
- 卷頭図版 2 馬形埴輪
青磁
- 図版 1 第1号方形周溝墓
第1号方形周溝墓遺物出土状況
- 図版 2 第3号方形周溝墓（西から）
第3号方形周溝墓（北から）
- 図版 3 第4・5号方形周溝墓
第4号方形周溝墓遺物出土状況
- 図版 4 第1号墳
- 図版 5 第1号墳（西から）
第1号墳土師器出土状況(1)
第1号墳土師器出土状況(2)
第1号墳形象埴輪（馬）出土状況
第1号墳形象埴輪（鳥）出土状況
- 図版 6 第1号墳形象埴輪（猪）出土状況
第2号墳
- 図版 7 調査区南側航空写真
- 図版 8 基壇状造構下の遺構（東から）
基壇状造構下の遺構（西から）
- 図版 9 第14号井戸木製品出土状況
第44号溝木製品出土状況
第44号溝土層断面（南）
第44号溝土層断面（北）
第29号溝土層断面
第43号溝土層断面
第43号溝上層板状造構
第43号溝下層板状造構
- 図版10 第1号掘立柱建物跡
第4・5号掘立柱建物跡
第1号井戸木製品出土状況
第4・5号掘立柱建物跡
調査区南側ピット群
- 図版11 方形周溝墓出土遺物(1)
- 図版12 方形周溝墓出土遺物(2)
- 図版13 第1号墳出土遺物(1)
- 図版14 第1号墳出土遺物(2)
- 図版15 第1号墳出土遺物(3)
第1号墳出土円筒埴輪(1)
- 図版16 第1号墳出土上円筒埴輪(2)
- 図版17 第1号墳出土円筒埴輪(3)
- 図版18 第1号墳出土七円筒埴輪(4)
- 図版19 第1号墳出土上朝顔形円筒埴輪(1)
- 図版20 第1号墳出土朝顔形円筒埴輪(2)
第1号墳出土朝顔形円筒埴輪(3)
ヘラ記号のある円筒埴輪
- 図版21 第1号墳出土形象埴輪（人物1）
- 図版22 第1号墳出土形象埴輪（人物2）
- 図版23 第1号墳出土形象埴輪（動物1）
- 図版24 第1号墳出土形象埴輪（動物2）
- 図版25 第1号墳出土形象埴輪（動物3）
- 図版26 第1号墳出土形象埴輪（動物4）
- 図版27 第1号墳出土形象埴輪（動物5）
- 図版28 第1号墳出土形象埴輪（盾1）
- 図版29 第1号墳出土形象埴輪（その他）
- 図版30 第2号墳出土遺物(1)
第2号墳出土遺物(2)
石棺・石室材
- 図版31 青磁
- 図版32 中世陶器(1)
- 図版33 中世陶器(2)
転用陶器片
- 図版34 中世陶器押印
- 図版35 墨書き
- 石製品(1)
- 図版36 石製品(2)
鉄製品
- 図版37 木製品(1)

- | | |
|--------------------------------|-----------------------------------|
| 図版38 木製品(2) | 図版(付編) 1 小沼耕地遺跡出土木製品の
顕微鏡写真(1) |
| 図版39 木製品(3)礎板 | 図版(付編) 2 小沼耕地遺跡出土木製品の
顕微鏡写真(2) |
| 図版40 木製品(4)礎板・柱 | 図版(付編) 3 小沼耕地遺跡出土木製品の
顕微鏡写真(3) |
| 図版41 木製品(5)柱・杭 | 図版(付編) 4 小沼耕地遺跡出土木製品の
顕微鏡写真(4) |
| 図版42 木製品(6)加工材
種子
その他の遺物 | 図版(付編) 5 小沼耕地遺跡出土木製品の
顕微鏡写真(5) |
| | 図版(付編) 6 小沼耕地遺跡出土木製品の
顕微鏡写真(6) |

I. 調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県教育委員会では県立の育学校、ろう学校、養護学校の児童・生徒の障害の多様化に対応し、障害の状況に適した教育を行うための条件整備を急務とし、さまざまな事業を実施している。特に、盲、ろう、養護学校の教職員の確保、スクールバスの運行、教材等設備の整備、教育方法開発特別設備の整備、特殊教育振興協議会の開催などはその中心となるものである。

北埼玉郡騎西町上種足地内に、約120名の児童・生徒が在籍できる県立騎西養護学校の建設もその一環として計画されたものである。

同養護学校の建設計画にあたり、昭和63年9月28日付け教財第729号で教育局財務課長から文化財保護課長あて「騎西養護学校（仮称）建設予定地内における文化財の所在及び取り扱いについて」照会があった。文化財保護課では、同建設予定地内には周知の埋蔵文化財は所在しないが、周辺の埋蔵文化財の状況からその存在が予想されたため所在確認調査を実施することとした。

所在確認調査は昭和63年11月14日から18日までの5日間実施した。その結果、古墳時代を中心とする遺構・遺物が検出されたため、昭和63年11月30日付け教文第7823号をもって、文化財保護課長から財務課長あて次のとおり回答した。

- 1 県立騎西養護学校建設予定地内には埋蔵文化財包蔵地が所在する。
- 2 上記の埋蔵文化財包蔵地は保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更しようとする場合は、当課と別途協議すること。

その後、財務課と文化財保護課との間で埋蔵文化財の保存について協議を重ねたが、その建設の主旨、緊急かつ必要性等から記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施することになり、平成元年1月11日に同事業団と埼玉県との間で発掘調査に関する委託契約が締結された。

その後、埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から文化財保護法第57条1項に基づく届け出が文化庁長官あて提出され、平成元年1月から発掘調査が開始された。

文化庁からは平成元年11月2日付け委保第5-176号をもって埋蔵文化財発掘調査に対する通知があった。

なお、県立騎西養護学校は発掘調査終了後ただちに着工し、平成2年4月に開校となった。

(文化財保護課)

発掘調査の組織

1. 発掘調査（昭和63年度）

主 体 者	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	発 指	
理 事 長	長 井 五 郎	理事兼調査研究部長	吉 川 國 男
副 理 事 長	百瀬 陽 二	調査研究部副部長	塙 野 博
常 務 理 事 兼 調 査 研 究 部 長	早 川 智 明	調査研究第3課長	宮 崎 朝 雄
理 事 兼 管 理 部 長	原 田 家 次	調 査 員	田 中 正 夫
應 務 経 理		調 査 員	黒 坂 滉 二
理 事 兼 管 理 部 長	原 田 家 次	調 査 員	田 中 広 明
管 理 課 長	関 野 栄 一	調 査 員	岡 本 健 一
主 事	江 田 和 美	3. 整理事業（平成2年度）	
主 事	岡 野 美 智 子	主 体 者	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
主 事	本 庄 朗 人	理 事 長	荒 井 修 二
主 事	齊 藤 勝 秀	副 理 事 長	早 川 智 明
発 指		常 務 理 事 兼 管 理 部 長	古 市 芳 之
常 務 理 事 兼 調 査 研 究 部 長	早 川 智 明	理 事 兼 調 査 部 長	吉 川 國 男
調 査 研 究 部 副 部 長	塙 野 博	應 務 経 理	
調 査 研 究 第 3 課 長	宮 崎 朝 雄	常 務 理 事 兼 管 理 部 長	古 市 芳 之
調 査 員	西 井 幸 雄	主 査	松 本 晋
調 査 員	田 中 広 明	應 務 課 長	高 田 弘 義

2. 発掘調査（平成元年度）

主 体 者	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	発 指	
理 事 長	荒 井 修 二	主 事	江 田 和 美
副 理 事 長	早 川 智 明	主 事	本 庄 朗 人
常 務 理 事 兼 管 理 部 長	古 市 芳 之	主 事	菊 池 久
理 事 兼 調 査 研 究 部 長	吉 川 國 男	主 事	齊 藤 勝 秀
應 務 経 理		整 理	
常 務 理 事 兼 管 理 部 長	古 市 芳 之	資 料 部 長	栗 原 文 藏
管 理 課 長	関 野 栄 一	資 料 部 副 部 長 兼	
主 事	江 田 和 美	資 料 整 理 第 1 課 長	増 田 逸 朗
主 事	岡 野 美 智 子	調 査 員	田 中 正 夫
主 事	本 庄 朗 人	4. 協 力 者	
主 事	齊 藤 勝 秀	駒 西 町 教 育 委 員 会 お よ び 地 元 住 民 各 位	

2. 調査の経過

(1) 発掘調査

発掘調査は1989年(昭和64年)1月5日から同年(平成元年)7月31日にかけて行なわれた。調査対象区総面積は、約8,000m²である。調査対象区は水田として利用されていて、調査面は、周辺の水田より低く、用水が引かれる時期には、調査区への水の流入や、湧水が予想されたため、調査区を全周する排水溝を重機により設けて調査を開始した。

1月 準備期間の後、現場事務所等を設置するとともに、ベルトコンベア用の動力引き込み、調査区の安全柵の設置を開始する。重機により排水溝を設置したのち、表上の除去作業を行う。その後、遺構の確認作業を開始する。

表土の除去が終了したのち基準点測量を行う。基準点測量はシン航空写真株式会社に委託し、9m正方眼のグリッドおよび標高杭を設置した。

調査区の周囲に巡らせた排水溝には水中ポンプを入れ強制排水を開始する(調査終了時まで継続)。2~3月 遺構確認の終了した調査区の北側から遺構の精査にとりかかる。併行して調査区中央付近で確認された前方後円墳(1号墳)の精査を行う。

調査区の南辺にあった水路の付け替え予定地については、3月から精査を開始し、遺構精査終了後、実測し調査を終了した。

4月 調査員を4人に増員し、継続して調査を行う。前方後円墳の調査と併行して、方形周溝墓(2号~3号)及び調査区北半の溝、土壤、井戸、ピット等の精査を行う。4月27日精査の終了した前方後円墳及び調査区北東半分の空中写真測量(図化は平成2年度)を実施する。空中写真測量はシン航空株式会社に委託した。

5月 基壇状遺構並びに2号墳とその周辺の溝、土壤等の精査を行い、調査の終了した調査区北東半分の埋め戻しを開始する。5月30日、2回目の空中写真測量(図化は平成2年度)を行う。

6月 空中写真撮影時に未調査であった溝、土壤、井戸等の精査を行い、6月30日すべての調査を終了し、器材の撤収を行なった。

(2) 整理作業

整理作業及び報告書の刊行は、1990年(平成2年)4月1日から翌1991年(平成3年)3月31日まで実施した。

4月 遺物の水洗・注記・および接合・復元を開始する。

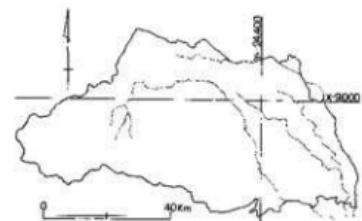
5~7月 接合・復元と平行して図面整理を行う。

8~9月 復元を終了し、実測・拓本を開始する。

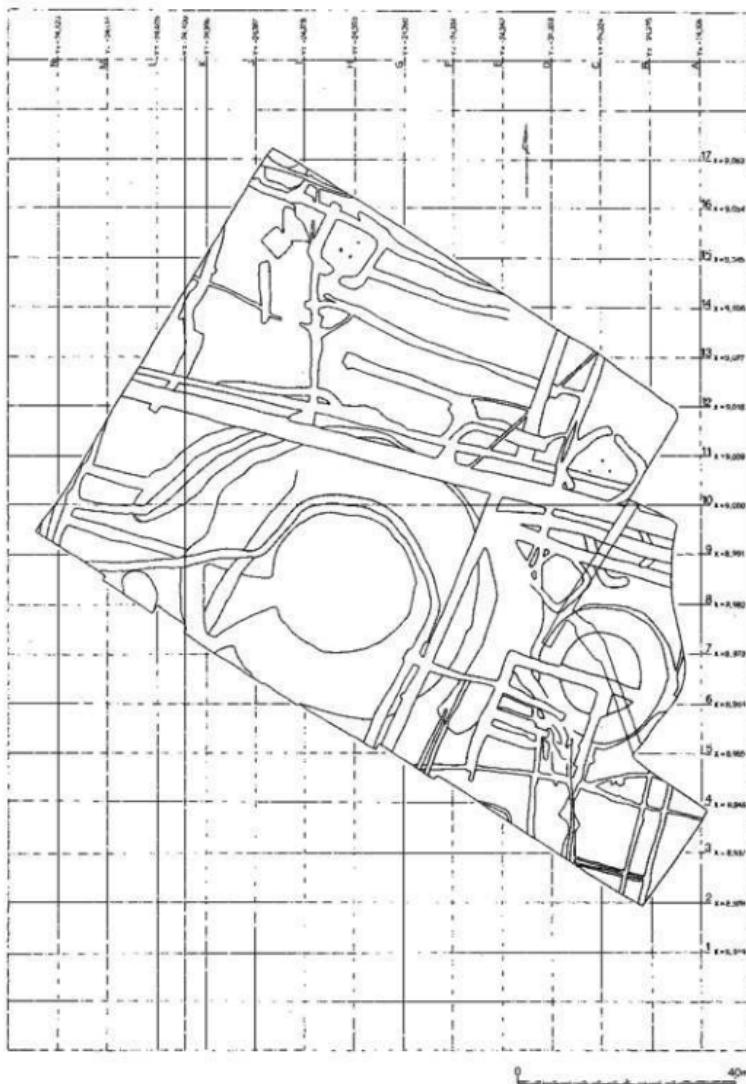
10~11月 実測・拓本を終了し、遺物トレースを行う。

12~1月 遺物・遺構トレースを終了、版下作成を行う。報告書の割り付けを行ない、遺構写真選択、遺物写真撮影を実施する。資料収集および原稿執筆を開始する。

2~3月 原稿執筆・編集を終了し、報告書を刊行する。



第1図 道路位置図 (1 : 10,000)



第2図 Grid展開網図 (1:1,000)

II. 遺跡の立地と環境

埼玉県の北部を流れる利根川の右岸には、妻沼・加須・中川低地が発達し、現荒川流域には、荒川低地が発達している。これらの低地の中に大宮台地が存在する。小沼耕地遺跡は、大宮台地の北辺に位置する遺跡である。

小沼耕地遺跡の所在する騎西町から行田市に至る地域は、秩父山地に源を発する荒川が、南東方向に流れを転ずる荒川扇状地の東南方にあたり、また古利根川が南東方向に流れを転ずる地域でもある。両河川や、中小河川の乱流により、この地域で大宮台地は、開析・分断され、北西から南東に延びる細長い台地となった。さらに河川により北西から南東方向へ、幾条もの自然堤防が形成された。

また、この地域は、いわゆる「関東造盆地運動」という地盤の沈降現象が認められる地域でもあり、さらに利根川・荒川などの河川による堆積土に覆われ、洪積台地は、自然堤防のような、微高地状の地形を呈する。小沼耕地遺跡は、こういった水田下に埋没した洪積台地上に立地する。

近年羽生市では、水田下に2~3mも埋没した古墳が発見され、行田市域などでは、墳丘は削平されてはいるものの、水田下に埴輪列が検出された古墳も多い。また行田市の東方に所在する真名板高山古墳は、現地表の3~5m下にローム基盤をもつという調査結果が示されるなど、この地域における洪積台地の沈降が、予想以上に大きいことが明らかとなってきている。これらのことを考えあわせると、小沼耕地遺跡の立地する洪積台地も、現況では水田下に埋没した状態であるが、古墳時代には、少なくとも低台地状の地形を呈していたものと推定されるのである。

小沼耕地遺跡の周辺では、先上器時代の遺跡が調査された例は、鴻巣市中三谷遺跡などごく少数である。縄文時代の遺跡としては、川里村赤城遺跡・鴻巣市中三谷遺跡が後期・晩期を中心とする大規模な遺跡としてあげられるが、それ以外は調査された例は比較的少ない。これらの遺跡は、埋没したローム台地上に立地するものであるが、現況では、地表からかなり深い位置から遺物が検出される。先述のとおり、洪積台地は埋没しているため、遺跡の所在確認が難しいこともあり、今後の確認作業が進むにつれ、遺跡数は増加することが予想される。

弥生時代中期の遺跡としては、行田市から熊谷市にかけて所在する小敷田・池上の両遺跡があげ

周辺の遺跡

1. 小沼耕地遺跡	2. 酒巻古墳群	3. 斎条古墳群	4. 小見古墳群
5. 新郷古墳群	6. 若小玉古墳群	7. 埼玉古墳群	8. 佐間古墳群
9. 愛宕古墳群	10. 小針遺跡	11. 真名板高山古墳	12. 小針鐵塚古墳
13. 若土子古墳	14. 八幡山古墳	15. 小見真綿寺古墳	16. とやま古墳
17. 酒巻1号墳	18. 大日塚古墳	19. 袋・台遺跡	20. 陣場遺跡
21. 鴻池遺跡	22. 武良内遺跡	23. 高畠遺跡	24. 道智氏館跡
25. 戸崎城跡	26. 多賀谷氏館跡	27. (古墳時代)	28. (古墳時代)
29. 檀垂城跡	30. (古墳時代)	31. 私市城跡	32. 安養寺古墳群
33. 笠原古墳群	34. 生出塚遺跡	35. 下闇遺跡	36. 赤古遺跡
37. 桜間古墳群	38. 羽生古墳群	39. 笹田古墳群	40. 東浦古墳



第3図 周辺の道路 (1 : 100,000)

られる。両遺跡は隣接するもので、埋没した小河川跡の両岸に立地する。本来1つの遺跡と考えられるものである。両遺跡は、須和田期の多数の住居跡の他、方形周溝墓も数基検出されており、また、木製品や炭化米も出土している。荒川環状地東方の氾濫原に、稻作農耕が定着していく過程を示す遺跡として注目されている。

古墳時代に入ると、鴻池遺跡・武良内遺跡（五領・和泉）、高畠遺跡（五領・和泉・鬼高）、白鳥田遺跡・小敷田遺跡・池守遺跡（五領・鬼高）、小針北遺跡（和泉）、陣場遺跡・袋・古遺跡・小針遺跡（鬼高）など多くの遺跡で住居跡あるいは方形周溝墓が検出されている。これらの遺跡は、埋没した洪積台地や自然堤防上に立地するもので、特に、鬼高期に入ると、広範囲・長期間にわたる集落が営まれるようになる。これは、5世紀末頃に突如造営を開始する埼玉古墳群との関わりによるものと理解される。

小沼耕地遺跡の北西約8kmに埼玉古墳群がある。埼玉古墳群は、5世紀末に築造されたと考えられる鷺荷山古墳を始めとし、直径102mの円墳である丸墓山古墳、北武藏地域最大の前方後円墳である二子山古墳など、大型・中型の前方後円墳8基と、大型円墳1基、その他に中型・小型の円墳數十基からなる古墳群である。また大型・中型の古墳は南北約900mの範囲に密集しており、しかも百数十年の間に、次々と築造された古墳群である。埼玉古墳群の北方1.5kmには若小玉古墳群がある。若小玉古墳群には、前方後円墳の他、巨大な横穴式石室をもつ大型の円墳八幡山古墳や、線刻壁画のある横穴式石室をもつ地蔵塚古墳が存在する。さらに北方には小見古墳群があり、主軸長100mの小見真觀寺古墳がある。埼玉古墳群の東方には、既に消滅したが、主軸長100mを超す若王子古墳を中心とした愛宕古墳群があり、また埼玉古墳群の東方約4kmには、主軸長105mを超す真名板高山古墳が存在する。

埼玉古墳群の立地する埋没台地の南東側延長上には、大規模な古墳は認められないが、安養寺古墳群・笠原古墳群と続き、主軸長100mの天王山塚古墳を中心とする柏間古墳群が存在する。また近半柄間古墳群の北東約2.5kmに前方後円墳である東浦古墳が発見された。

小沼耕地遺跡は、埼玉古墳群の南東約8km、天王山塚古墳の北方約4km、東浦古墳の北西約4km、笠原古墳群とは、沖積低地を隔てて約2.5kmの位置にある。大規模な埴輪生産跡と、円墳群が検出された鴻巣市生出塚遺跡からも約4kmの位置にある。これらの遺跡はほぼ同時期のものであり、小沼耕地遺跡で検出された古墳は、上記の遺跡と密接な関係をもって成立したことがうかがえる。

周辺の中世の遺跡としては、中三谷遺跡があり、14世紀～15世紀の鉢跡が検出されている他、同じ騎西町には、多賀谷氏館跡、戸崎城跡の2箇所が中世の館跡として知られる。また16世紀以後のものとしては、北東約3kmに私市城がある。なお、小沼耕地遺跡周辺は15世紀の文献に記される種重城があったと推定される地域である。

参考文献

- 坂口萬吉 「行田市眞名板高山古墳北側の埋没周講調査報告書」 1990
柳川敏司他 「埼玉鷺荷山古墳」 埼玉県教育委員会 1980
「埼玉県埋蔵文化財調査年報 昭和61年度」 埼玉県教育委員会 1987
「鴻巣市史 資料編1考古」 鴻巣市史編さん室 1989

III. 遺跡の概要

今回の調査で検出された遺構は、古墳時代前期の方形周溝墓5基、住居跡1軒、古墳時代後期の前方後円墳1基、円墳1基、鎌倉時代の基壇状遺構1、掘立柱建物跡9棟、時期不明のものもあわせ溝45条、井戸14基、土塁31基であった。

方形周溝墓は、いずれも五頭期の範囲であるが大略2時期あり、1号・3号が新しい時期の所産と考えられる。出土遺物は、1号方形周溝墓からは比較的多く出土したが、全体的に少ない。主な遺物は、高杯・器台・甕・壺である。住居跡は、1軒確認されたが、確認面から非常に浅く、また出土遺物も、五頭期の土師器小片と思われるものが數片覆土中に含まれていただけであった。

古墳は、前方後円墳(1号墳)と円墳(2号墳)が検出された。共に墳丘は削平され、内部主体も不明である。1号墳は、主軸長約39mであり、前方部を西に向ける。前方部は、著しく細く、特異な形態を示す。墳丘規模に比して、特徴的なのは、不整形かつ、断続的ながらも二重の周堤を持つことである。

遺物は、周堀覆土中から多量の円筒埴輪とともに、形象埴輪が出土した。形象埴輪は、復原できた人物頭部から胴部が4個体、いずれも女子である。他に顔の部分の破片があり、最低7個体分の破片が出土している。動物埴輪では復原できたものは、ほぼ完形に近い水鳥1、他に水鳥頭部2、猪頭部1、馬頭部1などである。他に馬や鹿の角と思われるもの、犬の顔の部分と思われるものなど動物の破片が多数ある。器物埴輪では、盾形埴輪が多く、最低5個体あるものと考えられる。埴輪はいずれも、内堀から出土したが、形象埴輪の多くは、くびれ部付近に集中していた。また周堀覆土中からは、供獻したと思われる上師器杯が5個体づつ、2箇所から検出され、2度にわたる墓前祭祀が行なわれたことを示す。2号墳でも、5個体の上師器杯が周堀覆土中から出土した。

中世の遺構としては、掘立柱建物跡9棟がある。その内2棟(3号・4号掘立柱建物跡)は、ピットの中に礎石の替わりに、大きな木材(礎板)を入れ、その上に柱を建てたものである。柱は、その痕跡を留めるだけであったが、礎板は比較的良好な状況で残されていた。この2棟の他、他の掘立柱建物跡も、重複しており、また、基壇状の遺構をとり囲む溝の造り替え等により、小沼耕地遺跡では、最低3時期の変遷が考えられる。基壇状の遺構は、その内の2次期日及び、3時期日のものと考えられる。

中世の出土遺物は、埼玉県内では比較的豊富なもので、青磁片の他、多くの陶器片があり、陶磁器の器形等から13世紀後半から14世紀前半頃のものと考えられる。また下駄、曲げ物、箸、蓋、建築部材、砧状の製品などの木製品も出土している。石製品では温石、石臼片、板碑片などがある。注目すべきものとしては黒書石が2点あり、内1点は経文の一節を写したものである。これらの遺物は、基壇状遺構の周辺の溝や、掘立柱建物跡周辺だけではなく、1号墳の墳丘を巡る中世の溝と、その溝に画された1号墳周堀覆土中から出土し、それらとともに大量の縁泥片岩の小片が出土したことは興味深い点である。なお基壇状遺構の周囲を巡る溝(SD44)からは、約5,500個の桃の種子が出土している。

井戸・土塁は、時期不明のものが多いが、中世の建物跡に伴うものもある。また溝についても同様時期不明のものが多いが、溝の約半分は近世以後のものであり現代に至るものもある。

第4圖 遊樂全圖圖 (1 : 700)



IV. 検出された遺構と遺物

1. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 方形周溝墓

第1号方形周溝墓 (SR1)

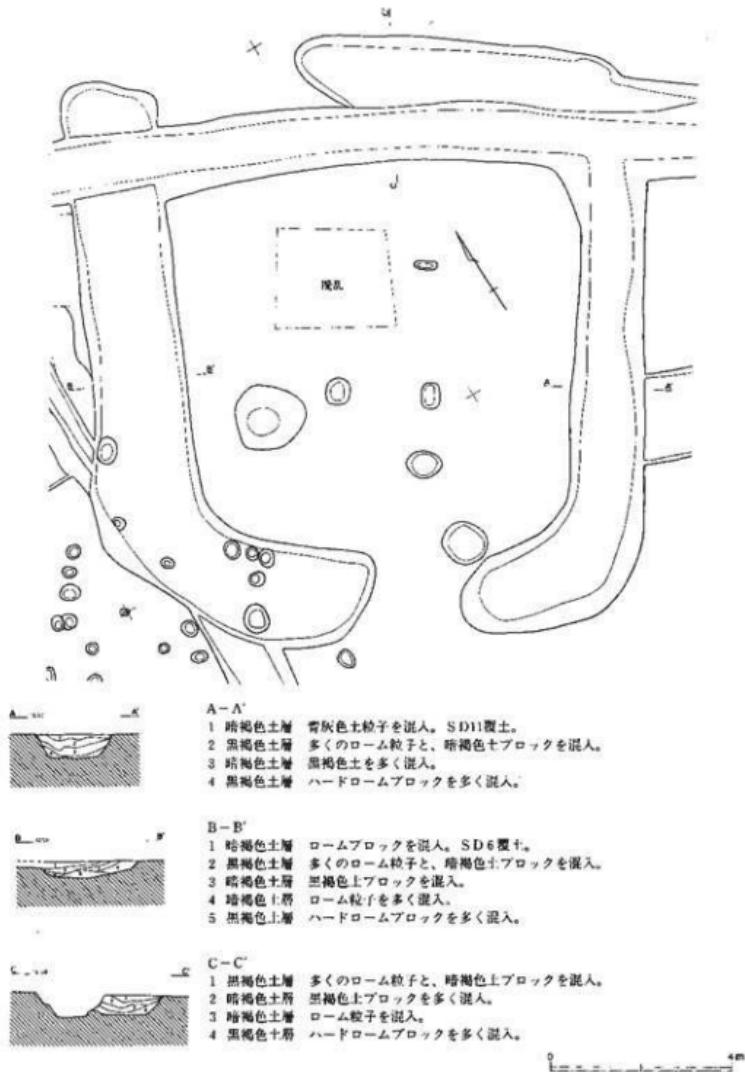
G・H-14・15, H-16 Gridに位置し、第2・6・11号溝によって切られている。特に第2号溝は、周溝底をかなり削っている。また第2号井戸と、第5・6号土壙が周溝の区画内にある。周溝は全周せず、南側の中央部と、北辺の西側隅が切れる。埋葬施設は検出されなかった。プランは、ほぼ正方形であるが、南側がやや狭くなっている。規模は、確認面の周溝内側上端部で東西7.7m、南北8.4mを測る。周溝幅は西側で1.8m東側で1.3m前後である。周溝底はほぼ平坦であり、溝内埋葬の痕跡は認められなかった。主軸は、N-32°-Eである。

周溝の覆土は、基本的には上層が黒褐色土で、ローム粒子を多く混入したものである。中層は、暗褐色土で、黒褐色土上のブロックを多く混入している。最下層は、黒褐色土でハードロームブロックを混入するものであった。

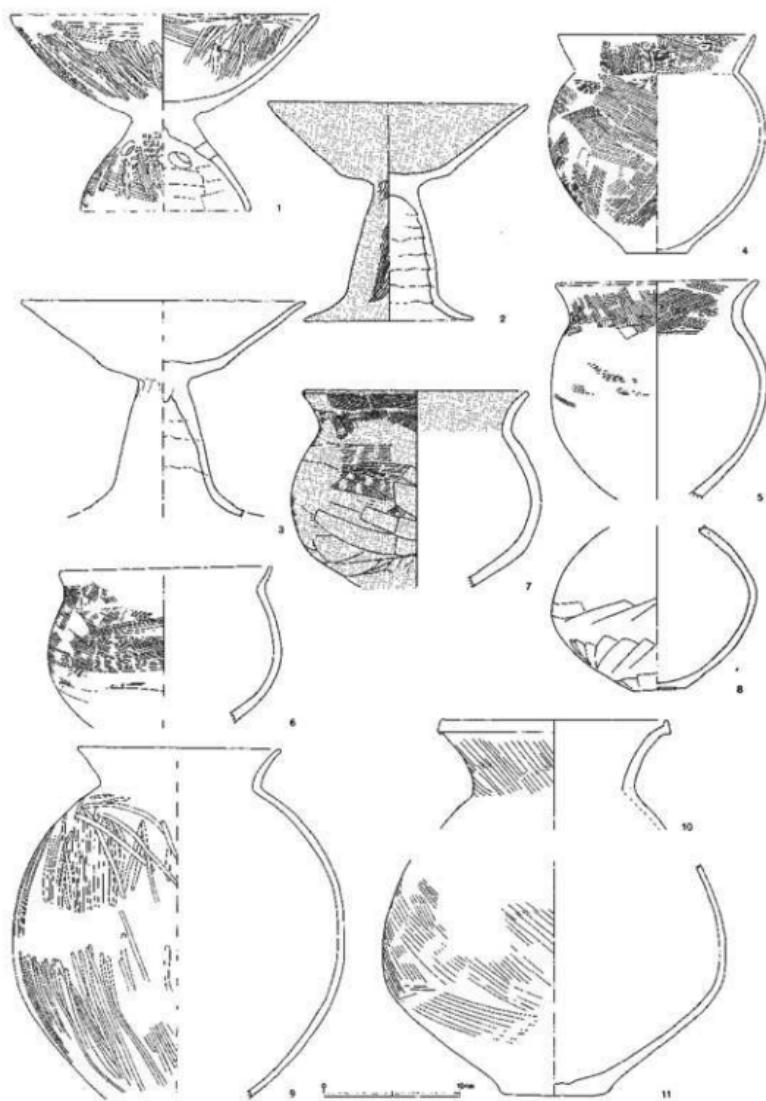
周溝に画された中央に、ほぼ長方形の3点にあたる位置でピットを検出した。他の1点にあたる部分には、搅乱があり、検出できなかった。検出された3基は、いずれもロームブロックを混入した暗褐色土が覆土で、埋め戻した状況であった。北側の1基はやや小形で底部の状況は不明瞭であったが、南側の2基は、底部中央がやや窪み柱状のものを建てた痕跡が認められた。いずれも覆土中に遺物はなく、時期不明のものである。検出された位置以外、直接方形周溝墓に伴うものであるという根拠はない。

出土遺物は、高杯3点、甕4点、鉢1点、壺2点の計10点である。西辺・南辺・東辺の周溝から出土し、周溝墓の南半に集中している。1.5~2.0mの間隔をおいて検出された。いずれも周溝底面より、やや浮いた状況で出土した。検出された間隔は、区画内に据置かれた間隔を反映しているものである可能性が考えられる。

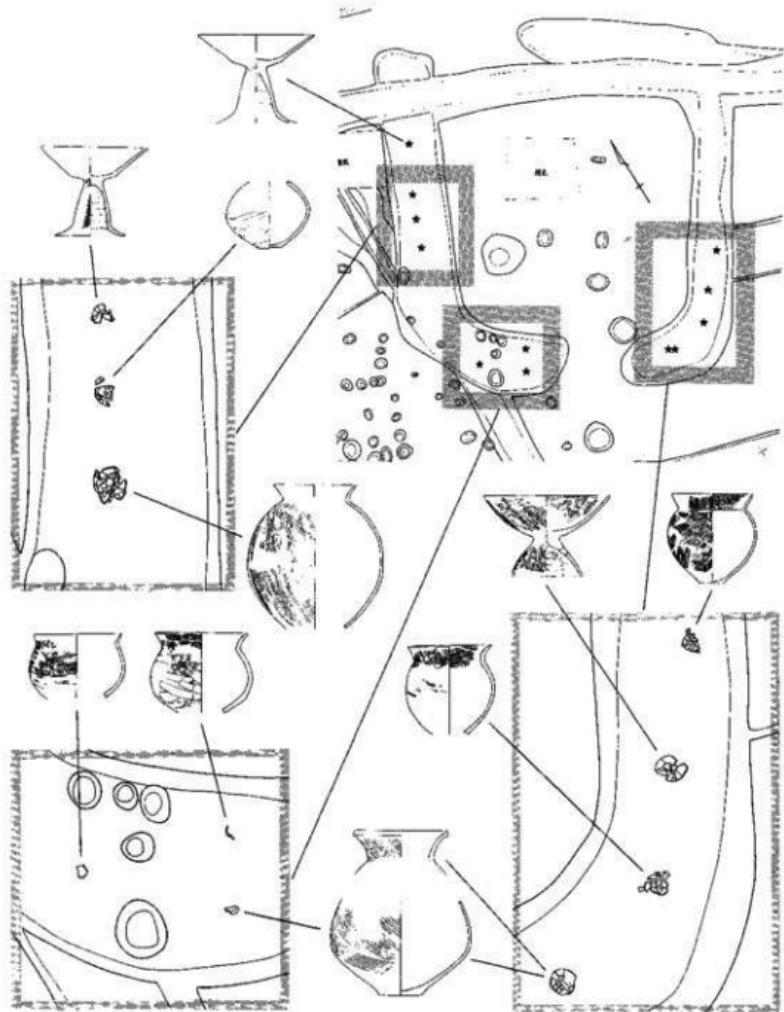
出土遺物（第6図）のうち1は、杯部外面に明瞭な段をもたず、接合部から緩やかに内擣しながら立ちあがる。口唇部端部内側は、明瞭な平面をなす。脚部も内擣し、端面は平坦である。透しは四方にあり、間隔・高さ共に不揃いである。脚部内面は範割り、杯部内面と外面は、丁寧な範みがきが施されている。2は、杯部外面に稜を持ち、立ち上がりも直線的である。脚部は接合部からややふくらみ、下端はやや外反しながら開く。内面には輪積み痕を明瞭に残し、外面は範みがきが施されている。杯部はナデられている。3は、 $\frac{1}{4}$ 程の破片からの復原である。形態は2とほぼ同様であるが、接合部に明瞭な接合痕を残す。また脚部の範みがやや少ない。4、5、6は甕である。4は、外面及び口縁内面に明瞭なハケ目を残すが、口縁外面上部は横ナデが施されている。5は頸部が緩やかに弯曲しながら口縁部に至るもので、口唇端は明瞭な面をなす。胴部内面はナデ、外面はハケ目を残す。口縁部は内外面ともハケ目を明瞭に残すが、端面近くはナデを施す。6は、口縁部が短く、やや内擣しながら立ち上がる。外面及び口縁内面はナデが施されるが、浅いハケ目を残す。



第5図 第1号方形周溝渠



第6圖 第1号方形周溝墓出土遺物



第7図 第1号方形周溝墓出土位置図

7は、胸部下半からやや直線的に底部へとむかい、緩やかな稜をもつ。口縁端部は面をなす。外面及び口縁内面はナデが施されているが、部分的に浅いハケ目を残す。なお外面及び口縁部内面は、赤彩が施されている。8は、胸部の中央がややとがった感じで張り出す。胸部外面は磨かれているが、笠削りの痕跡が認められる。9は、口径の小さな蓋で、球形の胸部から、やや外反する口縁を

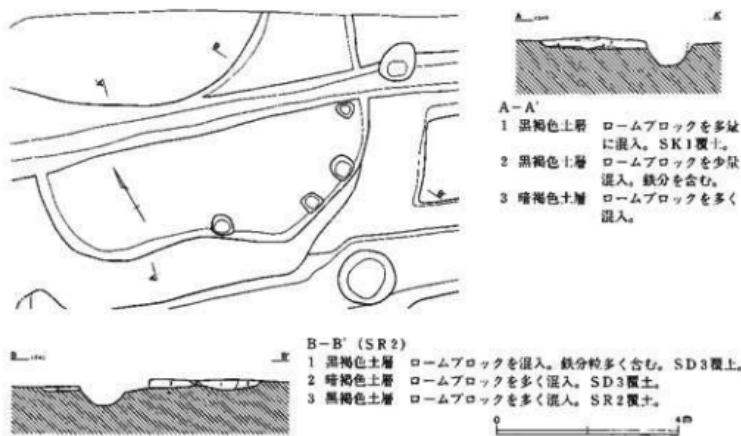
もつ。外面は範削り後、みがきが施される。内面は、頸部付近に輪積痕を残すが、下半は範削り後、範みがきが認められる。口縁部外面はナデが施される。10・11は、同一個体と思われるが、破片の風化が著しく、剥離し、細片となっているため、直接は接合しなかった。頸部下位に最大径をもち縦やかな棱を描き、直線から外反へと移行しつつ底部に至る。口縁部は外反し、端部を断面では三角形につくり出し、上端部が直立する。内面はナデが施されるが、外側は、短く、かつ非常に粗いハケ目を施す。

第1表 第1号方形周溝墓出土遺物

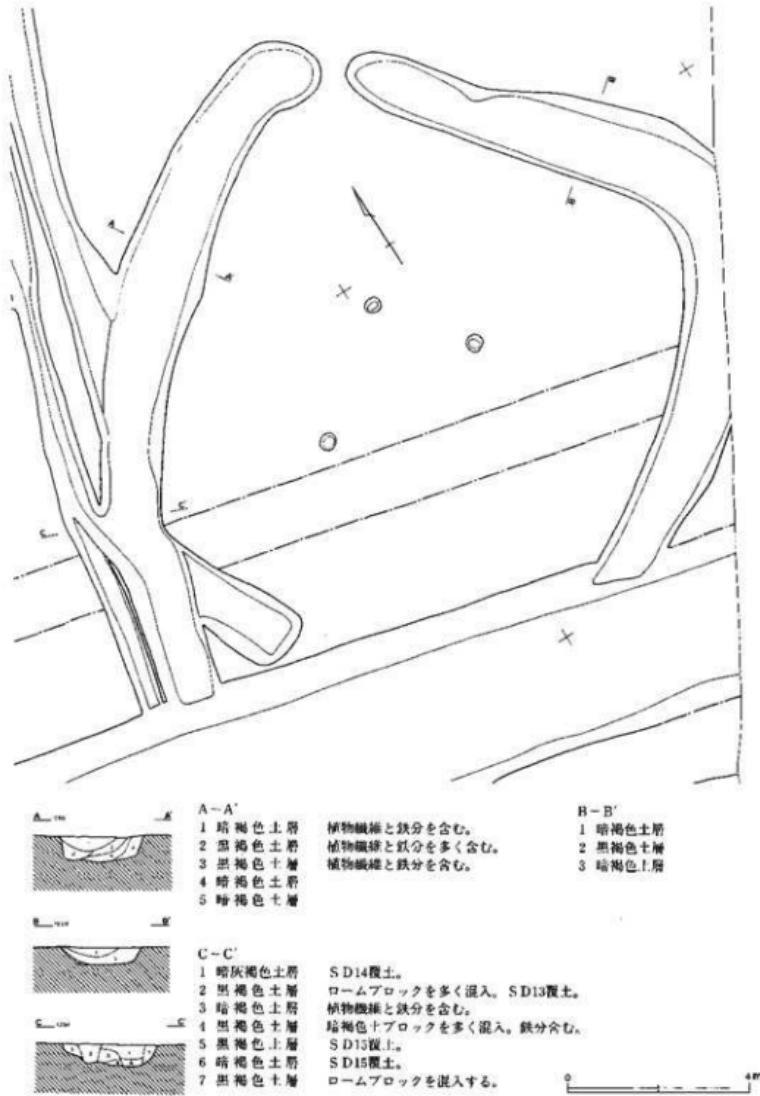
No	器種	口径(cm)	器高(cm)	胎土	色調	注	No	測No	備考
1	高杯	22.6	14.4	W+B+R+疊	橙色	G-14	2	803	
2	高杯	19.1	16.0	W+B+R少+疊	橙色	H-15	31	808	赤彩
3	高杯	20.9		W+R+B+疊	にぶい赤橙色	H-15	79	809	
4	甕	14.4	15.9	W+B+W'+疊多い	にぶい橙色	G-14	3	805	
5	甕	14.9		W+B+R少+疊	にぶい黄褐色	G-14	1	804	
6	甕	15.8		W+B+R+疊	明黄褐色	H-14	9他	807	
7	鉢	16.6		W多+B+R+疊	明褐色	H-14	7	806	赤彩
8	甕			W+B+疊	にぶい橙色	H-15	26	802	
9	甕	14.9		W多+B+R少+疊	にぶい赤褐色	H-15	28	801	
10	甕	17.0		W+W'+B+R少+疊	にぶい橙色	H-14	26	811	
11	壺			W+B+R少+疊	にぶい橙色	H-14	20他	810	10と同一個体

第2号方形周溝墓 (SR 2)

H・I-16Gridにおいて検出されたものである。調査対象区の端の部分で全体の8分の1程が確認された。1号方形周溝墓同様、南辺の溝の中央が切れる形を呈するものと思われる。検出されたのは南辺の東側部分だけである。第1号・第3号溝によって切られている。また周溝覆土中に第7



第8図 第2号方形周溝墓



第9図 第3号方形周溝渠

号土壤があったが周溝底までは至っていなかった。上層断面A-A'上の第1層が第1号土壇にある。

他の周溝墓に比べて周溝の幅は広く南辺周溝で約2.8mを測る。東辺は1.7m程になると思われる。また確認面からの深さも浅く約0.2mであった。埋葬施設は検出されなかった。また溝内埋葬も認められなかった。主軸は推定でN-13°-Eである。出土遺物は、五領期のものと思われる土師器小片が数点あるだけであった。

第3号方形周溝墓 (SR 3)

B-C-10・11Gridにおいて検出された。第21・24・13・14・15号溝によって切られ、特に第21号溝によって南辺中央から東辺にかけて完全に失われている。プランは、ほぼ正方形で隅がややまる。周溝は、隅が切れるもので、1号方形周溝墓とは同様の形態であるが、北辺の陸橋部の幅が狭く約0.6mである。規模は確認面の周溝内側立ち上がりで、東西約10.4m、南北11.0mを測る。周溝の幅は西辺の溝で約1.6m、北辺の溝で約1.8mである。周溝の深さは、約0.5mであり、周溝底は平坦である。また周溝の立ち上がりは直線的である。周溝の覆土は基本的に上層と中層が植物繊維と鉄分を含んだ暗褐色土と黒褐色土層であり、最下層は、暗褐色土層である。主軸はN-54°-Eである。

区画内の埋葬施設は全く検出されなかった。また、溝内埋葬も認められなかった。区画内には、3基のビットが存在する。3基のビットは、覆土がいずれもロームブロックを混入した暗褐色土で、埋め戻したものと判断されるが、覆土中からの出土遺物はなく時期は不明である。位置は方形周溝墓のほぼ中央部であり、長方形の四隅の内の3点の位置にある。長方形は3.2m×2.4mを測る。他の1点にあたる位置は45号溝があり、ビットの存在は確認できなかった。第1号方形周溝墓と同様、長方形にビットがならぶが、位置関係以外直接方形周溝墓に伴うという根拠はない。

出土遺物は、甕と手捏の2点(第10図)で、ともに南辺の西側から出土した。他に北辺の東側から、甕の小片が2点出土した。

1は、口径の $\frac{1}{4}$ 程の破片からの復原である。口縁部は外傾しつつ、ほぼまっすぐに立ち上がる。胴部外面には浅いハケ目を残す。内面には、6mm程の幅で、工具による押し引きされた状況の痕跡があり、工具によるナテと解される。口縁外面はナテが施されるが、ハケ目を残す。2は小型の鉢で、数カ所にハケをあてた痕跡が認められるが、全体的に丁寧にナテられている。



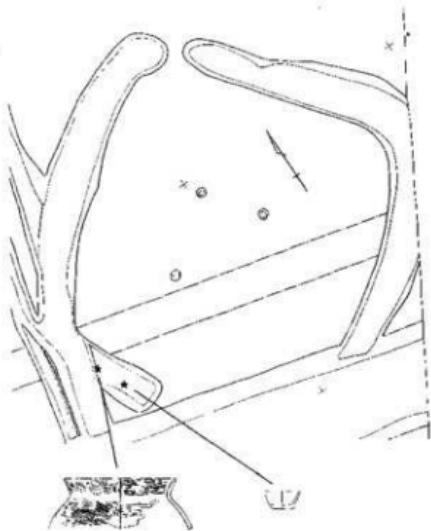
第10図 第3号方形周溝墓出土遺物

第2表 第3号方形周溝墓出土遺物

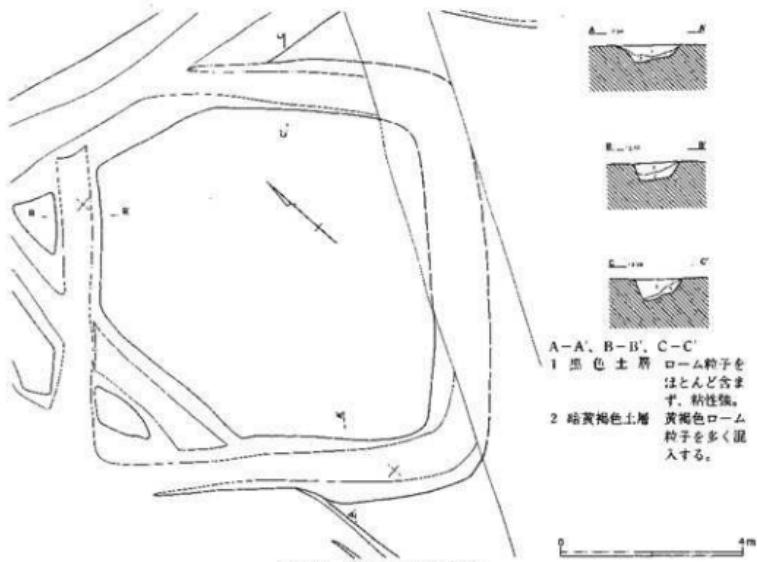
No	器種	口径cm	器高cm	胎土	色調	注	No	測No	備考
1	甕	20.4	3.3	W多+B+R少+疊	橙色 にぶい橙色	C-10	5	834	
2	小鉢	6.2		W+R+B+疊		C-10	9	813	赤彩

第4号方形周溝墓 (SR 4)

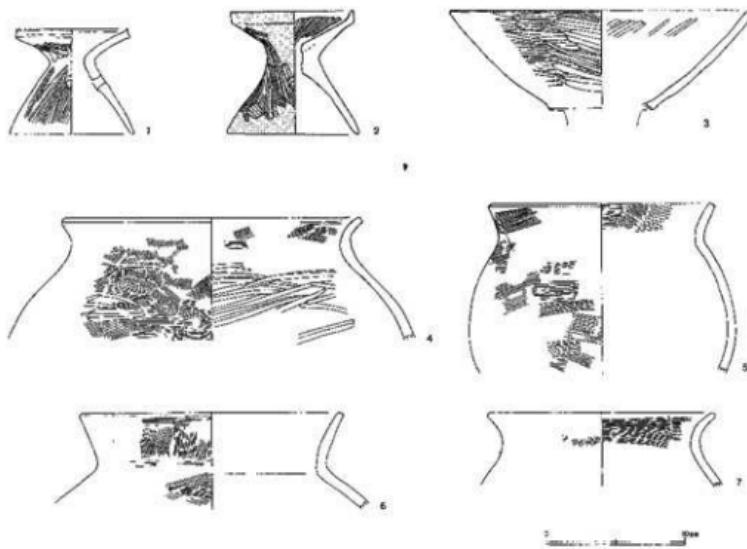
C・D-8・9 Gridに位置する。第1号墳外縁・7・13・15号溝によって切られている。7号溝により北西コーナーが削られているが、周溝は全周していたものと思われる。規模は、確認面での周溝内側立ち上りで東西7.30m、南北7.10mを測る。他の方形周溝墓よりやや小形である。周溝の幅は、南辺の周溝が1.50m・西辺の周溝が1.10mであり、深さは0.3mを測る。周溝の底面は、ほぼ平坦であり、立ち上りは比較的直線的に斜めに立ち上がる。他の方形周溝墓より周溝底面の幅が狭く、0.60m~0.80mである。プランはほぼ正方形である。区画内に埋葬施設は検出されなかった。又、周溝内の溝内埋葬も認められなかった。



第11図 第3号方形周溝墓遺物出土位置図



第12図 第4号方形周溝墓



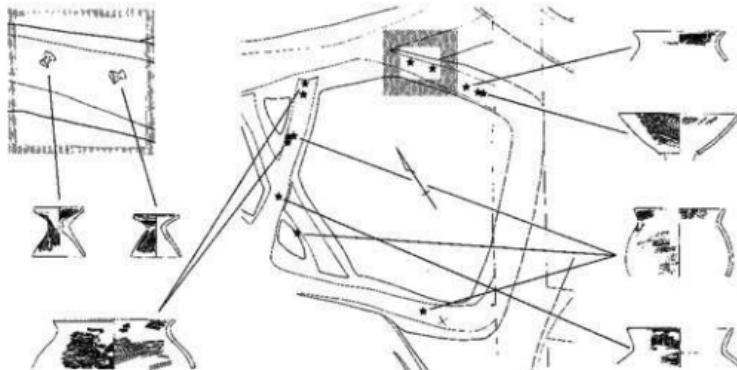
第13図 第4号方形周溝墓出土遺物

出土遺物（第13図）は、器台2点、高杯1点、甕4点である。遺物は西辺と北辺の周溝に集中しており、特に北辺の周溝の中央付近から器台2点が出土している。出土遺物のうち、1は受け部と脚端部の一部を欠くが、ほぼ完形に近い。受け部、脚部とともに、ほぼ直線的に聞くもので、受け部先端は上下に腰らみ、端部中央を範先によりナデ、沈線状にしている。透しは円形で、三箇所に外側から穿たれている。脚部内面はナデられているが一部にハケ目を残す。外面は下端部はナデであるが、他は範みがきを施し、内面同様一部にハケ目を残す。受け部は内外面とも範みがきが施されている。2は脚部の一部と、受け部の $\frac{1}{4}$ 程を欠く。脚部はやや内附し、端部に平坦面をもつ。接合部は1よりもかなり厚い。受け部は端部外側に稜をもち、垂直に立ちあがる。端部内面は、受け部から緩やかな稜をなし、端部へ至る。端部は、内外面ともナデが施されている。透しは円形で三箇所にある。脚部内面はナデ、外面は下端部をナデ、他は丁寧に範みがきが施される。受け部は内外

第3表 第4号方形周溝墓出土遺物

No.	器種	口径(cm)	器高(cm)	胎	上	色調	注	No.	測No.	備考
1	器台	8.3	7.6	W+W' + B + R少+縫	にぶい橙色	C-8	6	817		円型三方透、赤彩
2	器台	8.9	8.9	W+W' + B + R少+縫	にぶい赤橙色	C-8	5	813		円型三方透、赤彩
3	高杯	21.8		W+W' + B + R少+縫	にぶい黄橙色	C-8	1他	820		
4	甕	21.8		W+B+R少+縫	にぶい橙色	C-9	1他	832		
5	甕	16.3		W+B+R+縫	にぶい橙色	D-8	27他	814		
6	甕	18.4		B+W+R少+縫	にぶい橙色	D-8	20	833		
7	甕	16.5		W+W'+B+R少+縫	橙色	C-8	3	821		

面とも籠みがきが施される。なお外面及び受け部内面に赤彩を施す。3は、高杯の杯部の $\frac{1}{3}$ 程の破片からの復原である。杯部下位に棱をもつ。内外面とも丁寧にみがかれている。4は、口径の $\frac{1}{4}$ 程の破片からの復原である。口縁部は短く厚い。口唇部は、平坦面をなす。外面及び口縁内面には、明瞭にハケ目を残す。口縁部外面上半は、ナデが施されている。胴部内面は、籠によるみがき状のナデが施されている。5は、口径の $\frac{1}{4}$ 程の破片からの復原である。口縁部端は平坦に面をとっている。口縁部外面は、縦位のハケ後、横位のハケを施している。内面はハケ目をわずかに残す。胴部外面は、浅いハケ目を残す。内面はナデである。6は、口縁径の $\frac{1}{4}$ 程からの復原である。口縁部端部は、平坦に面をとっている。口縁部外側はハケを施すが、口唇部付近で頸部は横ナデされている。内面はハケ目を残す。7は、口縁径の $\frac{1}{8}$ 程の小片からの復原である。器面の摩減が著しい。口縁部内外面ともハケ目を残す。



第14図 第4号方形周溝墓出土位置図

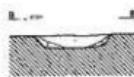
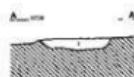
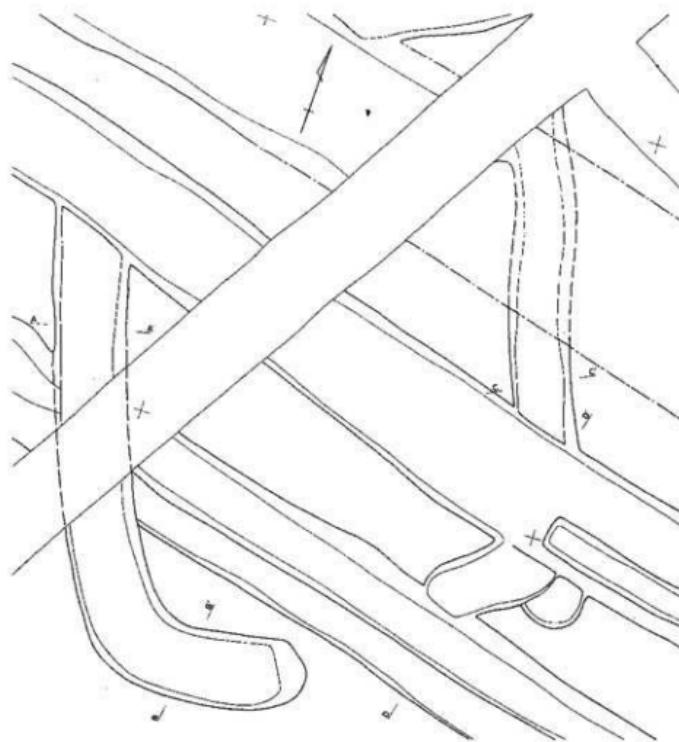
第5号方形周溝墓 (SR 5)

A・B・C…8・9 Gridに位置する。第7—21・24号溝によって切られる。特に21・24号溝により東辺は分断され、北辺は全く検出できなかった。確認されたのは、西辺と南辺・東辺の一部である。

周溝は、南辺の中央がきれており、また24号溝の北側で周溝が認められなかったことを考えると1号—3号周溝墓と同様の形態であると思われる。南辺の陸橋部の両側の溝は、一直線上に並ばずれている。規模は、確認面の周溝内側上端で、東西約8.4m、南北は、東辺側が推定で約8.5m、西辺側が約10.0mであり、南辺両側の溝のずれによりゆがんだ形態を示す。周溝の幅は、南辺で約1.6m、東辺で約1.3mである。区画内は、24号溝と排水溝により大きく削られている。埋葬施設は検出されなかった。また周溝内の溝内埋葬も確認されなかった。

周溝の覆土は、植物質の纖維を含んだ黒褐色土層であり、周溝の深さは0.3m、周溝底面は平坦である。周溝底面の幅は約1.0—1.3mを測る。

出土遺物は、南辺の東西の周溝に集中しているが、同一個体が東西・両溝から出土しているもの

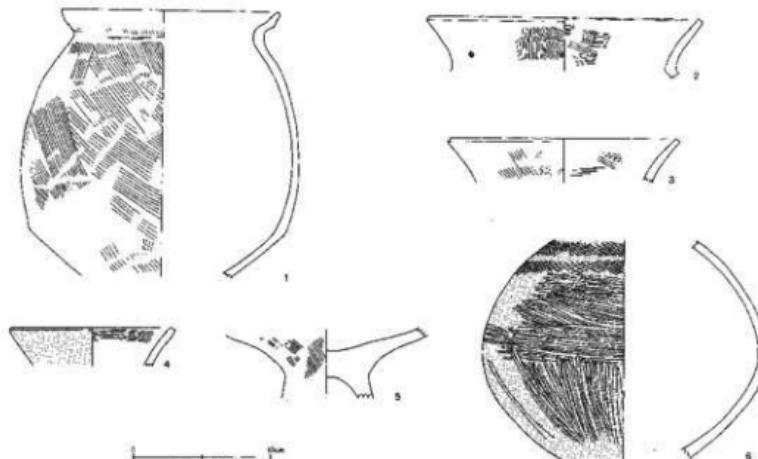


A-A', B-B', C-C'
1 黒褐色土層
2 灰茶褐色土層 ローム粒子を少量混入。

- D-D'
- 1 蒼灰色粘質土層 SD24壤土。
 - 2 黒褐色土層 ロームと青灰色土を混入。SD24壤土。
 - 3 黒褐色土層 SR3壤土。
 - 4 暗灰褐色土層 ローム粒子を多く混入。粘土の薄い間層がある。SD45壤土。
 - 5 黑褐色土層 ローム粒子を少量混入。SD45壤土。

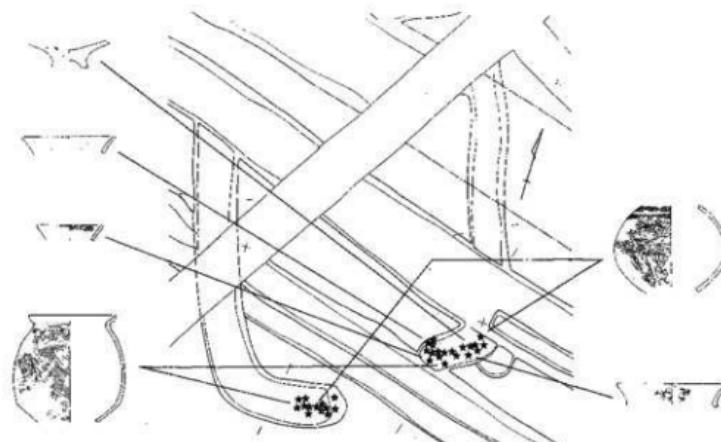
0 4m

第15図 第5号方形周溝基



第16図 第5号方形周溝墓出土遺物

も多い。出土遺物（第16図）の1は、口縁部が受け口状に屈曲しているものである。胸部下位に明瞭な稜をもち、直線的に底部へ向う。短い口縁部は、中程で内側にやや屈曲し立ちあがる。内外面とも、ハケを施した後ナテられており、ハケ目は内側にうすく認められるが、外面は、ほとんどナテ消されている。胸部は内外面とも、ハケ目を明瞭に残す。ハケ目は、非常に粗いものである。2は、5cm程の小片からの復原である。口縁端部に平坦面をつくり出す。内外面ともハケ目を残すが、



第17図 第5号方形周溝墓遺物出土位置図

頸部と口唇部付近はナデ消されている。3も5cm程の小片からの復原である。口縁端部に平坦面をつくり出す。器面がかなり摩滅しているが、外面はハケ目を残す。口唇部付近はナデ消されている。4も、5cm程の小片からの復原である。小型壺の口縁部と思われる。口縁端部は、不明瞭ながら平坦面をつくり出す。内面にはハケ目を残すが、外面はみがかれており赤彩を施す。5は、台付甕の接合部と思われるが、非常に大きなものである。内面は丁寧にナデされている。外面にはハケ目を残すが、接合部は丁寧にナデが施されている。6は、胴部上位に3段の網目状捺糸文を施した壺である。頸部以上で底部を欠く。内面はナデ、外面は範みがきが施されている。

第4表 第5号方形周溝墓出土遺物

No.	器種	口径cm	器高cm	胎土	色調	注No.	測No.	備考
1	甕	15.8		W+B+R少+礫	灰黄褐色	B-8 13億	816	
2	甕	20.0		W+B+礫	にぶい橙色	B-8 101	823	
3	甕	16.9		W+W+B+R+礫	にぶい黄橙色	B-8 41	822	
4	壺	12.0		W+B+R少+礫	灰白色	B-8 8	824	赤彩
5	台付甕			W+B+R+礫	にぶい橙色	B-8 112	819	
6	壺			W+B+R+礫	にぶい橙色	A-8 3億	815	赤彩、網目状捺糸文

小結

検出された方形周溝墓のうち、第1号・3号の両方形周溝墓では、区画内にピットが検出された。第1号では搅乱により、第3号では溝により削られ、3基づつしか検出されなかつたが、ピットは区画内の中央に長方形に並ぶものと考えてほほまちがいないものと思われる。また第1号のピットには、柱を立てた痕跡が明瞭に認められ、上部構造の存在を示すものである。

ピットが方形周溝墓と直接関係する遺構であることは、その位置関係以外、積極的な理由となるものはないが、区画内に他のピットが全く検出されていないにもかかわらず、検出された3基が周溝墓の中央であり、軸が周溝墓と一致することが、第1号・第3号とも共通しており、周溝墓に伴う遺構であることは非常に可能性の高いものと判断される。

方形周溝墓の区画内に方形にピットが検出される例は、県内では、行田市小敷田遺跡や、戸田市鐵治谷・新田口遺跡にも認められる。これらは、小沼耕地遺跡において検出された例とは同じ状況であり、ピット自体の時期比定は困難な面があるものの方形周溝墓に伴うものと考えられる。現段階で、方形周溝墓の区画内に方形に存在するピットの意味を論ずることは、推論の域を出ないものであるが、五領期の後半の一時期における方形周溝墓の葬送儀礼の中で、盛土以外の上部構造を持つ一例として報告すべきものと考える。

出土遺物では、甕の内面を鏡で磨くものが存在することや、器形も、明らかに東海地方の影響を受けたものがあり、他地域の影響を色濃く反映していることは、注目される点である。出土遺物は、大略2時期に分けられ、第1号方形周溝墓に新しい様相が認められ、第4号方形周溝墓に古い様相がみられる。また第5号方形周溝墓出土の網目状捺糸文も古い様相とみることができる。新しい段階は五領期の末葉に近い時期、古い段階は五領期の中葉に近い時期と思われる。

(2) 住居跡

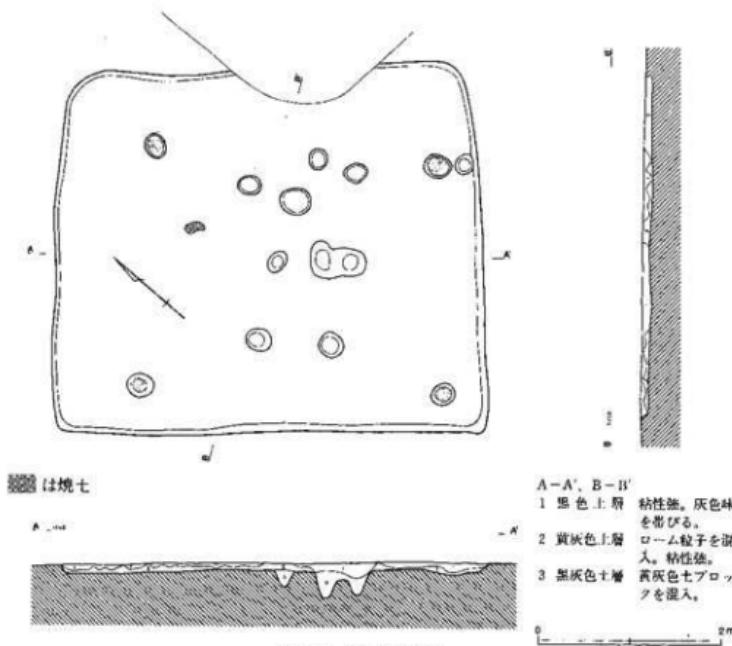
第1号住居跡

I-14・15Gridにおいて検出された。プランはほぼ長方形で、長軸4.8m・短軸4.0mを測る。確認面からの掘り込みは非常に浅く、8cm前後であった。カマドは無く、明瞭な炉も検出されなかつたが、プランの中央よりやや北に焼土が認められた。覆土は、上層が粘性のある黒色上層である。下層は黄灰色上層で、黄褐色コーム粒子を混入する、粘性の強い層である。

長方形のプランの中に、計14基のピットを検出したが、四隅に近い部分にあるものが、柱穴と思われる。中央部付近で検出したピットのうち、断面A-A'（第18図）にかかる3基は、ともに覆土が黄灰色土ブロックを混入する黄灰色上層であり、住居が壠まる時点では、先に埋まっていたものと判断される。他のピットについては、時期不明であった。

出土遺物は、五領期の土師器小片が數片出土しただけである。

なお、構構確認の時点で、第1号住居跡の北西に、住居跡らしい落込みを検出したため、第2号住居跡と呼称を付し、調査を開始したが、その後の調査で、住居跡ではなく、清に作る緩やかな傾斜面と判断された。従って本遺跡で検出された住居跡は、第1号住居跡のみである。



第18図 第1号住居跡

(3) 古墳

第1号墳 (SS1)

調査区の南東側に位置する前方後円墳である。墳丘はほとんど削平されており、発掘調査前までは水田として利用されていた。このため試掘調査が行なわれるまで、古墳の存在を全く確認することができなかった。

周囲は二重に巡るものであるが、調査区内で検出されたのは、墳丘部分と内堀のほぼ全部と外堀の60%程度であった。検出された範囲でも外堀は企堀せず、幅も一定しない。またプランも不整形である。内部主体は、全く検出されなかつたが、内堀覆土中から、組合せ式の箱式石棺の破片と思われるものが出土しており、箱式石棺であったことが予想される。

墳丘

規模は、確認された周囲の内側立ち上がり部で主軸長39.0mを測る。後円部直径は26.0m、前方部長さ13.0m、前方部先端の最大幅は13.3m、くびれ部での幅5.5mである。形態としては、くびれ部が著しく細く、前方部が短い、前方後円墳である。前方部の長さは後円部直径の半分、前方部先端の最大幅も同様である。主軸は、N=84°-Eであり、前方部をほぼ真西に向ける。

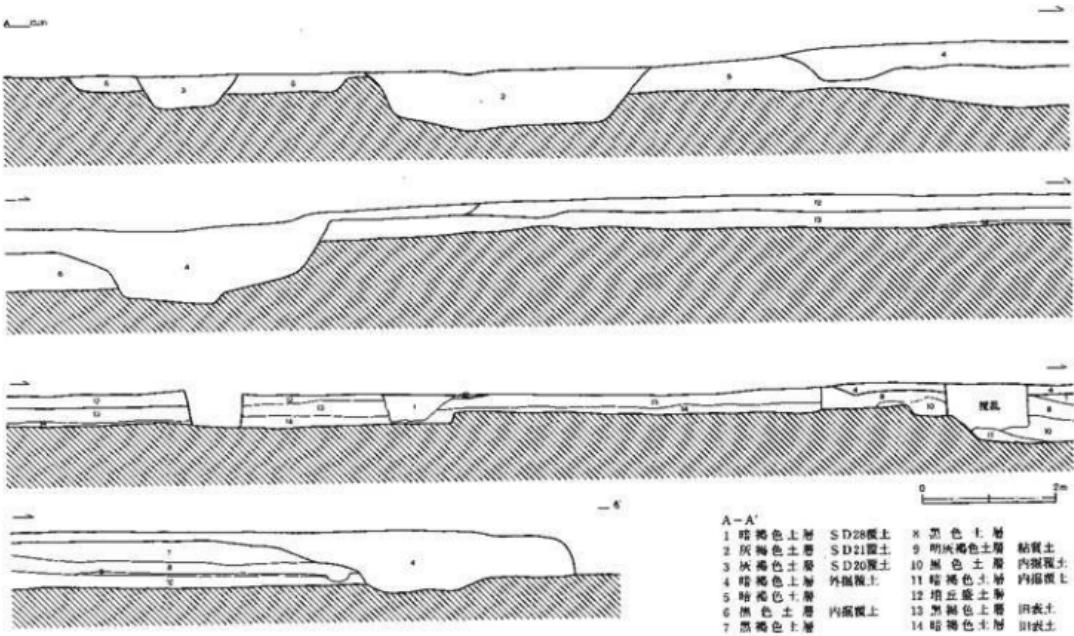
墳丘部分では、周囲の内側立ち上がりから1.0m～1.5m程内側で、ほぼ周囲内側のプランにそった形で古墳築造時の表土（旧表土）と思われる土層を検出した。上層が黒褐色土層、下層が暗褐色土層であり、その下に黄褐色のローム層がある。上層は漸移的に変化するものである。黒褐色土層の上には、墳丘盛土が残されており、黒褐色土層が古墳築造時の表土と判断されるものである。従って占墳築造時に表土を削平するなどの整地作業は行なわれていないことになる。盛土には、黄褐色ローム、暗褐色土、黒褐色土を用いていて、周囲を掘削した土を利用したものと考えられる。

1号墳の墳丘部分において周囲の立ち上がりからほぼ一定の間隔で、周囲のプランにそって旧表土が確認されたことは、この旧表土の確認される範囲が、墳丘盛土下であったことが考えられるのである。古墳築造後、周囲が埋まる過程で、大規模な墳丘の削平が行なわれないかぎり、自然な墳丘の崩落とともに、中堤や外堀の崩落も当然ありうることである。また、古墳周辺が墳丘を残したまま開墾等により削平されれば、結果的に、墳丘盛土自身の存在によりその下の旧表土は残されるが、古墳周辺はテラス部や中堤も含め、旧表土自体が削平されることとなるからである。従って、旧表土の検出される範囲は、盛土のプランを反映しているものであると考えられる。近年、行田市に所在する埼玉古墳群中の、丸墓山古墳と瓦塚古墳において、古墳の保存修理事業が行なわれ、墳丘と周囲の確認調査が実施された。両古墳ともに墳丘下に旧表土が確認され、しかも現地表よりもかなり高い位置であった。これは、墳丘盛土下だけ古墳築造時の表土が残され、古墳周辺は、大規模な削平を受けたことを示している。また、瓦塚古墳は、墳丘の東側部分がかなり削平されていたが、確認調査の結果、旧表土が検出され、しかも周囲立ち上がりから内側約1.5mのところに周囲と平行するプランで検出されていて、明らかに墳丘盛土部を反映しているものと判断されるものであった。1号墳の場合もほぼ同じ状況で旧表土が残されていたものと考えられる。

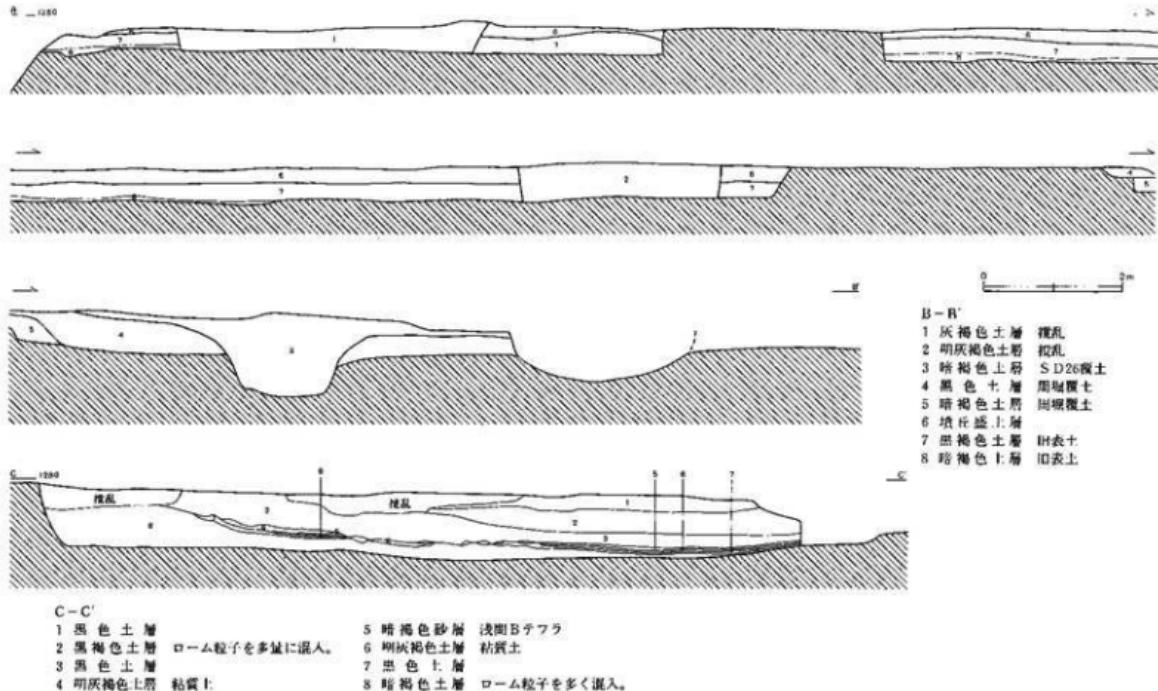
盛土から周囲の立ち上がり部にかけてはテラス状の部分として理解されるが、古墳築造時に表土



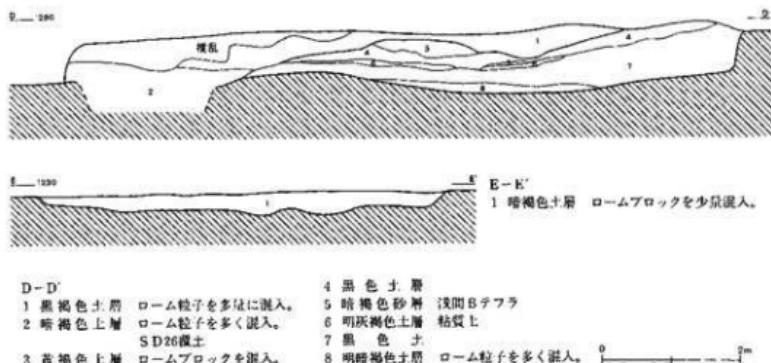
第19図 第1号墳



第20图 第1号填土层断面图(1)



第21図 第1号墳土層断面図(2)



第22図 第1号墳断面図(3)

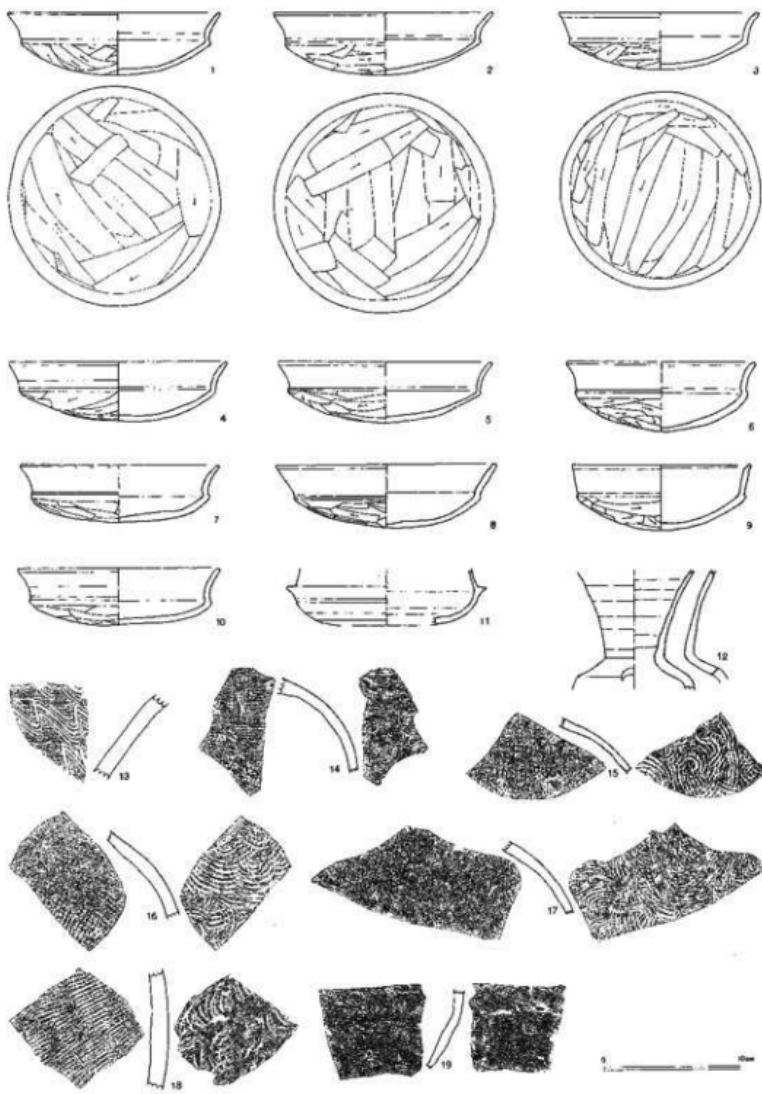
を残したままであったか、表土を削平したか、また平坦面か緩傾斜であったかは全く不明である。いずれにしろ、周堀覆土中から大量の埴輪が出土するに対し、テラス状部分において埴輪が樹立された痕跡が皆無であることを考えると、削平を受けていることは明らかである。

以上のように、旧表土による墳丘のプランを反映しているものと考えると、築造時の表土上の盛上墳丘規模は、主軸長34.5m、後円部径22.8m、前方部長11.7m、前方部前面最大幅7.6m、くびれ部幅約3mである。前方部長さは、後円部径の半分、前方部前面最大幅は、後円部径の約3分の1である。この数値から推測する限り、前方部の盛土は、少なく、後円部と比較するとかなり低いものであったと思われる。

周堀

周堀は、全周する内堀と、断続的な外堀の二重の周堀である。内堀は、現在墳丘部で確認できる旧表土標高が12.7mで、周堀底面の平均的なレベルは11.7mであり、約1.0m掘削している。輪は、確認面で約13mであり周堀内側立ち上がりでの後円部径の半分である。内堀は南側がやや狭くなつていて前方部周辺を除いた部分で最も狭いところは、10.5mである。前方部前面は極端に狭く4.2mを測る。従ってほぼ円形の周堀の一部（前方部前面）だけが4.2m出張った形をしている。

周堀の墳丘側の立ち上がりは、急角度で立ち上がる。外側立ち上がりは削平され不明瞭ではあるが内側より緩やかである。内堀内の覆土は、最下層が暗褐色土であった。覆土中には明灰色のうすい粘土層があり、その粘土層中に暗褐色の砂粒からなる層が認められた。これは肉眼での観察では、浅間山の火山噴出物（浅間Bテフラ）と思われるものである。この層は墳丘側立ち上がり近くでは周堀覆土の中位に位置するが、周堀の中程では周堀底面から僅に数cmの位置にある。浅間Bテフラは、天仁元年（1108年）に噴出したものと考えられており、この時点では、周堀はあまり埋っていなかった状況を示している。このことは、周堀覆土中（浅間Bテフラより上）から多量の埴輪小片とともに、中世陶磁器等が出土し、この時期に周堀のはとんどが埋っていることからも裏付けられる。



第23図 第1号墳出土土器

第5表 第1号墳出土土器

No.	器種	口径	器高	胎 土	色 調	注記 No.	実測 No.	備 考
1	杯	15.6	4.5	W+R+B少+礫	明赤褐色	I-7-3	I-7-1210	土師器
2	杯	16.1	4.6	W+R+B少+礫	明赤褐色	I-7-4	I-7-1211	土師器
3	杯	14.7	4.1	W+R+B少+礫	明赤褐色	I-7-1	I-7-1208	土師器
4	杯	16.0	4.2	W+R+B少+礫	明赤褐色	I-7-2	I-7-1209	土師器
5	杯	15.7	4.4	W+R+B+B	明赤褐色	I-7-5	I-7-1212	土師器
6	杯	13.8	5.0	R多+B多+W+礫	明赤褐色	K-8-342 他	K-8-1203	土師器
7	杯	14.6	4.2	W+R+B+礫	明赤褐色	K-8-344 他	K-8-1204	土師器
8	杯	16.2	4.6	W+R+B少+礫	橙	K-8-350 他	K-8-1206	土師器
9	杯	13.1	4.8	R多+W+B+礫	橙	K-8-720 他	K-8-1205	土師器
10	杯	14.8	4.2	R多+W+B少+礫	明赤褐色	K-8-684 他	K-8-1207	土師器
11	杯			W多+B+礫	灰色	F-8-466	F-8-1301	須恵器
12	瓶			W+B+礫	暗オリーブ灰色	J-6-33 他	J-6-1302	須恵器
13	大甕			W+W少+B+礫	灰色	I-6-1232	I-6-1305	須恵器
14	壺			W多+W+B+礫	灰色	H-6-1925	H-6-1313	須恵器
15	大甕			B多+W+礫	灰色	I-7-2716	I-7-1312	須恵器
16	大甕			B+W+礫	灰色	H-10-78	H-10-1315	須恵器
17	大甕			B+W+礫	灰色	H-6-1725	H-6-1314	須恵器
18	大甕			W多+B+礫	灰色	G-6-1071	G-6-1318	須恵器
19	壺			W+B少+礫	暗紫灰色	I-7-539	I-7-1317	須恵器

墳丘がいつの時点で削平されたかについては、明確にし得ないが、少なくとも浅間Bテフラより下の層は、自然堆積であり、また、墳丘確認面において、いくつか中世の遺物と造構が確認されていることを考えあわせると、浅間Bテフラ降下後から、鎌倉時代の後半に至る時期、特に鎌倉時代が中心と思われるが、墳丘は大規模な削平を受けた可能性が考えられるのである。

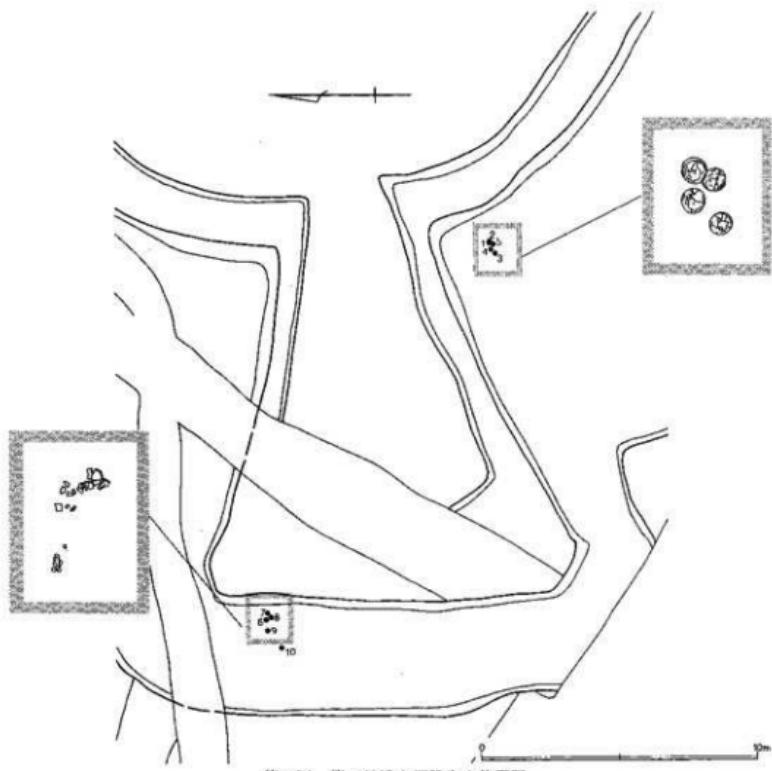
外堀は、墳丘の北側から東側にかけてと、前方部前面側だけが検出された。北側から東側にかけては、調査区内で完結している。墳丘の南側は、調査対象区外であるため、外堀の存在は、確認できなかった。検出された外堀は、幅も一定せず、内堀との距離も一定しないものであり、最大部の幅9.0m、最少部の幅2.5mを測る。外堀底面の標高は12m前後である。内堀よりかなり浅く、そのレベル差は30m前後を測る。覆土は暗褐色土層であり、基本的には内堀と同じである。外堀からの埴輪の出土は非常に少なくそのほとんどが細片である。また、樹立された埴輪が倒壊した状況で出土したものもなく外堀と内堀の中間（中堤）と外堀の外側（外堤）には、埴輪は全く樹立されていなかったものと判断される。

出土遺物

土師器杯が10点、須恵器杯1点、瓶1点、大甕片多数が周堀覆土中から出土した。埴輪は、円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪・人物・馬・猪・盾等の形象埴輪がコンテナ約150箱分出土した。埴輪のはほとんどが細片であった。

土器

出土した土師器杯は、5個体づつ2ヶ所からまとめて出土した。第23図1~5は、I-7 Grid くびれ部の周堀内から出土し、そのうち2個体は重ねられており、周堀内に据え置かれた状況を示



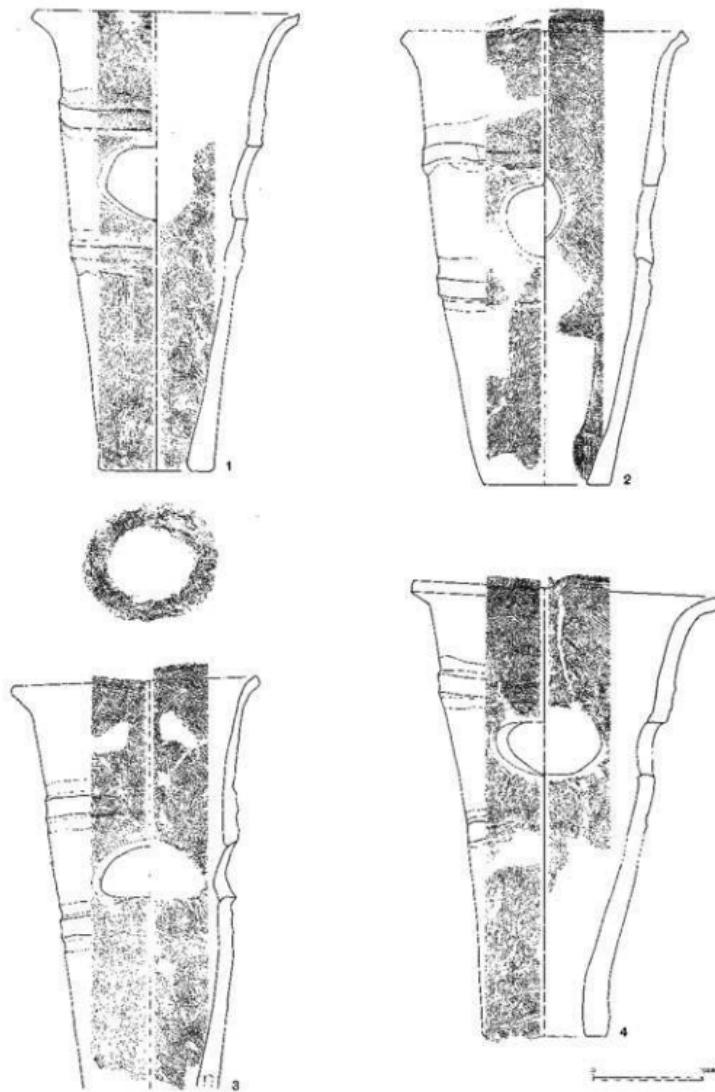
第24図 第1号墳土師器出土位置図

すものである。6~10は、K-8 Gridの前方部前面の周堀内から出土した。くびれ部の5個体程、遺存状況は良くなかったが、これも周堀内に据え置かれたものと考えられる。

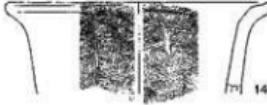
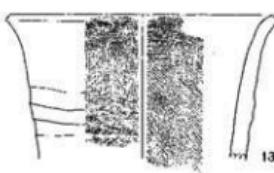
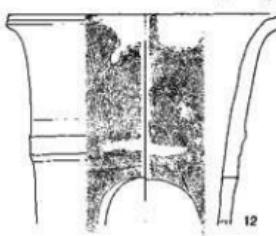
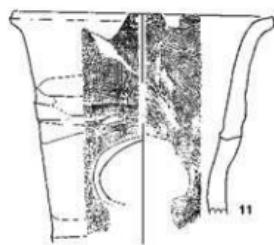
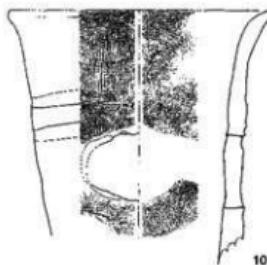
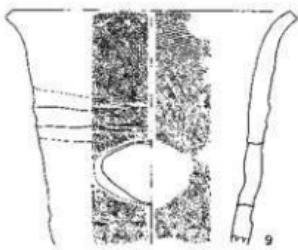
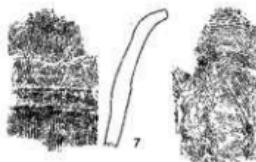
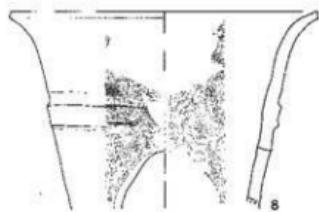
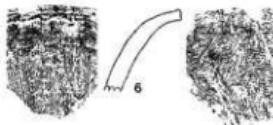
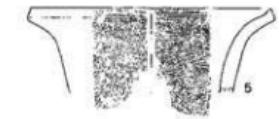
くびれ部の5個体は、周堀底よりやや浮いており、古墳築造直後の供獻とは考えられない。供獻されたのは前方部前面の5個体が早く、古墳築造直後のものと思われる。

出土した土師器杯は、口縁部が外反しながら開くもので、体部と口縁部の間は工具によりおさえ、明瞭な段をもつ。また、口唇部にも工具によるおさえを加えて、特徴的である。こういった形の杯は、行田市小針遺跡に多くみられるものである。ただ小針遺跡のものは、その胎上（きめの細かい淡橙褐色）と明瞭な範削りも、その特色のひとつであるが、その点小沼耕地遺跡の場合、異なる。いずれにしろ、この形の杯が主体的に出土するのは、小針遺跡・埼玉古墳群・生出塚遺跡・笠原古墳群等、ごく少数であり、地域的にも集中する。

第一次に供獻された杯の内、9は口縁が外反せず直立ぎみである。また、口径に対し器高が他の杯よりも高く、古い様相を呈する。6も同様、器高が高く、口縁の外反する度合いも小さい。11は

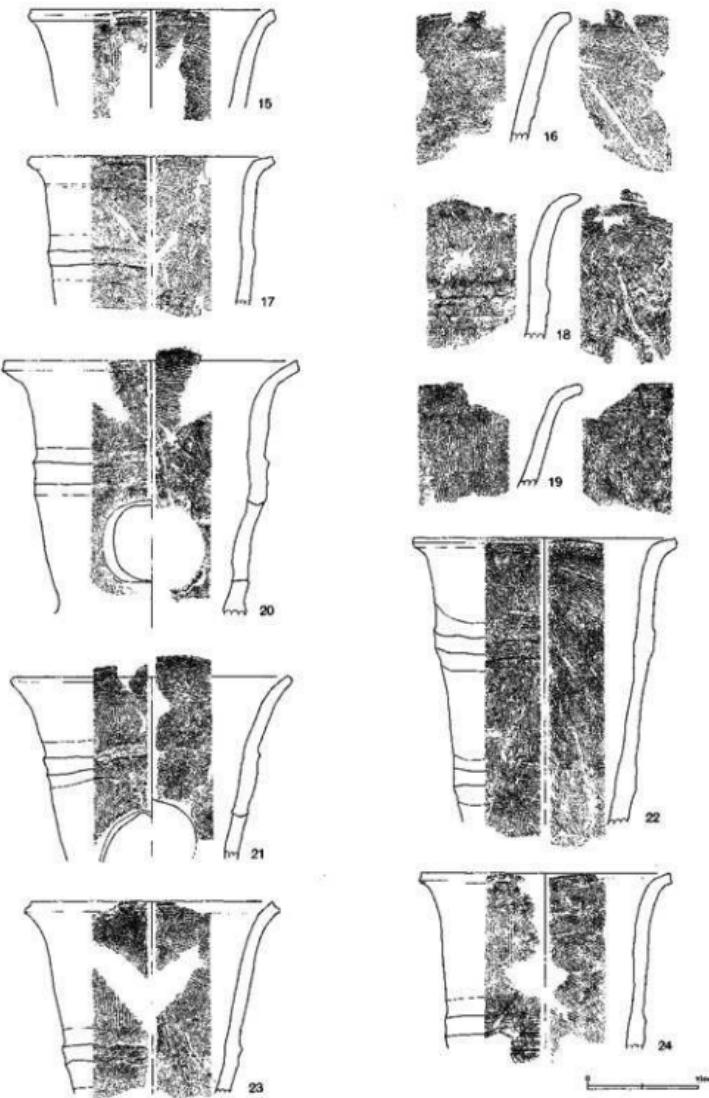


第25図 円筒埴輪(1)

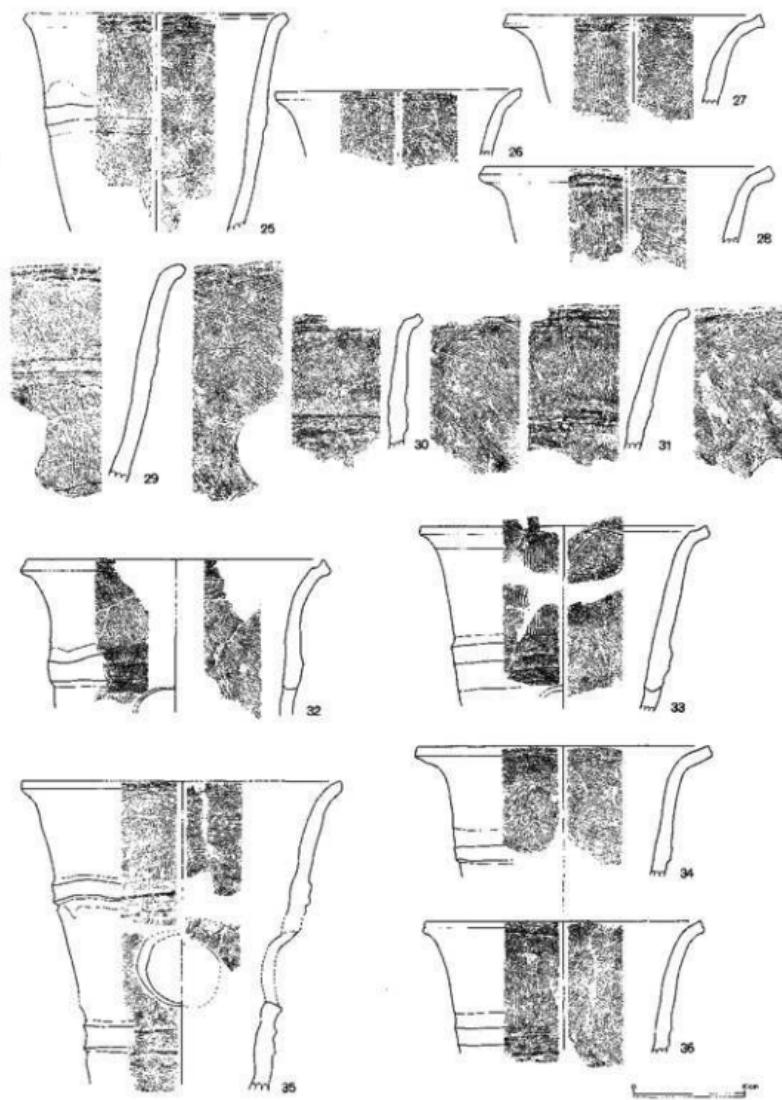


2 5cm

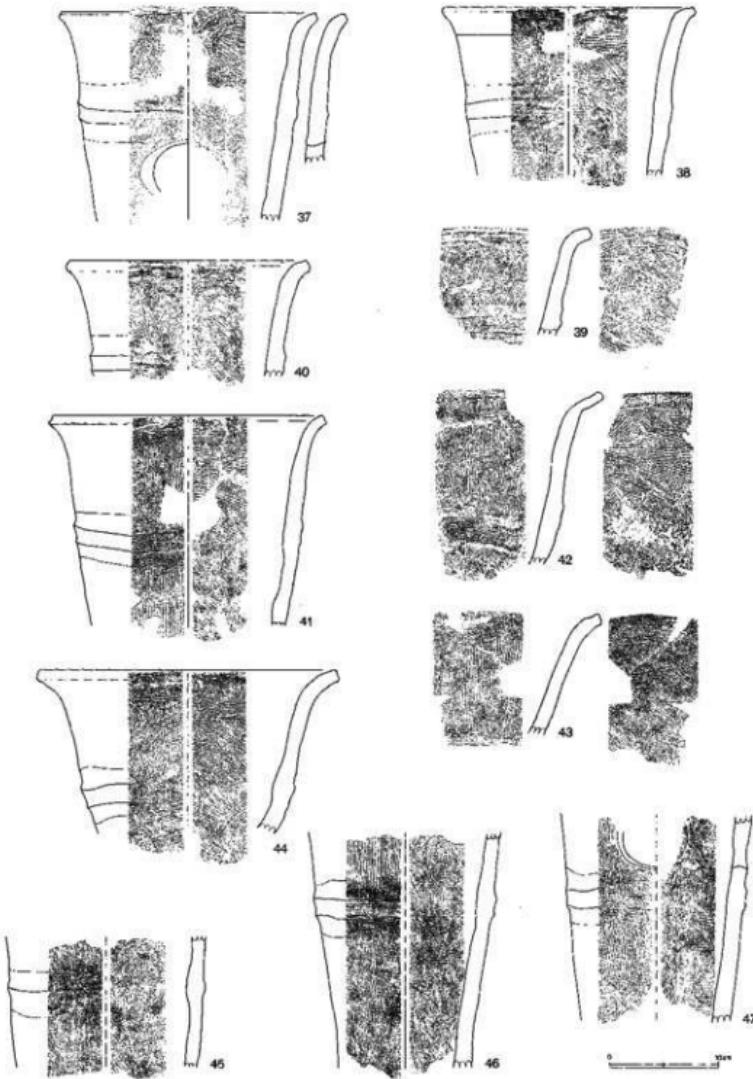
第26図 円筒埴輪(2)



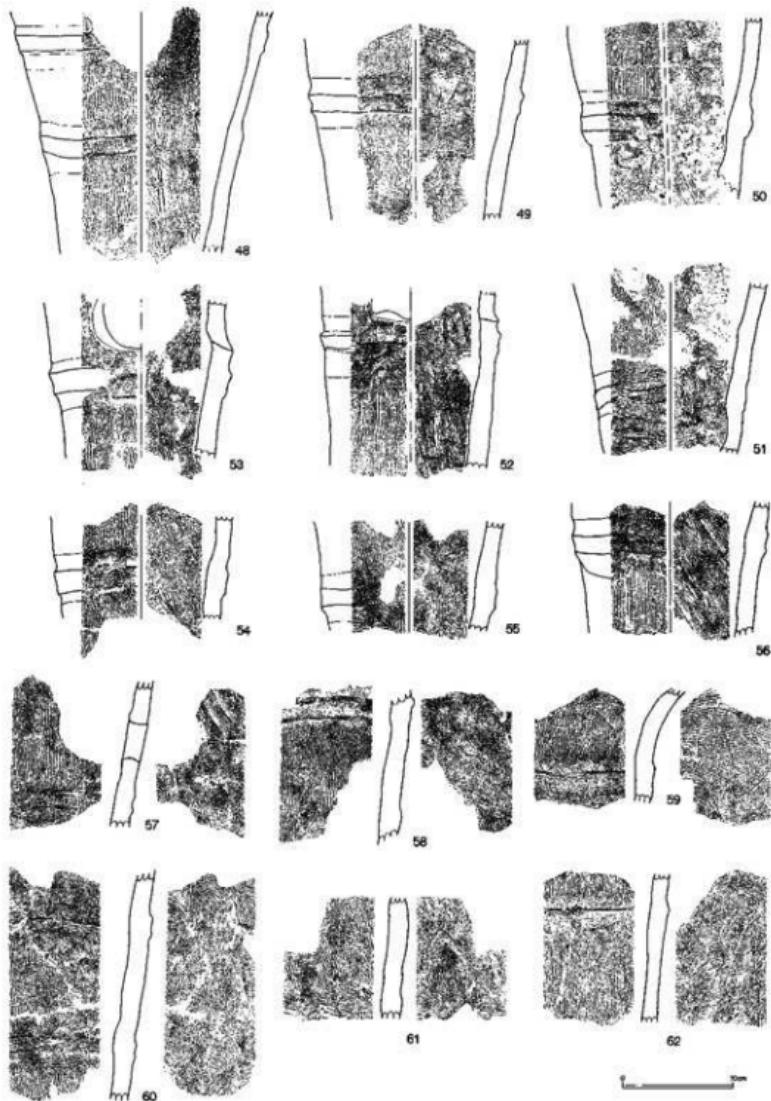
第27図 円筒埴輪(3)



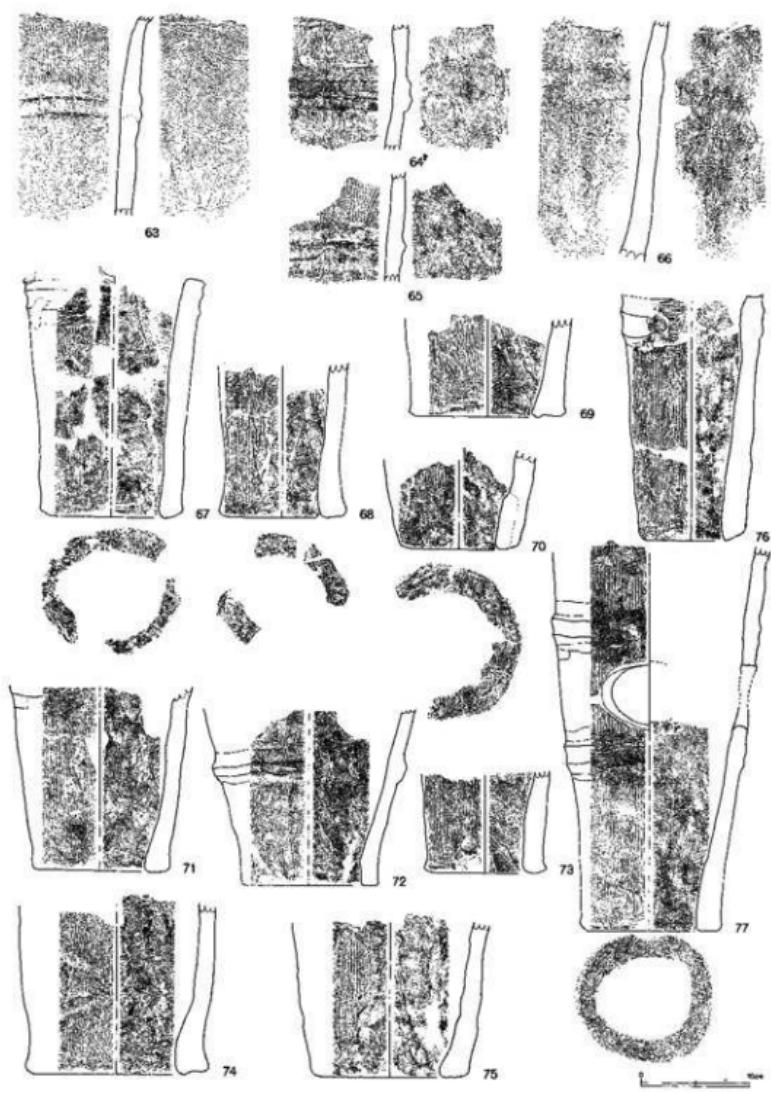
第28図 円筒埴輪(4)



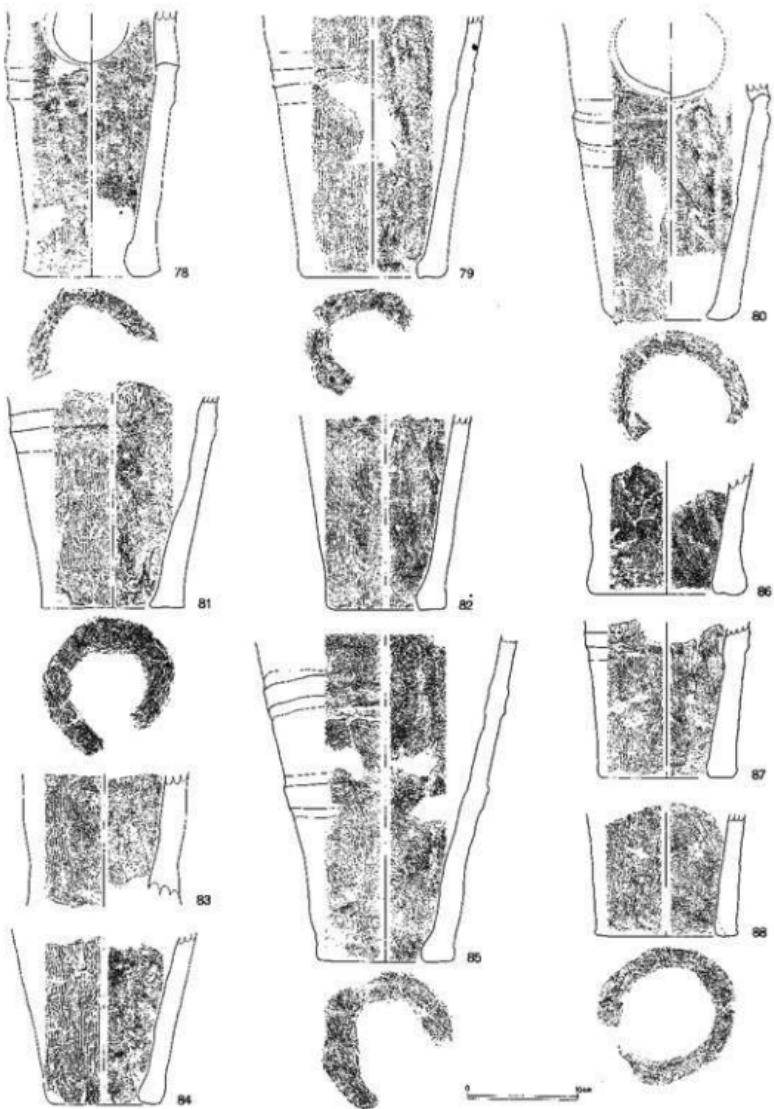
第29図 円筒埴輪(5)



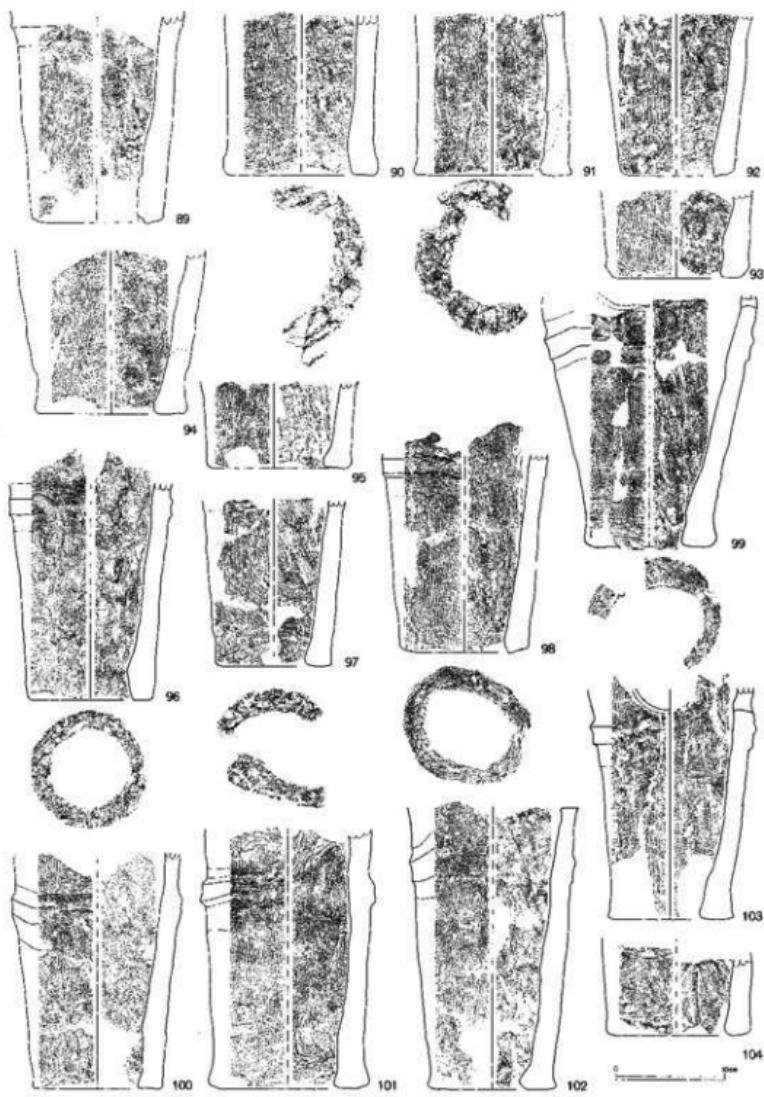
第30図 円筒埴輪(6)



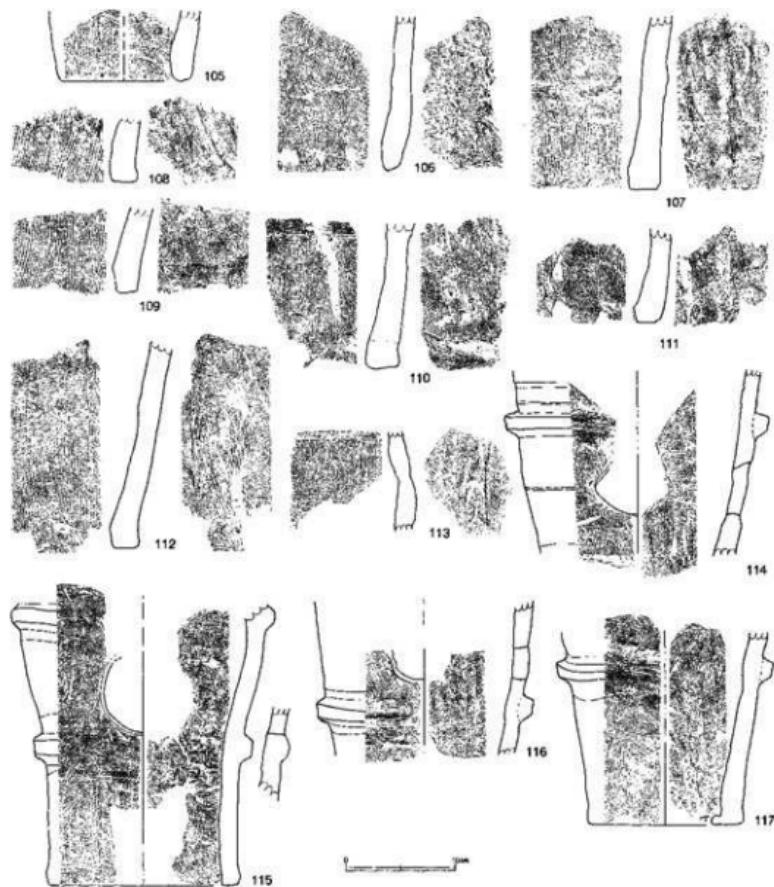
第31図 円筒埴輪(7)



第32図 円筒埴輪(8)



第33図 円筒埴輪(9)



第34図 円筒埴輪

須恵器杯で、小片からの復原である。供獻された土師器杯とは全く離れた所から出土しており、混入と考えられる。

円筒埴輪（第25図～第34図）

1号墳からは、多量の円筒埴輪片が出土している。そのほとんどが小片であるため、接合したものは少なく、底部から口縁部まで接合したのは、わずかに3個体だけであった。（第25図1・2・4）確認された円筒埴輪は、総て2条突帯で、中段に透孔が2ヶ所に穿たれている。透孔は円形であるが、やや扁平になるものも多い。突帯は断面M字形で、非常に低いものがほとんどである。整

形後、粘土紐をはり付け、その上下を強く横ナデし、突帯をつくっている。整形は外面縦ハケで、二次調整は行なっていない。内面は斜めハケを施しているが、底部近くは工具によるナテが多用される。口縁部近くは、斜めから徐々に口縁に添ったかたちでハケ目を施す。口縁端部の内外面は強く横ナデされ、特に内側は、明瞭な凹をつくりだすものが多い。

口縁部の形態は大別して2種類ある。

1. 口縁部近くで極端に外傾するもの。
2. 口縁端部近くで緩やかに外傾するもの。

1号墳では、前者が圧倒的に多い。さらに口縁端部に平坦に作り出した面をもつものと、この面を工具によりナテを施し、平坦面が凹状になっているものとに細分が可能であるが、凹の強弱は、同



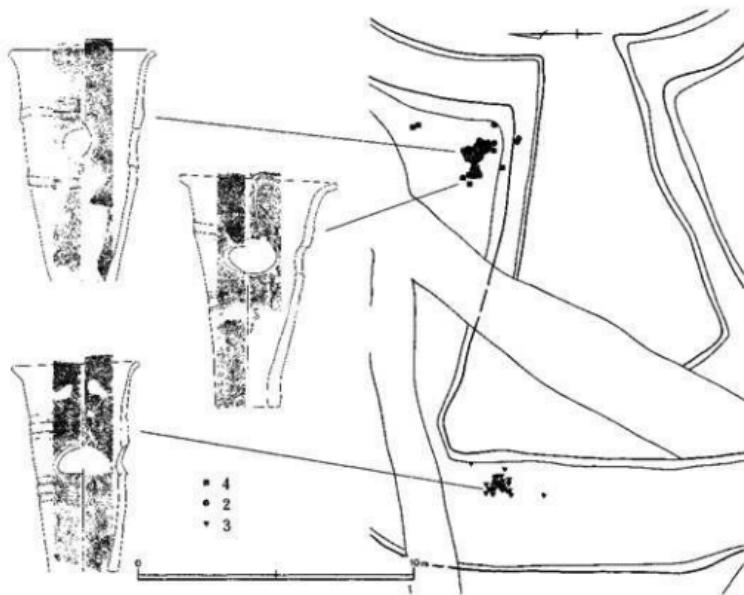
第35図 円筒埴輪（底部）出上位置図

一個体中にも認められるため、ここではあえて分類はない。

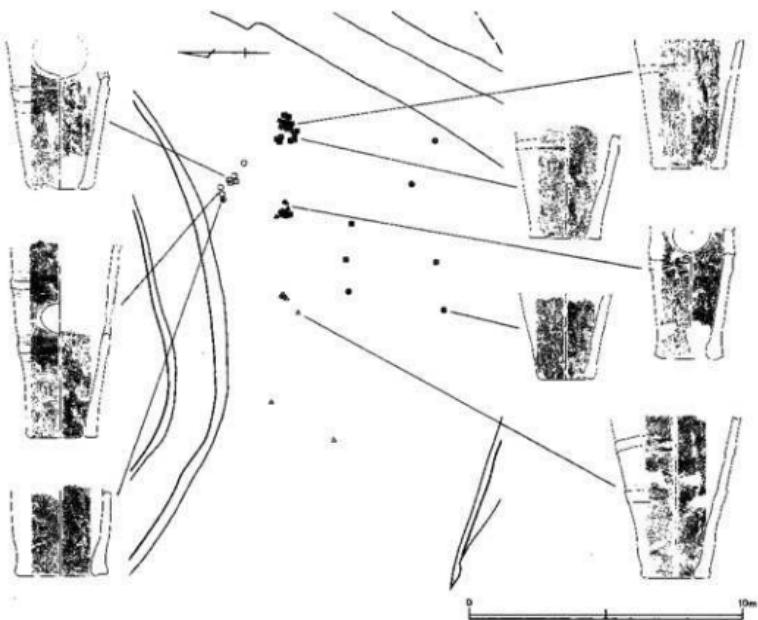
底部は、6～7cm前後の粘土板を丸くし、両端を重ね合わせて接合しており、内面にナデが認められるものが多い。底部は必ずしも正円ではなく、長円形にゆがんでいる。底部が残されている埴輪の内、少數ではあるが底部調整が認められる。調整は、板状の工具を押し付け、形を整えるものである。他に底部付近の一部に、指によるナデを施すものがあるが、部分的であり、ひび割れ等の修正のためと思われる。

第25図から第34図に示したもののうち、1から41までは口縁部を残すものである。45から66は体部片、69から112までは底部を残すものである。後を復原できるものについては極力復原したが、先述したとおり、底部・体部とともに必ずしも正円とはいせず、口径・底径のばらつきが少し多くなった感がある。

第34図113から117は、他の円筒埴輪が赤褐色・明赤褐色・だいだい色を呈するのに対し、色調：胎土・皮形・焼形いずれも、他の円筒埴輪とは全く異っているものである。113・114・116・117は、同一個体である可能性が強い。灰色を呈し、突唇は著しく高く、しっかりしている。外面整形は縱ハケを施す。縱ハケ整形後に、工具が横方向に当たった痕跡が明瞭に認められ、各段ともに沈線状あるいはナデ状に縱ハケが消されている。内面はナデ整形であるが、粘土積上げ部に部分的ではあるが横ハケを残す。113はやや内寄する破片で、朝顔形円筒埴輪である可能性も考えられるが、ここでは一応、円筒埴輪として掲載した。115は、にぶい橙色で白みがかったものである。突唇は高くし



第36図 円筒埴輪出土位置図(1)



第37図 円筒埴輪出土位置図(2)

つかりしている。外面は非常に粗いハケ目を施す。内面は横ナテされている。

113・114・116・117が同一個体であるとすれば、115と合わせ、全く異なった円筒埴輪が1個体づつ出土していたことになり、単に隣接する古墳に樹立されていたものが混入したとはいい難い面がある。

後述する朝顔形埴輪にあっても、他と全く異なった個体が2個体だけあり、円筒埴輪と同様である。異なった埴輪を1個体づつ意識的に樹立した可能性も考えられる。

円筒埴輪は、樹立された状況で検出されたものは皆無であり、すべて周溝内に転倒したものか、墳丘の削平とともに周溝や、墳丘の周囲を巡る中世の溝などに包含されたものである。

第35図～第37図は、円筒埴輪の出土位置を示すもので、第35・36図は比較的遺存状況の良いものの出土位置を示した。第37図は、円筒埴輪のうち底部を残すものについてのみ、位置を示したものである。また第42図は、ヘラ記号が口縁部内側についている片断の出土位置図であり、同一個体は含まれないものと判断できる。遺存状況の良いものは、くびれ部北側と前方部前面及び後円部南東側に集中しており、後述する形象埴輪が集中して出土した、くびれ部南側からの出土は無い。全体の底部の分布をみると、後円部の北側からはほとんど出土していない。また、内堀の外側立ち上がり

り付近も少なく、円筒埴輪は、墳丘部にのみ樹立されたものと考えられる。また、形象埴輪の集中して出土した、くびれ部から前方部にかけては、円筒埴輪の樹立は粗く、墳丘北側にも、あまり樹立されなかったものと考えられる。

第6表 円筒埴輪

No.	胎 土	色 調	外面調整 %	内面調整 %	注記 No.	実測No.	備 考
1	W+R+B少+縦	赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	注記なし
2	W+R+B少+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-7-1652他
3	W+B+R+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	K-8-624 他
4	W+B+R+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-8-637 他
5	W+R+B少+縦	赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	F-7-808 他
6	W+R+B少+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	F-8-798 他
7	W+R+B少+縦	赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	F-8-318 他
8	W+R+B+縦	赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	H-6-1658他
9	R+W+B少+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケナダ	%	I-7-3032他
10	B多+W+R少+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-7-4887他
11	W+R+B+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-7-3524他
12	W+R+B少+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-7-2955他
13	W+R+B少+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-7-1198他
14	W+B+R+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-7-4793他
15	W+R+B+縦	赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-7-1474他
16	W+R+B+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-8-1236他
17	W+R+R少+縦	赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-7-2121他
18	W+D+B+R+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-7-2053他
19	W+D+R+B+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-7-927 他
20	W+D+B+R+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-8-872 他
21	W+B+R+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-8-1009他
22	W+D+R+B+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-8-450 他
23	W+R+B+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-8-964 他
24	W+B+R+W+縦	赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-8-529 他
25	W+R+B+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-8-468 他
26	W+R+B+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-8-2060他
27	W+D+R+B+縦	赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-8-1717他
28	W+D+R+B+縦	赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	J-7-1447他
29	W+D+R+B+縦	赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-8-1561他
30	W+D+R+B+縦	赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	J-7-1293他
31	R多+W+B+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	J-8-593
32	W多+R多+B+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	I-9-423 他
33	W+R+B+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	J-8-791 他
34	R+W+B+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	J-8-508 他
35	R+B+W+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	J-8-63 他
36	W+B+R+W+縦	赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	J-8-399 他
37	W+R+B少+縦	明赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	J-8-940 他
38	W+D+R+B少+縦	赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	J-8-169 他
39	W+R+B少+縦	赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	J-8-178 他
40	W+R+B少+縦	赤褐色	縱ハケ	%	斜ハケ	%	J-8-180 他

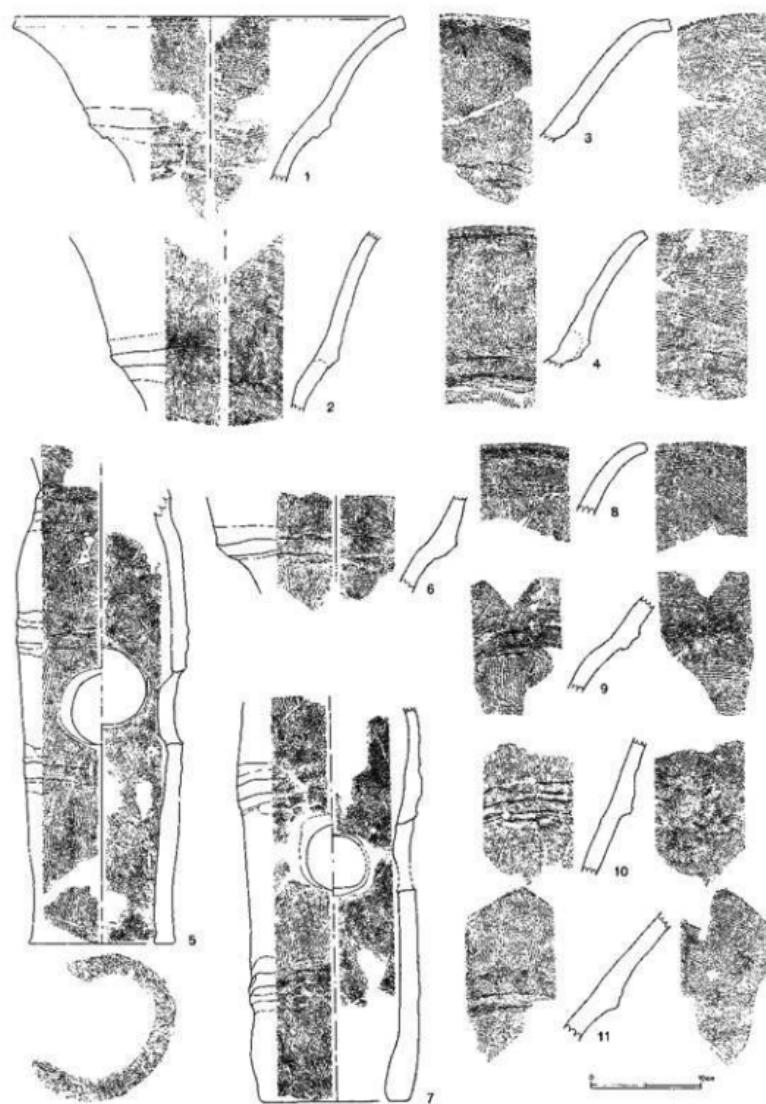
No	胎土	色調	外面調整%	内面調整%	注記	No	実測No	備考
41	W+B少+R+疊	赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	K-8-22	他
42	W多+R+B少+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	K-8-363	K-8-103
43	W多+B+R少+疊	赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	K-8-562	他
44	R多+W+B微+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	K-8-816	他
45	W+R+B微+疊	赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	F-7-795	他
46	R多+W+B微+疊	赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	F-7-1438	F-7-209
47	R多+W+B微+疊	赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	F-7-1551	他
48	W+R+B少+疊	赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	F-7-120	他
49	W+B+R+疊	赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	G-6-672	他
50	R+W+B微+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	I-7-4288	他
51	R多+W+B+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	I-8-497	他
52	W+R+B+疊	赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	I-8-303	他
53	W+R+B+W+疊	赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	I-8-1035	他
54	W+R+B+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	I-8-666	他
55	R多+B+W少+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	J-7-1478	他
56	W多+R+B+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	J-8-394	他
57	W多+R+B+疊	赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	F-7-413	他
58	W+B+R+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	G-6-517	他
59	R多+B+W+疊	にい赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	H-6-1427	他
60	R多+B+W+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	H-6-1789	他
61	R多+B+W+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	H-6-1634	他
62	R多+B+W+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	I-8-286	他
63	R多+W+B+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	I-8-599	I-8-202
64	W+R+B+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	J-8-431	他
65	W+R+B+W+疊	赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	J-8-1024	他
66	R多+W+B+疊	赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	J-8-400	他
67	R+B+W+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	F-7-1195	他
68	W+B+R+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	F-7-948	他
69	W+R+B+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	ナデ		F-7-1419	他
70	R+W+B+疊	赤褐色	緩ハケ	%	ナデ・ハケ%		F-7-600	他
71	W+B+R+疊	赤褐色	緩ハケ	%	ナデ・ハケ%		F-8-605	他
72	W+B+B少+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	ナデ		F-8-798	他
73	W+B+B+疊	赤褐色	緩ハケ	%	ナデ・ハケ%		F-8-455	他
74	W+R+B+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	ナデ・ハケ%		G-6-865	G-6-8
75	R+B+W少+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	不明瞭		G-6-557	他
76	R+W+B+疊	赤褐色	緩ハケ	%	ナデ・ハケ%		F-7-548	他
77	W+R+B+疊	赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	G-6-865	他
78	R多+W+B+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	G-6-961	G-6-5
79	W多+R多+B+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	G-6-978	他
80	W多+R多+B+疊	赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	G-6-917	G-6-4
81	R多+W+B+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	ナデ		G-6-393	G-6-6
82	R多+W多+B+疊	赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	G-7-379	G-7-1
83	R多+W+B少+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	ナデ		G-6-660	他
84	R多+W+B+疊	赤褐色	緩ハケ	%	斜ハケ	%	G-6-737	他
85	R多+W+B少+疊	明赤褐色	緩ハケ	%	ナデ・ハケ%		H-6-1088	他
86	W多+R多+B+疊	にい赤褐色	緩ハケ	%	ナデ・ハケ%		H-6-921	他
								底部外表面部へうおきえ

No.	胎土	色調	外面調整%	内面調整%	注記	No.	実測No.	備考
87	W多+R多+B+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	ナデ・ハケ%	H-6-1216他	H-6-3	
88	R多+W+B少+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	ナデ・ハケ%	H-6-1245他	H-6-4	
89	R多+W多+B+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	ナデ・ハケ%	H-6-1642他	H-6-2	一次調整外面底部おさえ
90	R多+W+B少+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	ナデ・ハケ%	I-6-1051他	I-6-1	
91	R多+W+B少+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	ナデ・ハケ%	I-7-3414他	I-7-2	
92	R多+W+B少+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	ナデ・ハケ%	I-7-2878他	I-7-3	底部外面一部ヘラおさえ
93	R多+W+B+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	ナデ・ハケ%	I-7-1025他	I-7-1	
94	R多+W多+B+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	ナデ・ハケ%	I-7-1476他	I-7-6	
95	R+W+B少+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	ナデ・ハケ	I-8-671	I-8-8	
96	W多+R多+B+疊	明赤褐色	縦ハケ	%		J-6-24他	J-6-1	底部外面二次調整ヘラおさえ
97	R多+W+B少+疊	にぶい橙	縦ハケ	%	斜ハケ	I-8-1252他	I-8-6	・部灰褐色
98	R多+W+B少+疊	にぶい橙	縦ハケ	%		I-8-687他	I-8-5	
99	W多+R+B+疊	赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	I-8-1184他	I-8-7	底部・部横ナデ
100	R多+W多+B+疊	赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	I-7-1871他	I-7-2	
101	W多+R多+B+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ・ナデ%	J-7-1527	J-7-3	底部内面下端横ハケ
102	R多+W多+B+疊	赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ・ナデ%	K-7-66他	K-7-1	
103	W多+R+B+疊	赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ・ナデ%	J-9-367他	J-9-2	
104	B+R+W+W+疊	明灰褐色	不明瞭	%	ナデ	第1TR-E他	第1TR-2	
105	W+R+B少+疊	明赤褐色	縦ハケ	%		試掘	試掘-1	
106	W+R+B+疊	にぶい橙	縦ハケ	%		F-7-598	F-7-6	二次調整外面ヘラおさえ
107	R多+W+B少+疊	赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	G-10-214	G-10-1	内面下端工具によるおさえ
108	R多+W+B+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	F-8-335	F-8-7	
109	W多+R+B+疊	明赤褐色	縦ハケ	%		H-5-63	H-5-2	内面下端工具によるおさえ
110	R多+B+D+W+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	I-6-1496	I-6-3	
111	W多+R多+B+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	I-7-2554他	I-7-5	二次調整外面ヘラおさえ
112	W多+R多+B+疊	赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	第1TR-E	第1TR-1	
113	W多+W多+B+疊	灰褐色	縦ハケ	%	横ハケ	I-9-1143	I-9-2D	外面部横ナデ
114	W多+W多+B+疊	灰褐色	縦ハケ	%	横ハケ	I-9-210他	I-9-2B	梵形時一部横ナデ
115	B+W+R+W+疊	にぶい橙	縦ハケ	%	下端横ナデ	I-6-1053他	I-6-101	底部外面端部工具おさえ
116	W多+W+B+疊	灰褐色	縦ハケ	%	ナデ	I-9-18他	I-9-2C	外面上部横ナデ
117	W多+W多+B+疊	灰褐色	縦ハケ	%	ナデ	I-9-678他	I-9-2A	

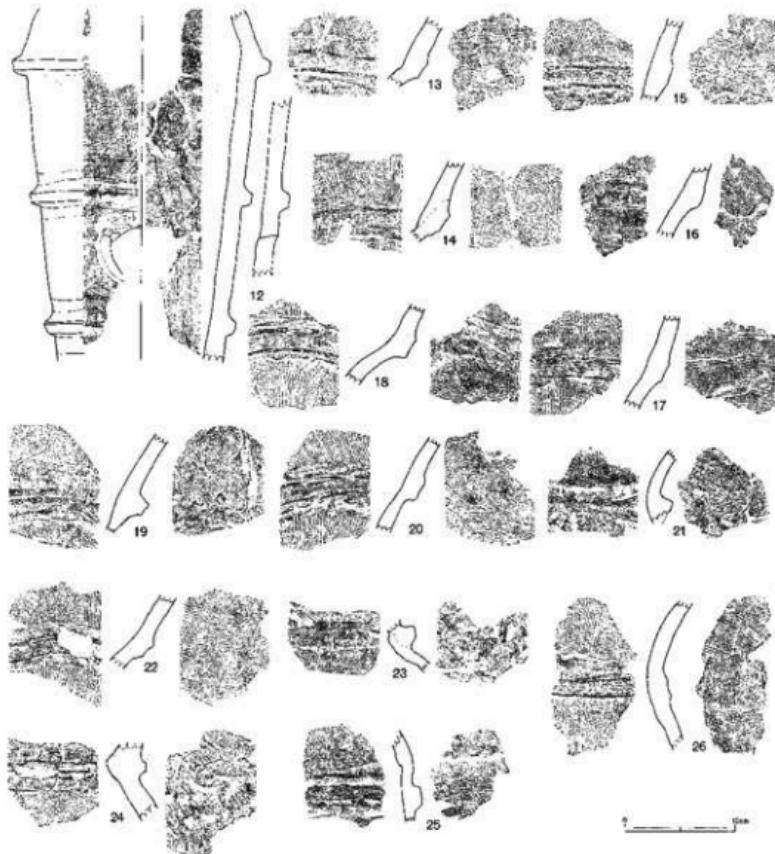
朝顔形円筒埴輪

朝顔形円筒埴輪は、普通円筒埴輪と比較すると極めて少なく、また、底部から口縁部まで接合したものはない。復原される限りでは、胴部は2条突帯で、その上部の頸部に突帯を巡らす。透孔は胴部中段に相対して2ヶ所に穿たれる。透孔は円形である。外面整形は縦ハケを施す。内面は、斜めハケ及びナデ整形を施す。口縁部内側端部近くは、ハケを横に施す。

1は、口縁部の破片である。くびれた頸部から外反して立ち上がり、粘土積上げ部で段をなして直線的に開きながら、口縁端部近くで緩やかに外反する。口縁端部はナデが施され、特に内側は強くナデられ、凹状を呈する。また、端部は平坦な面が強くナデられ、やはり凹状を呈する。外面上には粘土紐を貼りつけ、突帯を作り出す。突帯の上下ともナデられているが、下はナデつけが甘く、ハケ目を残す。



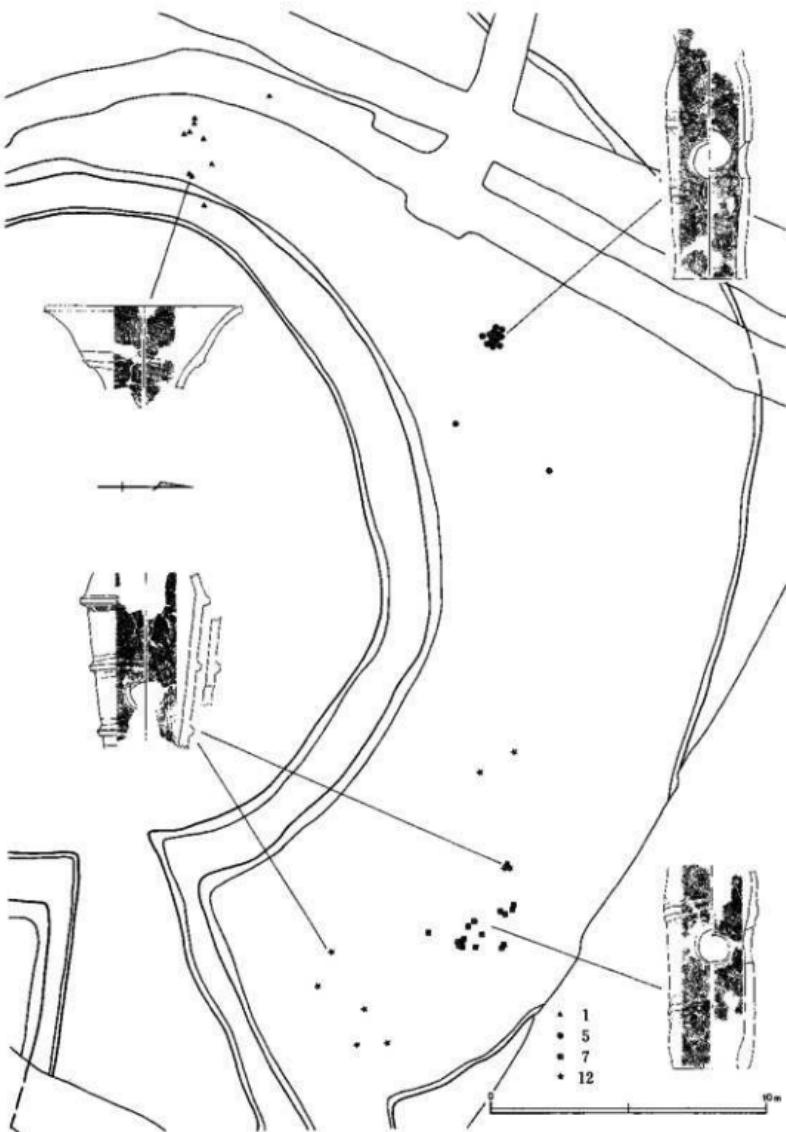
第38図 朝顔形円筒埴輪(1)



第39図 朝顔形円筒埴輪(2)

2は、口縁端部を欠く。1よりも、やや立ち上がりの開きが少ないので、基本的な整形は同じである。内面は斜めハケを施すが、粘土積上げ痕を明瞭に残す。外面の突帯は、上下とも強くナデつけされ、突帯の下端の稜線は部分的に不明瞭となる。

3・4は、口縁端部から突帯に至る破片である。3は1と同様、口縁端部と内面を強くナデ、ともに圓状を呈するものである。4は、口縁端部のナデが比較的弱く、ナデつけされた部分は平坦である。また内側の粘土積上げ部で、大きく屈曲する。8は、口縁部の破片である。内面は斜めハケだが、口縁端部は口縁にそって横ハケを施す。口縁端面は、他の1・3・4とは異なり、丸みを帯びて仕上げられているが、端部は平坦な面をなす。端部の内外面ともにナデが弱く、弱くハケ目を



第40図 朝顕形円筒埴輪出土位置図

第7表 朝顔形円筒埴輪

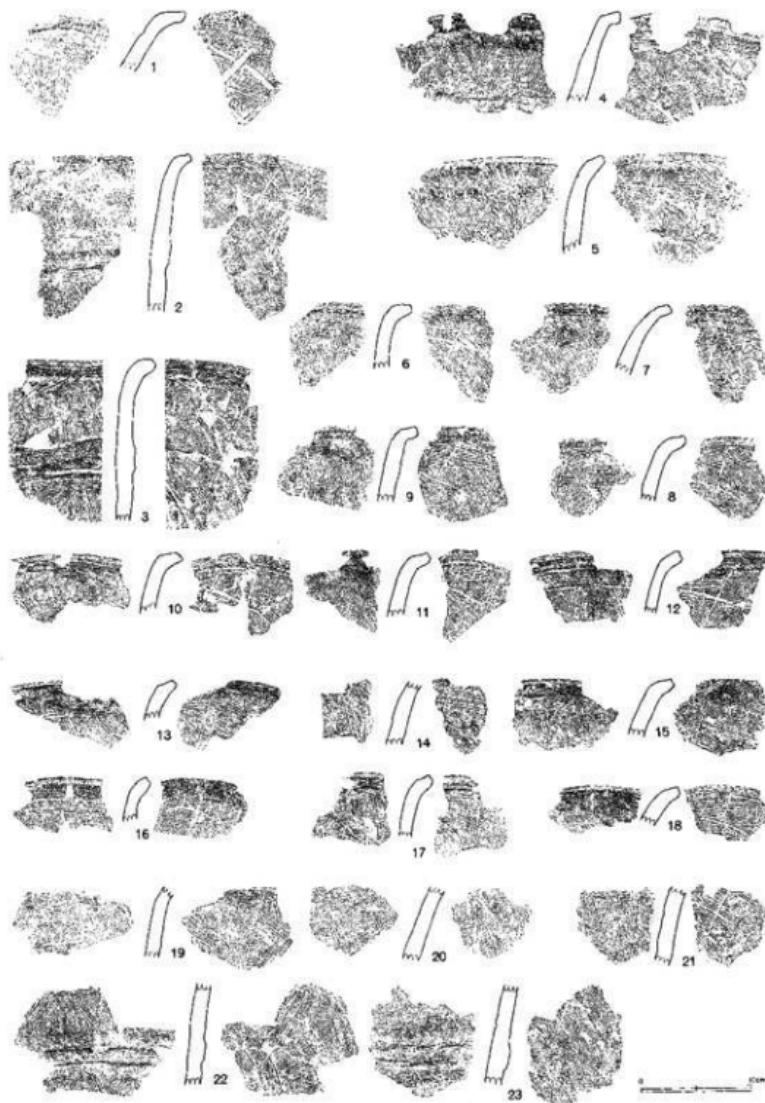
No.	胎土	色調	外面調整%	内面調整%	注記 No.	実測No.	備考
1	R 多+W少	明赤褐色	縦ハケ	%	F-7-1124他	F-7-301	
2	W多+R+B+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	G-7-295 他	G-7-301
3	W少+B+R少+疊	赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	G-7-276 他	G-7-302
4	W多+B少+R+疊	赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	G-6-787 他	G-6-101
5	W多+B+R少+疊	赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	G-6-982 他	G-6-302
6	W多+B+R少+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	I-8-529 他	I-8-301
7	W多+B+R少+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	I-6-1321 他	I-6-5
8	W多+B+R多+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	G-9-445 他	G-9-310
9	W多+R多+B+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	G-9-273 他	G-9-312
10	R多+W+B少+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	J-6-28 他	J-6-301
11	W多+R多+B	明赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	G-9-37 他	G-9-309
12	W多+W+B+疊	にい黄橙	縦ハケ	%	斜ハケ	I-6-1414 他	I-6-206 24と同一個体
13	W多+R多+B+疊	赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	I-7-1007 他	I-7-303
14	W+B+R+W+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	I-7-767 他	I-7-301
15	W+R多+B+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	I-7-4495 他	I-7-304
16	W+R+B+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	I-7-4426 他	I-7-311
17	W多+R+B少+疊	赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	I-9-649 他	I-9-302
18	W多+R多+B+疊	赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	G-6-798 他	G-6-301
19	W+W+B+R+疊	にい黄橙	縦ハケ	%	斜ハケ	I-9-1110	I-9-317 25と同一個体
20	W多+R+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	I-7-5812 他	I-7-302
21	W+W+B+疊+R	明黄褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	J-9-481 他	J-9-301
22	R多+W+B+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	J-8-304 他	J-8-301
23	W+W+R+B+疊	明黄褐色	縦ハケ	%	横ナデ	J-9-258 他	J-9-302
24	W+W+R+B+疊	橙	斜ハケ	%	斜ハケ	J-6-77	J-6-302 12と同一個体
25	W+W+R+B+疊	にい黄橙	斜ハケ	%	横ナデ	J-8-1318	J-8-304 23と同一個体
26	W+R+B+疊	明赤褐色	縦ハケ	%	斜ハケ	G-9-204 他	G-9-305

残す。

5は、口縁部を欠く。胴部は円筒状で、あまり開かない。突帯は2条で、他に頸部のくびれに1条ある。突帯は断面M字形で低い。透孔は円形で、中段に相対して2孔、穿れる。外面は縦ハケ整形で、2次調整はない。内面は、斜めハケとナデにより整形している。

7は、頭部下半以上を欠く。胴部は円筒状で、ほとんど開かない。突帯は2条であるが、下位の突帯が著しく低い位置にある。突帯の断面はM字形であるが、著しく低い。透孔は中段の上部に、相対して2孔穿れる。整形は外面縦ハケ、内面斜めハケ及びナデである。底部外面には、底部調整が認められる。調整は、板状工具の押圧により行っている。

第38図6・9~11、第39図13~20・22は、口縁部下半の破片である。第39図12は、他と全く異なるものである。5・7と比較すると、径が大きく、しかも上方にいくにつれ開く。突帯は3条以上であり、断面台形の高く、しっかりしたものである。透孔は上段と中段にあり、それぞれ2孔に対する位置に穿れ、上段と中段は90°ずれた位置にある。ともに形は半円形で、平らな面を上にする。整形は、外面は目の細かな縦ハケで、内面は縦ナデのみを施す。色調も、他のほとんどが赤褐色、明赤褐色であるのに対し、全く異なりにい黄橙色である。24は、12と同一個体と思われる破片で、頸部の一部である。頸部より下は外面斜めハケ、内面はナデである。上は、外面はやや斜めの縦ハ



第41図 ヘラ記号のある円筒埴輪

ケと思われ、内面は斜めハケを施す。

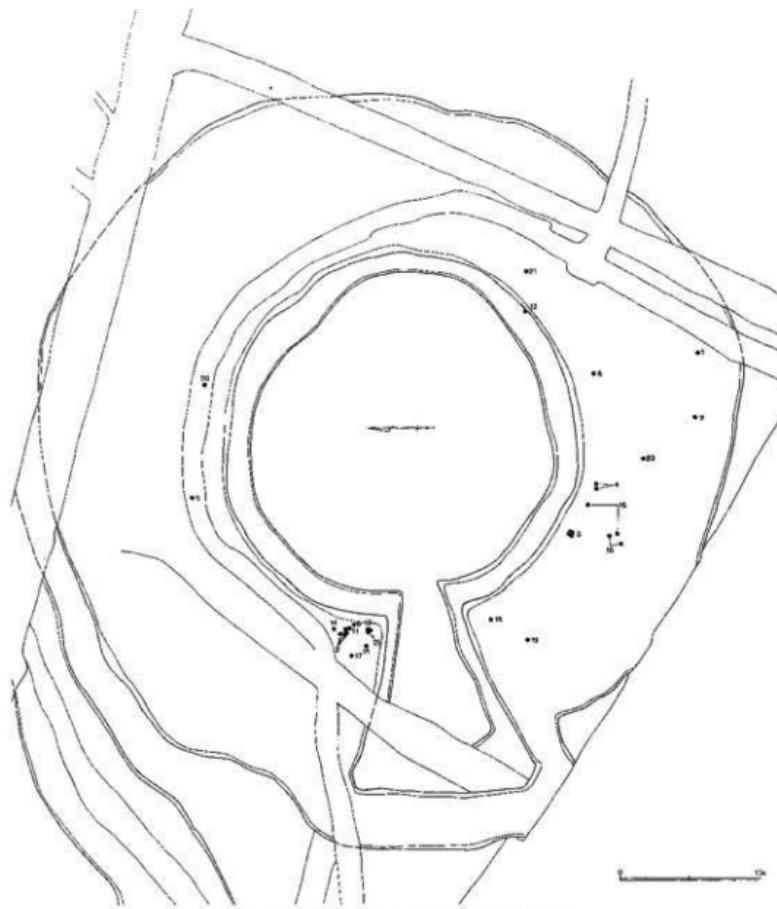
また、19・21・23・25の4点は、同一個体と思われるものであり、これも他の朝顔形埴輪と全く異なるものである。19は、口縁部下半の破片である。一度端部を平坦な口縁状に作り、その内側から粘土を積み上げ、外側には粘土紐を貼りつけ突帯をつくる。突帯は、断面台形の高く、しっかりしたものである。整形は外面縦ハケ、内面斜めハケであるが、粘土積上げ部はナデである。21・23は、頸部の破片である。頸部突帯より上は、外面縦ハケ、内面斜めハケであるが、突帯より下は、外面横ハケ、内面ナデである。25は、胴部最上段の突帯から頸部に向かって、くびれる部分の破片であり、突帯に接するように透孔が穿れる。内面はナデ整形だが、明瞭に粘土積上げ痕を残す。外面は突帯の上部は、斜めハケと横ハケが施されている。いずれの破片も突帯は高く、しっかりしたもので、色調もぶい黄橙色と、他の朝顔とは全く異っており、むしろ12・24に近い形態のものである。26は、頸部の破片であるが、第38図5と、ほぼ同じつくりである。

ヘラ記号

ヘラ記号は、確認し得た限りでは、すべて普通円筒埴輪の口縁部内面に記されている。部分的なものが多いが、すべて横1本に縦2本であると思われる。細い箇先で記されたものが多い。ヘラ記号のある破片は、それらの間で接合しない限り、別個体と考えられるものであり、普通円筒埴輪の分布を示す良好な材料と考え、第42図にその分布を掲げた。

第8表 ヘラ記号のある円筒埴輪

No.	胎 土	色 調	外面調整 %	内面調整 %	注記 No.	実測No.	備 考
1	W+R+R+B+壁	明赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	G-6-1088
2	W+R+B+壁	明赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	I-8-383他
3	W+R少+B少+壁	明赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	I-7-5025他
4	W+R+B少+壁	明赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	H-6-1965他
5	W+R多+B+壁	明赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	H-10-351
6	W+R多+B+壁	明赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	I-8-1542
7	R+W+B少+壁	赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	第1TR
8	W+R+B少+壁	明赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	G-6-173
9	W+R+B少+壁	明赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	H-6-2078
10	R多+W+B+壁	赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	I-6-1511他
11	W+R+B少+壁	明赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	I-8-2100
12	W+R+B少+壁	明赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	I-8-1590
13	W多+B+R+壁	明赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	G-7-453
14	W+R+B+壁	明赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	I-7-3828
15	R多+W+B+壁	赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	I-8-180
16	W多+R多+B+壁	暗赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	H-6-1617他
17	W多+R+B+壁	赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	I-8-195
18	W多+R+B少+壁	赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	I-8-854
19	W+R+B+壁	赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	I-7-3421
20	W+R多+B少+壁	明赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	G-9-523
21	R多+W+B少+壁	明赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	F-7-348
22	W+R多+B少+壁	赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	I-8-1665他
23	W+R多+B少+壁	明赤褐色	縦ハケ	1/2	斜ハケ	1/2	H-6-1182



第42図 ヘラ記号のある円筒埴輪出土位置図

形象埴輪（人物）

第1号墳の内堀からは、多くの円筒埴輪とともに形象埴輪が出土している。人物・馬・猪・水鳥・鹿・盾・家等である。小型の前方後円墳としては、数量・種類ともに豊富なものといえる。

第43図～第45図は、人物埴輪の破片と思われるものである。Iは、女子人物の頭部である。髪の表現は欠損しているが、つぶし島田であると思われる。円筒状の頭部に粘土板を貼り付け、顔を作り出している。顔は全体に丁寧にナデが施されるが、粘土板を貼った顎の部分は特に丁寧である。内面はナデ整形であるが、輪積痕を明瞭に残す。目・口・耳は、工具により円形に小さく穿孔され、内部まで通っている。眉は細い粘土紐を貼りつけ、一直線で表現され、左右は分かれていない。鼻も三角錐状の粘土を貼り付けたものであるが、鼻孔の表現は無い。穿孔された両耳の直下には、環

状に粘土が剥落した痕跡があり、耳環を表現したものを、穿孔した耳に粘土を一部ひっかけるようにして貼り付けたものが、剥落したものと思われる。頭部の後ろ側は、整形時のハケ目を残す。頭部には粘土紐を貼り付けた上に円形の小さな粘土板を貼り、頭飾りを表現している。

2は、女子人物頭部である。1と同様、髪の部分を欠損しているが、つぶし島田と思われる。頭部は比較的、丸く仕上げられているが、顔は粘土板を貼り付けて作り出している。粘土板を貼り付ける前に、接合面にハケ目を施している。目・口・耳は、穿孔して表現している。左右の目の下と、髪の接合部下の額の部分に、横に細長く赤彩が施されている。眉は、細く粘土紐を貼り付けているが、左右別々に付けている。鼻は、三角錐状の粘土を貼り付け、鼻孔の表現は無い。穿孔により表現する耳と接して、環状の剥落痕があり、1同様の耳環の表現が剥落したものである。

3は、女子人物頭部である。1・2同様、髪の表現を欠損するが、つぶし島田と思われる。顔の作りも1・2と同じ、粘土板を貼り付けたものである。目・口・耳も穿孔により表現される。やはり耳と接して環状の剥落痕があり、1・2同様、耳環の表現が剥落している。頭部には、細い粘土紐の上に円形の粘土粒を貼り付け、頭飾りを表現している。眉は1と同様の表現で、細い粘土紐を顔の両側面にかけて1本貼り付けている。鼻も1・2と同様であり、鼻孔の表現は無い。内面はナデ整形であるが、輪積痕を残す。外面は、顔と頭部は丁寧にナデられているが、一部にハケ目を残す。

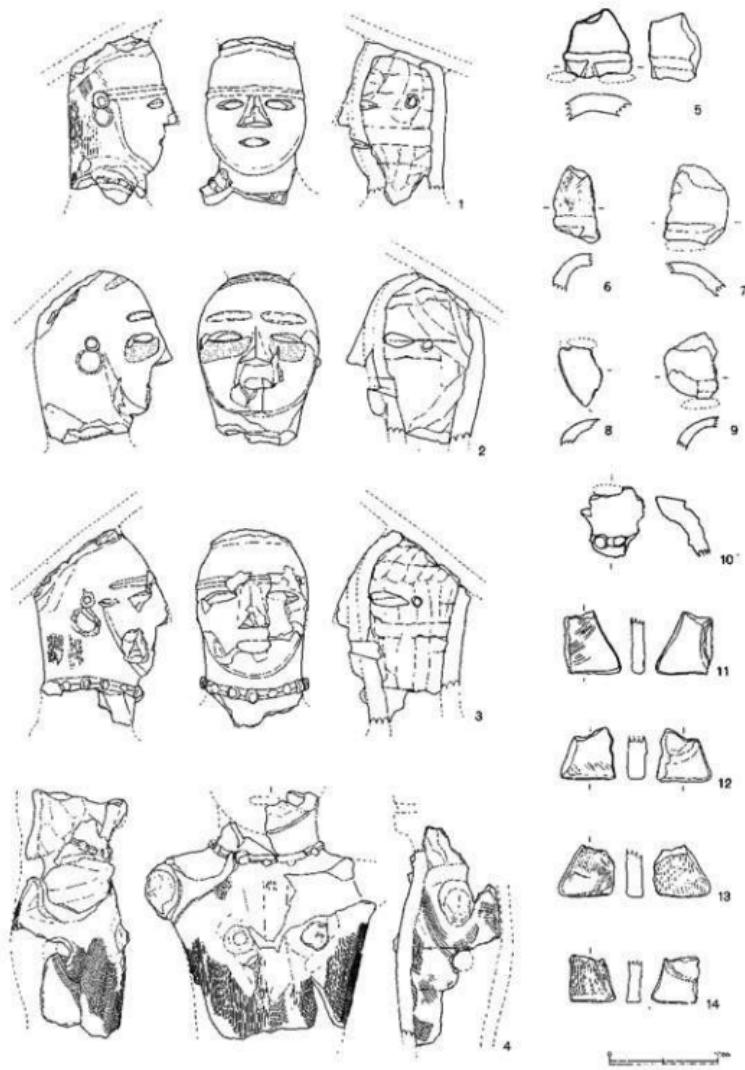
4は、女子人物の胸部から肩・口にかけての部分である。胸部はハケ整形後、円錐台状の粘土を貼り、乳房を表現している。左腕は、棒状に作った粘土を胸部に差し込み、接合部に粘土を足し、丁寧にナデしている。頭部から胸部上半も丁寧にナデ調整されるが、側部と下半はハケ目を明顯に残す。側面の腕の下には、小さな透孔が穿たれている。頸部は細い粘土紐上に円形の粘土粒を貼り付け、1・3同様、頭飾りを表現している。内面は、ハケ及びナデ整形が施されている。

5～10は、人物埴輪の顔面部の破片である。5は、目の上端から眉の部分、6は、鼻の上端から右肩の部分の破片である。額の部分にハケにより、綾杉状の文様が描かれ、冠の表現とも思われる。7は、左目上端と眉の部分である。8は、右頬の部分で、やはり貼り付けにより顔を作っている。9は、右目上端と肩の一部と思われる。10は、口の下端から頸部にかけての破片である。頸部には、細い粘土紐の上に円形の粘土粒を貼り付けた、頭飾りを表現している。

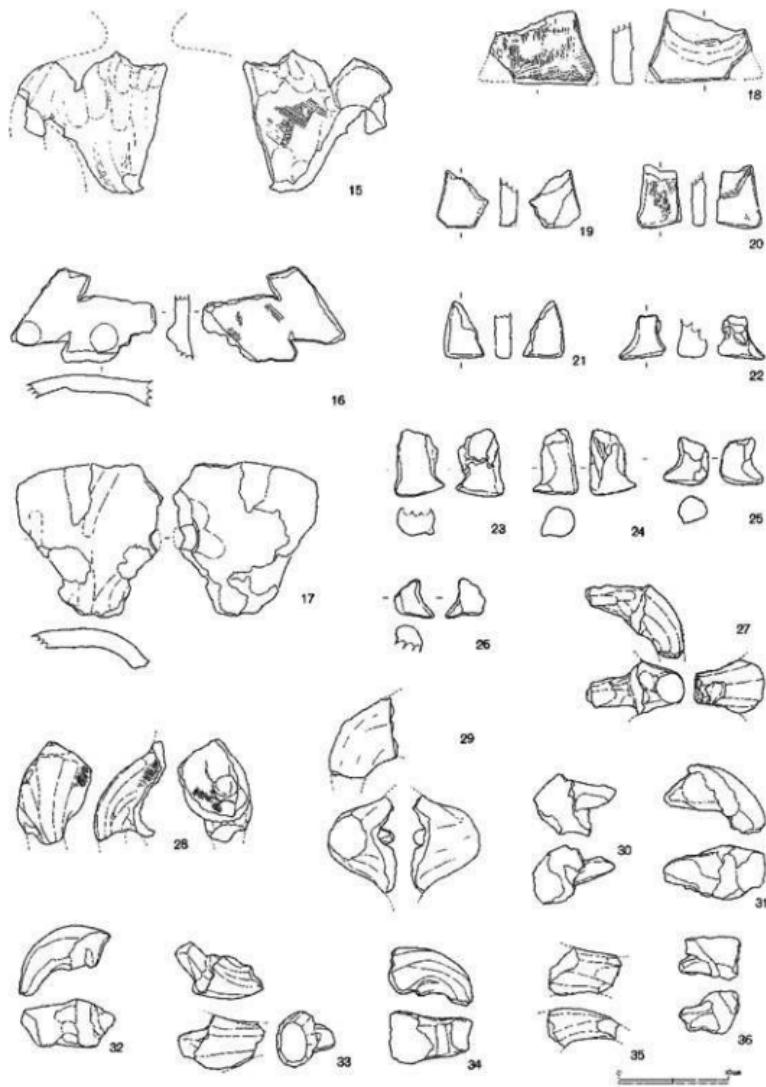
5から10は、いずれも目・口は内側まで穿孔し、眉と鼻の表現は、1・3と同じであり、10の頭飾りは、1・3・4と同じ表現方法である。

11～14と第44図18～21は、女子人物のつぶし島田の破片と思われる。扁平な台形を2つ、短い底を合わせた形になるものと考えられる。11・12・14・18・20には、円形をなす剥離痕が認められる。これらの破片は、いずれも内側はナデ、外側にはナデも施すが、ハケ目を明顯に残す。13は、片面にはハケ目が認められるが、他面は板目状の圧痕が認められ、作業台の痕跡と思われる。21は、他のつぶし島田の破片の側部が、内側に彎曲するのに対し、彎曲する方向が異なり、他の形象埴輪の破片である可能性も考えられる。

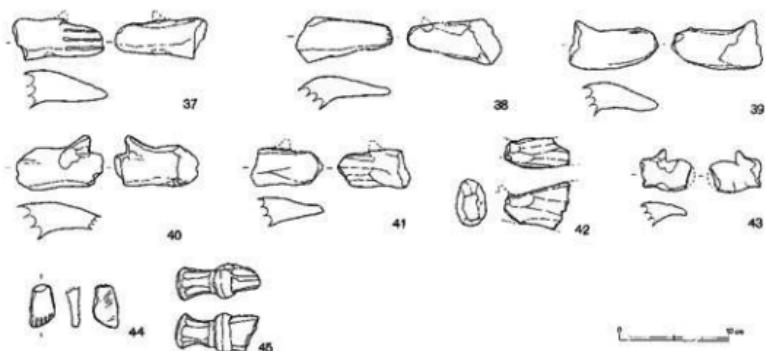
第44図15は、人物の胸部から右の破片である。外面はハケ整形後ナデ、内面はハケとナデである。肩は中空で、ここに棒状の腕を差し込んだものと思われる。外面は丁寧にナデされているが、胸部



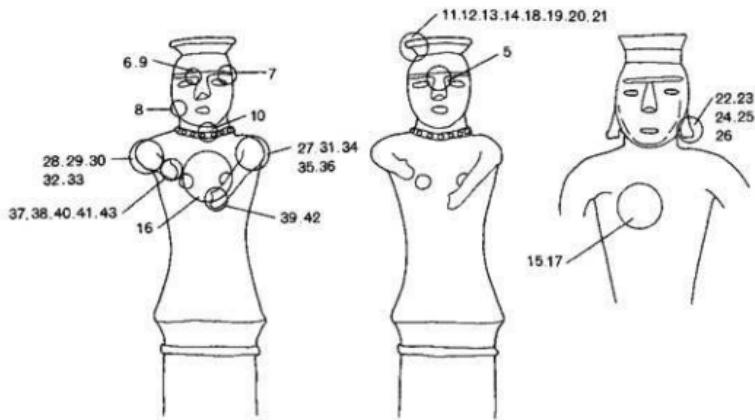
第43図 形象埴輪（人物1）



第44図 形象埴輪（人物2）



第45図 形象埴輪（人物3）



第46図 塩輪片の部位（人物）

下半にはハケ目を残す。内面はハケ及びナデ整形である。

16は、女子人物胸部の破片である。円形の粘土を貼り付け、乳房を表現している。外面はナデ、内面には一部ハケ目を残す。外面に白色の物質が付着する。17は、人物の胴部の破片と思われるが、胸部か背部か定め難い。胴部側面に小さな透孔を穿っている。外面は丁寧にナデつけされる。

22～26は、男子人物の下げ角髪と思われる破片である。22～24は、片側に明瞭な接合痕を残す。25・26は接合痕が無く、やや先端が丸みを帯びたつくりであり、「下げ角髪ではなく他の形象埴輪の部分である可能性もある。

27～36は、肩から腕にかけての破片である。小片で不明確なものもあるが、27・31・34～36が左腕、28～30・32・33が右腕と考えられる。いずれも腕の根元を棒状に作り、肩の部分に差し込んだ

第9表 形象埴輪(人物)

No.	部位	胎 土	色調	注記 No.	実測 No.	備 考
1	頭部	W + R + B + 磁	赤褐色	J - 7 - 747	J - 7 - 503	
2	頭部	W + B + R + 磁	橙色	I - 7 - 2625他	E - 5 - 501	口の下部分に赤彩
3	頭部	W + R + B + 磁	明赤褐色	J - 8 - 879 他	J - 8 - 501	
4	胸部	W + R + B + 磁	明赤褐色	I - 8 - 536 他	I - 8 - 501	白い付着物有り
5	顔	W + R + B + 磁	明赤褐色	J - 9 - 487	J - 9 - 503	
6	頭部	W + R + B + 磁	赤褐色	I - 7 - 1017他	J - 7 - 511	冠部に綾糸状ハケ有り
7	頭部	W + R + B + 磁	明赤褐色	I - 8 - 585	I - 8 - 504	試 摄・501
8	顔	W + R + B + 磁	明赤褐色	I - 8 - 580	I - 8 - 510	
9	顔	W + R + B + 磁	明赤褐色	I - 6 - 1523	I - 6 - 505	
10	顔	W + R + B + 磁	明赤褐色	I - 8 - 1957	I - 8 - 515	
11	冠部	W + R + B + 磁	赤褐色	I - 7 - 1725	I - 7 - 551	
12	冠部	W + R + B + 磁	赤褐色	J - 7 - 745	J - 7 - 506	
13	冠部	W + R + B + 磁	赤褐色	I - 8 - 1171	I - 8 - 518	
14	冠部	W + R + B + 磁	明赤褐色	I - 8 - 744 他	I - 8 - 514	
15	胸部	R + W + B + 磁	明赤褐色	J - 7 - 356 他	J - 7 - 513	白い付着物有り
16	胸部	R + W + B + 磁	明赤褐色	I - 7 - 2617他	I - 7 - 548	白い付着物有り
17	胸部	R + W + B + 磁	赤褐色	I - 7 - 4635	I - 7 - 552	
18	髪	R + W + B 少+ 磁	赤褐色	I - 8 - 675	I - 8 - 517	
19	髪	W + R + B 少+ 磁	明赤褐色	I - 8 - 2063	I - 8 - 516	
20	髪	W + R + B 少+ 磁	明赤褐色	I - 7 - 4622	I - 7 - 525	
21	髪	W + R + B 少+ 磁	明赤褐色	I - 7 - 2296	I - 7 - 553	
22	下美豆良	W + R + B 少+ 磁	赤褐色	I - 7 - 2103	I - 7 - 555	
23	F美豆良	W + R 少+ B 少+ 磁	赤褐色	J - 7 - 1004	J - 7 - 514	
24	下美豆良	W + R 少+ B 少+ 磁	明赤褐色	G - 6 - 1655	G - 6 - 504	
25	下美豆良	W + R 少+ B 少+ 磁	明赤褐色	I - 7 - 2672	I - 7 - 554	
26	下美豆良	W + R 少+ B 少+ 磁	明赤褐色	J - 7 - 1087	J - 7 - 517	
27	肩	W + R + B 微+ 磁	明赤褐色	E - 6 - 24	E - 6 - 501	
28	肩	W + B + R 少+ 磁	明赤褐色	I - 7 - 1550	I - 7 - 541	
29	肩	W + B + R 少+ 磁	明赤褐色	I - 7 - 4425	I - 7 - 535	
30	肩	R + W + B 微+ 磁	赤褐色	I - 8 - 538	I - 8 - 506	
31	肩	R + B + W + 磁	明赤褐色	F - 7 - 439	F - 7 - 503	
32	肩・腕	R 多+ B 少+ W 少+ 磁	明赤褐色	I - 8 - 581	I - 8 - 507	
33	肩・腕	R 多+ B 少+ W 少+ 磁	明赤褐色	I - 7 - 1945	I - 7 - 536	
34	肩・腕	R + B 少+ W 少+ 磁	赤褐色	I - 7 - 4438	I - 7 - 543	
35	腕	R + B + W 少+ 磁	明赤褐色	I - 7 - 5439	I - 7 - 544	
36	肩	W + R + B + 磁	明赤褐色	I - 7 - 1170	I - 7 - 538	白い付着物有り
37	手	W + B + R + 磁	明赤褐色	I - 7 - 4421	I - 7 - 537	
38	手	W + B + R + 磁	赤褐色	I - 7 - 1012	I - 7 - 540	
39	手	B + R + W + 磁	明赤褐色	F - 8 - 409	F - 8 - 502	
40	手	B + R + W + 磁	明赤褐色	J - 7 - 543	J - 7 - 516	
41	手	W + B + R + 磁	明赤褐色	I - 7 - 1905	I - 7 - 542	
42	手	W + R + B + 磁	明赤褐色	I - 7 - 4785	I - 7 - 546	
43	手	B + R + W + 磁	明赤褐色	I - 7 - 2549	I - 7 - 545	
44	足	W + R + B + 磁	明赤褐色	I - 8 - 1821	I - 8 - 503	
45	大刀	W + B + R + 磁	赤褐色			

ものである。整形は外面ナデで、丁寧なつくりである。

第45図37～43は、手の部分の破片である。37は、右手の破片である。親指だけ独立して作ったものと思われるが、欠損している。他の指は1つに作り、3条の沈線によって表現する。38も右手と考えられるものである。37同様、上部に小さな剝離痕があり、親指を独立して作ったものと思われる。他の指は、扁平にした粘土板の先端に、ごく短い、鎧による刻みを入れ、指を表現している。39は、親指の表現ではなく、先端を扁平に作っているだけである。40は、左手の破片である。上方に粘土を貼り付け、独立させて親指を表現する。他の指の部分は、先端が欠損しているため、表現されていたかどうか不明である。41は、右手の破片と思われる。上部に粘土の剝離痕があり、親指の表現があったものと思われる。先端部分を欠くが、指の表現は無かったものと思われる。42は左手と思われるが、他の破片とやや異なり、先端が細くなっている。先端は欠損しているが、やや上方に屈曲しており、独立した親指の表現があった可能性がある。43は、小型のもので丸みを帯びたつくりである。親指は独立したものであるが、他の指の表現はない。先端は欠損している。44は、人物の左足の破片と思われる。指を表現するためか、先端に5条の刻み目をつけている。裏面は調整を施しておらず、椅子にすわる人物につく足の可能性が考えられる。45は、人物埴輪につく大刀の頭部である。

形象埴輪（動物）

第47図1は、馬形埴輪の頭部である。右側面の残りはよいが、左側面は大きく欠損している。顔の部分は、筒状にした粘土の上から、逆U字状に粘土板で被い、成形している。外面はハケ整形、内面はナデにより整形する。鼻孔は小さな円形に穿たれ、口は竪で一直線に切り込まれている。目と耳は穿孔されるが、両目とも穿孔された目の上部を、意識的に盛り上げているようである。面繋の表現は、目と耳の間と、目と鼻の間に1条づつ粘土紐を貼り付け、上面に1条、側面から耳の後ろを通し、たてがみの上部の窪みから反対側面に通して、1条貼り付けている。また各々の粘土紐の交点には、円形の浮文が貼り付けられている。鬚は長円形で、素環の鬚を表現している。鬚の部分からは、たてがみの後部下位に向けて、両側面に粘土紐を貼り付け、手綱を表現する。たてがみは、円筒状の頭部にハケ目を施した後、貼り付けており、断面形は長い三角の頂点を平らにしているが、端部は左右にやや広がっている。ハケ整形後ナデを施しているが、たてがみ端部は稜線にそって丁寧にナデされている。たてがみの先端は、円柱状にしたものと上部を広げたものを立て、その後ろに粘土を板状にしたものと、立てるようにして付けている。

2は、雲珠を表現したものと思われる。扁平な円板に、やや細い円柱をつけた形である。

3は、馬の左側の鬚と思われる。形態は1とほぼ同じで、素環の鬚を表現したものである。整形は、外面ハケ整形後、粘土紐を貼り付けている。また、鬚から斜く2本の粘土紐の上部に、円形の粘土板を貼り付けている。

4は、馬の左耳の破片と思われる。内部まで貫通する耳の立ち上がりの下端に、ハケ整形後、粘土紐を貼り付けている。

5は、2と同様、雲珠を表わしたものと思われる。扁平な円形の粘土板に円柱状の粘土をつけたもので、ナデにより整形される。

6は、耳の後ろに隆帯が付き、円筒状の頭部にたてがみが付く。馬の左耳からたてがみの下部にかけての破片である。外面はハケ整形後ナデ、特にたてがみの接合部は丁寧である。内面はナデ整形が中心だが、一部にハケ目を残す。

7は、馬の鞍の破片と考えられる。大きく彎曲する胴部に粘土板を立てるようにして貼り付け、接合部を丁寧にナデる。内面はナデ及びハケ整形である。外面はハケ整形後、部分的にナデしている。

8は、薄く伸した粘土紐を、緩やかに彎曲する部分に階段状に貼り付けたもので、部位を特定するのは難しいが、可能性としては、馬の鞍から障泥にかけての破片が考えられる。外面はハケ整形後、薄い粘土板を貼り付け、粘土板周辺を丁寧にナデつけている。内面はハケ整形後、部分的に指ナデが施される。

第48図9は、馬の左右の足の付け根の部分と考えられる。円筒状に作った足の上部に、水平にU字状の胴部をついている。片面の上部はやや大きめの透孔があり、前足である可能性が大きい。外面はハケ整形であるが、透孔の下部と、足と胴の接合部は丁寧に指ナデされる。内面はナデ整形であるが、部分的にハケ目がみられる。

10~13は、緩やかに彎曲する胴部に、広めて扁平な粘土紐を貼り付け、その下に長方形の粘土板をT字状に付けたものである。10は、外面ハケ整形後、粘土紐と粘土板を貼り、丁寧にナデつけている。内面はハケ整形である。11は、粘土紐から垂下する長方形が、2ヶ所並んで付けられている。長方形の斜め下には透孔が穿たれている。10同様、外面ハケ整形後、粘土を貼り丁寧にナデしている。内面はハケ及びナデ整形である。12も、長方形の斜め下に透孔があけられる。外面は10・11同様のつくりであるが、内面はナデ整形である。13は、11・12とは反対の位置に透孔があけられるもので、外面は10・11・12同様の作りであり、内面は上半がナデ、下半がハケ整形を施す。11~13は馬の胸繫の破片と考えられ、11・12は透孔を中心として、胸繫の右側、13は左側の破片である。10は、胸繫か、尻繫か不明確である。長方形の粘土板は、立闘などの表現はないが、杏葉を表わしたものと思われる。なお、10・11・13には、少量だが外面に白い付着物がある。

14は、馬の障泥の一部である。障泥の下端は、やや彎曲している。外面はハケ整形後、部分的にナデを施す。円形に粘土紐を貼り付けたものが剥落した跡があり、輪鎧を表現していたものと考えられる。内面はナデ整形であるが、円弧状の痕があり、馬胴部との接合面と考えられる。

15は、彎曲する胴部に粘土板を貼り、外面を平らに作ったもので、障泥を表わした部分と考えられる。破片の片側に、三角形をなす平坦面の端部が残されている。平坦に作られた面の下部は、意識的に段をつくっており、段の表面は格子目に施されたハケ目を残す。平坦面は丁寧にナデされているが、上半にはハケ目を残す。また、平坦面の上端に方形の剥落痕があり、その周囲は直角にナデされている。前輪あるいは後輪の表現が剥落したものと考えられる。内面はハケ整形を施すが、障泥の内側に隠れる胸部下面にあたる部分は、粗いナデ整形が施されるだけである。なお、外側平坦面上半のハケ目に、白い付着物がある。

16は、鎧を表現したものと思われる。雑に丸められた粘土塊の一部を上方に漬し広げ。本体に押し付けて接合したもので、片面に接合痕が認められる。切り込みなどによる鎧口の表現は無い。

第49図17は、水鳥形埴輪である。尾の先端を欠く。円筒状の台部に乗るもので、足の表現は無い。

胸部は粘土を積み上げて成形しているが、頭部と尾部は、棒状の粘土を胸部の穴に差し込み作っている。内面はナデ整形である。外面は非常に丁寧にナデ整形される。左右の翼は、長円形の粘土板を上部だけ貼り付けており、下部は胸部からやや離れている。尾は縦長に表現され、尾の下に小孔を穿っている。目は、細い棒状のものを深く差し込んだものと思われ、やや円錐状をなす。鼻孔は、細い管先で2条、押し引きして表現する。嘴の先端は若干欠損しているが、管により先端から刻み込み、なお且つ左右に押し引きして、嘴を長めに表現している。台部には突帯は無く、整形は外面縦ハケ、内面縦ナデである。台部と水鳥の接合部は、丁寧にナデつけている。台部の透孔は、水鳥の側面側に1ヶ所づつ穿たれているが、小さなものである。

第50図18は、猪形埴輪の頭部である。口の部分は、先端を押しつけて広げている。鼻は、細い棒状のもので内側まで穿孔している。口は、やや大きめの管状工具により、正面だけではなく、左右の側面に長く刻まれている。口の刻みをつけた後に、左右側面の刻み日の上に粘土塊を貼り付け、下向きの牙をつけているが、牙の先端は、左右とも欠損している。目は、ほぼ丸く穿孔され、目のすぐ後ろに耳が付き、耳も穿孔されている。耳はナデにより整形される。頭頂から背部にかけて、たてがみ状の突出を貼り付けているが、馬よりもかなり低い。断面形は馬と同様、端部がやや広がるものである。外面はハケ整形であるが、顔面部とたてがみ状の部分は、丁寧にナデられている。内面はナデ整形である。胸部の正面に透孔が穿たれる。

19は、水鳥形埴輪の頭部である。嘴の先端を欠く。頭部だけで比較すると、17よりも大型である。頭部の成形も異なり、棒状の粘土を差し込むのではなく、粘土板を絞るようにして成形している。目は、細い棒状の工具を深く差し込み、表現している。鼻孔は、棒状の工具の刺突により表現され、この点も17と異なる。嘴は欠損しているが、鼻孔の位置と方向から推測する限り、やや下へ屈曲するものと思われる。外面は、ハケ整形後ナデを施すが、背面は、ハケ目を明瞭に残す。なお、背面のハケ目に、白い付着物がわずかに認められる。

22も、水鳥形埴輪の頭部である。19よりも、やや大きい。成形は19同様、筒状にした粘土板を絞るようにして成形している。目は、輪の狭い管状工具の刺突により表現しており、そのため長方形を呈する。鼻孔は、細い棒状の工具を深く刺突することにより表わしている。嘴の先端は欠損しているが、残存する範囲では口の表現は無い。嘴は、鼻孔の部分から下へ屈曲して作られており、鼻孔の上側と下側は、明瞭な面を作り出している。嘴の側面はハケ整形後、ナデあるいは工具の押圧により面とりされている。整形は、ハケ整形後ナデであるが、わずかにハケ目を残す。

25は、水鳥形埴輪の胸部片である。翼から尾部にかけてのもので、尾部は、積み上げた粘土を絞るようにして成形している。尾部の下に小孔が穿たれている。翼は、17と比較すると非常に厚い粘土板を用いているが、やはり上部のみを貼り付け、下部は、胸部とやや隙間がある。外面はハケ整形であるが、丁寧にナデ、ハケ目を消している。

20は、動物埴輪の顔の破片である。粘土板を絞るように成形している。小片ではあるが、鼻孔と口の刻み、右目の穿孔の一帯が認められ、上顎部であることがわかる。鼻先に向かって著しく細くなり、鼻孔は棒状の工具で穿孔される。管状工具による口の刻みも深く、又、側面の目の下近くまで至っている。馬・猪の顔の表現とは全く異なっており、犬あるいは鹿形埴輪の可能性が考えられ

る。外面はハケ整形後ナデであるが、ハケ目を残す。

21は、動物の口の部分の破片で、範状工具により深い刻みを入れ、口を表現したものである。図では上顎として掲載したが、明瞭な鼻孔の表現が無いため、下顎の可能性もある。20ほどではないが、鼻先で細くなる形態を示す。外面には一部にハケ目が認められるが、比較的難な整形である。

23も、動物の顔の部分と考えられるもので、両側面に目の表現である小孔を穿っている。20・21同様、鼻先で極端に細くなる形態を示す。外面はハケ整形後ナデであるが、ハケ目を残す。内面はナデ整形である。

24は、上端、下端及び、枝分かれする部分の先端も欠損している破片である。棒状にした粘土の周間に、粘土を少しづつ貼り付け、傘状にし、さらにその上部に、別の細い粘土棒を斜めに付けている。傘状の部分は指による押圧で整形し、細い棒の接合部はナデしている。元となっている粘土棒には、棒状にした時の作業台の圧痕が認められる。意識的に下部を傘状に作っている点と、枝分かれしている点から、鹿の角と考えられる。なお、表面には白い付着物が頗るに認められる。

26は、動物の右耳と思われる。粘土板を彎曲させて成形している。形態は、馬・猪とは異なるものである。残存部の大きさから推定すると、比較的大型の耳である。内面には粘土板を作った際の、作業台の圧痕を残す。外面はハケ及びナデ整形である。

27は、中空の円筒状に作ったものを斜めに切った形をしており、馬の左耳と考えられる。裏側は接合部にそってナデが認められる。外面はハケ整形である。

29は、動物の耳であるが小型である。先端と側面を欠く。外面はナデ整形である。

30は、動物の耳の先端部である。内外面ともナデ整形を施す。

28は、動物の頭部の破片と考えられる。たてがみの表現は認められない。上端の頭側部にあたる位置に、やや下向きに小孔が穿たれているが、位置的に、目、耳にあたるものとは考えられない。外面はハケ整形であるが、頭側部から上部にかけては、ナデが施される。内面は、下端に一部ハケ目が認められるが、他はナデ整形である。

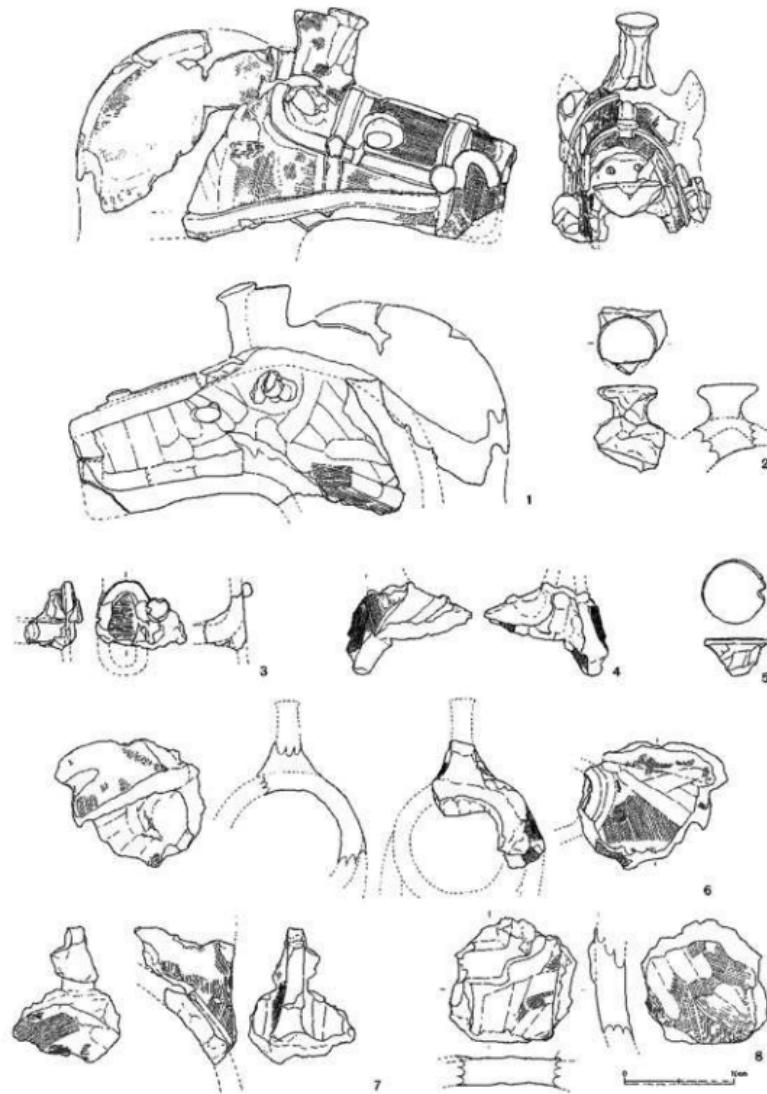
31は、動物の鼻の先端部である。円形の刺突により、鼻孔を表現している。

第51図32は、動物埴輪の胸部である。ほぼ中央に小さめの透孔がある。外面はハケ整形であるが、側面の一部が板状工具の押圧により整形されている。内面は胴部はハケ、細くなる頭部は横位のナデにより整形される。

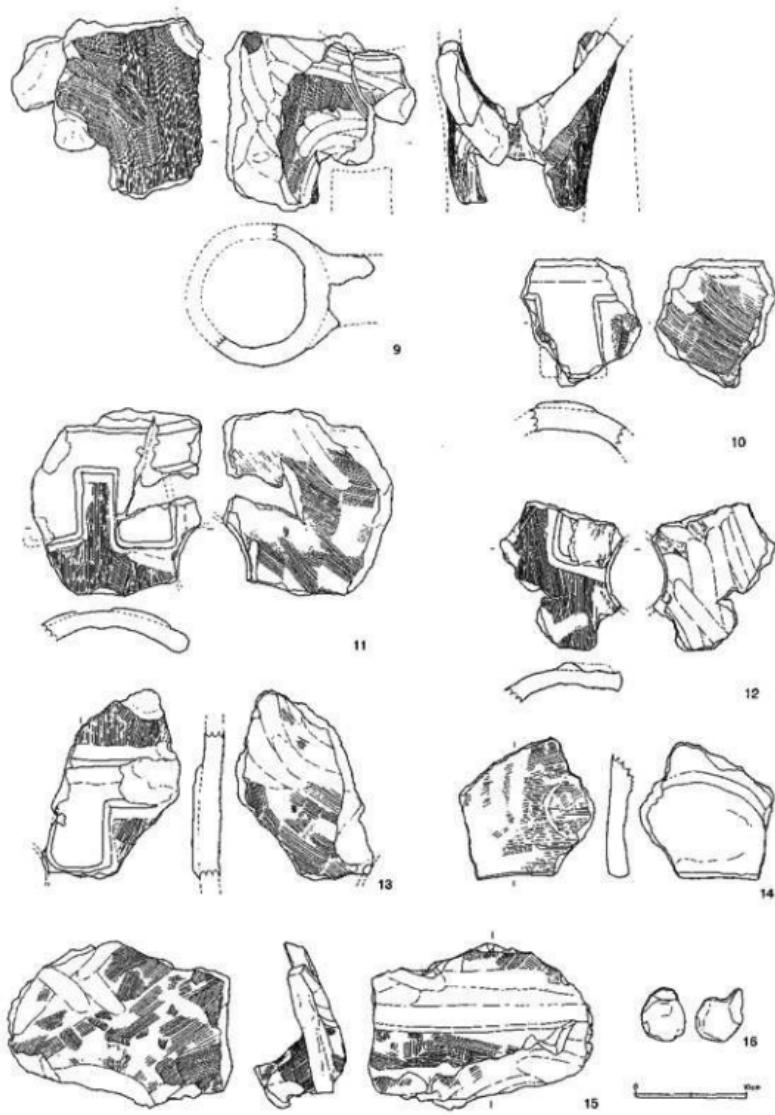
33・34は、ほぼ同様の大きさであり、且つほぼ同様の成形である。先端を押し潰して広げた円柱状の粘土に、粘土板を立てて接合して、一部粘土を加え、ナデにより整形している。馬形埴輪のたてがみの先端部分である。第47図1の、馬形埴輪のたてがみの先端と同じ成形であり、大きさもほぼ同じである。

35は、動物埴輪の胴部右後ろ側と思われる破片である。破片の上端は外側がやや外反し、その周囲を円弧状にナデしており、また内側は、粘土の溜まりが認められ、尾を接合した部分とみられる。外面はハケ整形、内面は下半が主にハケ、上部はナデ整形が施される。

36・37は、動物の尾である。先を細くした粘土棒の先端に面をとり、周囲はハケにより整形している。

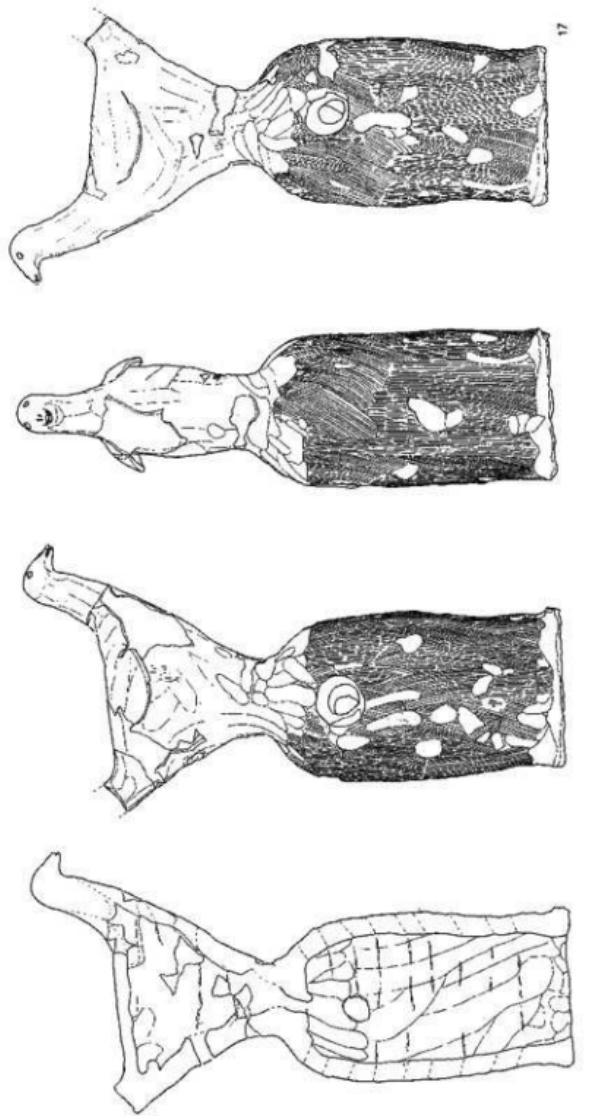


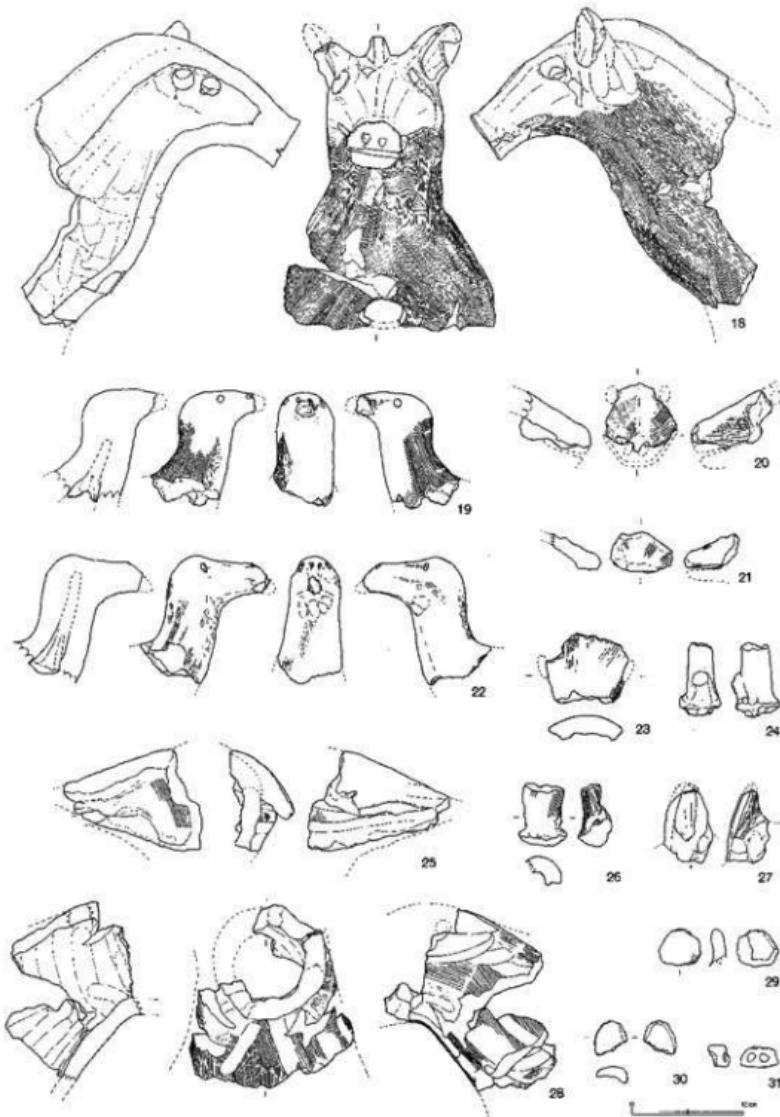
第47図 形象埴輪(動物1)



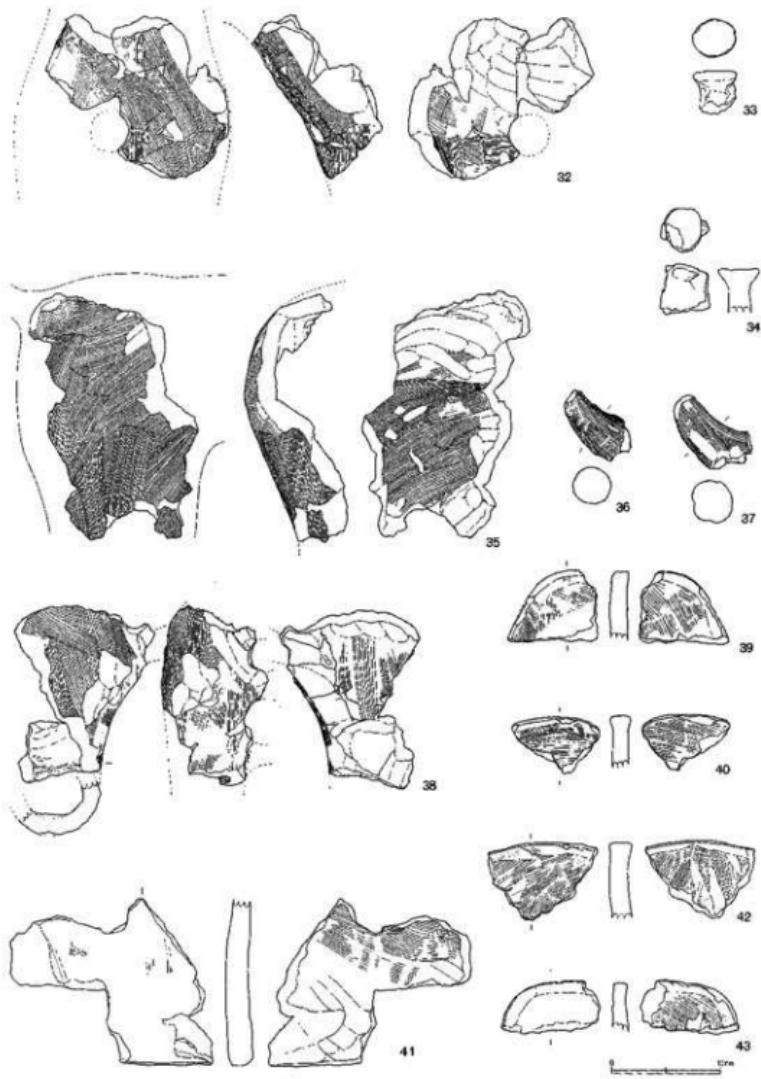
第48図 形象埴輪(動物2)

第49图 形象地輪（動物3）

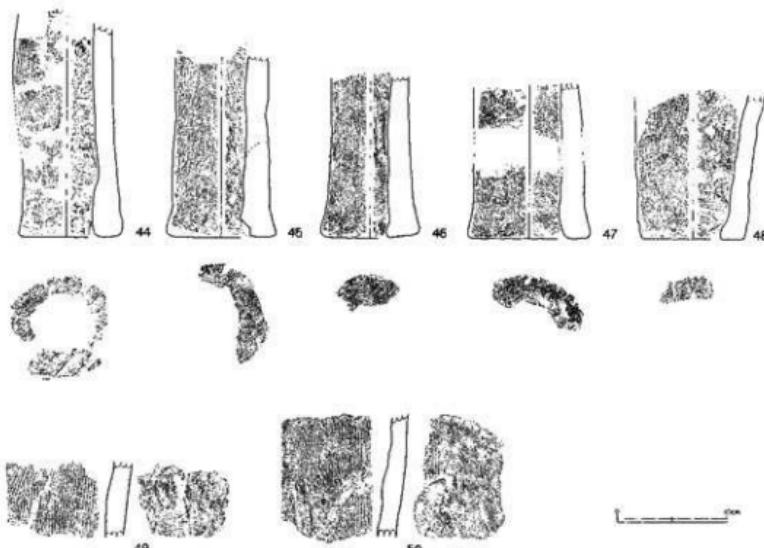




第50図 形象埴輪(動物4)



第51圖 形象坡輪（動物5）



第52図 形象埴輪(動物6)

38は、動物の左後ろ足の付け根の部分である。脚の上方に透孔が穿たれ、その上部に尾を接合したとみられる円孔が認められる。上方の円孔周辺には、接合した粘土塊が一部残され、その周囲は、ナデにより整形されている。脚部は脚部だけで整形された後に、接合されている。外面はハケ整形、内面は脚の接合部はナデ、胴部下半はハケ目、上半はナデ整形を施す。

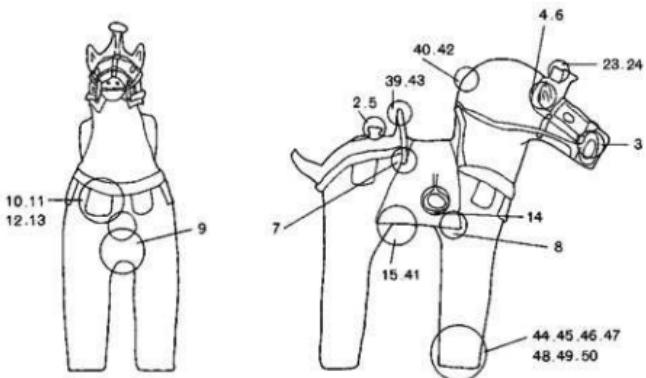
39は、板状の破片である。両面ともハケ整形を施すが、端部は稜線にそってナデしている。片側の割れ口の端部はやや盛り上がり、その部分にナデが施されており、他の部分との接合部と思われる。端部の断面は、左右に広がらない。形態と、接合部があることから推定すれば、鞍の前輪と思われる破片である。

40・42は、板状の破片であるが、ともに断面形が端部で広がるものである。表裏の区別は無く、ハケ整形を施し、端部をナテる。馬のたてがみと考えられる。

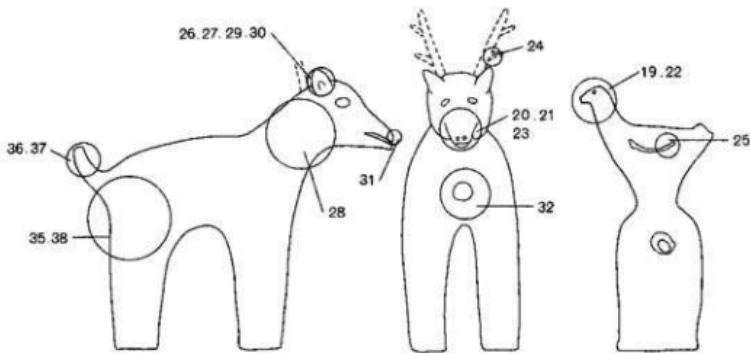
43は、やはり板状の破片であるが、端部はほとんど広がらない。端部はナデを施す。片面はハケ整形後ナデ、もう片面はハケ整形であり、意識的に表裏を区別しているものと思われ、鞍の可能性が考えられる。

41は、やや内側する板状の破片であるが、下面に端面が残される。外面は丁寧にナデ整形され、ハケ目は、ほとんどナデ消されている。内面は下部がナデ、上部がハケ整形である。外面の端部近くの割れ口に、粘土の盛り上がりが認められ、他の部品の接合痕と考えられる。積極的な根拠に乏しいが、馬の障泥の一部の可能性が考えられる。

第52図の44~50は、動物の脚部である。小片から逐の復原を行なっているため径にややばらつきが



第53図 形象埴輪の部位（馬）



第54図 形象埴輪の部位（動物）

ある。44・46・47は、縦一直線に割れが入る部分があり、その割れ口はいずれも扁平である。また46は、その割れにそって内側を縦にナデている。いずれの個体も、径が極めて細いのにもかかわらず、内面にハケ目が認められる。一撃、大きめな円筒状に成形したものを、刀子状の工具により縦に切り、径を小さく作り直した痕跡と理解される。整形は外縦ハケ、内縦ナデであるが、一部にハケ目が認められる。

なお、第53・54図は、動物埴輪の破片の部位を、概念的に表わした図である。

第10表 形象埴輪（動物）

No	器種	部位	胎 土	色 調	注記 No.	実測 No.	備 考
1	馬	頭 頭珠	R 多 + B 少 + 黒	明赤褐色	I - 7 - 826 他	I - 7 - 513	
2	馬		R 多 + W + B + 黒	明赤褐色	H - 6 - 1250 他	H - 6 - 528	

No.	器種	部位	胎 土	色 調	注記 Na.	実測 Na.	備 考
3	馬	鬚	R 多 + W + B 少 + 磁	明赤褐色	J - 9 - 352	J - 9 - 510	
4	馬	耳	R 多 + W + B + 磁	橙	I - 6 - 1201他	I - 6 - 510	
5	馬	茎珠	R 多 + W + B 少 + 磁	明赤褐色	I - 6 - 1624	I - 6 - 513	
6	馬	頭部	R 多 + W 多 + B + 磁	赤褐色	J - 9 - 374	J - 9 - 508	
7	馬	鞍	R 多 + W 少 + B 少 + 磁	明赤褐色	K - 19 - 56 他	K - 10 - 502	
8	馬	蹄泥	R 多 + W 多 + B + 磁	赤褐色	I - 8 - 1451	I - 8 - 519	
9	馬	脚部	R 多 + W + B + 磁	にぶい赤褐色	J - 7 - 1203他	J - 7 - 502	
10	馬	胸繫	R 多 + W 多 + B 少 + 磁	明赤褐色	J - 7 - 1076	J - 7 - 519	白い付着物有り
11	馬	胸繫	R 多 + W + B + 磁	にぶい赤褐色	I - 7 - 3846他	I - 7 - 567	白い付着物有り
12	馬	胸繫	R 多 + B + W + 磁	橙	K - 8 - 851 他	K - 8 - 506	
13	馬	胸繫	R 多 + W + B + 磁	明赤褐色	J - 8 - 62	J - 8 - 503	白い付着物有り
14	馬	蹄泥	R 多 + W + B 少 + 磁	明赤褐色	J - 6 - 71	J - 6 - 501	
15	馬	蹄泥	R 多 + W + B + 磁	明赤褐色	J - 7 - 1792	J - 7 - 520	白い付着物有り
16	馬	鈴	R 多 + W + B + 磁	橙	F - 7 - 1505	F - 7 - 508	
17	鳥	全形	R 多 + B + W + 磁	赤褐色	I - 7 - 4450	I - 7 - 501	
18	鳥	頭部	R 多 + W + B + 磁	明赤褐色	I - 7 - 2005	I - 7 - 508	
19	鳥	頭部	R 多 + W 多 + B 少 + 磁	明赤褐色	I - 7 - 4684	I - 7 - 570	白い付着物有り
20	猪	鼻	R 多 + W 多 + B 少 + 磁	極端赤褐色	I - 7 - 4154	I - 7 - 571	
21		顎部	R + W + B + 磁	明赤褐色	I - 7 - 23	I - 7 - 576	
22	鳥	頭部	R 多 + W + B + 磁	暗赤褐色	試 握	試 握 - 502	白い付着物有り
23		顎部	R + B + W + 磁	明赤褐色	I - 7 - 2395	I - 7 - 573	
24	鹿	角部	R + W + B + 磁	赤褐色	I - 7 - 4448	I - 7 - 534	白い付着物有り
25	鳥	胸部	R 多 + W + B + 磁	赤褐色	I - 7 - 1600	I - 7 - 574	
26		耳 (右)	R + W + B + 磁	赤褐色	I - 7 - 3097	I - 7 - 556	
27	馬	耳 (左)	R 多 + B + W + 磁	明赤褐色	I - 7 - 2125	I - 7 - 569	白い付着物有り
28	馬	首部	R 多 + W + B 少 + 磁	赤褐色	I - 7 - 1972	I - 7 - 505	
29		耳部	R 多 + W + B + 磁	明赤褐色	K - 8 - 429	K - 8 - 504	
30		耳部	R 多 + W + B + 磁	明赤褐色	I - 7 - 2782	I - 7 - 557	
31		鼻	R 多 + W + B + 磁	赤褐色	I - 7 - 1436	I - 7 - 558	
32	馬	脚部	R 多 + W + B + 磁	明赤褐色	F - 5 - 25	F - 5 - 501	
33	馬	頭部	R 多 + W + B + 磁	明赤褐色	C - 5 - 146	C - 5 - 501	
34	馬	頭部	R 多 + W + B + 磁	明赤褐色	I - 9 - 357	I - 9 - 502	
35		胴体	R 多 + B + W + 磁	明赤褐色	I - 7 - 3336	I - 7 - 559	
36		尾部	R 多 + B + W + 磁	赤褐色	I - 9 - 305	I - 9 - 503	
37		尾部	R 多 + W + B + 磁	橙	I - 9 - 594	I - 9 - 504	
38		脚部	R 多 + W + B + 磁	明赤褐色	F - 7 - 827 他	F - 7 - 505	
39	馬	鞍部	R 多 + W + B + 磁	明赤褐色	I - 7 - 1785	I - 7 - 522	
40	馬	たてがみ	R 多 + W + B + 磁	明赤褐色	H - 6 - 1086	H - 6 - 519	
41	馬	たてがみ	R 多 + W + B + 磁	明赤褐色	H - 6 - 1530他	H - 6 - 516	
42	馬	たてがみ	R 多 + B + W + 磁	明赤褐色	J - 7 - 1065	J - 7 - 504	
43	馬	たてがみ	R 多 + W + B 少 + 磁	明赤褐色	J - 7 - 327	J - 7 - 505	
44	馬	足部	R 多 + W + B 少 + 磁	明赤褐色	I - 7 - 2038他	I - 7 - 503	
45	馬	足部	R 多 + W + B + 磁	赤褐色	I - 6 - 1146他	I - 6 - 501	
46	馬	足部	R 多 + W + B + 磁	明赤褐色	I - 7 - 2311他	I - 7 - 504	
47	馬	足部	R 多 + W + B + 磁	明赤褐色	I - 7 - 1928他	I - 7 - 510	
48	馬	足部	R 多 + W + B 少 + 磁	明赤褐色	I - 7 - 2462	I - 7 - 506	
49	馬	足部	R 多 + W + B 少 + 磁	明赤褐色	I - 7 - 1106	I - 7 - 502	
50	馬	足部	R 多 + W + B 少 + 磁	赤褐色	I - 7 - 478 他	I - 7 - 507	

形象埴輪（盾）

第55図から57図は、形象埴輪の内、盾を表現したものの破片である。

第55図の1は、盾形埴輪の上部である。緩やかに彎曲する。両側面には台形の突出が付く。突出部の内側のくびれは、ハケ整形後に切っている。端部は平坦な面を成し、ナデ整形を施す。外面はハケ整形を行うが、縱方向が多い。また一部にナデが加わる。裏面もハケ整形だが横方向である。裏面の中央には、ハケ整形後に貼り付けた粘土が認められ、別の部品を接合した痕と考えられる。

2も1同様、盾形埴輪の上部である。1よりやや横幅が広い。形状は1とはほぼ同じで、左右に台形の突出部が付く。端部は面をなし、丁寧にナデされている。整形は外面は縦方向のハケであるが、その後、指によるナデと、板状工具による押圧が加えられている。裏面は、横方向のハケ整形である。裏面の中央上部には、長方形の接合痕があり、断面長方形の部品が付いたものと考えられる。接合痕の周囲は四角くナデされる。接合された部品は、下部の円筒部と続き、盾の上部を支えるためのものである可能性がある。

3は、裏面にハケ整形後、粘土を貼った接合痕があり、盾形埴輪の上端部の破片と考えられる。端面は強くナデられ、やや凹状を呈している。端部はナデ整形、外面はハケ整形後、板状工具による押圧が加えられるが、ハケ目は明瞭に残っている。裏面は、横方向のハケ整形後、ナデを行っている。

4は、小片であり、器種は不明確であるが、片面だけにハケ整形後、板状工具による押圧が加えられており、盾形埴輪の上部の破片と考えられる。端面は強くナデられ、凹状を呈する。端部はナデ整形である。裏面はハケ整形である。

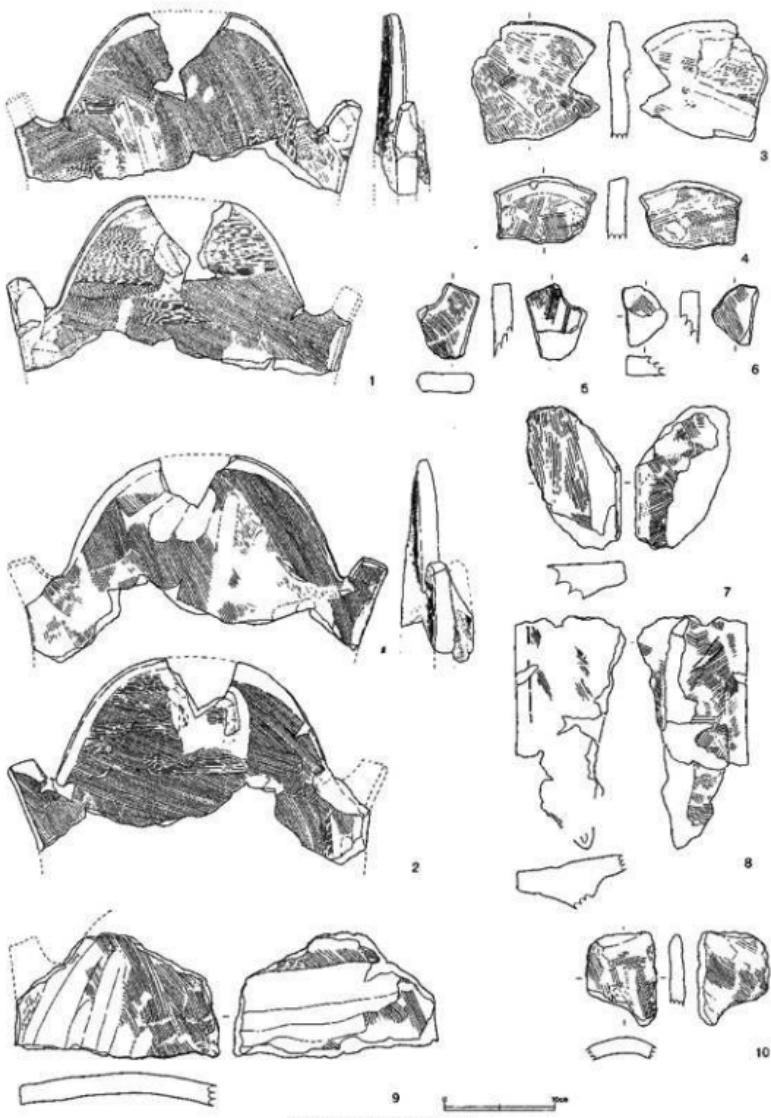
5と6は、盾形埴輪の上部の両側に付く、台形の突出部の破片である。5は、片面にハケ整形後、板状工具により押圧を加えている。裏面はハケ整形であるが、整形後、突出部の内側のくびれを切っている。6は外面ハケ整形後、やはり板状工具で押圧している。裏面はハケ整形である。5・6とともに、正面から見て左側の突出部の破片と考えられる。なお6は、2と同一個体である可能性があるが、直接、接合しなかった。

7は、円筒部が始まる部分の破片である。外面はほぼ半らであるが、裏面は粘土が盛り上がっており。側面の端面は強くナデられ、凹状を呈する。また端面にそって、表裏ともナデ整形がなされる。外面はハケ整形後ナデが加えられる。裏面はハケ整形である。

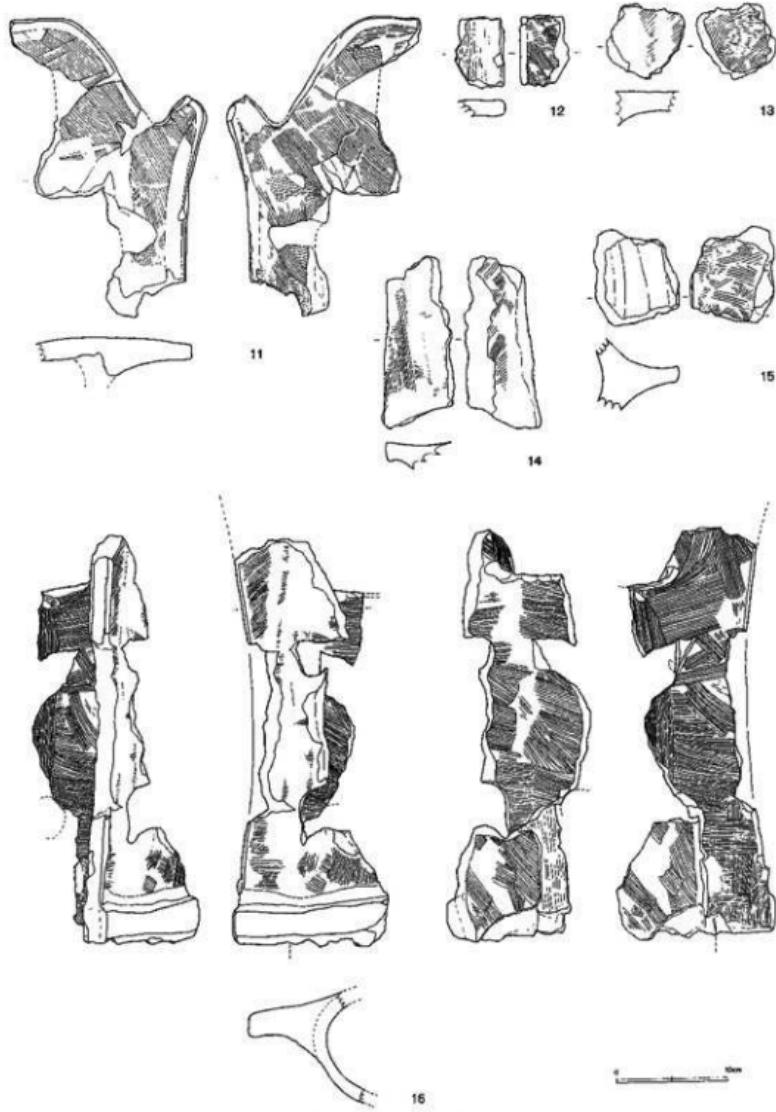
8も、円筒部の接合部の上端である。破片の上部に、円筒部の端面が残る。外面の上部は比較的平坦であるが、下部に向かうにつれ、徐々に彎曲が大きくなる。円筒状に成形した外面に、側面部を接合しており、上部に行くに従って、円筒部を徐々に扁平に作っている。整形は、外面がハケ整形後丁寧なナデ、裏面はハケ整形であるが、円筒部上端面付近の接合部はナデしている。

9は、上部の向って左側の突出部付近の破片である。突出部は欠損している。破片の下部は彎曲している。裏面の一部は粘土が徐々に盛り上がっており、この破片のすぐ下に円筒部が付くものと推定される。外面はハケ整形後ナデが加えられ、一部に板状工具による圧痕が認められる。裏面はハケ後ナデ整形を行っている。側面及び上面の端面と、その両側はナデ整形である。

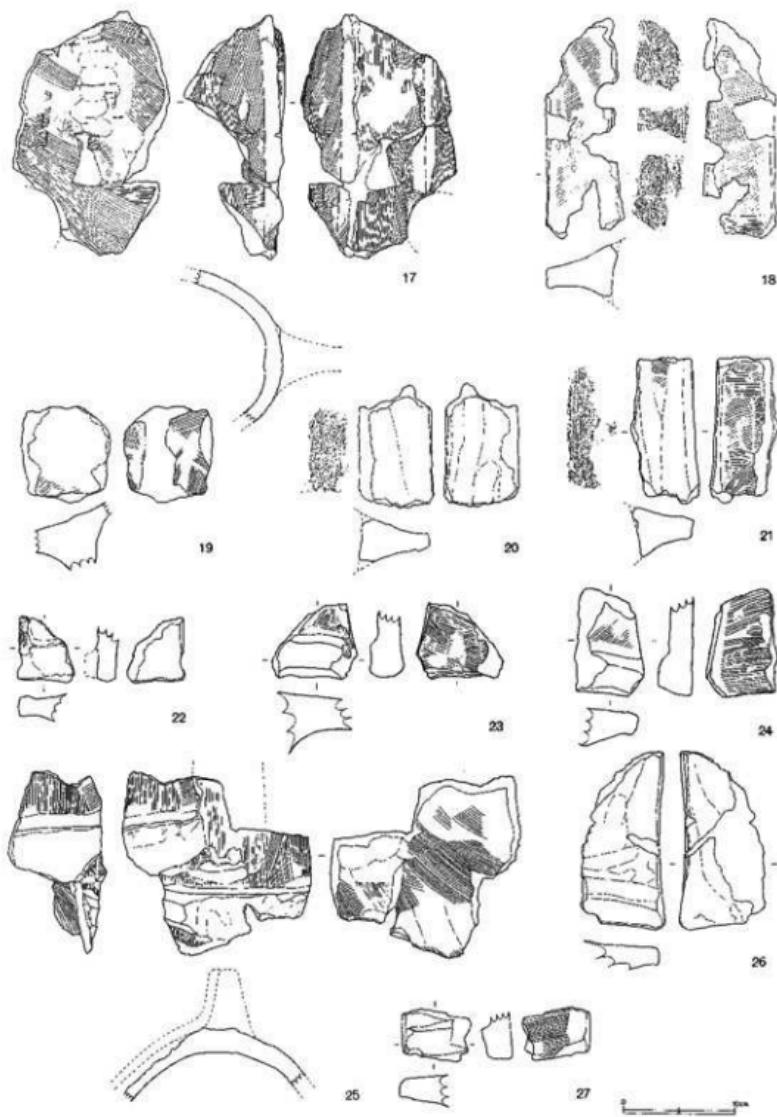
10は、円筒部の上端部の破片と考えられる。表面の一部に剥落痕があり、側面及び盾外面の接合



第55図 形象埴輪（盾1）



第56図 形象埴輪(盾2)



第57図 形象埴輪(盾3)

第11表 形象埴輪(盾)

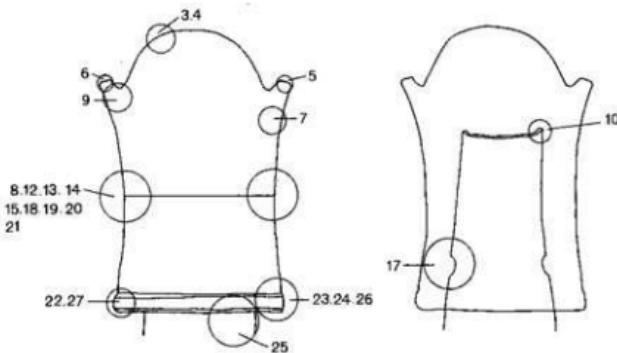
No.	部位	胎土	色調	注記 No.	実測 No.	備考
1	盾上部	R+B+W+疊	明赤褐色	I-7-2663他	I-7-519	
2	盾上部	R+B+W+疊	明赤褐色	I-7-3276他	I-7-512	
3	盾上部	R+B+W+疊	明赤褐色	H-6-793他	H-6-515	
4	盾上部	R+B+W+疊	明赤褐色	I-6-1677	I-6-504	
5	盾上部	R+B+W+疊	赤褐色	H-6-1309	H-6-504	
6	盾上部	W+R+B+疊	明赤褐色	I-7-3885	I-7-516	
7	盾側部	R+B+W+疊	明赤褐色	I-6-1533	I-6-502	
8	盾側部	R+B+W+疊	赤褐色	G-6-506他	G-6-502	
9	盾上部	R+B+W+疊	明赤褐色	H-7-168他	H-7-501	
10	盾台部	R+W+B+疊	明赤褐色	I-7-4714	I-7-515	
11	盾上側部	R+W+B少疊	赤褐色	G-6-1045	G-6-501	
12	盾側部	R+W+B+疊	明赤褐色	G-6-84	G-6-503	
13	盾側部	R+W+B+疊	明赤褐色	I-7-3850	I-7-517	
14	盾側部	R+W+B+疊	明赤褐色	I-7-2637	I-7-520	
15	盾側部	R+W+B+疊	赤褐色	G-9-267	G-9-501	
16	盾側部	R+W+B+疊	明赤褐色	I-7-1492他	I-7-509	
17	盾台部	W+R+B+疊	明赤褐色	I-7-3635他	I-7-511	
18	盾側部	R+B+W+疊	赤褐色	F-8-865他	F-8-501	
19	盾台部	R+B+W+疊	明赤褐色	G-5-304	G-5-501	
20	盾側部	R+W+B+疊	明赤褐色		第1TR-501	
21	盾側部	W+B+W+疊	明赤褐色	I-7-2631	I-7-521	
22	側部下端	B+R+W+疊	明赤褐色	H-6-624	H-6-505	
23	盾下端	R+W+B+疊	赤褐色	F-7-609	F-7-501	
24	盾下端	B+R+W+疊	明赤褐色	J-6-463	J-6-502	
25	盾台部	R+B+W+疊	明赤褐色	I-7-1492他	I-7-509	
26	盾下端	R+B+W+疊	赤褐色	H-6-1612他	H-6-518	
27	盾下端	R+B+W+疊	赤褐色	G-7-243	G-7-501	

部と思われる。上端は明確な面をもたず、整形は粗雑である。内・外両ともにハケ整形である。

第56図11は、正面に向って右側上部の破片である。裏面の上部には、第55図1~3と同様、別の部品を付けた痕跡が認められる。破片のほぼ中央付近には、わずかであるが円筒部上面が残されている。円筒部より上方の比較的平坦な粘土板は、円筒部上端より、やや下の外面側から粘土を貼り付けて成形している。外面はハケ整形後、板状工具により押圧され、また部分的にナデ調整される。裏面はハケ整形である。端面は強くナデられ、上部では凹状を呈する。端部は表裏ともナデ整形される。

12~15は、側部の破片であり、上下も不明確である。12~14は、円筒部との接合部付近の開きが小さく、上部の破片である。15は、盾外面も完全に円筒状になるため、下部の破片と考えられる。いずれも外面はハケ整形後ナデを施す。裏面は、ハケ整形である。また円筒部内面もハケ整形である。

16は、正面からみて左側の側面部で、盾の下端から、円筒部の上端付近までの破片である。円筒状のものに、断面三角形の粘土を貼り付け、盾側部を成形している。その際、接合面にはハケ目を



第58図 形象埴輪の部位（盾）

施す。盾の上部は、円筒状のものの外面から粘土板を貼り成形する。円筒部の上端は、盾部との接合部だけ面をとるが、円筒部は整形が難である。盾部の下端は、幅広の粘土紐を貼り付け、ナデ整形を施す。盾部下端から15cm程上方の、盾側部の裏面に透孔が穿たれる。整形は盾部外面は、ハケ整形後ナデが加えられる。裏面と円筒部内面は、ハケ整形である。

第57図17は、縦に長い剥落痕と、その脇に透孔を有する円筒部の破片で、正面からみて右側の盾部側面が剥落したものと考えられる。接合部にはハケ目を施す。整形は内外面ともハケ整形である。

18・20・21は、盾側部が、円筒部から剥落したものである。ともに上下は不明確である。接合面にはハケ目を施す。外面はハケ整形後ナデを加え、裏面は18・21がハケ整形である。端面及び端部の表裏はナデ整形である。20は、他の破片と異なり、ハケが認められず、難なナデ整形を施すだけである。

19は、円筒部の上端近くの盾部の破片である。円筒部の接合部を残す。外面はハケ整形後、丁寧なナデを加え、裏面はハケ整形である。

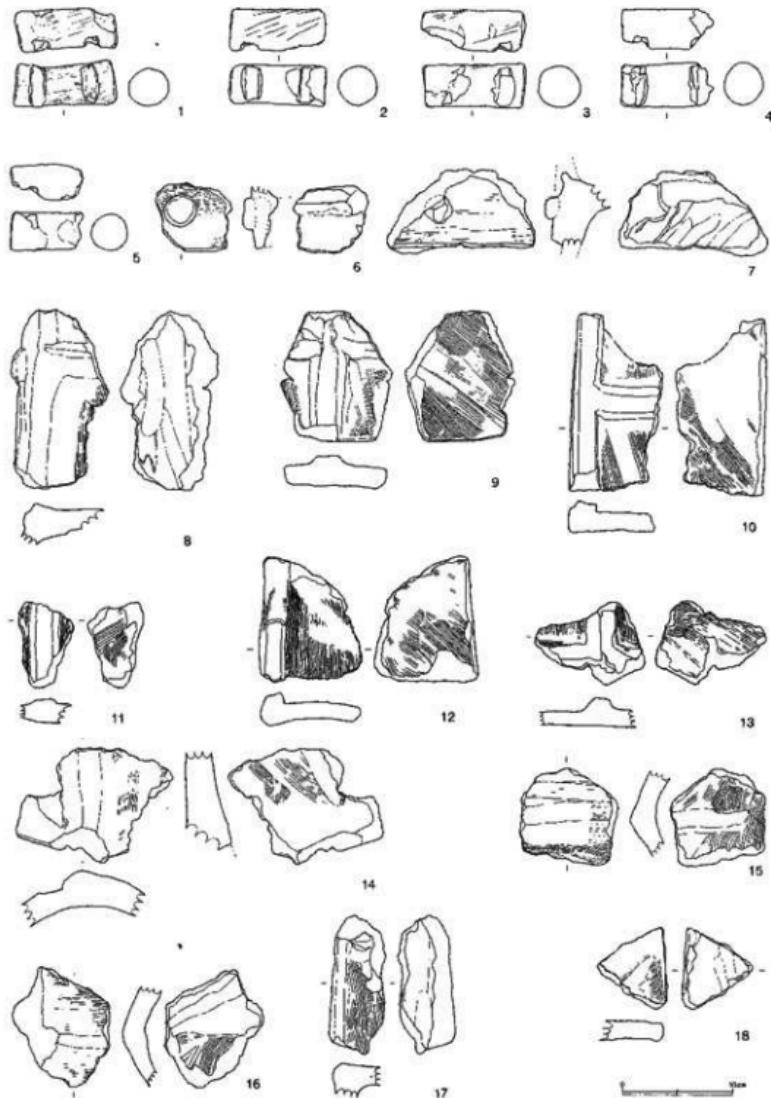
22～24・26・27は、盾部側面下端の破片である。22・27が向って左側、23・24・26が右側の側面である。22は、貼り付けた粘土紐が剥落しているが、他はすべて下端に粘土紐を貼り付けている。整形は、外面はハケ後ナデ、裏面はハケ整形で、粘土紐を貼り付けた部分はナデ整形である。ただ、22の裏面にはハケ目は認められず、粗いナデ整形が施される。

25は、向って右側下部の円筒部の破片である。盾側部上端が剥落しており、また、円筒部に貼り付けられた下端を画す粘土紐も剥落している。いずれも接合部にはハケ目が残されている。盾部下端を画す粘土紐の下位に突起が巡る。内外面ともハケ整形である。25は、色調などから16・17・24と同一個体と考えられるが、明らかに直接接合するとはいはず、あえて復原せずに実測した。

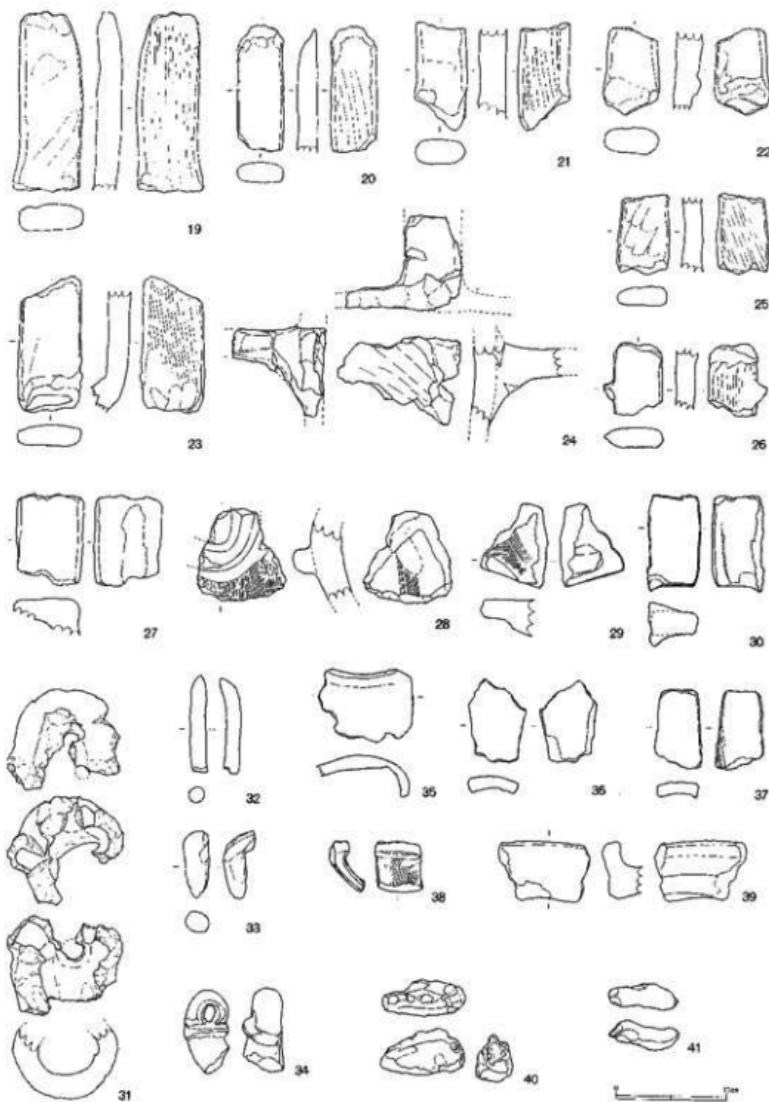
なお第58図は、各破片の概略の部位を表わしたものである。

形象埴輪（その他）

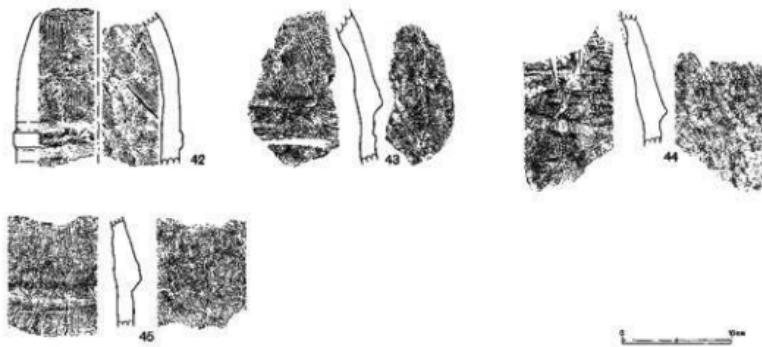
第59図1～5は、家形埴輪の櫻木である。円柱状に作った粘土棒の下面を2ヶ所、コの字状に切ったものである。屋根の先端は2枚の板状になっていたものと思われ、それに接合するために、2



第59図 形象埴輪（その他1）



第60図 形象埴輪（その他2）



第61図 形象埴輪（その他3）

ヶ所の切り込みを入れたものであろう。切り込みには、接合された屋根の一部が付着している。整形は、ごく一部にハケ目も認められるが、すべて表面に作業台の圧痕と見られるものが残っており、成形したまま使用している。

6は、板状の部分に円柱の粘土板を貼り付けたものである。裏面は剥離しているが、上下と横方向に粘土板が伸びることは確実である。屋根の上端が断面H字形になる部分の破片と思われる。外面はハケ整形後、下端を丁寧にナデている。7も、6同様上下と横方向に粘土板が続く破片である。外面は段をなしており、扁平な表面に円形の粘土板を貼り付けている。やはり先が狭くなる断面H字形の屋根の一部と考えられる。外面はハケ整形後ナデ、内面はナデ整形である。

8～13は、ほぼ扁平な粘土板の、縦・横の方向に粘土紐を貼り付けたもので、家の壁を表現したものである可能性が大きい。10と12は、粘土紐を貼り付けた部分は端面であり、家の破片とすると窓、あるいは出入口を表現したものである。破片はいずれも小片であり、上下は不確定である。外面はハケ整形後、粘土紐を貼り、その周囲をナデしている。内面はハケ及びナデ整形である。なお8は、断面がJ字形となり、壁のコーナー部と思われる。内面はナデ整形である。

14は、断面くの字状で、外面に稜をもつもので、下部にも端面が一部残っている。外面はハケ整形後ナデ、内面はハケ及びナデ整形である。小片であり、器種を特定することは難しいが、屋根下端のコーナー部である可能性が考えられる。15・16は、くの字状に屈曲する破片で、14同様外面に稜線をもつ。外面はハケ後ナデ、内面はハケ及びナデを施す。ともに14と色調、整形が非常に似ており、屋根の稜の部分の破片である可能性が考えられる。

17以後は、ほとんど器種、部位とともに不明のものが多いが、特徴的な形象埴輪であり、図を掲載した。17は、断面L字状に屈曲する破片である。上下も不明であるが、図では破片の上端にあたる部分に接合痕がある。角は丸く仕上げられ丁寧にナデしている。一面にのみハケ整形が施され、内面はナデである。18は、板状の破片で、上下・左右全く不明である。表裏は意識的であり、表はハケ整形後丁寧なナデ、裏面は雑なナデ整形である。端面は平坦に作り、ナデしている。

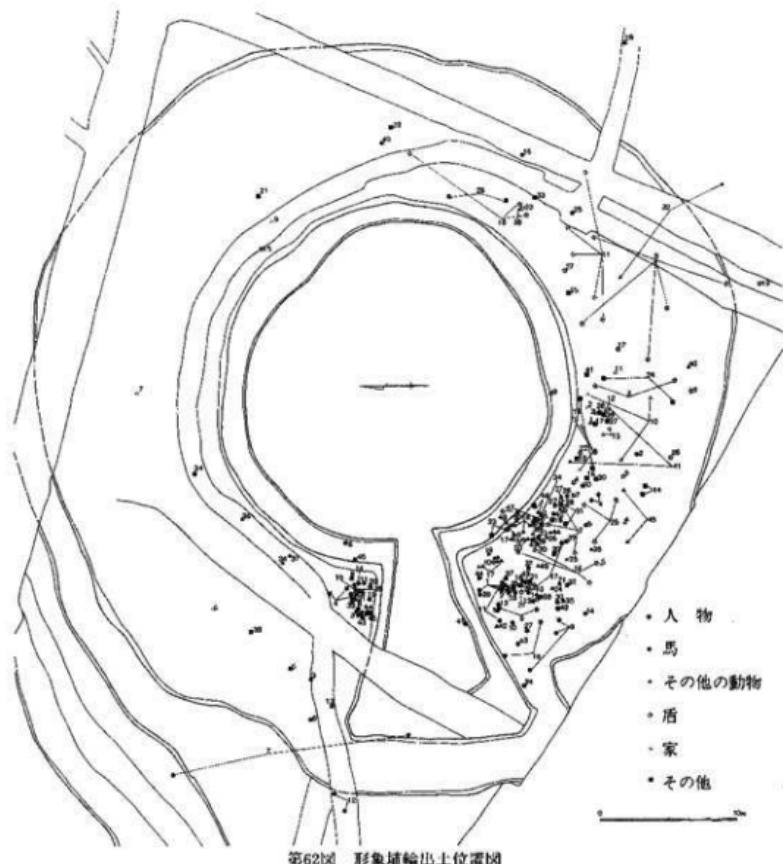
第60図19～23・25は、細長い板状の破片である。明らかに表裏を意識しており、表はナデ、裏に

形象埴輪(その他)

No	器種	部位	胎 土	色 調	注記 No.	実測 No.	備 考
1	不明	不明	R+W+B少+礫	赤褐色	H-6・1945	H-6・521	白い付着物有り
2	不明	不明	R+W+B+礫	赤褐色	H-6・1142	H-6・523	白い付着物有り
3	不明	不明	R+W+B+礫	赤褐色	H-6・1529	H-6・522	白い付着物有り
4	不明	不明	R+W+B+礫	赤褐色	I-6・1454	I-6・507	白い付着物有り
5	不明	不明	R+W+B+礫	赤褐色	I-6・1356	I-6・506	白い付着物有り
6	家	屋根	R+B+W+礫	明赤褐色	J-9・386	J-9・501	
7	家	屋根	R+W+B+礫	明赤褐色	H-10・401	H-10・501	
8	家	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	H-6・879 他	H-6・509	
9	家	不明	R+B+W+礫	明赤褐色	F-9・420	F-9・502	
10	家	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	H-6・792 他	H-6・508	
11	家	不明	R+B+W+礫	明赤褐色	H-6・1071	H-6・511	
12	家	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	H-6・1169	H-6・514	
13	家	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	H-6・1864他	H-6・507	
14	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	I-6・1161他	I-6・508	
15	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	H-6・1565	H-6・510	
16	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	H-6・1632	H-6・513	
17	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	H-6・1990	H-6・527	
18	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	I-7・3055	I-7・523	
19	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	H-6・347 他	H-6・525	
20	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	I-7・1595他	I-7・565	
21	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	F-9・139	F-9・501	
22	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	F-8・23	F-8・503	
23	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	I-7・4165他	I-7・564	
24	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	H-6・1194他	H-6・506	
25	不明	不明	R+W+B+礫	赤褐色	G-7・262	G-7・502	
26	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	H-6・869	H-6・524	
27	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	H-6・1940	H-6・526	
28	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	F-7・874 他	F-7・506	
29	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	I-7・3425	I-7・518	
30	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	H-6・1073	H-6・503	
31	不明	不明	W+R+B+礫	明赤褐色	I-7・1924他	I-7・561	
32	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	H-5・不明	H-5・501	
33	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	F-7・246	F-7・502	
34	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	H-10・735	H-10・502	
35	不明	不明	R+W+B+礫	暗赤褐色	I-7・2629他	I-7・531	
36	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	I-8・646	I-8・502	
37	不明	不明	R+W+B+礫	赤褐色	I-7・2613他	I-7・532	
38	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	J-9・133	J-9・502	
39	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	H-6・1027	H-6・512	
40	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	F-6・233	F-6・501	
41	不明	不明	R+W+B+礫	明赤褐色	H-6・1440	H-6・520	
42	不明	台	R+W+B+礫	暗赤褐色	J-7・1229	J-7・518	白い付着物有り
43	不明	台	W+R+B+礫	明赤褐色	J-8・780	J-8・506	
44	不明	台	W+R+B+礫	明赤褐色	J-8・674 他	J-8・505	
45	不明	台	R+W+B+礫	明赤褐色	J-8・670	J-8・507	

は作業台の板目状の圧痕が残る。22と23は端部に接合痕がある。盾の上部を支える部品の可能性が考えられる。26も同様の棒状の部品であるが、粘土を貼り突起を付けている。親指だけ独立して作る手に似ているが、手のように一端に向って薄くならない。裏面には、作業台の板目状の圧痕が残る。

24は、上下・左右不明である。板状にしたものに細長い板状の部品を接合している。板状の部品を接合した面と反対側の面は、丁寧にナデが施され、表としての意識が働いているものと思われる。27は、断面コの字状になる部品である。内外面ともナデ整形である。これも上下・左右全く不明である。28は、溝曲する板状の部分に太い粘土紐を屈曲させて貼り付けたもので、粘土紐の周囲はナ



第62図 形象埴輪出土位置図

テが施される。整形は内面がハケ及びナデ、外面はハケ整形である。上下・左右は不明である。

29は、粘土板の裏面隅の端部に粘土紐を貼り付けた破片である。表面はハケ整形後、部分的にナデを施すが、裏面はナデ整形である。下端と側面の端部の一部が残されている。形態は、盾形埴輪の盾部の下端と同様であるが、粘土紐を裏面に貼っている点と、裏面にハケを施さない点で異なる。30も、形態としては、盾部下端が円筒部から剥落したものと同様であるが、表裏とも、ナデによる整形である。図では、下端と側面の端部が残されており、もう一方は剥落面である。29・30とも上下は不明である。

31は、中空の球状の一方が開き、その他の四方向に小孔が穿たれたものである。動物の頭部である可能性も考えられるが、小孔は、大きさも揃わず、また方向もまちまちである。外面は、丁寧にナデられている。上下・左右全く不明である。32は、断面円形の棒状の部品で、先端を尖らせ、やや屈曲させている。表面は丁寧なナデである。図の下部は欠損している。33は、棒状粘土の先端を屈曲させたものである。作りは雑で、屈曲させた先端で欠けている。34は、ほぼ断面円形の太い彎曲する粘土棒の先端を環形にし、その下端に粘土紐を1周貼り付けたものである。貼り付けられた粘土紐は、片面が著しく低いものであるが、その面で何か別のものに接合していた痕跡はない。形態としては藤手刀の柄のようであるが、断面も丸く太い。管見にふれる限りで類例は無いが、動物の尾である可能性も考えられよう。

35は、断面が浅いU字状になる部品である。図の上端と一方の側面には端面が残されているが、側面の端部は、他の部分に接合していた可能性もある。上端は緩やかに彎曲し、上端部と表面は、丁寧にナデされている。裏面は雑な仕上げである。人物埴輪の冠帽の一部か、あるいは鞍形埴輪の一部の可能性が考えられる。36・37は、彎曲する細長い板状の破片である。ともに側面には端面が残り、一方向に向けて細くなる。また表面は丁寧にナデされているが、裏面は雑である。37は、上端にも端面がある。上下・左右ともに不明である。

38は、外反する板状の破片である。図では、両側面と下面は端面をなすが、上端は接合痕がある。上端は粘土を加え厚くしており、緩やかな段をなす。表面はハケ整形を施すが、裏面は雑なナデである。上下は不明であるが、大刀形埴輪の一部と思われる。

39は、断面L字形で棒状の破片であるが、緩やかに彎曲している。内外面ともにナデ整形を施す。40は、小型の土製馬の頭部と思われる破片である。目は小さな円形の刺穴により表現され、目の上部後方に、粘土粒を貼り付けており、耳の表現と思われる。頭部の中央から後方には、断面三角形の粘土紐を貼り付け、上部に3ヶ所くの字状の刻みを施していく、たてがみの表現と思われる。頭は目から下を欠損している。

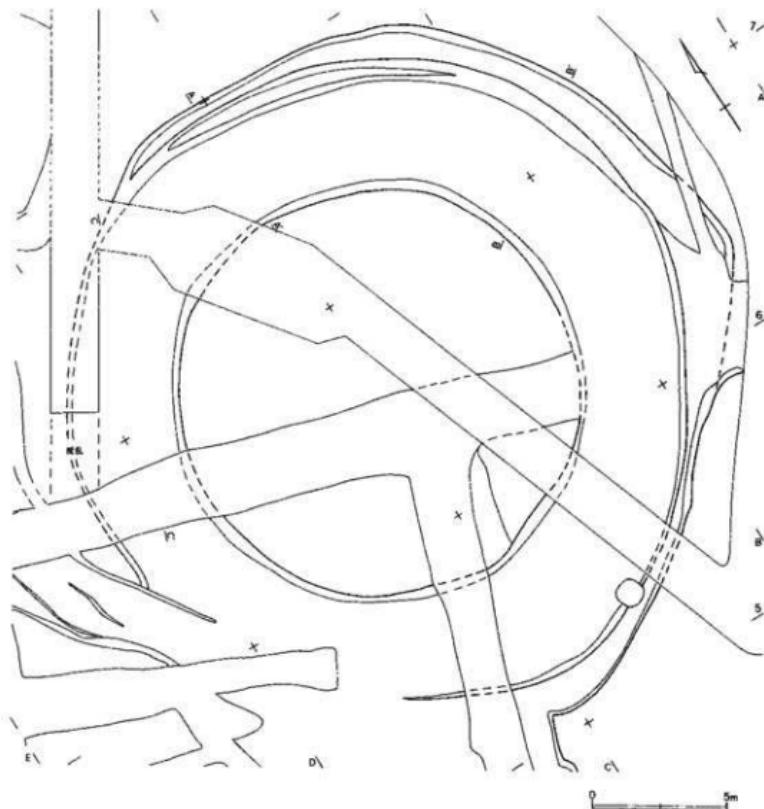
41は、小型の鳥を表現した製品の破片と思われるもので、下面に剥落痕がある。頭部は、粘土を指でつまんで押し潰しただけで表現している。尾部は欠損している。他の埴輪の付属品である。

第61図42~45は、形象埴輪の台部である。外面は縦ハケ、内面は斜ハケ及び、ナデ整形を施す。42は、低い断面M字形の突帯が巡る。43~45は、断面M字形の突帯の上端が潰れた形態の突帯が巡るもので、直接接合しなかつたが、胎土も色調もよく似ており、この3片の内のいずれかが、同一個体である可能性が考えられる。

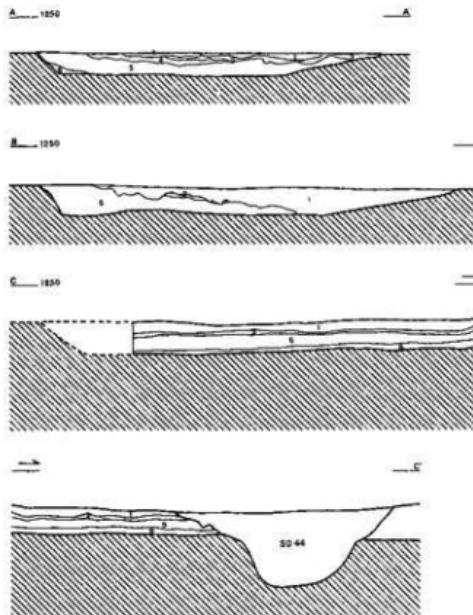
第2号墳 (SS 2)

A ~ D - 4 ~ 6 Gridにおいて検出された円墳である。第1号墳と隣接して築造されたものであるが、第1号墳の外堀とは切り合っておらず、最も近い部分で推定ではあるが1.5m程の距離がある。墳丘は削平され全く残されていなかった。また、内部主体も検出されなかった。

確認面での規模は、周堀内側立ち上がり上端で、直径15.0mを測る。周堀は、墳丘側立ち上がりは急で、45°~60°を測るが、外側は、非常に緩やかに立ち上がる。周堀の西側半分は、後世の溝などにより削られ不明確であるが、東側半分では、外側立ち上がりは緩やかな段をなす。幅は最小で4.5m最大で6.1mである。東側半分の緩やかな段の上端は、約5m幅ではほぼ正円に巡っており、その外側は、周堀を拡張した可能性も考えられるが、上層断面で見る限り、時期をおいて拡張した形跡は



第63図 第2号墳

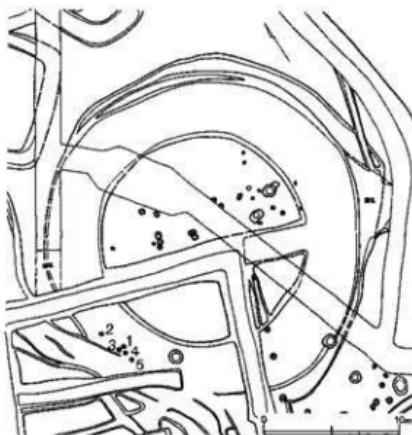


- 1 黒色土層 塚化物を多く含む。
- 2 白色粘質土層 層中に浅間B種石と思われるものがブロックあるいは1m程の帯状に含まれる。
- 3 灰褐色土層 黄褐色ローム粒子を混入する。
- 4 黒色土層 粘性強。
- 5 黒色土層 黄褐色ロームブロックを混入する。

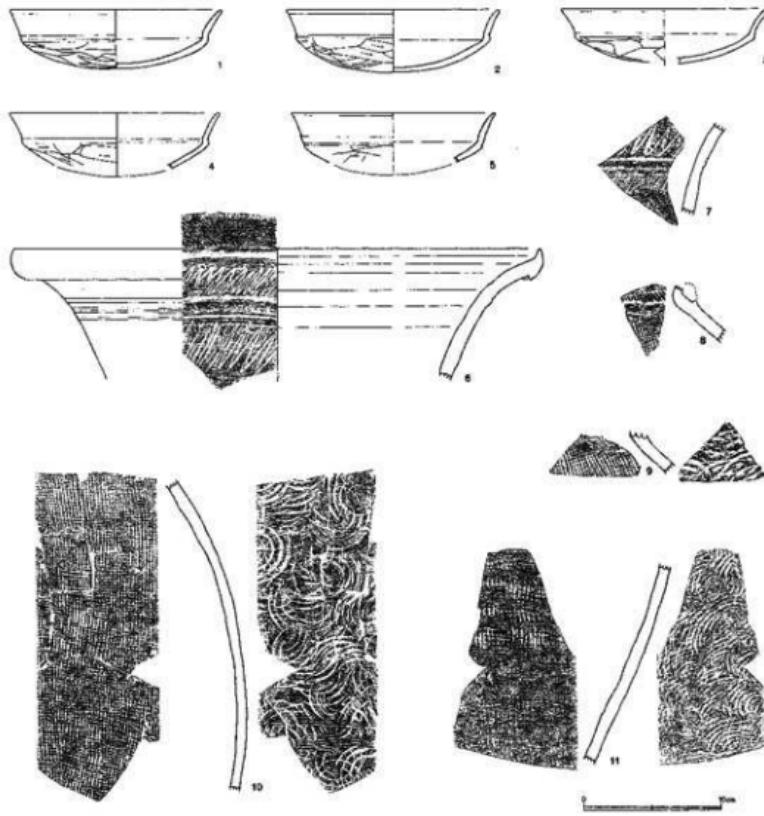
第64図 第2号墳土層断面図

無く、拡張であっても、築造後間もない時点で行ったものと思われる。

周堀の底面はほぼ平坦であり、標高は、11.5m～11.7mである。確認面からの深さは、30cm～50cmを測る。覆土は、基本的には、第1号墳と同様であり、黒色土層が覆土の主体である。また、堆積土層中に、白色粘質土層が認められ、その層中に暗褐色砂粒が認められる。肉眼での観察では、浅間山の火山噴出物、(浅間Bテフラ)と思われるものであった。この白色粘質土層は、周堀底面から20～30cmの位置にあり、浅間Bテフラ降下時には、周堀は埋まりきっていなかったことを示



第65図 第2号墳土器杯出土位置図



第66図 第2号墳出土土器

している。

出土遺物は、土師器杯5点の他は、須恵器大甕の破片が出土した。埴輪はほとんど無く、第2号墳には、埴輪は樹立されなかったものと判断される。また、これは隣接する第1号墳の外堀外堤上にも埴輪が樹立されなかったことを示すものもある。

第66図1～5は、南西側の周堀内からある程度集中して出土している。据え置かれた状況では出土しなかったが、周堀のこの部分は後世の溝などにより削られており、その影響とも考えられる。また第1号墳でも2回にわたる土師器杯の供獻は、明らかに周堀内に5個体ずつ据え置いたものであり、第2号墳の場合も、周堀内にまとめて据え置かれた5個体が、周囲に散らばったものと考えられる。いずれも土師器杯である。4・5は小片からの復原であるが、第1号墳の第2次供獻土器の一群とはほぼ同様の口径・器高・形態を示す。ただ異なるのは、同様に口縁が大きく外傾するが、口

第13表 第2号墳出土土器

No	器種	口径	基高	胎土	色調	注記 No	実測 No	備考
1	杯	15.5	4.3	R多+W+B少+礫	明赤褐色	D-6-134他	D-6-1213	土師器
2	杯	15.6	4.5	R+B少+W+礫	にぶい橙	D-6-146他	D-6-1201	土師器
3	杯	15.1	(3.9)	W+R+B少+礫	にぶい赤褐色	D-6-131他	D-6-1214	土師器
4	杯	15.3	4.6	W+R+B+礫	明赤褐色	D-6-92他	D-6-1202	土師器
5	杯	14.9		B多+W+R+礫	にぶい赤褐色	D-6-100	D-6-1215	土師器
6	大甕	39.0		W多+B+礫	灰色	C-5-254	C-5-1303	須恵器内外面櫛描波状文
7	人甕			W多+B+礫	灰色	D-7-23	D-7-1304	須恵器内外面櫛描波状文
8	大甕			W多+B少+礫	灰色	C-5-155	C-5-1308	須恵器内外面タタキ
9	大甕			W多+B+礫	暗青灰色	C-5-299	C-5-1306	須恵器内外面タタキ
10	大甕			W多+B+礫	暗青灰色	C-5-256他	C-5-1311	須恵器内外面タタキ
11	人甕			W多+B+礫	オリーブ黒色	I-7-2343他	I-7-1316	須恵器内外面タタキ

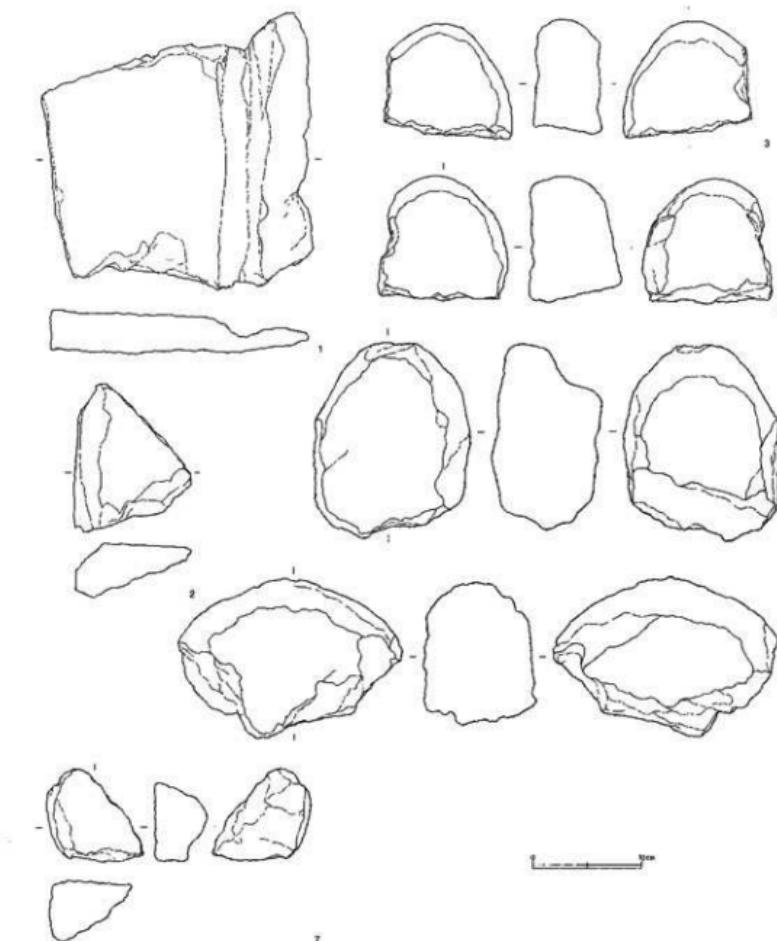
縁部の反り自体は小さく、やや直線的に外傾することである。

6～11は、須恵器人甕の破片である。6は、口縁部の破片である。沈線により2段に画された中に、櫛描波状文を施す。7は、6と同一個体と思われるもので、同様の怖による波状文を施す。8は、頭部下端の破片であるが、叩きを施したあと、粘土を貼り付けた痕跡があり、頭部補強突帯が剥落したものと考えられる。9も頭部下端の破片と思われる。10・11は胴部の破片である。須恵器はいずれも周塙内からの出土であるが、集中地点は認められなかった。

石棺・石室材

第67図は、第1号墳・第2号墳の周辺から出土した、石棺片、石室用材の破片と思われる石を掲載したものである。1～4は第1号墳の周辺から、5～7は第2号墳の周辺から出土した。第1号墳、第2号墳ともに墳丘は削平され、内部主体は全く検出されなかった。また、これらの石材は、ほぼ中世陶器の分布域と同様の範囲から出土するもので、後世かなり動かされているものと思われ、各古墳の周塙から出土したとはい、上層からの出土では、その古墳に伴うものともいい難い面がある。従って一括して報告することとした。

1と2は緑泥片岩である。1は板状の緑泥片岩の一辺に添って溝を穿ったものである。組合せ式の箱式石棺の一部と考えられる。1は、第1号墳の内塙の比較的下層からの出土であり、第1号墳に伴う可能性が大きい。2は、板状の緑泥片岩の一辺をやや丸く削っているので、小片ではあるが、これも箱式石棺の一部と考えられる。3・4は、浮石質の角閃石安山岩である。ともに欠損しているが、上面と下面を平坦に面取りしている。前面は丸い自然面を残している。側面は欠損していて不明確であるが、やはり面取りされていたものと思われる。5～7はやはり角閃石安山岩であるが、3・4と比較するとかなり重い。5は、上面及び下面と両側面を面取りしており、前面だけ丸く自然面を残す。3・4より大型である。6は、5よりさらに大型であるが、上面・下面を面取りし、前面は丸い自然面を残している。7は、小片であるが、二面を面取りしており、5・6同様の石材の破片と考えられる。他にも緑泥片岩の細片約2,400片をはじめとして、角閃石安山岩も出土しているが、明瞭な加工面を有するものだけを掲載した。また、緑泥片岩や角閃石安山岩の中には、板碑や後世転用されているものもあり、それらについても、中世の遺物として別に掲載した。



第67図 石棺・石室材

第14表 石棺・石室材

番号	材質	重さ(g)	注 No.	測No.	番号	材質	重さ(g)	注 No.	測No.
1	綠泥片岩	3400	I-6-1532	927	5	角閃石安山岩	2020	D-6 78	941
2	綠泥片岩	640	I-7-1389	912	6	角閃石安山岩	2010	D-8 14	936
3	角閃石安山岩	720	F-6-241	938	7	角閃石安山岩	1460	B-5 11	937
4	角閃石安山岩	740	G-6-863	939					

小結

第1号墳から出土した埴輪は、鴻巣市生出塚遺跡出土の埴輪と非常に似ている。色調・胎土だけではなく、形象埴輪の成形についてもである。人物埴輪は、筒状に作った頭部に粘土板を貼り付け、顔を成形し眉を一直線の粘土紐で表現する。小孔で表現される耳には、環形にした耳環をその小孔にひっかけるようにして貼り付けている。漁し鳥田は、台形を組み合わせた板で表現する。馬形埴輪は、頭部の成形、雲珠や杏葉の表現方法も全く同じといつていいものである。第1号墳に樹立されたほとんどの埴輪は、生出塚遺跡で生産されたものと考えられる。

円筒埴輪は、底部から第1突帯の間が比較的長いものが多いが、短いものもかなり含まれている。底部調整は、ごく一部に認められるだけである。突帯は、断面M字形の極めて低いものであり、外側は縦ハケ整形だけでいわゆる二次調整は施さない。円筒埴輪をもって、時期の細分を行なうこととは、現状では困難な面も多いが、全体としては、2条突帯の円筒埴輪は底部から第1突帯の間が新しくなるにつれ長くなり、突帯はくずれる傾向がある。その観点から見た限り第1号墳出土の円筒埴輪は、底部と第1突帯の間が伸びる前段階のものと見ることができる。

第1号墳及び、第2号墳から出土した土師器杯は、行田市小針遺跡から出土する特徴的な土師器杯と似た形態を示す。小針遺跡に特徴的な杯（以下板に小針型杯と呼ぶ）は、「精選された粘土により焼成され、灰褐色・淡褐色を呈する」もので、口縁部の外反・外傾を特色とするものである。これに対し、同じ行田市域でも埼玉古墳群より西方では、内面黒色処理されるいわゆる有段口縁杯^(注3-4)がその主体であり、埼玉古墳群を境として土器の様相は全く異なることが指摘されている。第1号・第2号墳から出土した土師器杯は、色調は異なるものの小針型杯と共通点が多く、その系統に属するものである。小針型杯の系統に属するものは、埼玉古墳群の他、生出塚1号墳、鴻巣市笠原古墳群に認められる。

小針遺跡では、2次調査B地区20号住居跡において、定形化した模倣杯がT K47に相当する須恵器杯と共に併存しているのに対し、小針型杯の口径の大型化したものが2次調査B地区6号住居跡でMT15を共存しているとされている。小針型杯は、一括大型化する傾向から小型化へと向い、一方新しくなるにつれ口径に対して器高が低くなり、口縁は外反・外傾する傾向を持つとされている。

第1号墳の第1次供獻土器は、小針遺跡3次調査2号・7号住居跡出土杯に類例を求めるが器高もやや低く、外反もやや大きい。全体としては後出的である。第2次供獻土器と第2号墳供獻土器は、さらに後出的である。以上の点と、先に述べた、円筒埴輪の形態の特徴を合わせ考えると、第1号墳の築造は6世紀の第3四半期頃と思われる。また第2号墳は、埴輪を全く伴わない点を考慮に入れるならば、7世紀の初頭頃と考えられる。

註

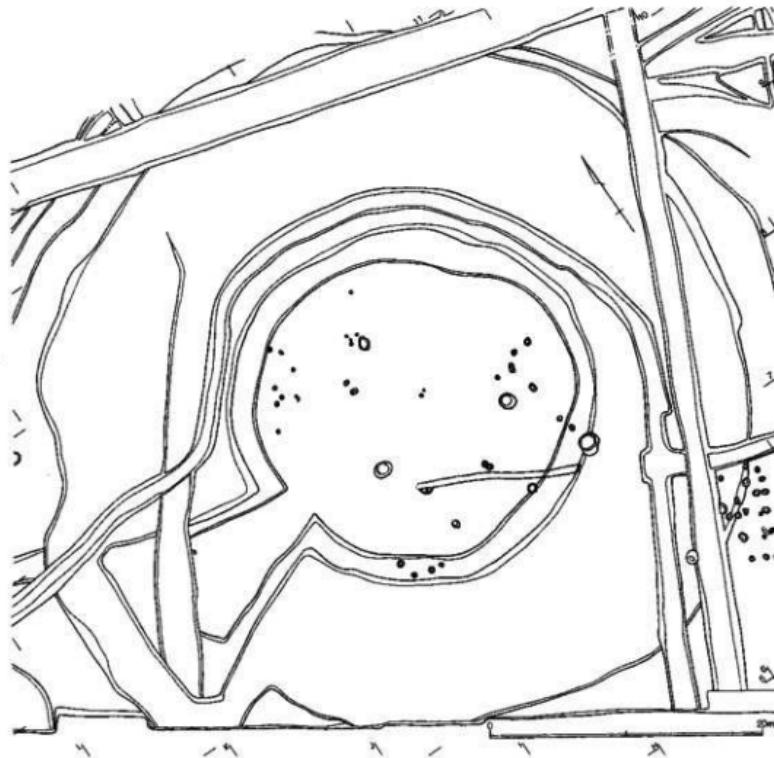
- 1 山崎 武 「生出塚遺跡」鴻巣市遺跡調査会報告書第2集 鴻巣市教育委員会 1981
- 2 鴻巣市史編さん室 「鴻巣市史 資料編1考古」 1989
- 3 斎藤国夫 「小針遺跡発掘調査報告書—B地区—」行田市文化財調査報告書第10集 行田市教育委員会 1980
- 4 斎藤国夫 「小針遺跡—第3次調査報告書—」行田市遺跡調査会報告書第2集 行田市遺跡調査会 1989

2. 中世以降の遺構と遺物

検出された中世の遺構は、掘立柱建物跡9棟、基壇状遺構1基、溝、井戸、土壌などである。中世の遺構は、調査対象区の南半に集中している。特に、第1号墳の外堀と第2号墳を切って構築された基壇状遺構の南側に、掘立柱建物跡を中心とするピット群が存在する。また、第1号墳の前方部西側から、墳丘の北側を巡り、南方に延びる第26号溝により画される区域と、第44号溝の中央から第26号溝に統く第29号溝によって画された区域内に井戸、土壌等が多く存在する。中世の遺物も、第26号・29号・44号溝により画された区域内から、そのほとんどが出土している。

第26号溝により区画内に取り込まれた第1号墳の墳丘上にも、井戸などの遺構が存在する。また周囲護土上層からは、中世陶器・磁器・板瓦等と共に多くの縁泥片岩小片が出土している。

調査対象区北側の、第1号住居跡周辺においてもピット群が検出され、掘立柱建物跡の存在が予想されるが、調査時に明確な建物跡は検出できず、又、時期も不明であった。



第68図 第1号墳墳丘上の中世遺構

溝・井戸・土壌については、中世のものだけではなく、他の時期のものもあり、また時期不明のものもあるが、この節で一括して掲載した。

また、掘立柱建物跡が集中して検出された部分は、工事及び調査の都合上、やむを得ず調査区の南側部分だけを先行して調査した為、建物跡1棟分として写真が撮影できなかったものもある。また確認した掘立柱建物跡の他にもピットを多数検分しており、他の建物や柵列の存在が予想されるが、調査時及び、整理作業時に確認したものは9棟だけであった。

(1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡

D・E-4・5 Gridに位置する。規模は桁行3間(8.04m)×梁行1間(3.70m)である。梁行で方位はN-17°-Eである。ピットは円形を基本としているが、やや歪んでいるものもある。直径は60cm~75cmと比較的大きなものである。桁行のピット間の距離は、東へ行く程距離は狭まり、断面A-Aのラインでは、西から3.23m、2.54m、2.27mである。平均は2.68mである。ピットはほぼ同じ深さであり、確認面から40cm程を測る。覆土は黒褐色土にロームブロックを含むもので、柱の痕跡は認められなかった。

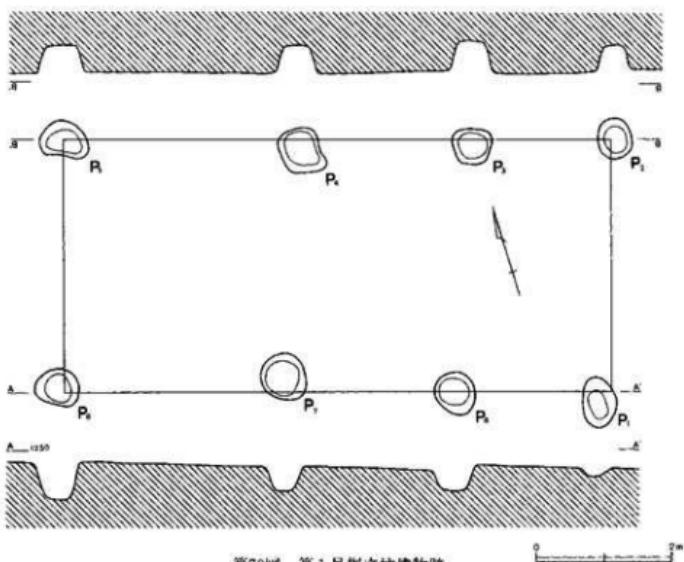
第1号掘立柱建物跡は、後述する基壇状造構を囲む、第44号溝の南辺桁行の軸をそろえて構築されており、その間の距離は、溝の立ち上がりから1.5mである。第44号溝の南辺の部分は、基壇状造構を囲む溝が当初第43号溝であったものが、それを埋め、第44号溝南辺だけを拡張しているものであり、第1号掘立柱建物跡は、その拡張時あるいは、その後に伴うものと判断される。

第2号掘立柱建物跡

D-3・4、E-4 Gridに位置する。規模は桁行4間(9.28m)×梁行1間(3.40m)あるいは桁行4間×1間(2.22m)に北側に附、あるいは縁がつくものである可能性もある。建物の内部に当たるP11・12・3と、P10・13・4は、ほぼ直線上に並ぶが、P9・14のライン上にP5は並ば



第69図 掘立柱建物跡位置図



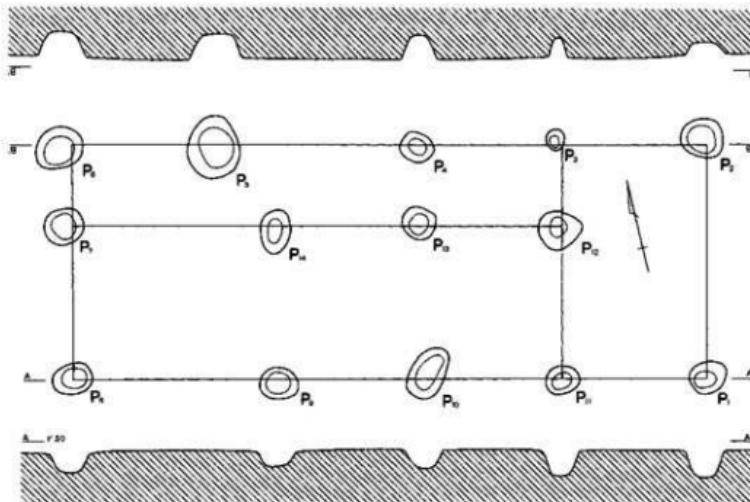
第70図 第1号掘立柱建物跡

ず、西に40cm程ずれている。桁行のピット間の距離は、2.10~2.20mが多いが、P14・7とP8・9、またP4・5の間が3.00m前後である。北側のP2~P6が廻あるいは縁であるとすると、P1とP2の間のピットは欠けていることになる。その場合、廻は1.18mである。ピットはP3が最も小さく径約30cm、最大はP5の長軸90cmである。他は50cm前後である。確認面からの深さは30~40cm前後である。覆土は、黒褐色土を基本にして、ロームブロックを混入するものであった。梁行方位はN-14°-Eを示す。

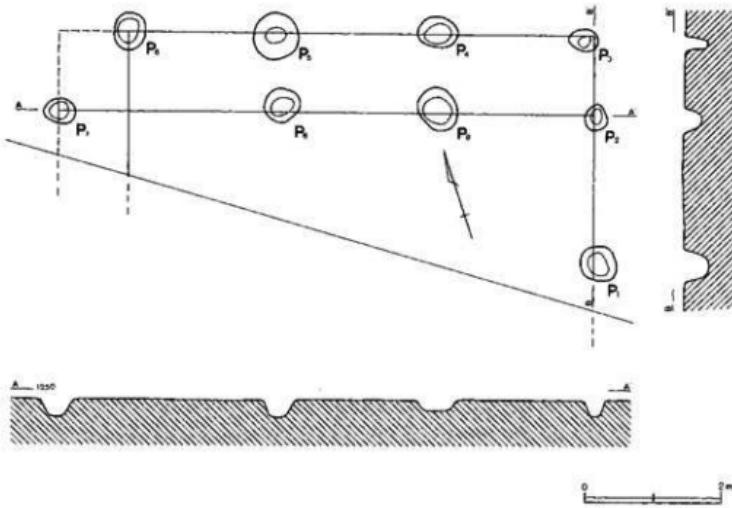
第2号掘立柱建物跡は、第3号掘立柱建物跡と第4号掘立柱建物跡と一部重複しており、同時存在は考えられない。直接ピットの切り合いは無く、前後関係は不明確である。

第3号掘立柱建物跡

D・E-3・4 Gridに位置する。調査対象区外に統く可能性があるもので、規模は桁行3間(6.82m)×梁行1間(2.38m)以上の建物跡と考えられ、北と西側にそれぞれ1.16m・1.02m前後の廻あるいは縁がつくものである。ただしP7とP8の間に、主屋の北西隅にあたる部分に、ピットは検出されなかった。あるいは、P7を主屋の北西隅とすると、桁行は3間(7.84m)となる。ピットの径は40~50cmを中心で、P5が70cmを測る。深さは確認面から20~30cm前後である。ピット間の距離は、主屋の部分で2.24~2.38mと、ほぼ等間隔である。平均すると2.27mである。柱の抜き取りの痕跡は無かった。梁行方位はN-19°-Eを示す。なお、第2号掘立柱建物跡と重複する。



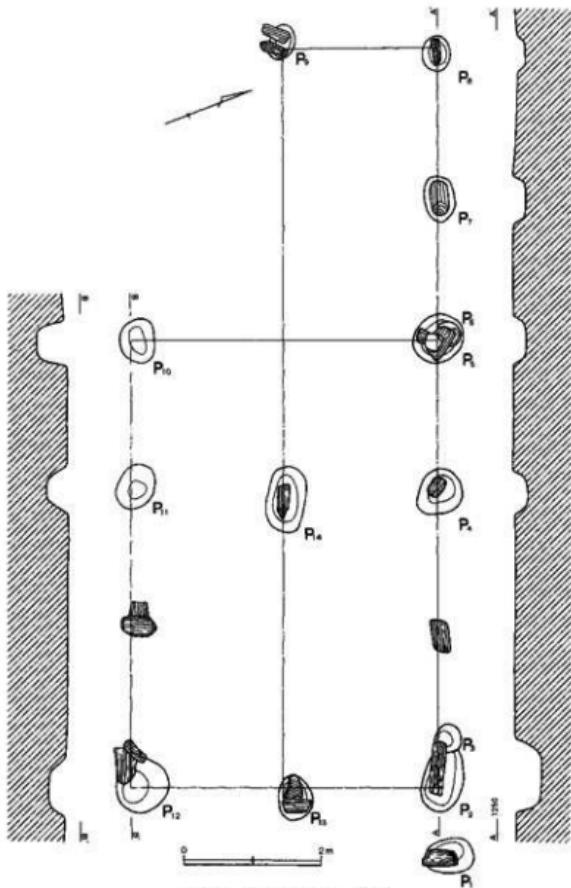
第71図 第2号掘立柱建物跡



第72図 第3号掘立柱建物跡

第4号掘立柱建物跡

C・D-3・4 Gridに位置する。規模は桁行5間(10.66m)×梁行2間(4.48m)である。ただ、P12-P10の桁行ライン上の西側2間分のピットは検出されなかった。第4号掘立柱建物跡と第5号掘立柱建物跡には、ピット内に大きな割り材、あるいは角材を切ったものを置き、礎石の替わりとし、その上に柱を建てている。礎石の替わりに木材を用いているので、正確な意味での板ではないが、仮に礎板と呼称する。第4号掘立柱建物跡は、礎板の遺存が良く、検出されたピットの内、礎板が認められなかったのはP10とP11だけである。P11とP12の間の礎板は、この建物より古い時期の溝(第36溝)の覆土中にあったもので、明確なピットは認められなかった。欠けている南西

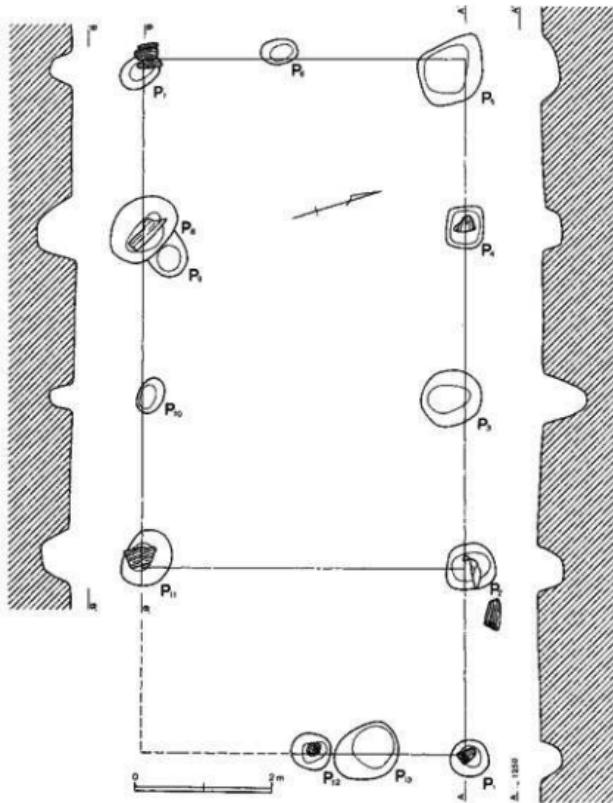


第73図 第4号掘立柱建物跡

側2間分の位置にも、礎板が置かれていた可能性も考えられる。

礎板は、その多くが太い丸太材の1辺を割ったものであるが、中心で割ったものではなく、かなり中心から離れた位置で割っている。従って断面形は一面が平坦な円弧形である。中心付近は角材にし、建築用材として用いたものであろう。木口部は、斜めに切り離している。礎板の多くは、樹皮をつけたまま、割り口の平坦な部分を上にして、ピットの中に据え置かれている。礎板は40~50cm前後に切り、幅は20~25cm前後のものが多く、最大厚は10cm前後が多い。樹種はクリが多く、一部ヤナギ属も含まれていた。詳細は、遺物の節を参照のこと。

数ヶ所の礎板の上には、柱の痕跡が残されているものがあった。樹皮が円形に立っているだけのもので、樹皮だけ残して木質部はすべて失われ、そこに明灰色の粘土がつまつたものである。径は



第74図 第5号据立柱建物跡

15cm前後である。のことから礎板上に立てられた柱は、少なくとも下部は樹皮をつけたままの柱であったことがわかる。

礎板間の距離は、桁行が平均2.13m、梁行が2.24mと、やや広い。またP2の東側にあるP1にも礎板が認められる。位置的には、同様に礎板建ちの施物である。第5号掘立柱建物跡に伴うものとは考えられず、第4号掘立柱建物跡の北側の桁行ライン上にのるもので、第4号に伴うものと思われる。P2の礎板からの距離は約1.04mで、約半間に当る。単独で存在するため、廊、縁あるいはその他の構造物の礎板であるのかは不明である。ピットは礎板を置くためにやや大きく掘られており、礎板の厚さにより深さも異なる。礎板はほぼ確認面において認められた。ピットは長軸50~100cmを測る。礎板が細長いため、ピットも長円形を呈するものが多い。

P2と重複するP3と、P5と重複するP6は、第6号掘立柱建物跡の柱穴である。土層断面の観察及び、礎板がP3・P6の上に載ることから、P3・P6の柱を抜き取った後に、第4号掘立柱建物を構築したことは明らかである。また第4号掘立柱建物跡は、第5号掘立柱建物跡とも重複しており、この3棟の同時存在は不可能である。第4号と、第5号掘立柱建物の新旧については、重複する部分で第4号の礎板上に柱痕跡が認められることから、第4号が新しい可能性が大きい。方位は梁行方向でN-21°Eを示す。

第5号掘立柱建物跡

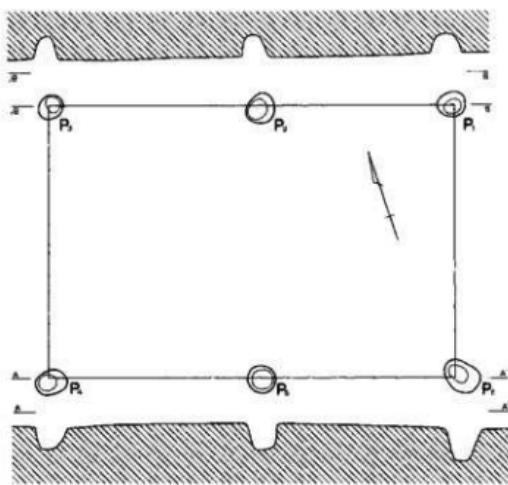
C・D-3・4 Gridに位置する。規模は桁行4間(10.00m)×梁行2間(4.66m)であるが、梁行南西隅のピットは検出されなかった。第5号掘立柱建物跡も第4号同様、礎板建ちの建物であるが、第4号より礎板の遺存は良くなく、また既してやや小型の礎板を用いているようである。礎板を検出したのはP1・P4・P7・P11であり、P2の外側に礎板を1点検出したが、P2から動かされたものと思われる。またP2とP8は、石材片が置かれており、礎板とともに一部石材を用いている。P12は礎板は用いず、そのまま柱を建てている。ピットの大きさは様々である。最も小さいP10で長軸50cm、最大のP5は長軸110cmを測る。深さも確認面から30~70cmとばらつきがある。礎板を用いているため、他の掘立柱建物跡と異なりピットは大きめである。

桁行のピット間の距離は、北辺で西から2.40m、2.45m、2.48mとほぼ等間隔であるが、P2とP1の間だけやや広く、2.67mを測る。梁行は西辺で2.68m、1.98m、東辺で2.24m、2.46mと一定していない。梁行のピット間の距離の平均は2.34m、桁行は、P2からP5までだけで測ると平均2.44m、全体で測ると2.50mとなる。方位は梁行方向でN-18°Eを示す。

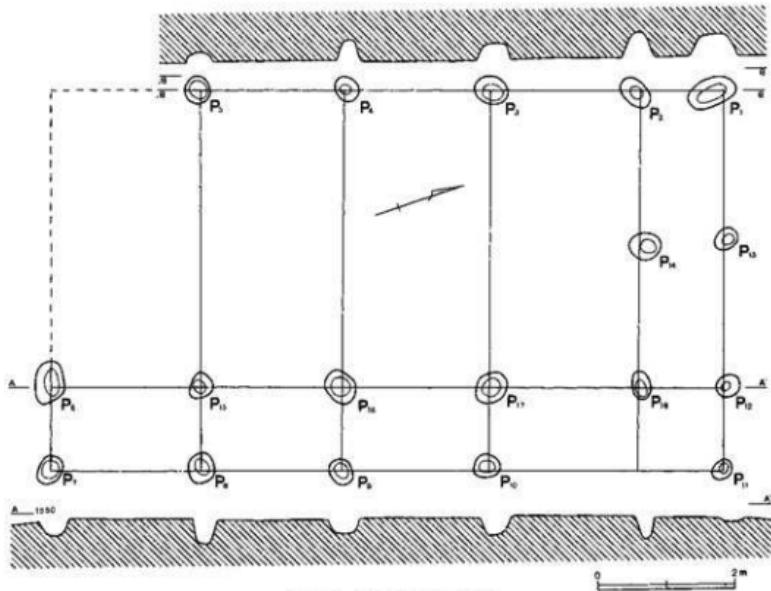
第5号掘立柱建物跡は、先にも述べたとおり、第4号・第6号掘立柱建物跡と重複しており、また、東辺部分が第8号掘立柱建物跡と重複するため、以上3棟との同時存在は不可能である。

第6号掘立柱建物跡

C・D-3・4 Gridに位置する。規模は桁行2間(5.92m)×1間(3.94m)を測る。桁行・梁行ともにピット間の距離が長く、特に梁行は4mの距離があるが、中間にピットは検出されなかつた。桁行のピット間の距離は西側がやや広く、北辺では西から3.06m、2.86m、南辺では西から3.12



第75図 第6号擡立柱建物跡



第76図 第7号擡立柱建物跡

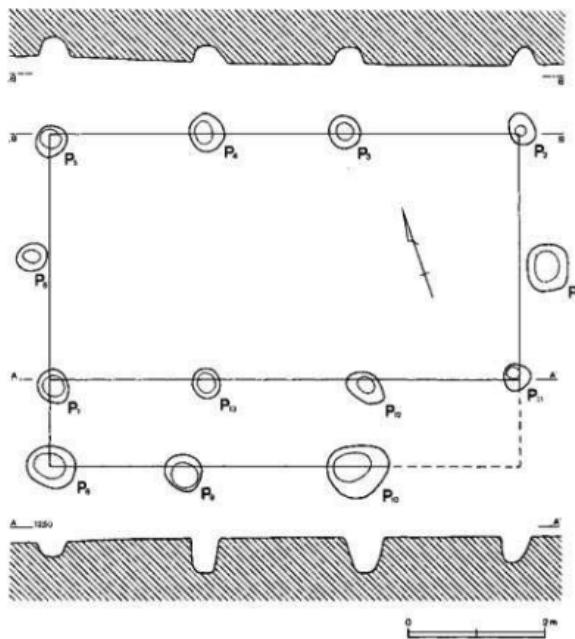
m、2.80mを測る。平均すると2.96mである。ピットは礎板建ちの建物跡と比べ小さく、直径40cm前後である。P4とP6がやや径が大きいが、柱の抜き取りによるものとも考えられる。

第6号掘立柱建物跡は、第33分溝の南側に、軸をほぼそろえて位置している。溝は浅いものであり、また溝の上端から約80cm離れており、同時に存在した可能性も考えられる。第4号・第5号掘立柱建物跡と重複している。方位は梁行方向でN-18°-Eを示す。

第7号掘立柱建物跡

B-3・4、C-3 Gridに位置する。桁行4間(8.58m)×梁行2間(4.30m)の北側と東側に廟あるいは、縁が1.22m付く。従って9.80m×5.52mの規模をもつ。検出された他の7棟とは異なり、桁行方向が南北をとる。梁行方向のP6とP7のライン上のピットは検出されなかった。主屋部分の桁行方向のピット間の距離は、南から2.18m、2.08m、2.15m、2.17mであり、平均は2.15mである。梁行方向は西から2.22m、2.06mを測り、平均2.14mである。桁行、梁行ともにはば等間隔である。

ピットの大きさも大体そろっており、35~50cm前後である。深さは、15~40cmと、ばらつきがあり、特にP12だけ著しく浅いものである。方位は桁行方向でN-19°-Eを示す。第8号掘立柱建物



第77図 第8号掘立柱建物跡

跡と重複している。第8号掘立柱建物が第33号溝の南側に、ほぼ溝と軸をそろえているのに対し、第7号掘立柱建物跡は、その溝覆土中にピットを掘り込んでおり、第8号よりも新しい可能性が大きいものと考えられる。

第8号掘立柱建物跡

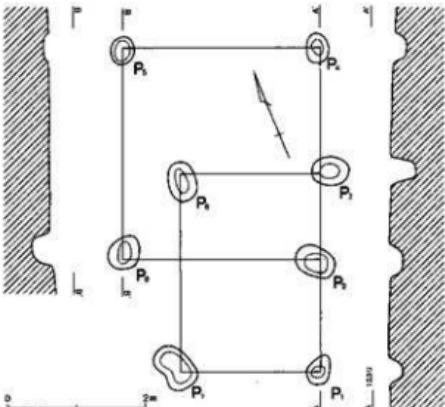
B・C—3・4 Gridに位置する。規模は桁行3間(6.82m)×梁行1間(3.55m)の南側に、廊あるいは縁が1.25m付くものである。ただ、廊の南東部分のピットは検出されなかった。総規模は、6.82m×4.80mである。また主屋部分の梁行のはば中間のライン上の、建物の外側に1基ずつピットがあり、棟持柱を持った建物であったことが考えられる。主屋部分の桁方向のピット間の距離は、北辺で西から2.25m、2.06m、2.51mとやや均一を欠くが、南辺は、西から2.28m、2.30m、2.24mとほぼ等間隔であり、平均は2.27mとなる。ピットの大きさは、主屋部分ではほぼそろっており、直徑40~50cmのものが多い。深さは、ややばらつきがあり、30~50cmを測る。棟持柱の柱穴と思われるP1は、70×60cmの隅丸方形を呈するが、P6は、径約45cmの円形であった。深さは30cm前後である。方位は、梁行方向でN-19°-Eを示す。

第8号掘立柱建物跡は、第5号・第7号掘立柱建物跡と重複しており、この2棟との同時存在は不可能である。また、第33号溝とほぼ軸をそろえており、溝の上端からの距離は、約80cmである。第6号掘立柱建物跡と共に、第33号溝との同時存在の可能性が考えられる。

第9号掘立柱建物跡

F—5・6 Gridに位置する。変則的な形態である。1間×1間の大きさの異なったものが一辻をそろえて重複している形態として復原したが、合わせて一棟と考えられるものである。規模は桁行(長軸)で4.66m、梁行(短軸)で2.84mを測る。南辺は、2.04mである。桁行(長軸)を南北に取るもので、検出された掘立柱建物跡の中では、最も小さく、また、一棟だけ離れた位置に存在する。物置的な機能を持つ建物と思われる。

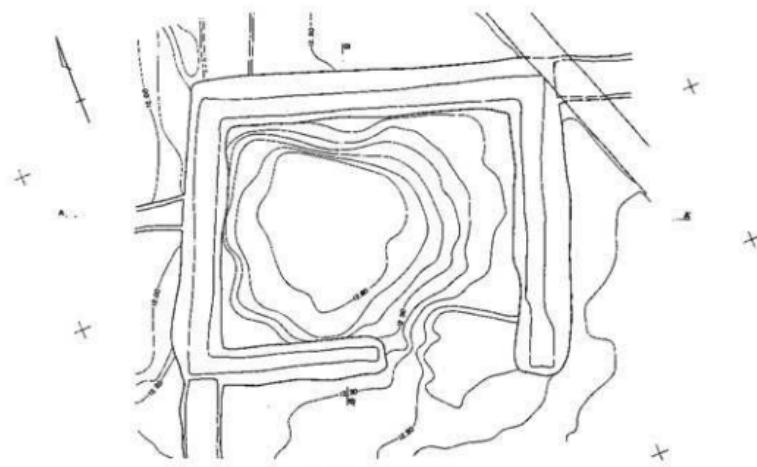
ピットは、大きさ、深さともまちまちである。ピット間の距離はP1・P2が1.62m、P2・P3が1.25m、P3・P4が1.79m、P4・P5が2.84m、P5・P6が3.04m、P3・P8と、P1・P7間が2.04mと一定性を欠くものである。



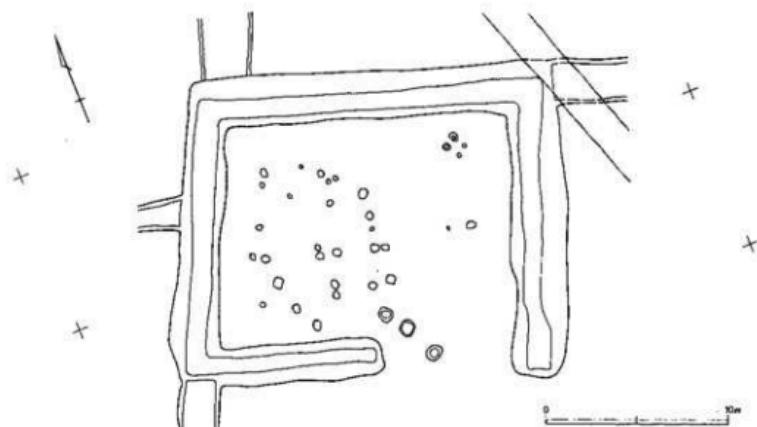
第78図 第9号掘立柱建物跡

(2) 基壇状造構

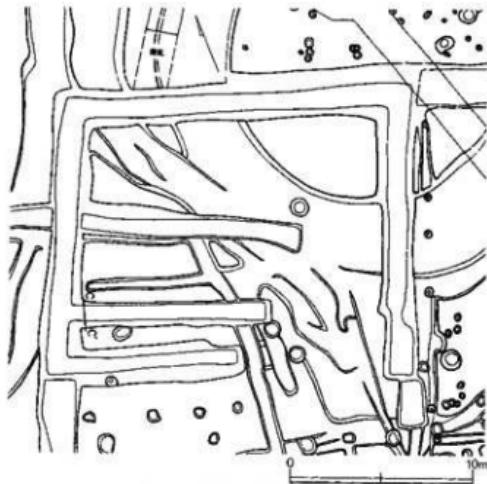
C・D・E-5・6 Gridに位置する。ほぼ長方形のプランを有し、周囲を上幅2~3mの第44号溝により区画されている。溝は、南辺のみほぼ中央部分で止まり、全周はしていない。第44号溝により区画された内側の規模は、長軸(東西)約16m、短軸(南北)約12mを測る。区内には盛土され、



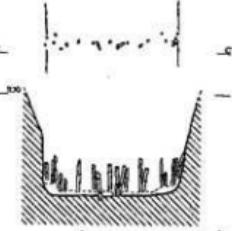
第79図 基壇状造構



第80図 基壇上の造構



第81図 基壇状造構下の造構



第82図 第43号溝横状造構

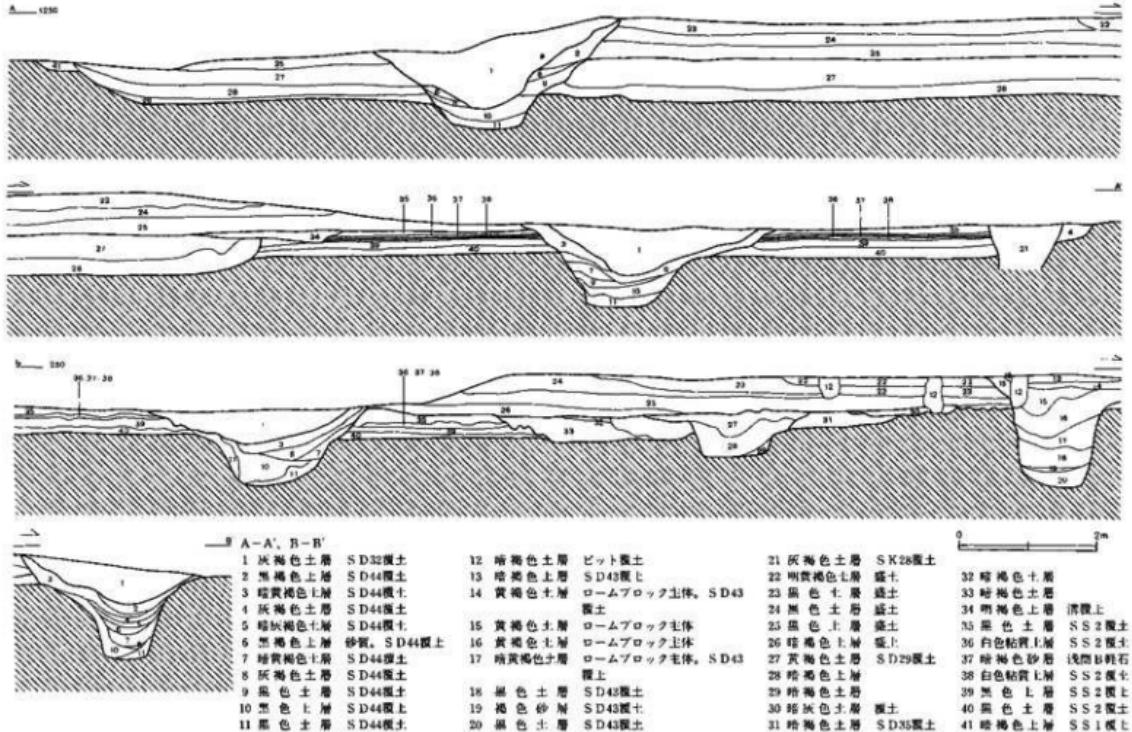
遺存していた盛土の上面で、標高は12.80mであった。周辺の造構確認面は、標高12.10~12.20mであり、比高差は70~80cmである。盛土は、黒色土が主体で、それに黄褐色のロームブロックを多く混入するものであった。周囲を巡る第44号溝は、底面が標高11.00m前後であり、溝底面と盛土上面は、1.8m前後の比高差がある。センターの中心は長方形のプランの西側に寄っているが、これがそのまま旧地形を反映しているものかどうかは、判断しかねる。

盛土上では33基のピットと、3基の土壙を検出した。ピットは並ばず、掘立柱建物跡としては確認できなかった。3基の土壙中中央に位置する第25号土壙から曲物が出土したが、調査時には、ほとんど腐蝕し、形状を留めたまま取り上げることができなかった。

基壇状造構は、その断面観察の結果拡張していることが確認された。盛土下で検出された第43号溝は、第44号溝と底面のレベルがほぼ等しく、その覆土は、第83図に示すように、第17層以上が黄褐色のロームブロックを多量に含むもので、明らかに南側から埋め戻されている。第44号溝の南辺を掘削した排土で第43号溝を埋め戻したものである。

第43号溝の西端の、第44号溝への出口には、2層にわたる樋状造構が検出された。下層の樋状造構は、直径2cm前後の細い竹の先端を斜めに切り、十数本を前後に刺し並べ、その間に植物質の物を詰めたものと思われる。上層の樋状造構は、遺存状況が悪く不明瞭であったが、數本の細い木を刺し、その間にやはり植物質の物を詰めたものと思われる。調査時の所見では、第43号溝の埋め戻しに際し、水が中に入らないようにしたか、あるいは水をかい出すために設けたものと考えられた。

拡張は、第44号溝の東辺を約3.5m拡張したものと思われ、その部分でやや溝がたがい違いになっている。また西辺を約3m延長して、そこから南辺を新たに掘削している。拡張前の区画内の規模は、長軸約16m、短軸(南北)約9.5mである。



第83図 基壇状造構上層断面図

(3) 溝

調査対象区内において計48条の溝を検出した。その内完全に重複しているものあるいは、途中から2条に分かれるものなどは、同じ番号のA・Bで示した。溝の番号は、第85図～第88図に示すとおりである。また、溝の規模と主な出土遺物は表13に示すとおりである。表中の石は石製品、転陶は転用陶器片、木は木製品を表わし、番号は挿図の遺物Noである。なお番号は調査時のものをそのまま使用しているが番号についていなかったものには新たに付した。第26号溝は、第1号墳の墳丘の北側で、当初第27号溝と続くものと思われたため、第1号墳墳丘以東で27号と呼称していたが、その点は改め、26号とした。

第1号溝

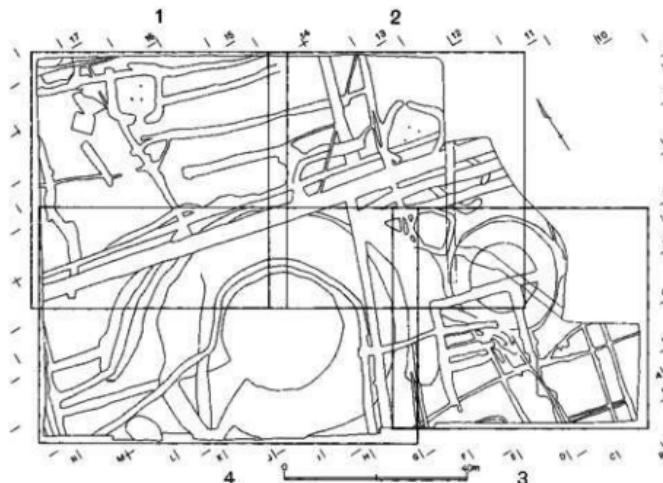
H・I-16に位置する。第1号溝は調査区の北側隅において検出された。第2号方形周溝墓を切る。覆土は灰褐色の粘質土である。ほぼ直線に延びる。近世以後の溝と思われる。

第2号溝

E-14～J-16Gridに位置する。ほぼ直線に延びる。第1号方形周溝墓と第2号土壙を切る。第1号方形周溝墓付近から五領期の土器片を出土した。覆土は黒褐色土・暗褐色土を主体とする。時期不明。

第3号溝

H・I-16Gridに位置する。第1号・第2号溝の間を結ぶ形で位置する。覆土は暗褐色上層であ



第84図 溝平面図の位置

る。第2号方形周溝墓と接する。出土遺物は五領期の土器片がある。時期不明。

第4号溝

H・I-16Gridに位置する。溝か土塙か不明確である。第2号溝と並び第3号溝と交差するが、底面のレベルはほぼ等しい。覆土は黒褐色土層である。時期不明。

第5号溝

H-16Gridに位置する。第1号溝と第2号溝を結ぶ位置にある。延長線上に第6号溝があり、本来同一の溝である可能性もある。覆土は黒褐色土層が基調となるものである。

第6号溝

I-11～I-15Gridに位置する。ほぼ直線に延びる。第2号溝から第21号溝に至る間検出できたが、その先は不明である。第22号溝に統く可能性もあるが、覆土は異なる。第1号方形周溝墓を切り、第8号・45号・21号溝により切られる。I-12Grid以南では溝は2段になる。

第7号溝

A-8～E-9 Gridに位置する。第5号・4号方形周溝墓を切る。ほぼ直線に延びる。約半分の間段をもつ。第21号溝とは平行に統く。時期不明。

第8号溝

C-12～H-14Gridに位置し、E-13Gridから8A・8B溝に分かれ、8B溝は第6号溝の東で、8A溝は第6号溝を越し西側で終る。断面図を作成した位置では8B溝が深く、掘り直したものと考えられる。第15号溝により切られる。覆土は黒褐色土を基調とするものである。時期不明。

第9号溝

I-13・14Gridに位置する。ほぼ直線であるが、幅広く、短い。また極めて浅いものである。時期不明。

第10号溝

J-14～L-12Gridに位置する。やや屈曲しながら延びる。K-12Gridで10A・10Bが重複して統く。断面観察では10Aが新しい。覆土はともに黒褐色土を基調とするものである。時期不明。

第11号溝

D-13～G-14Gridに位置する。ほぼ直線的に延びる。第12号溝とはほぼ並行である。非常に浅くD-13Gridで確認面と同じ高さになる。他方は、第1号方形周溝墓で終る。時期不明。

第12号溝

E-12～H-13Gridに位置する。ほぼ直線的に延びる。第11号溝とはほぼ並行である。幅広く浅い、第18号溝と重複する。覆土は黒褐色土を基調とする。時期不明。

第13号溝

C-13～D-7Gridに位置する。緩やかに東に彎曲しながら延びる。第8号・45号・21号・24号溝に切られ、第15号溝と第3号・4号方形周溝墓と第1号墳外塁を切る。覆土は黒褐色土層である。ほぼ第15号溝と並行して統くが、第21号溝の南側で交差する。時期不明。

第14号溝

C-10Gridに位置する。第13号溝と第15号溝の間に認められたもので確認できたのはごく短い距



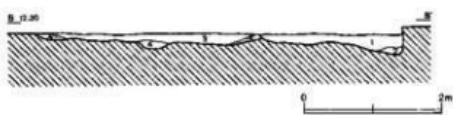
- 2号溝B-B'
- 1 黒褐色土層
 - 2 灰褐色土層
 - 3 黑褐色土層 ローム・黒色土粒子を混入。
 - 4 黑褐色土層 黒色土ブロックを混入。
 - 5 灰褐色土層 鉄分を多く含む。粘性強。
 - 6 黑褐色土層 岩化物を含む。
 - 7 黑褐色土層 ロームブロック混入。
 - 8 灰褐色土層 白色土粒子を含む。



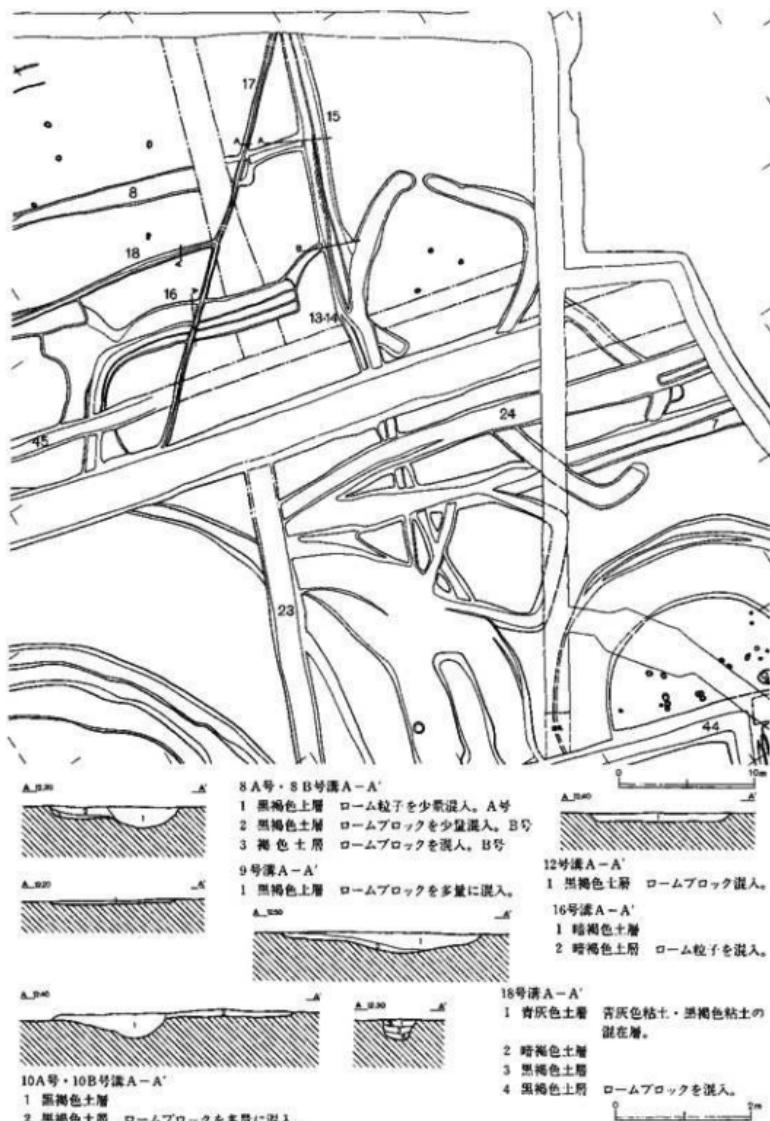
- 5号溝A-A'
- 1 黒褐色土層 ロームブロック混入。
 - 2 黑褐色土層 ロームブロックを多く混入。



- 6号溝A-A'
- 1 黑褐色土層 ローム粒子を多く混入。
 - 2 黑褐色土層 ローム粒子を混入。
 - 3 灰褐色土層 ロームブロックを多量に混入。



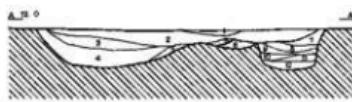
第85図 溝(1)



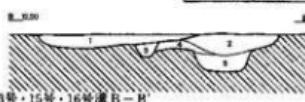
第86図 溝(2)



17号溝 A-A'
1 暗褐色土層 ローム粒子を混入。



- A号・13号・15号溝 C-C'
- 1 黒褐色土層 ロームブロックを多量に混入。 8△号溝覆土
 - 2 黒褐色土層
 - 3 暗褐色土層
 - 4 黑褐色土層
 - 5 暗褐色土層
 - 6 黑褐色土層
 - 7 黑褐色土層 暗褐色土・ロームブロックを混入。 13号溝覆土
 - 8 暗褐色土層 ロームブロックを混入。
 - 9 黑褐色土層 ロームブロックを少量混入。
 - 10 暗褐色土層 ロームブロックを多く混入。
 - 11 黑褐色土層 暗褐色土・ロームブロックを混入。
 - 12 青灰色土層 粘質土・暗褐色土を混入。

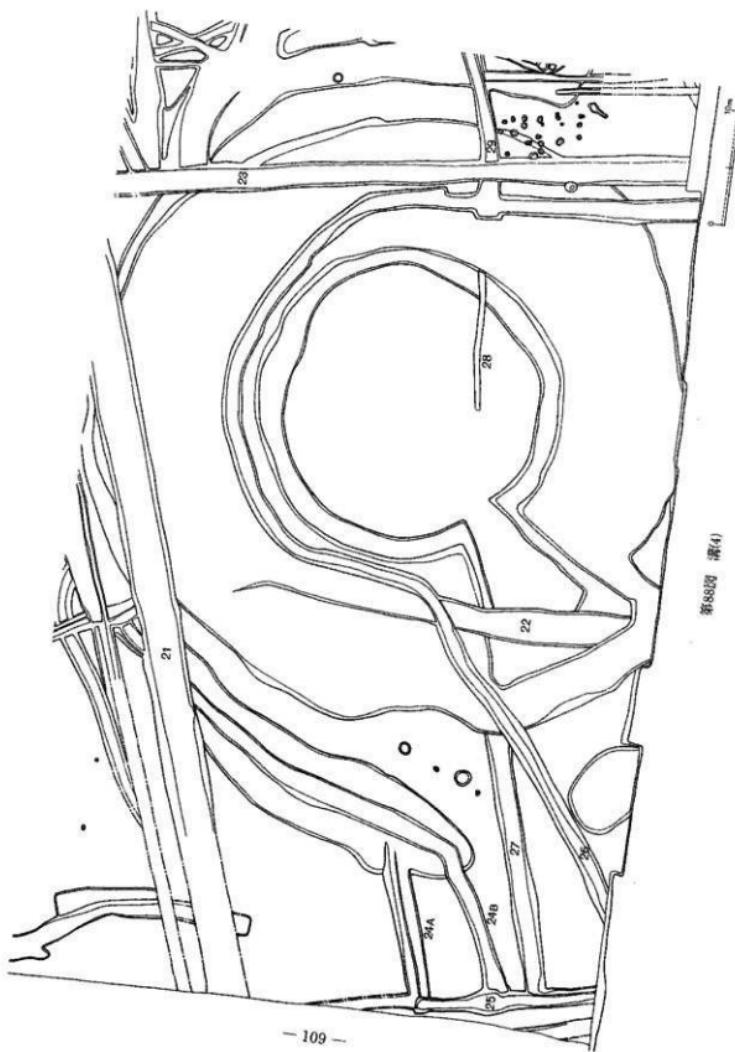


- B-B'
- 13号・15号・16号溝 B-B'
- 1 黒褐色土層 青灰色粘土・ロームブロックを少量混入。
 - 2 黑褐色土層 ロームブロックを少量混入。
 - 3 黑褐色土層 13号溝覆土
 - 4 黑褐色土層 ロームブロックを多く混入。
 - 5 黑褐色土層 ロームブロックを少量混入。



- F-F'
- 36号・37号溝 F-F'
- 1 暗褐色土層 ロームブロックを多量に混入。
 - 2 暗褐色土層 青灰色粘土を少量混入。
 - 3 青灰色土層 粘質。
 - 4 暗褐色土層
 - 5 暗褐色土層 ロームブロックを少々混入。
 - 6 暗褐色土層 ロームブロックを混入。

第87図 溝(3)



離である。時期不明。

第15号溝

B-13～D-8 Gridに位置する。ほぼ直線的に延びる。第8号・13号・16号・45号・21号・24号溝によって切られ、第1号方形周溝墓を切る。覆土は暗褐色土・黒褐色土を基調としロームブロックを多く混入する。時期不明

第16号溝

C-11～F-10 Gridに位置する。E-11 Gridで大きく屈曲する。幅広い浅い溝の中に深い溝があり2段になっている。D-11 Gridで、幅広い溝と深い溝は止まるがそこから第15号溝方向に浅く、細い溝が延びる。第45号溝により切られ、第13号・15号・17号溝を切る。時期不明。

第17号溝

C-13～F-10 Gridに位置する。ほぼ直線に延びる。全測図では第21号溝で止まっているが、これは、第1号墳の部分が航空測量時の図であるため、実際には、第1号墳の内堀の中程まで続いている。覆土は暗褐色土層である。時期不明。

第18号溝

D-11～F-12 Gridに位置する。第17号溝から枝分かれし、第12号溝と重複して西へ続く。F-12 Gridで第12号溝と底面が同じレベルになる。覆土は黒褐色土層を基調とするが、上層に青灰色の粘質土を混入する。時期不明。

第19号溝

I-13～K-14 Gridに位置する。延長上にはほぼ同じ幅の第20号溝があり、本来同一の溝である可能性もある。時期不明。

第20号溝

H-I-13 Gridに位置する。第8号溝と第6号溝を結ぶようにある。第6号溝の東側で二股に分かれ、一方は第6号溝の西側まで続きそこで止まる。他方は第6号溝の中で止まる。時期不明。

第21号溝

A-9～L-12 Gridに位置する。調査区をほぼ中央で2分する。上端約4mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は青灰色の粘質土である。土地改良以前の地籍図と重ねると、第21号溝は、耕地と耕地の境にある水路とほぼ一致するものであり、水路の北側には道が存在する。当遺跡周辺の区画整理は昭和38年に始まる。従って第21号溝はそれまで使用されていた水路と思われる。時期は、近世から現代である。

第22号溝

I-10～K-7 Gridに位置する。第1号墳の前方部と第26号溝を切る。時期不明。

第23号溝

E-10～G-5 Gridに位置する。第1号溝の内堀・外堀と第29号溝を切り、第21号溝で止まる。覆土は青灰色の粘質土であり、第21号溝同様近世から現代に至るものと考えられる。

第24号溝

A-9～E-9 Gridに位置する。また確認面上層では、L-M-10 Gridに位置する24A溝・24B

溝に続いている。24B溝は、第1号墳外堀の中央を切り第21号溝に至る。第24号溝は、第5号方形周溝墓と第13号・15号溝を切る。覆土は灰褐色と青灰色の粘質土であり、近世以後の溝と考えられる。

第25号溝

M-11からN-9 Gridに位置する。調査対象区の西端で検出した。第24A・24B両溝とも第25号溝で止まっており、覆土もほぼ同じである。近世以後の溝と考えられる。

第26号溝

G-5～M-8 Gridに位置する。第1号墳の墳丘の北側を内堀を切って巡る。断面観察では底面は平坦で、立ち上がりは直線的であり、上部で斜めに広がる。いわゆる箱築研に近い形態の溝である。覆土は、黒褐色土を基調としたものである。覆土中からは多くの中世陶器や木製品、石製品が出土している。時期は中世である。

第27号溝

K-8～M-9 Gridに位置する。第25号溝から、第1号墳内堀にかけて検出された。時期不明。

第28号溝

G・H-7 Gridに位置する。第1号墳の削平された墳丘上で検出した溝である。西側にいくにつれ浅くなる。時期不明。

第29号溝

C-5～F-6 Gridに位置する。第26号溝から、基壇状造構の下に続く、基壇状造構を巡る第44号溝により切られ、第29号溝覆土上に基壇の盛土をしている。基壇状造構構築前の、中世造構群を両する溝と考えられる。底面は平坦であり、立ち上がりは直線的にはまっすぐ立ち上がる。覆土は黒褐色土・暗褐色土層である。覆土から中世陶器・木製品が出土している。

第30号溝

F-4・5 Gridに位置する。第31号溝とほぼ平行して続く細い溝である。第33号溝を切る。時期不明。

第31号溝

E-5～F-4 Gridに位置する。第30号溝とほぼ平行し、第29号溝まで延びる。第33号溝を切る。時期不明。

第32号溝

B-6～E-4 Gridに位置する。第32号溝は、32A溝と32B溝としたもの他第44号溝と完全に重複しているもので、第44号溝が完全に埋まりきる前に、32A・32B溝を掘削し、合わせて第44号溝の上部を利用して溝としている。覆土は灰褐色土層である。中世以後の溝と考えられる。

第33号溝

A-3～F-4 Gridに位置する。検出された部分のはば中央で第34号溝と分岐する。分岐した東側は溝が2重になっており第38号溝に至る。第1号・5号・8号掘立柱建物跡のビットに切られる。時期は中世と考えられる。

第34号溝

B・C—4 Gridに位置する。第33号溝から分かれる。幅・深さはほぼ第33号溝と同じ、第5号掘立柱建物跡のピットと第13号井戸により切られる。時期は中世と考えられる。

第35号溝

D—3～5 Gridに位置する。基壇状造構の盛土下にあり、中世以前の溝である。

第36号溝

C—3・4 Gridに位置する。第4号掘立柱建物跡のピットにより切られる。中世以前の溝である。

第37号溝

C—2～5 Gridに位置する。第5号掘立柱建物跡のピットと第36号溝により切られ、基壇状造構の盛土下に続く、中世以前の溝である。

第38号溝

B—2～4 Gridに位置する。ほとんど直線状に続く。北側の延長線上にある溝に続くと考えられる。第39号溝と3.2m前後の距離をおき平行する。覆土は暗褐色土を基調とする。

第39号溝

A—4～B—1 Gridに位置する。ほとんど直線状に続く。第38号溝と平行し、覆土も同様である。

第40号溝

D—4・5 Gridに位置する。基壇状造構下において検出された溝である。第25号土壌により切られる。覆土は暗褐色土層である。中世以前の溝である。

第41号溝

B・C—2 Gridに位置する。第42号溝と平行する。第37号溝から第39号溝にかけて検出され、第39号溝と直角をなす。覆土は暗褐色土層を基調とする。

第42号溝

B・C—2 Gridに位置する。第41号溝と平行する。第41号溝と同様第37号溝と第39号溝を結ぶ。覆土は暗褐色土層を基調とする。

第43号溝

D・E—5 Gridに位置する。拡張する以前の基壇状造構の周囲を巡る溝の一部である。覆土は、下層は自然堆積であり、黒褐色土・暗褐色上層であるが、中層以上はロームブロックを多量に混入する埋め戻し層である。基壇状造構の拡張に伴い、南側に位置する第44号溝を掘削した排土により埋め戻されている。覆土中から木製品・中世陶器片が出土している。溝の底面は平坦である。断面形は箱薬研を呈する。中世の溝である。

第44号溝

B—6、C—4～6、D—5～7、E—5・6 Gridに位置する。基壇状造構の周囲を巡る溝である。基壇状造構の拡張前は、第43号溝がその南辺の溝である。東辺と西辺を約3.5m延長し、新たに南辺の溝を設けている。第29号溝の他、古墳の周堀と、基壇状造構下の溝を切っている。覆土は黒褐色土・暗褐色土を基調としているが上層には灰褐色土も認められる。また第44号溝の上層はすべて、第32号溝と重複しており、その覆土は青灰色の粘質土である。青磁・中世陶器・木製品・石製品など多数の遺物がある。時期は中世である。なお濃覆土中から5,000個以上の桃の種子が出土した。

第45号溝

B-10~L-12 Gridに位置する。第3号方形周溝墓、第1号墳外堀、第6号・10号・13号・15号・16号・17号溝を切る。覆土は青灰色粘質土を基調とするものである。第21号溝とほぼ平行する。時期は、近世から近・現代と思われる。

第15表 溝一覧表

%	位 置	規 模	出土遺物	No	位 置	規 模	出土遺物
1	H-16, I-16	18.0×1.30×0.57					38, 42, 45, 55,
2	E-14~J-16	51.5×1.90×0.61	五輪1				56 五輪4, 6,
3	H-16, I-16	3.0×1.35×0.28	五輪1	27	K-8~M-9	22.8×2.25×0.35	
4	H-16, I-16	2.5×0.65×0.25		28	G-7, H-7	12.2×0.55	
5	H-16	2.6×0.70×0.23		29	C-5~F-6	11.9×1.55×0.50	陶器78 木39, 33
6	I-11~I-15	35.9×2.15×0.39		30	F-4, F-5	12.2×0.50×0.24	
7	A-8~E-9	34.5×2.29×0.30	木27, 28, 52	31	E-5, F-5	18.6×0.75×0.12	
8A	C-12~H-14	43.5×1.80×0.19		32A	B-6	4.6×2.40×0.62	陶器34
8B	E-13, H-14	20.5×1.10×0.30		32B	E-4, E-5	9.1×2.40×0.28	陶器58
9	I-13, I-14	12.3×1.90×0.06		33	A-3, F-4	54.5×0.25×0.10	
10A	J-14~L-12	26.7×2.45×0.36		34	C-4, B-4	12.7×0.90×0.24	木58
10B	K-12, K-13	8.8×1.91×0.10		35	D-3~D-5	24.1×0.75×0.39	
11	D-13~G-14	27.0×1.90×0.10		36	C-3, C-4	6.7×0.65×0.32	木40, 60, 61
12	E-12~H-13	25.0×2.35×0.12		37	C-2~C-5	22.9×0.75×0.53	
13	C-13~D-7	55.7×0.85×0.19		38	B-2~B-4	22.2×0.95×0.18	陶器36, 49
14	C-10	0.31×0.60×0.14		39	A-4~B-1	22.6×1.10×0.18	
15	B-13~D-8	40.0×0.79×0.54		40	D-4, D-5	4.9×0.99×0.02	
16	C-11~F-10	22.5×1.16×0.31		41	B-2, C-2	13.4×0.45×0.19	
17	C-13~F-10	40.0×0.60×0.36		42	B-2, C-2	13.2×0.55×0.14	
18	D-11~F-12	31.4×0.60×0.36		43	D-5, E-5	10.5×1.35×0.14	陶器38, 50, 52 木48
19	I-13~K-4	18.3×0.65×0.10		44	B-5~E-6	59.5×2.37×1.00	陶器9, 30, 31,
20	H-13	7.0×0.65×0.14					35, 42, 45, 46,
21	A-9~L-12	104.5×3.95×0.70	陶器32				48, 51, 53, 54,
22	I-10~K-7	34.3×3.15	陶器79				59~63, 65, 67,
23	E-10~G-5	50.5×2.60×0.30	陶器4, 5, 6				69, 71, 76, 90,
24	A-9~E-9	31.2×2.65×0.90					91, 94 青磁1
24A	L-10, M-10	14.5×2.20×0.28					板碑2375, 6,
24B	L-9~M-10	39.8×1.60×0.18					9 木3, 5, 6, 8,
25	N-9~M-11	25.0×1.65×1.72	青磁5				10, 11, 15, 22,
26	G-5~M-8	109.1×2.10×0.06	陶器2, 7, 8, 10				23~25, 29, 32,
			~27, 83 石3,				33, 36, 37, 40,
			7, 転陶14木12,				41, 43, 50
			14, 16~20, 35, 45	B-10~L-12	93.0×2.80×0.50		

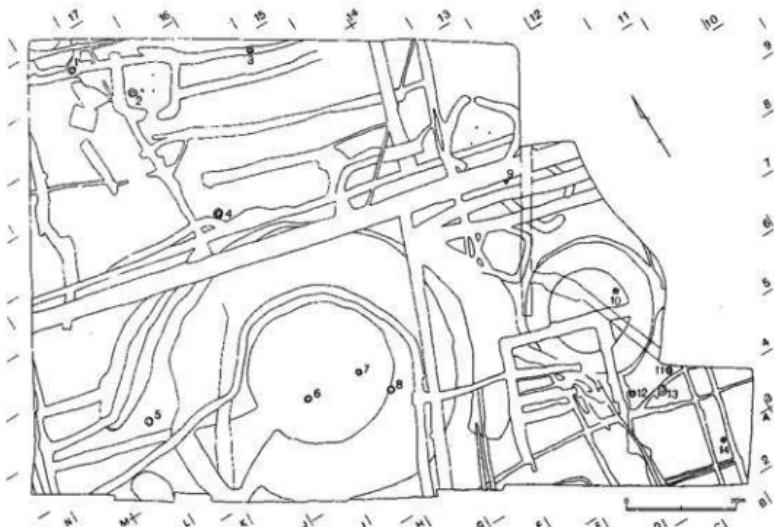
(4) 井戸

井戸は14基検出された。検出した井戸の位置及び規模は、第91図及び表16に示すとおりである。表中の石は石製品を、木は木製品を表わしたものであり、番号は、挿図中の遺物Noである。また旧Noは、調査時に付した番号である。

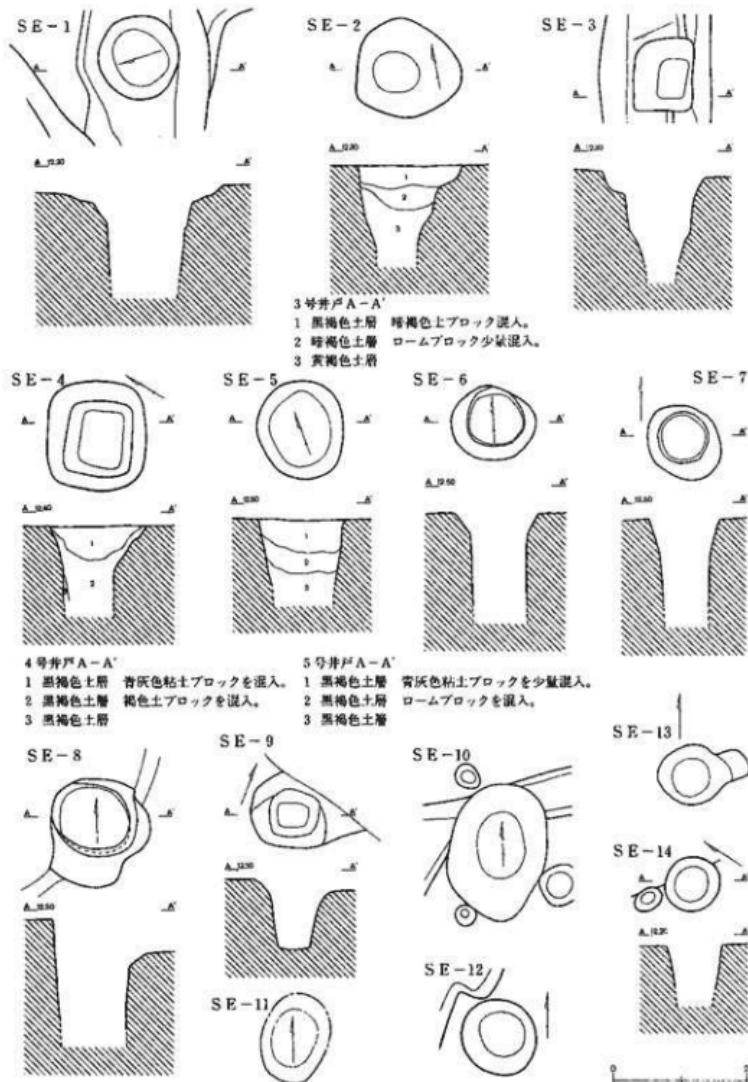
第3号・4号・9号井戸はプランか方形を基調としたものであるが、他は円形あるいはやや長い円形である。時期は、第6号・7号・8号・10号・11号・12号・13号・14号が中世のものと思われるが他の井戸については不明である。覆土は黒褐色土層を基調とするものであるが一部灰褐色土を混入するものもある。

第16表 井戸一覧表

No.	ID No.	位 置	規 模	出土遺物	No.	ID No.	位 置	規 模	出土遺物
1	1	I-16	1.25×1.20×1.48		8	8	G-7	1.64×1.50×1.84	陶器66
2	4	II-15	1.55×1.49×1.35		9	14	B-9, C-9	0.76×0.70×1.08	
3	2	E-14, F-14	1.10×0.90×1.55		10	13	B-6	1.36×0.90×0.35	
4	3	II-12	1.64×1.48×1.35	五箇5	11	15	B-4	1.35×1.00×0.63	
5	5	K-9	1.46×1.30×0.98		12	12	C-4	1.20×1.10×0.80	
6	6	H-8	1.29×1.10×1.62	木30	13	10	B-4	2.05×1.50×1.13	陶器73, 石1
7	7	G-8	1.21×1.05×1.60	木34	14	11	B-2, B-3	0.86×0.80×0.88	木2, 石4



第89図 井戸位置図



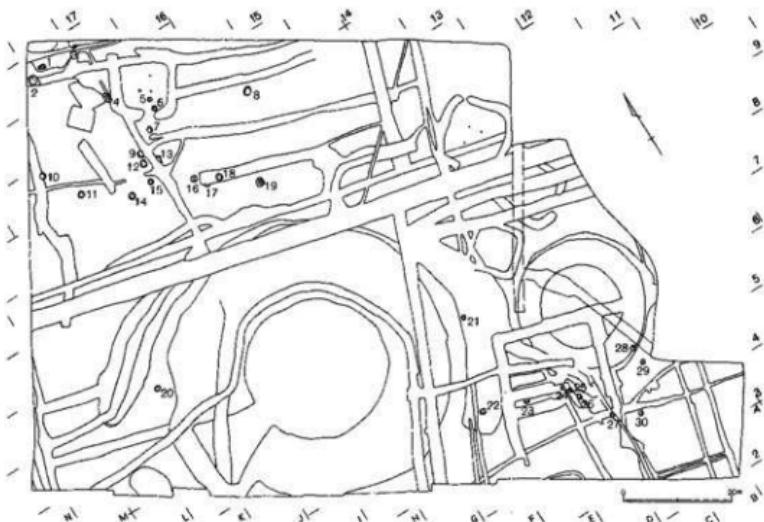
第90図 井戸

(5) 土壌

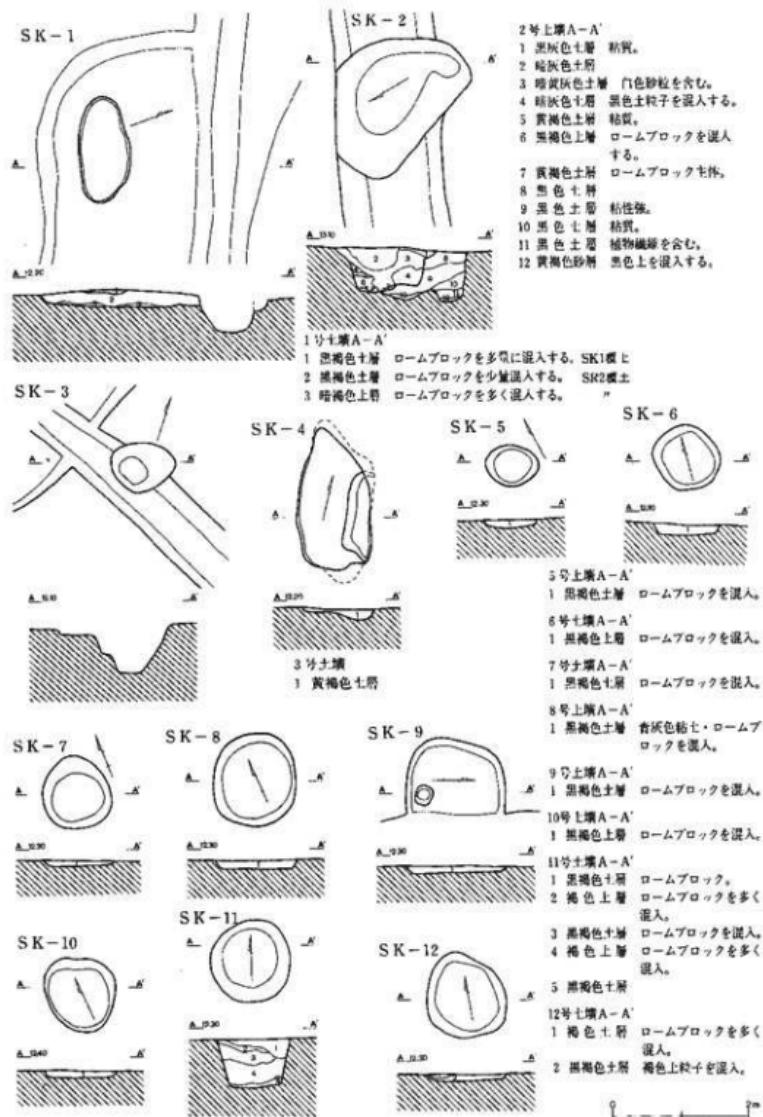
検出された土壌は30基であった。位置・規模は、第91図と表17に示すとおりである。表中の石は石製品、木は木製品、転陶は転用陶器片をさし、Naは押樹中の遺物Naである。

第17表 上壌--観表

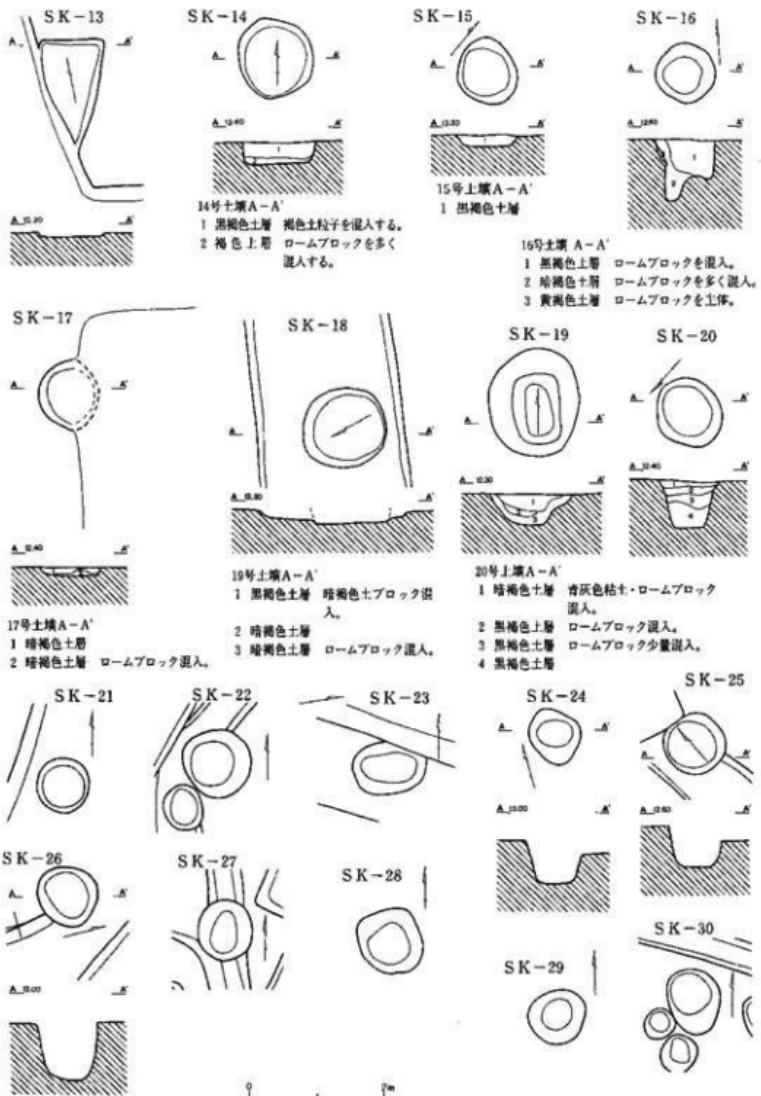
No.	IUNo.	位 置	規 模	出土遺物	HINo.	位 置	規 模	出土遺物
1	1	I-16	1.55×0.75×0.54	五箇3	16	10	0.88×0.89×0.91	
2	2	I-16, J-16	2.32×1.69×0.78		17	11	1.04×0.90×0.13	
3	4	H-16	0.95×0.72×0.72	陶器80	18	13	1.22×1.14×0.23	
4	3	H-15	2.02×1.08×0.15		19	12	1.58×1.34×0.46	
5	19	H-14	0.80×0.59×0.11		20	21	1.06×0.96×0.74	陶器1、木47
6	18	H-14	1.00×0.96×0.16	転陶13	21	30	0.80×0.78×0.83	
7	17	H-14	1.08×1.00×0.10		22	22	1.02×1.00×0.33	
8	20	F-13, F-14	1.34×1.22×0.12	板牌22	23	31	1.02×0.97×0.70	
9	13	H-14	1.46×1.08×0.11		24	23	0.87×0.71×0.62	
10	16	J-14	1.07×1.02×0.11		25	24	0.93×0.90×0.60	
11	6	J-14, J-13	1.18×1.08×0.73		26	25	0.92×0.86×0.81	
12	8	H-13, I-13	1.24×1.18×0.12		27	26	0.89×0.80×0.51	
13	14	H-13	1.58×0.95×0.07		28	29	1.06×0.97×0.56	
14	7	I-13	1.16×1.10×0.24		29	28	0.86×0.79×0.59	
15	9	I-13	0.97×0.90×0.17		30	27	0.97×0.79×0.21	板牌24



第91図 上壌位置図



第92図 上塙(1)



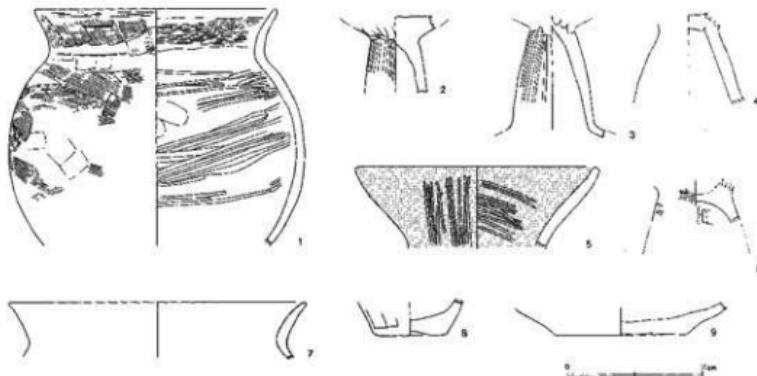
第93図 土壌(2)

確認された土壙は、時期・性格ともに不明なものが多い。プランはほとんどが円形を基調とするものであるが、第1号・2号・4号土壙が不整形の長円であり、第13号土壙は長方形になるものと思われる。第19号土壙は、段を有する土壙で、中段でのプランは長方形、上端のプランは長円形である。

出土遺物は、第1号土壙から五領期の高杯の破片が出土している。

第1号土壙は、第2号方形周溝墓の覆土中に掘り込まれたものである。第3号土壙は、第1号溝によって切られ、中世陶器片を出土している。第6号土壙は、第1号方形周溝墓の区画内にあるが、中世陶器片の割れ口に擦痕のあるものが出土している。第8号土壙からは、板碑の破片と思われる石材が出土している。第20号土壙からは、中世陶器と共に、大型の曲げ物の破片と思われる薄い板材が出土している。また第25号土壙からも曲げ物が出土したが、腐食が著しく図示できなかった。第30号土壙からは、板碑の破片と思われる石材片が出土している。

なお第24号・25号・26号土壙は、基壙状造構の盛土上で検出されたもので、基壙状造構に伴う可能性がある。



第94図 溝・井戸・土壙・Grid出土遺物

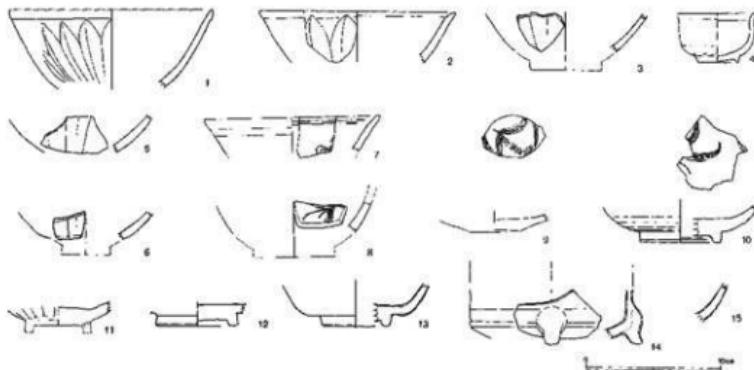
第18表 溝・井戸・土壙・Grid出土遺物

No.	器種	出土遺構	胎 土	色 調	注 No.	測 No.	備 考
2	台付甕	第1号塙	W+B+R+礫	にふい赤褐色	H-6 1197	830	
3	高杯	第1号土壙	W+W+B+R少+礫	桜色	土壙-1 2	838	
5	壺	第4号井戸	W多+B+R+W+塵	暗赤色	H-12 2 他	826	赤彩
7	甕		W多+B+R少+礫	にふい黄橙	H-13 1	831	
1	甕	第1・2号溝	W+B+R+礫	橙色	H-16 10 他	812	内側黒褐色
6	台付甕	第26号溝	W+B+R+礫	にふい橙色	F-7 316	829	
8	甕	第1号塙	W+B+R少+礫	橙色	I-6 1378	828	内側褐灰色
4	台付甕	第26号溝	W+B+R+礫	橙色	G-6 718 他	827	
9	壺	第15号溝	W+W+B+R+礫	褐灰色	C-11 6	835	内側黒褐色

(6) 中世の遺物

青磁

検出された磁器は、いずれも破片である。1は、青磁の椀の口縁部の破片であるが、外側には蓮弁を描いたものである。蓮弁は明確に描かれている。瀧泉窯系の製品である。器面はやや荒れており、長期にわたり使用されたものと思われる。第44号溝から出土した。2も椀の口縁部の破片である。1と同様外側には、明確に蓮弁が描かれるもので瀧泉窯系と思われる。1・2ともに、しっかりとした蓮弁であり、13世紀後半から14世紀前半のものと思われる。3は椀の体部の破片である。4は小型の鉢であるが、色調は青磁とは異なり、黄褐色を基調とするものである。磁器ではあるが、中世の遺物としていいものは疑問の残るものである。5・6は、青磁椀の体部の破片である。瀧泉窯系のものである。7は、青磁椀の口縁部の破片である。内面の釉下に、細い2重の線刻による文様が描かれている。色調は、褐色がかかった濃いものであり、同安窯系の製品と思われる。8は、青磁椀の体部の破片である。内面の釉下には、数条の細い線刻により文様が描かれるものである。色調も7と同様であり、同安窯系の製品である。9は皿の底部である。内面には、7・8と同様細



第95図 青磁

第19表 青磁

No.	器種	出土遺構	注記 No.	測No.	備考	No.	器種	出土遺構	注記 No.	測No.	備考
1	椀	SD-44	C-5-11	1502		9	皿	S S-1	G-6-119	1508	同安窯系
2	椀	S S-1	J-7-844	1511		10	椀	S S-1	I-7-1162	1517	同安窯系
3	椀	S S-1	I-6-1039	1513		11	椀	Grid-K-9	K-9-35	1503	
4	小鉢	S S-1	I-8-4	1501		12	椀	S S-1	I-6-1050	1512	
5	椀	SD-25	N-10-9	1509		13	椀	S S-1	I-6-1109	1505	
6	椀	S S-1	I-7-210	1515		14	香炉	S S-1	D-5-117	1504	
7	椀	S S-1	I-6-851	1507	同安窯系	15	椀	S S-1	G-10-63	1506	
8	椀	S S-2	B-7-13	1514	同安窯系						

下に数条の細い線刻による文様が描かれるもので、色調も7・8と同じである。同安窯系の製品である。10は、青磁碗の底部の破片である。内面の釉下に細い数条の線刻により文様を描く。色調も7・8・9と同様である。同安窯系の製品と思われる。11・12・13は青磁碗の底部の破片である。11は、高台部を欠損している。色調は明るい青で、瀧泉窯系の製品と思われる。14は、青磁の香炉の破片である。脚部は3方に付くものと考えられる。瀧泉窯系の製品と思われる。15は青磁碗の体部の破片である。

検出された、青磁のうち、蓮弁文のつくものは、蓮弁が大きく、明確に表現するものであり、古い様相を呈するものである。その特徴から13世紀後半から14世紀前半のものと考えられる。

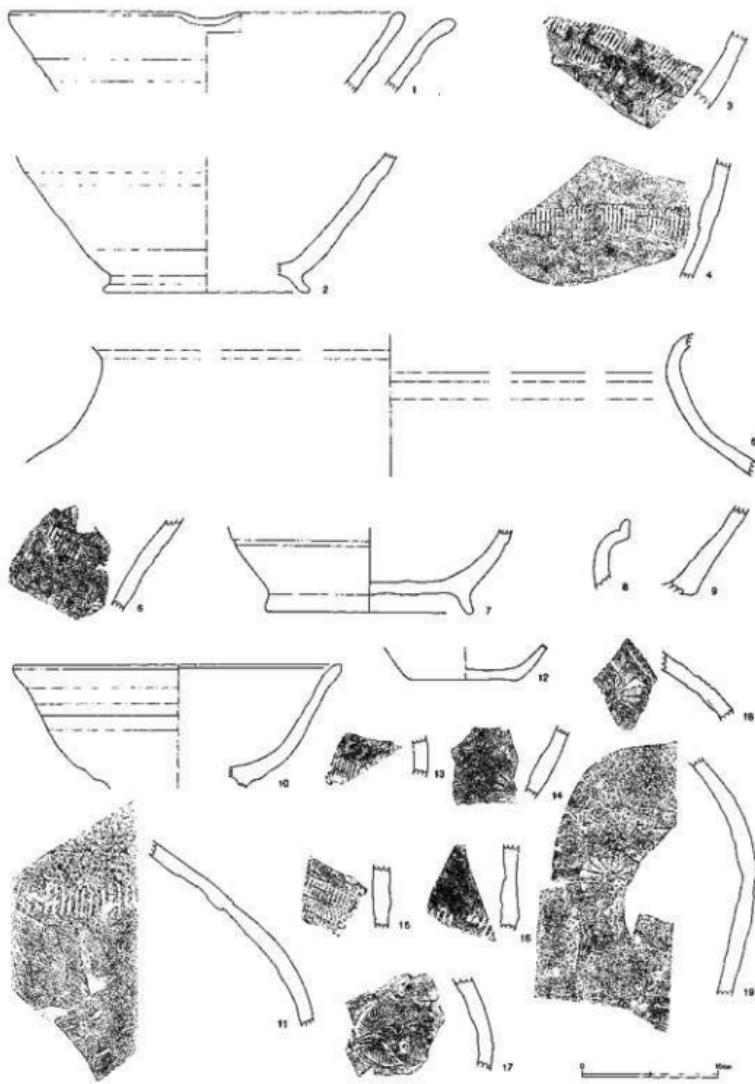
陶器

陶器は、基壇状造構の周辺と、第1号墳の内堀南側を中心として広い範囲から出土している。その多くは常滑の大甕の破片である。また外面に押印が付くものも多い。出土した造構は表20に示した。表中のGridはGrid出土遺物である。

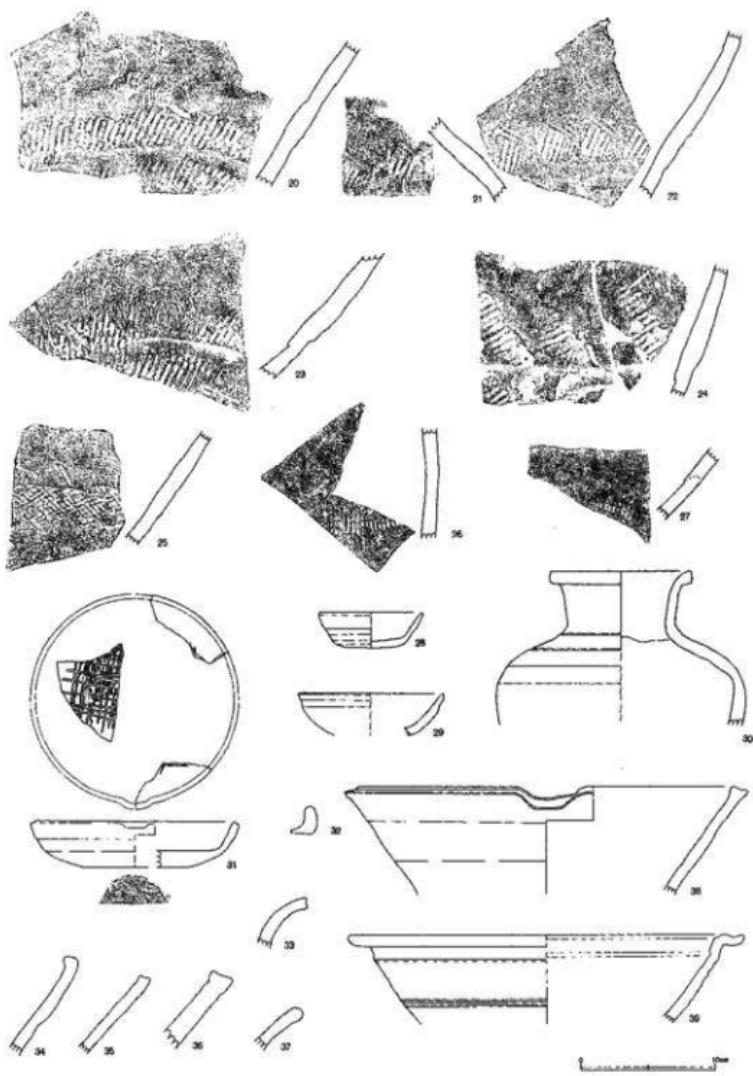
1と3は、第20号上塙から出土したもので、1は片口鉢の口縁部の破片、3は大甕の胴部の破片であり、押印が付く。3は、85と同一個体である可能性がある。2は、鉢の底部の破片である。第20号溝から出土した。4・5・6は、第23号溝からの出土であるが、4・6は大甕の胴部、5は大甕の頭部の破片である。4と5は押印が付く。7・8、10~27は、第26号溝から出土したものである。7と10は鉢、8は壺の口縁と思われる。12は、赤く、硬質の焼成の土師質の皿である。他はすべて大甕の破片で押印が付く。10は、割れ口に漆を塗り、割れ口を接合しており、割れたものを捕修して使用していたものと考えられる。17の押印は鳥形だったものである。93と同-個体と思われる。14・18・19は花形の押印である。84と同一個体である可能性がある。20と23も同-個体である可能性がある。

28は、第1号墳の内堀上層から出土した小皿であるが、ほぼ完形である。灰色を呈するもので、きめの細かい胎土である。瀧美系の製品と思われる。外面の約半分が黒くなっている。29は、やや丸みを帯びて立ち上がる小皿である。口縁外面がやや窪む。第44号溝の上層からの出土であり、色調は淡い赤橙色を呈する。中世の遺物とするには疑問が残るものである。30は、小型の盃である。頸部下端と肩部に、細い沈線が巡る。常滑系の製品である。31は、おろし皿の破片であり、3片から復原実測を行った。第44号溝から出土したもので、瀧戸系の製品と思われる。32は、第21号溝出土の焰塔の小片である。近世以後のものである可能性が強い。33は、壺の口縁部の破片である。第1号墳周堀上層の出土である。34~39は、鉢の口縁部の破片である。39は、第44号溝の上層からの出土で、29と共に第44号溝と重複する。第32号溝の遺物と見ることもできる。色調は灰白色で、堅緻である。口縁端部が大きく外側に屈曲する。他の遺物よりも時期が下る可能性も考えられる。34は第32A号溝、35は第44号溝、36は第38号溝、37はGrid、38は第43号溝からの出土である。

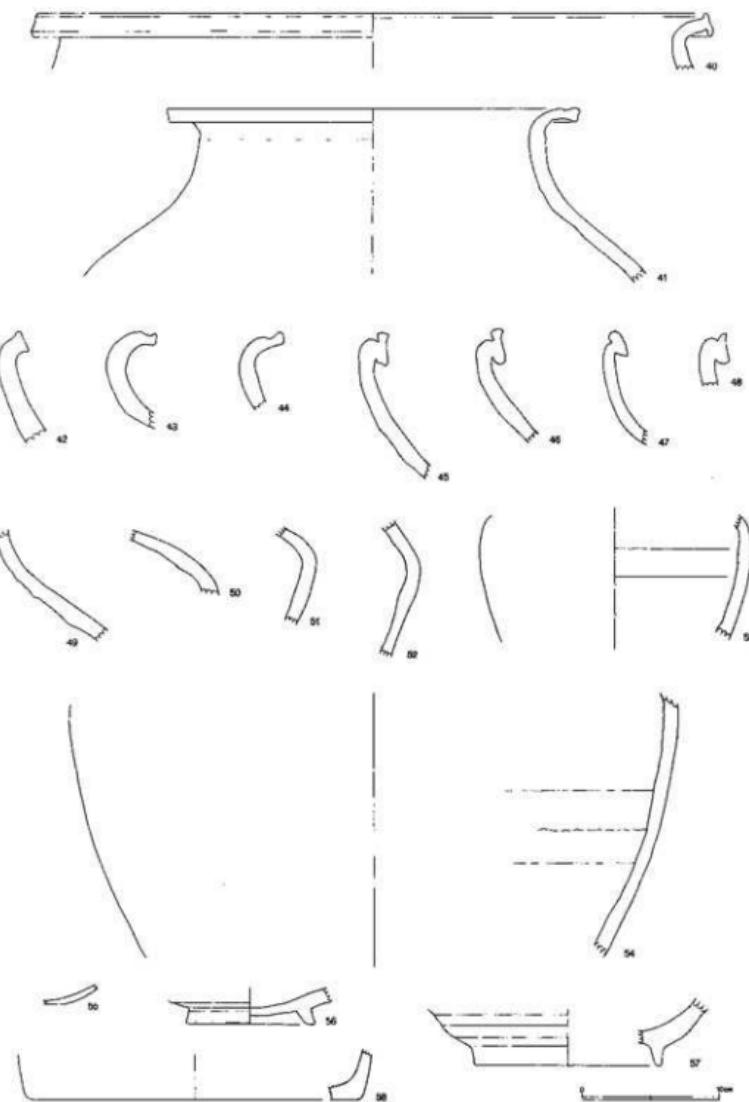
第98[40~48]は、大甕あるいは大壺の口縁部の破片である。40・41は小片から口径を復原した。40は約50cm、41は約30cmである。40・41・43・44は、第1号墳周堀覆土上層、42、45~48は、第44号溝からの出土である。いずれも常滑系の製品である。口縁部の形態は、折り返すものも、あまり



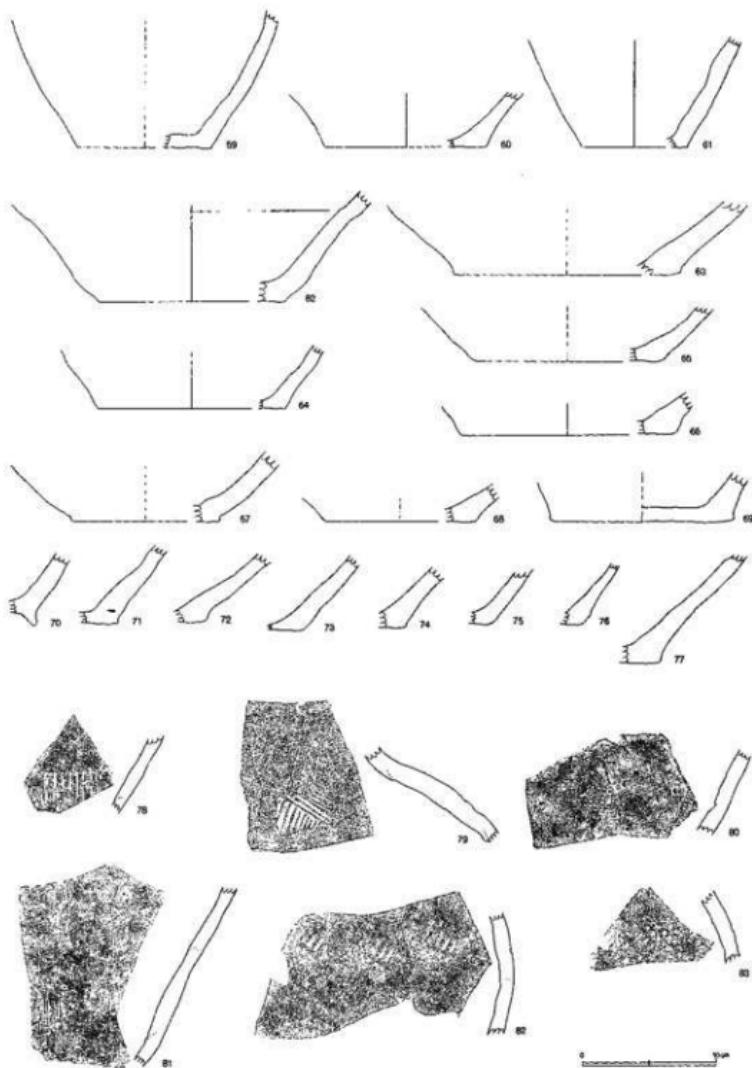
第96图 中泄陶器(1)



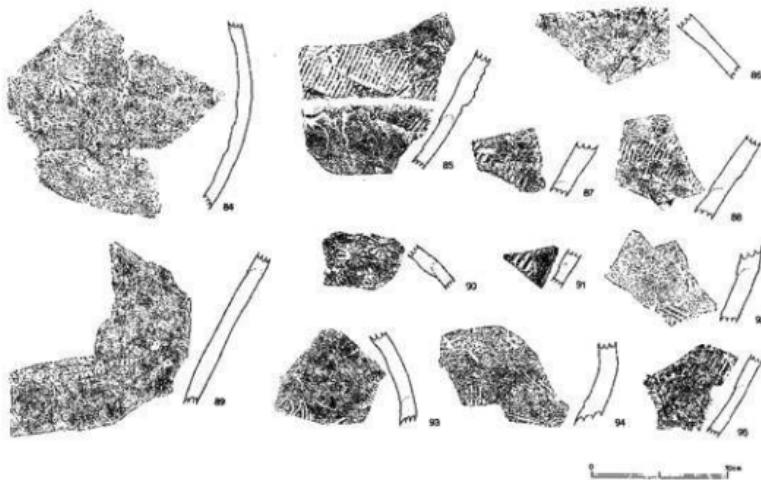
第97図 中世陶器(2)



第98图 中世纪器(3)



第99図 中世陶器(4)



第100図 中世陶器(5)

洗れておらず、古い様相を呈するものである。49~52は、甕の颈部から胴部上端にかけての破片である。49は第38号溝から、50・52は第43号溝、51は第44号溝からの出土である。53は、小型壺の胴部片である。54は、大甕の胴部片である。共に常滑の製品であり、第44号溝から出土した。

55は、皿である。色調は灰白色を呈するもので、非常に堅密な焼成である。内面に透明な釉がかかる。第44号溝からの出土である。56・57は、鉢の底部である。高台が付く。56はGrid出土、57は第1号墳内壠上層の出土である。58は、第32B号溝から出土した焰烙の破片である。近世以後のものである可能性が考えられる。

第99図59・61は、壺の底部である。第44号溝からの出土であり、共に常滑の製品である。60・70・71・76は、鉢の底部である。70は、高台が付く。60・71・76は第44号溝の出土であり、70は第1号墳内壠覆土上層からの出土である。70は、明灰色を呈するものであるが、他は、明褐色を呈する。62~69、72~75、77は、大甕あるいは大壺の底部の破片である。いずれも常滑系の製品である。64・68・72が第1号墳内壠覆土上層から、66は第8号井戸、73は第13号井戸から、74・75はGrid出土遺物である。他は第44号溝から出土した。

78~83と第100図84~95は、大甕あるいは大壺の胴部破片で、押印の付くものである。いずれも常滑系の製品である。

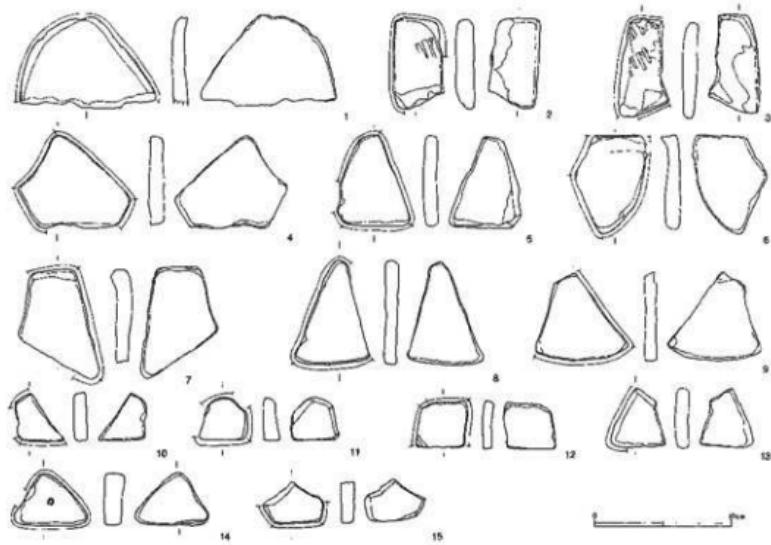
検出された中世陶器のうち、常滑の大甕の口縁部の形態の特色、おろし皿の器形、片口鉢の器形は、古い様相を呈するものが多く、一部を除きその大半は、青磁同様、13世紀後半から、14世紀前半頃までの年代幅の中に納まるものと考えられる。

第20表 中世陶器

No	器種	出土遺構	注記 No	測 No	備考	No	器種	出土遺構	注記 No	測 No	備考
1	片口	SK-20	K-9・13	636		49	大甕	SD-38	B-3・5	640	
2	片口鉢	SD-26	K-9・13 他	616		50	大甕	SD-43	C-4・5 他	612	内面にふい型
3	大甕	SK-20	K-9・14	737	内面有り	51	大甕	SD-44	C-5・20	660	
4	大甕	SD-23	G-5・284	725	押印有り	52	大甕	SD-43	E-5・28	655	
5	大甕	SD-23	F-6・107 他	610	表面有り	53	小甕	SD-44	D-5・29 他	602	
6	甕	SD-23	F-6・120	715	押印有り	54	大甕	SD-44	C-5・101 他	601	
7	鉢	SD-26	G-6・1102 他	685		55	皿	SD-44	C-5・126	681	内面有り
8	蓋	SD-26	F-7・450	645		56	片口鉢	Grid・K-11	K-11・4	667	
9	鉢	SD-44	C-5・34	638		57	片口鉢	SS-1	F-7・453	627	
10	鉢	SD-26	F-9・378 他	618		58	皿	SD-32B	E-5・14	669	
11	大甕	SD-26	J-9・73 他	605	表面有り	59	蓋	SD-44	D-5・127 他	657	
12	皿	SD-26	F-7・989	664		60	片口鉢	SD-44	D-5・4	658	
13	大甕	SD-26	F-7・272	703	押印有り	61	小甕	SD-44	C-5・3	654	
14	大甕	SD-25	G-5・168	704	押印有り	62	大甕	SD-44	E-5・37	629	
15	大甕	SD-25	G-5・105	705	押印有り	63	大甕	SD-44	C-4・6	653	
16	大甕	SD-26	G-6・1086	733	押印有り	64	大甕	SS-1	C-5・28	663	
17	大甕	SD-25	H-10・382	718	押印有り	65	片口鉢	SD-44	C-6・28	630	
18	大甕	SD-25	G-7・119	732	押印有り	66	大甕	SE-8	G-7・400	686	
19	大甕	SD-25	J-9・187 他	604	押印有り	67	大甕	SD-44	B-5・4	661	
20	大甕	SD-26	G-5・315	723	押印有り	68	大甕	SS-1	J-9・244	659	
21	大甕	SD-25	I-9・957	716	押印有り	69	大甕	SD-44	D-5・3	656	
22	大甕	SD-25	H-10・620	712	押印有り	70	片口鉢	SS-1	H-5・187	635	
23	大甕	SD-26	F-8・874	735	押印有り	71	片口鉢	SD-44	C-5・45	624	
24	大甕	SD-26	F-7・441 他	711	押印有り	72	大甕	SS-1	G-6・500	633	
25	大甕	SD-26	F-7・456 他	622	押印有り	73	大甕	SE-13	B-4・21	632	
26	大甕	SD-26	F-6・259 他	620	押印有り	74	大甕	Grid・E-5	E-5・34	662	
27	大甕	SD-26	G-5・183	717	押印有り	75	大甕	Grid・E-5	E-5・33	628	
28	小皿	SS-1	H-6・411 他	623		76	片口鉢	SD-44	D-5・15	687	
29	小皿	SD-44	C-5・169	673		77	大甕	SD-44	D-5・37	634	
30	小窓	SD-44	D-5・92 他	603	常滑	78	片口鉢	SD-29	D-6・66	707	押印有り
31	おろし皿	SD-44	C-6・6 他	679		79	大甕	SD-22	I-9・173	713	押印有り
32	ほうろく	SD-21	H-11・12	679		80	大甕	SK-3	H-16・5	727	押印有り
33	蓋	SS-1	G-6・639	647		81	大甕		G-9・193 他	722	押印有り
34	鉢	SD-32A	B-6・9	641		82	大甕		C-4・65 他	619	押印有り
35	鉢	SD-44	C・5・31	626		83	大甕	SD-26	F-8・471	741	押印有り
36	鉢	SD-38	B-3・4	642		84	大甕		C-8・12 他	617	押印有り
37	鉢	Grid・F-9	F-9・333	631		85	大甕	SS-1	G-6・859	724	押印有り
38	片口鉢	SD-43	B-5・15	625		86	大甕	Grid・K-7	K-7・137	739	押印有り
39	鉢	SD-44	D-5・35	644		87	大甕	SS-1	G-6・64	731	押印有り
40	大甕	SS-1	F-6・170 他	689		88	大甕	Grid・H-5	H-5・41	720	押印、軸有り
41	大甕	SS-1	H-6・400 他	614		89	大甕	SS-1	I-8・188	615	押印有り
42	大甕	SD-44	D-5・2	643		90	大甕	SD-44	D-5・138	719	押印有り
43	大甕	SS-1	I-6・1023	651		91	大甕	SD-44	C-5・25	734	押印有り
44	片口鉢	SS-1	J-7・773	648		92	大甕	SS-1	F-9・419	708	押印有り
45	片口鉢	SD-44	D-5・12	650	内面灰褐色	93	大甕	SS-1	I-6・98	738	押印有り
46	鉢	SD-44	C-5・24	652		94	大甕	SD-44	D-6・2	728	押印有り
47	大甕	SD-44	C-4・9	649		95	大甕	SS-1	G-5・293	702	
48	大甕	SD-44	D-5・21	646							

転用陶器片

中世陶器の破片のうち、破片の割れ口を擦っているものを計15点確認した。大甕・片口鉢の破片を利用したものであるが、使用目的は全く不明である。破片の形態は様々である。破片の整形のために擦っているものでないことは明らかである。擦り面は、きれいに1つの面を成すものもあり、小さな擦り面が重なっている部分もある。また側面から見ると擦り面は、ほぼ直線状になるものと、中央が外側に彎曲するものが多いが、第102図4・6の一部に見られるように、中央が彎む面を持つものもある。中世陶器の破片の割れ口を擦ることが目的ではなく、鉄・銅などの金属製品に付着したものを取り除くか、鏽を落とす道具として、中世陶器の破片を転用したものと考えられるが、製品の特定と、詳しい使用目的については不明である。



第101図 転用陶器片

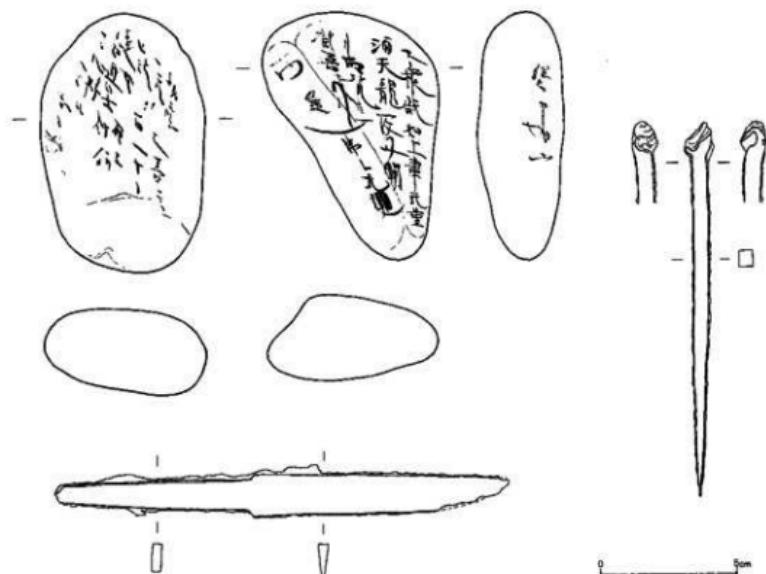
第21表 転用陶器片

No.	器種	出土遺構	注記 No.	測No.	備考	No.	器種	出土遺構	注記 No.	測No.	備考
1	甕	Grid-C-5	C-5-281	767		9	鉢	SS-1	F-6-197	764	
2	甕	SS-1	I-6-350	759		10	鉢	SS-1	I-6-684	757	
3	甕	SS-1	H-5-261	760	中世743	11	鉢	SS-1	H-6-380	755	
4	甕	SS-1	G-5-193	751		12	鉢	SS-1	I-6-518	761	
5	甕	SS-1	I-6-718	756		13	鉢	SK-6	H-8-3	762	
6	鉢	SS-1	I-6-674	753	中世639	14	鉢	SD-26	G-6-708	758	
7	鉢	SS-1	I-6-721	754		15	鉢	SS-1	I-6-191	763	
8	鉢	SS-1	H-6-863	752							

第102図1～5、7～15は、大甕の破片と思われる。2・3は押印が付くものである。7は、片口鉢の口縁部の破片である。1は、Grid出土遺物、2～12、15は第1号墳周堀覆土上層から、13は第6号土壙、14は第26号溝からの出土である。出土位置が第1号墳内堀覆土内に集中する点は、他の中世陶器の分布域というよりも、綠泥片岩の分布域と共通している。

墨書き石

基壇状造構の周辺より、礫に墨で文字を書いた墨書き石が2点出土した。第102図の1は、読める文字が少なく、内容は不明である。書体は、右上がりの非常に特徴的なもので、文字数はかなりある。読めた文字は、善・百・十・女・命・命だけである。D-5 Gridから出土した。他の一点はC-4 Gridから出土したもので、30以上の文字が書かれていたものと思われる。読めた文字は、……大衆□如上事無量諸天龍夜叉聞□□歡喜……である。「浄土三部経」の中の觀無量寿経の最後の一説である「者闍崛山阿難の復説」の一説を写経したものと思われる。漢文書き下しと、釈文及び墨書き石の読みは、別に掲げたとおりである。觀無量寿経は、その終わりの部分で、「この経を、極楽国土と無量寿仏、觀世音菩薩・大勢至菩薩を觀する（経）と名づけ、また、業障を淨め除いて諸仏の前に生まるる（経）と名づく」というものであり、中世における武士階級の信仰にも添うものと考えられる。墨書き石2点は第44号溝の拡張部分からの出土であり、基壇状造構構築の際の鎮壇に使用された可能性もある。



第102図 墨書き石と鉄製品



爾時世尊、足歩虚空、還耆闍崛山。
 無量諸天、及龍夜叉、聞佛所說、
 皆大歡喜、禮佛而退。
 佛說歡無量壽經。

(耆闍崛山における阿難の復説)

その時、世尊、足、虚空を歩みて、耆闍崛山に廻りたもう。その時阿難、「この山において」広く大衆のために、如上の事を説けり。無量の諸天および龍・夜叉・仏の所説を開きて、みな、大いに歡喜し、仏を礼して退きぬ。仏の説きたまひし歡無量壽經。

大衆說如上事無量
 欽喜佛所說諸天龍夜叉聞

鉄製品

基壇状造構の周辺から2点鉄製品が出土している。第102図3は、刀子である。全長16.8cmである。関は両開で、刀部・鍊部とともに関がつく。茎は比較的長く、目釘孔は認められなかつた。遺存状態は良い方であるが、刀部は、剥離し、一部欠損している。4は、形態としては釘状の製品である。遺存状態は非常に良いもので、先端は細く尖っている。上部は、鉄板を重ねているのがよく観察され、ねじられている。未使用の釘あるいは、錐状の工具の可能性が考えられる。全長13.8cm、最大幅0.6cmであり、釘とするにはやや大型品である。

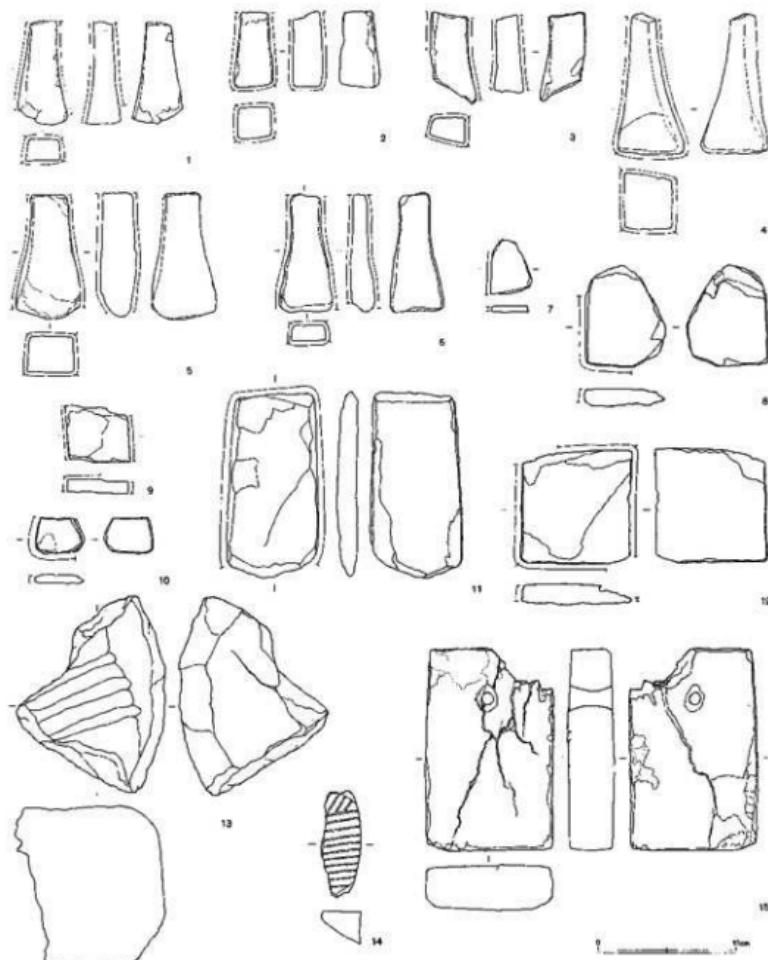
石製品

中世陶器とともに多くの石製品が出土している。砥石・石臼・温石・板磚等である。出土位置は、第106図・107図に示した。図中のNoは、挿図中の遺物番号である。また重量等は、表22に示したところである。

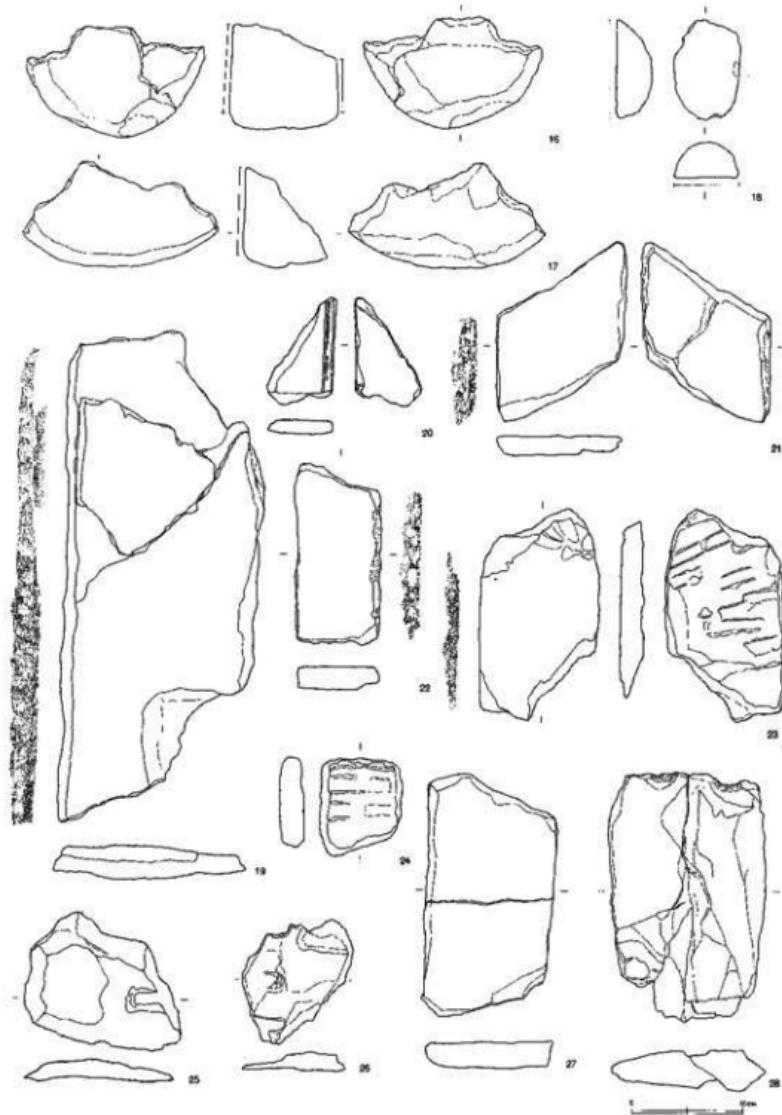
第103図の1～6は砥石である。1～5は、粘板岩あるいは凝灰岩系のきめの細かいものであるが、6は片岩系の石材で他と異なる。あるいは、7～12のような、擦り痕のある石と同様の使用のしかたをしたものである可能性もある。

7～12は、板状の石材の側面を擦っているものである。7～9・12は、それ自体側面をきれいに擦り面取りした石製品の一部が剥離したものである可能性も否定しきれないが、擦り面が角の部分

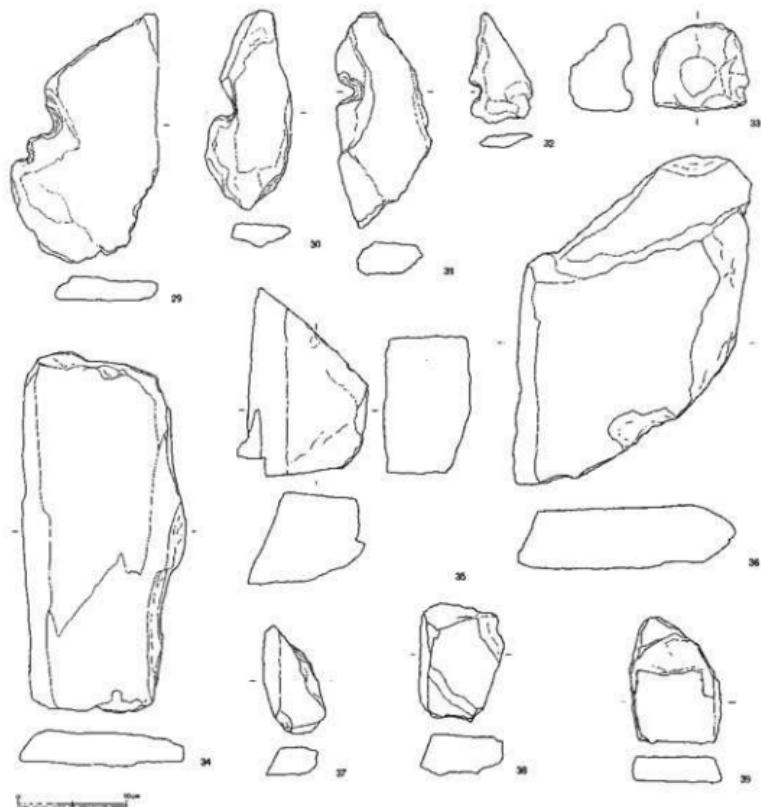
でやや丸くなつており、石片を擦る道具として使用した可能性が大きいものと考えられる。7は、小さな石片の側面を擦っているもので、擦り面はほぼ直線的である。8は、やや厚めの石板の2側面を擦っているものである。9は、長方形の石板の両側面と平坦面の一部をきれいに面とりしており、あるいは、硯の一部かとも思われるが、加工面が少なく、他は剥離しており、残っている加工面には、磯・海の部分は認められない。10は、7同様小さな石片の2側面を擦っているものである。



第103図 石製品(1)



第104図 石製品(2)



第105図 石製品(3)

11は、一見扁平片刃磨製石斧の形態を呈するものである。両側面をきれいに面取りしており、刃部に相当する部分も擦っているが、上端・下端ともに刀部状に擦られ、しかも、両刃風に、表裏両面から斜めに擦っている。あるいは、扁平片刃磨製石斧を後世転用したものである可能性もある。12は、ほぼ正方形で厚さ1.5cm程の石板の4側面のほとんどを擦っている。

13・14は石臼の破片である。13は、大型品であり目もあらい。14は、小型品で、目も細かく、茶臼と思われる。15は、温石である。14.5cm×9.4cm×厚さ3.4cmで重量は860gを測る。上部に孔が両側からあけられている。全体に熱を受けており、ひび割れが入っている。温石としては大型品である。また、石鍋などの破片を転用したものではなく、当初から温石として製作されたものと思われる。

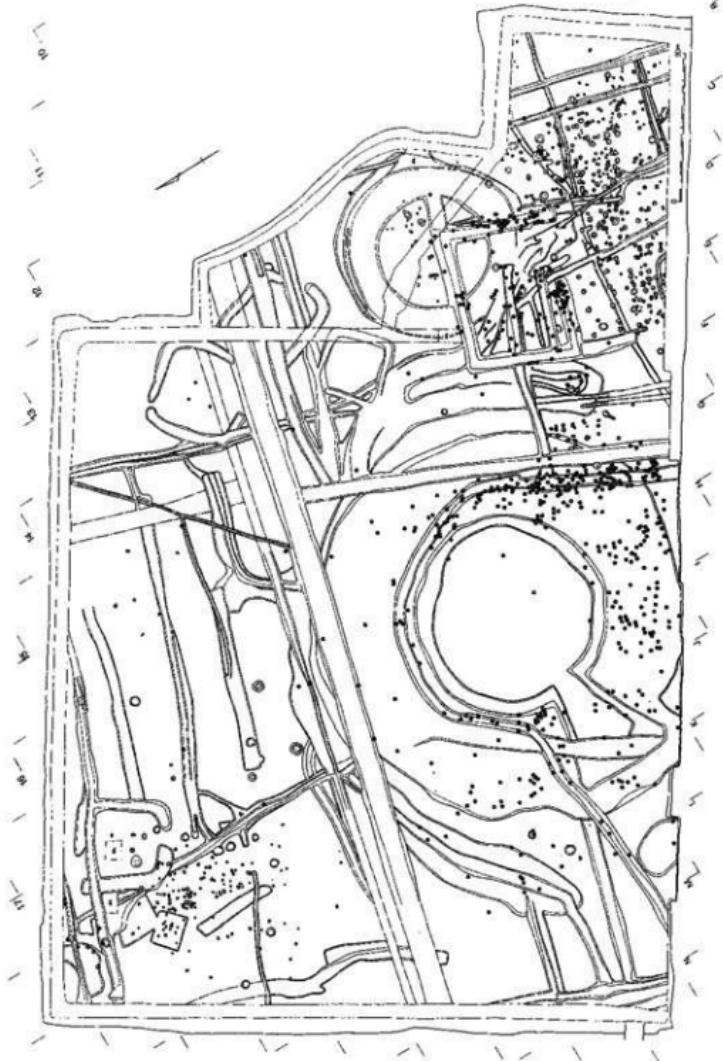
第22表 石製品重量表

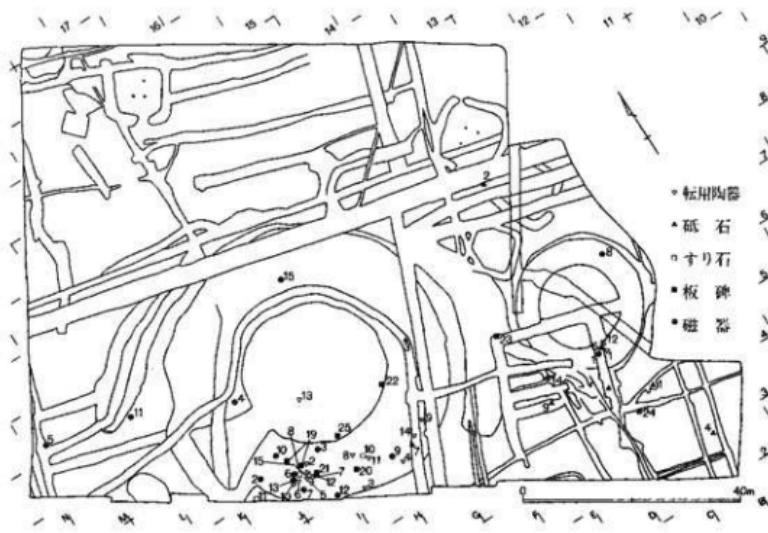
番号	器種	重さ(g)	注No.	測No.	番号	器種	重さ(g)	注No.	測No.
1	砥石	60	B-4・10	931	20	板碑	100	H-6・179	922
2	砥石	50	C-9・9	928	21	板碑	460	I-6・1220	918
3	砥石	50	F-7・541	933	22	板碑	520	G-7・439	901
4	砥石	190	B-2・1	765	23	板碑	790	D-7・24	904
5	砥石	160	C-4・18	932	24	板碑	260	C-4・29	905
6	砥石	70	C-5・291	930	25	板碑	410	H-7・76	919
7	擦り痕のある石	10	G-6・778	934	26	板碑	190	I-6・668	920
8	擦り痕のある石	90	I-6・498	925	27	板碑	1210	I-7・1880	916
9	擦り痕のある石	30	D-5・126	928	28	抉り込のある石	1700	C-6・54	907
10	擦り痕のある石	10	H-6・451	926	29	抉り込のある石	910	G-7・438	902
11	擦り痕のある石	250	J-6・85	923	30	抉り込のある石	360	F-10・1	913
12	擦り痕のある石	160	C-5・8	924	31	抉り込のある石	700	C-6・4	903
13	臼臼	1800	E-4・1	935	32	抉り込のある石	80	I-6・533	921
14	臼臼	50	E-4・表採	914	33	抉り込のある石	290	G-7・417	942
15	温石	860	C-6・13	943	34	平坦面のある石材	2300	I-6・1692	917
16	擦り面のある石	760	B-5・11	937	35	平坦面のある石材	2060	H-9・116	908
17	擦り面のある石	440	B-5・11	937	36	平坦面のある石材	4940	G-7・368	906
18	擦り面のある石	90	J-7・1117	940	37	平坦面のある石材	190	F-6・178	911
19	板碑	3710	I-7・980	915	38	平坦面のある石材	400	F-9・206	910
			I-6・1159		39	平坦面のある石材	400	E-9・19	909

第104図の16~18は、浮石質の角閃石安山岩の二面あるいは一面を平坦に擦っているものである。古墳に使用されていた石材を何らかの理由で使用しているものと考えられるが、使用目的は不明である。16は、側面に丸い自然面を残す石材の上面と下面を擦っている。17は、やはり丸みを帯びた自然面を側面に残すもので、平坦面を擦っている。他の一面は欠損していて不明である。16と17は、B-5 Gridからの出土で出土位置もほぼ同じである。同一個体とは思えないが、同時に投棄された可能性がある。18は、長円形の縁を半分にしたような形をしている。平坦な面は擦られており、16・17と組み合わせて使用されたものと考えられる。縄文時代にみられる石皿と擦り石のように相対応するものと見られる。ただ石材が非常に軟らかいものであり、固いものを叩き割ることには不向きと思われ、軟らかいものを擦る道具として使用された可能性が考えられる。

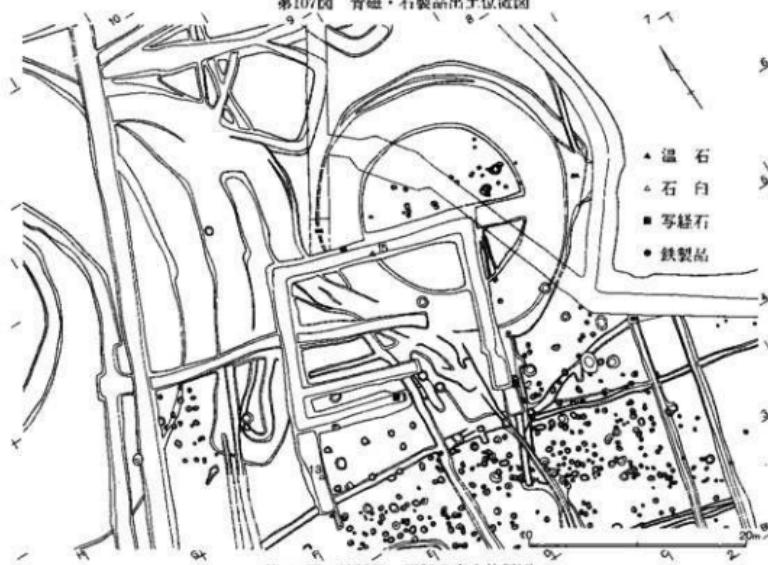
19~28は、板碑の破片と考えられるものである。すべて緑泥片岩の板状の破片である。19は、大型の板状の石材の側面を加工して面を取っている。2片に分かれて出土しており、I-7・I-6 Gridの第1号墳周囲覆土中から出土した。小片の方は火を受けている。20は小片であるが平坦面の側面側に、側面と平行して、細い沈線が刻まれており、板碑の界線と思われる。21は、側面に加工痕があり、上面は平坦である。22も21同様側面を加工して面取りしている。やはり上面は平坦である。23は、裏面と側面に加工痕がある。上面は平坦であり、上端に蓮台の一部が刻まれており、明らかに板碑の一部である。裏面の加工痕は幅1cm弱の工具により加工されたものと思われる。24~26は、板状の石材に23の裏面同様の加工痕が認められるものである。板碑の一部か、板碑を製作する過程で生じた剥片と思われる。27は、側面を加工し上面・下面を平坦に仕上げている。全体にす

第106圖 中地陶器片出土位置圖



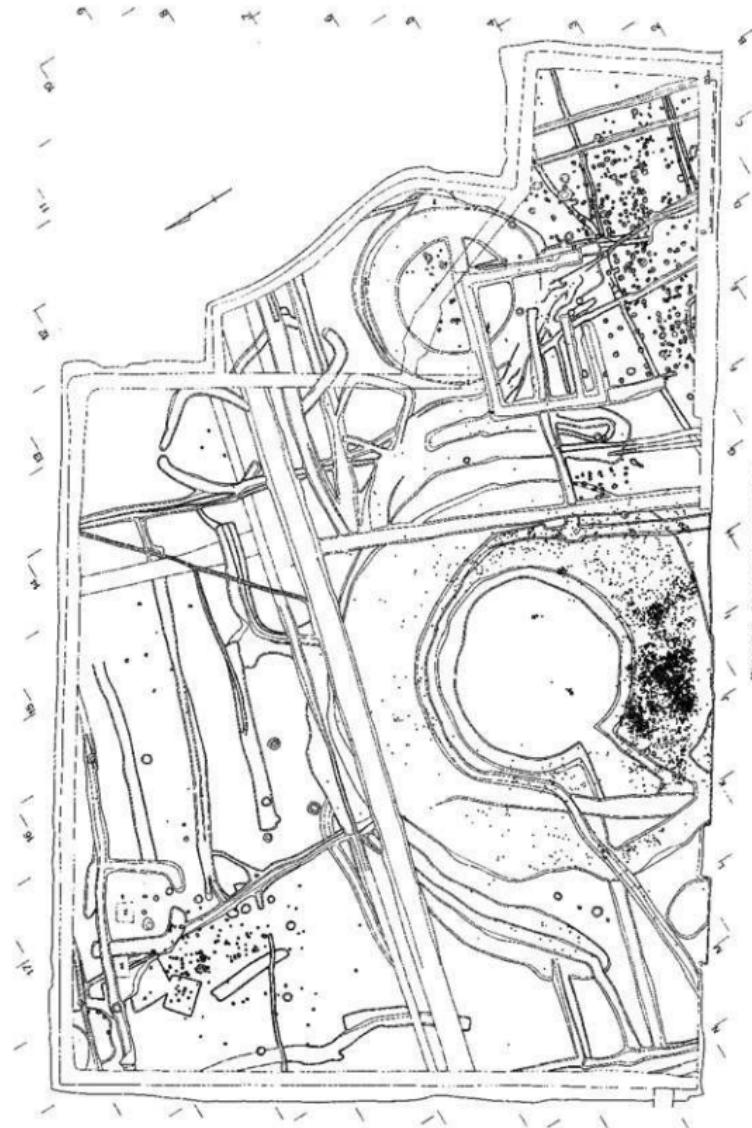


第107図 青磁・石製品出土位置図



第108図 鉄製品・石製品出土位置図

圖109
綠泥片岩出土位置圖



第23表 緑泥片岩重量分布表

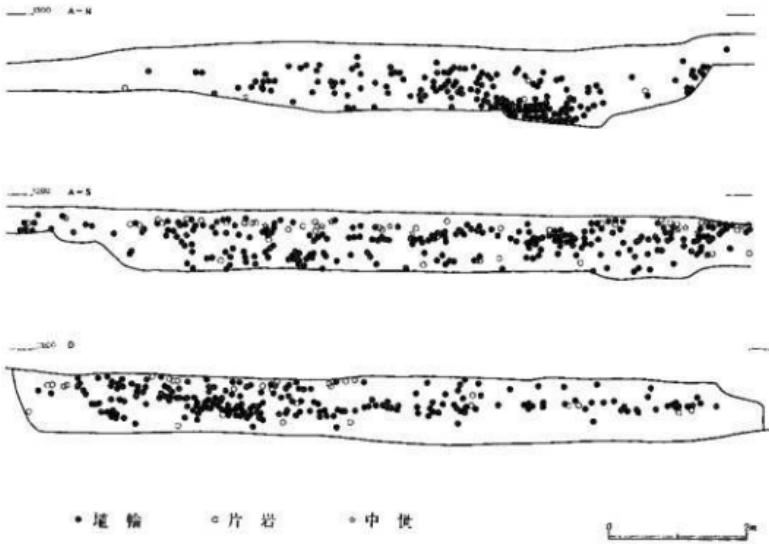
Grid	Grid	個数	総重量	Grid	Grid	個数	総重量	Grid	Grid	個数	総重量	Grid	Grid	個数	総重量
A-6	8	1	105	D-6	7	2	40	F-7	7	26	2555	G-7	7	1	10
	9	1	65		D-7	5	1	140	8	12	895	8	1	10	
B-4	2	2	670		7	8	990	F-8	9	3	500	G-8	4	8	265
	5	1	130		8	3	620		2	2	270		G-9	1	1
B-5	7	2	400	D-8	9	1	40		3	6	165	G-10	6	6	420
	8	1	50		3	1	5		4	15	795		9	2	25
B-5	9	1	40	D-9	4	2	295	F-9	5	20	1792	G-10	1	1	50
B-7	1	1	1000		5	3	20		6	7	510	G-11	3	1	100
	2	1	90		7	1	200		7	1	10		4	5	270
B-6	8	1	80	D-9	4	1	10	F-9	8	2	320	G-11	5	1	160
B-8	9	1	80		7	2	705		9	5	360		6	1	120
C-3	6	2	500		9	2	370		1	2	30		7	3	390
C-4	1	1	265	D-12	9	1	140		3	2	90		8	9	1104
	2	2	35	E-5	8	1	10		4	1	28	G-11	4	1	245
C-5	5	2	605		9	1	110		5	1	40		7	1	110
	6	1	15	E-6	1	1	50		6	1	20	G-12	2	1	10
C-5	8	2	70		2	1	110		7	3	300	G-13	2	1	10
	1	5	630		3	2	30		8	4	840		3	1	820
C-6	2	3	1040		4	2	45		9	1	10	G-14	1	1	20
	3	3	730		5	3	150	F-10	1	1	380	G-15	5	1	130
C-6	4	2	125		7	1	25		6	1	170		8	1	50
	5	2	70		8	1	10	F-13	1	1	60	H-5	3	30	521
C-7	7	2	95	E-7	9	1	100	F-14	6	1	480		6	35	640
	8	5	310	E-8	9	3	770	G-5	1	1	100	H-6	1	25	348
C-6	9	4	420	E-9	1	2	550		2	4	650		2	18	859
	2	3	2860		4	1	760		3	3	1020		3	37	1075
C-7	7	2	260		6	1	280		5	26	1880		4	68	2903
	3	1	25		7	1	570		6	17	1120		5	121	2833
C-9	4	1	45	E-10	1	1	50		8	3	595		6	30	2716
	6	1	10		2	1	70		9	15	190		7	29	5081
C-10	6	1	350		3	1	130	G-6	1	16	965		8	62	1493
	9	1	165	F-5	2	1	70		2	9	618		9	58	923
D-4	2	1	10		6	1	450		3	13	455	H-7	1	3	15
	5	1	100		9	3	300		4	15	630		4	10	1015
D-5	2	3	230	F-6	2	2	60		5	12	215		7	30	601
	3	3	75		3	2	50		6	19	1655		8	1	5
D-5	5	2	90		6	2	250		7	14	725	H-8	4	1	100
	6	3	118		7	5	600		8	15	450		7	12	970
D-6	8	1	190		8	15	1225		9	20	405	H-9	3	1	220
	9	1	30		9	20	1435	G-7	1	10	1445		6	1	185
D-6	2	1	90	F-7	1	1	140		2	17	4668		9	1	2150
	3	1	15		3	5	720		3	1	13	H-10	1	10	1488
D-6	4	1	65		4	4	180		4	5	5090		2	3	70
	5	2	85		5	20	1335		5	2	10		3	2	230
D-6	6	2	130		6	30	1495		6	1	20		4	4	260

Grid	小Grid	個数	総重量	Grid	小Grid	個数	総重量	Grid	小Grid	個数	総重量	Grid	小Grid	個数	総重量	
H-10	6	1	190	I-8	7	8	120	J-8	5	43	1314	K-9	2	18	1055	
	7	2	100		9	37	1080		6	9	123		3	13	620	
	8	1	30		4	1	20		7	4	210		4	1	40	
H-11	3	1	350	J-9	5	1	15	K-9	8	14	132		6	2	50	
	4	1	300		6	6	843		9	4	948		9	2	50	
	6	1	25		7	3	153		1	2	20		1	1	334	
	7	1	50		8	6	37		2	3	118		2	1	60	
	9	1	30		9	9	1779		3	6	507		3	1	132	
	1	10	2452		1	2	70		4	3	4839		6	1	40	
I-6	2	155	6288	J-9	2	2	195	K-10	5	1	20		9	6	435	
	3	221	7337		3	1	60		6	2	450		2	1	289	
	4	4	147		4	2	30		9	6	643		3	2	330	
	5	71	1096		5	4	81		1	4	363		4	5	463	
	6	212	6401		7	7	2577		2	1	30		5	1	81	
	7	4	475		9	4	160		3	2	187		7	2	49	
	8	9	1276		3	1	25		4	2	153		8	1	25	
	9	220	6032		4	3	46		5	7	1049		K-11	1	1	51
	4	1	115		5	2	51		6	3	53		L-7	3	1	330
H-14	8	1	35		7	1	50		7	5	255		L-8	3	1	355
	3	1	270	J-10	1	2	115		8	9	455		9	1	12	
	6	1	55		2	1	30		9	4	303		L-9	3	1	75
H-16	7	1	55		3	18	759		1	3	150		L-10	1	2	105
	1	114	4306.5		6	7	520		2	1	30		2	1	40	
	2	10	505		9	1	15		5	2	15		M-10	6	2	344
I-7	4	97	3313	J-7	1	54	1989		6	1	40		7	2	124	
	5	133	7486		2	41	4344		7	1	5					
	6	25	604		3	24	551		K-7	3	1	18				
	7	59	4448		4	42	1466		K-8	1	19	985				

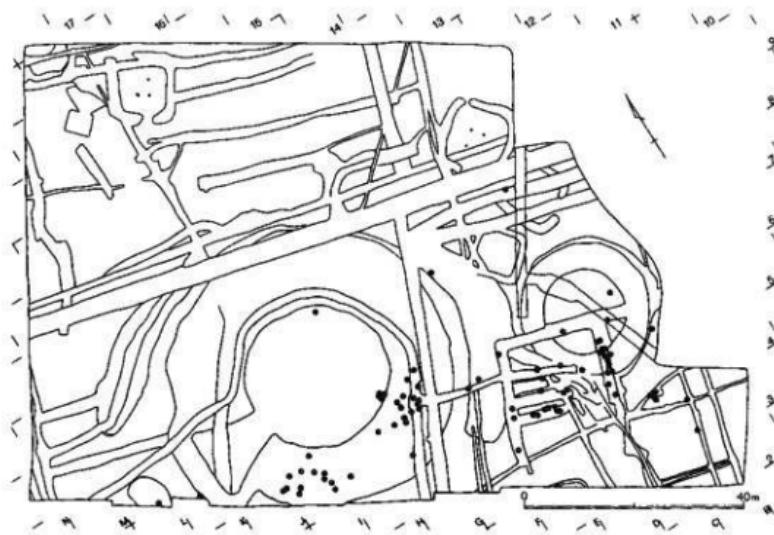
すが付着している。

28と第105図29~32は、石片の一部に抉り込みのつけられた破片である。28は3片に割れている。接合すると上端に左右2箇所の抉り込みが確認できる。抉り込みはやや浅い。29は板状の石片の側面ほぼ中央に2箇所抉り込みが認められる。30も側面ほぼ中央に抉り込みがみられる。31はやや方側に寄った位置に抉りが入る。32は小片であるが側面に抉りが認められる。28~32はいずれも緑泥片岩の破片である。道具として使用するために石片の一部を抉ったとは考えにくく、道具として使用した結果抉りが生じたとも考えられる。

33は、浮石質の角閃石安山岩である。形態としては、半分にした碟の半坦面に、半球状の窪みをつけたものである。窪みは擦れおり、小片ではあるが、何かの軸受けとして利用されたものである可能性が考えられる。34~39は、平坦な面を複数有する石材である。すべて緑泥片岩である。古墳の石室材である可能性もある。また石室材を、再加工し、緑泥片岩の石製品を作る原材料としたものである可能性も考えられる。



第110図 遺物垂直分布図



第111図 角閃石出土位置図

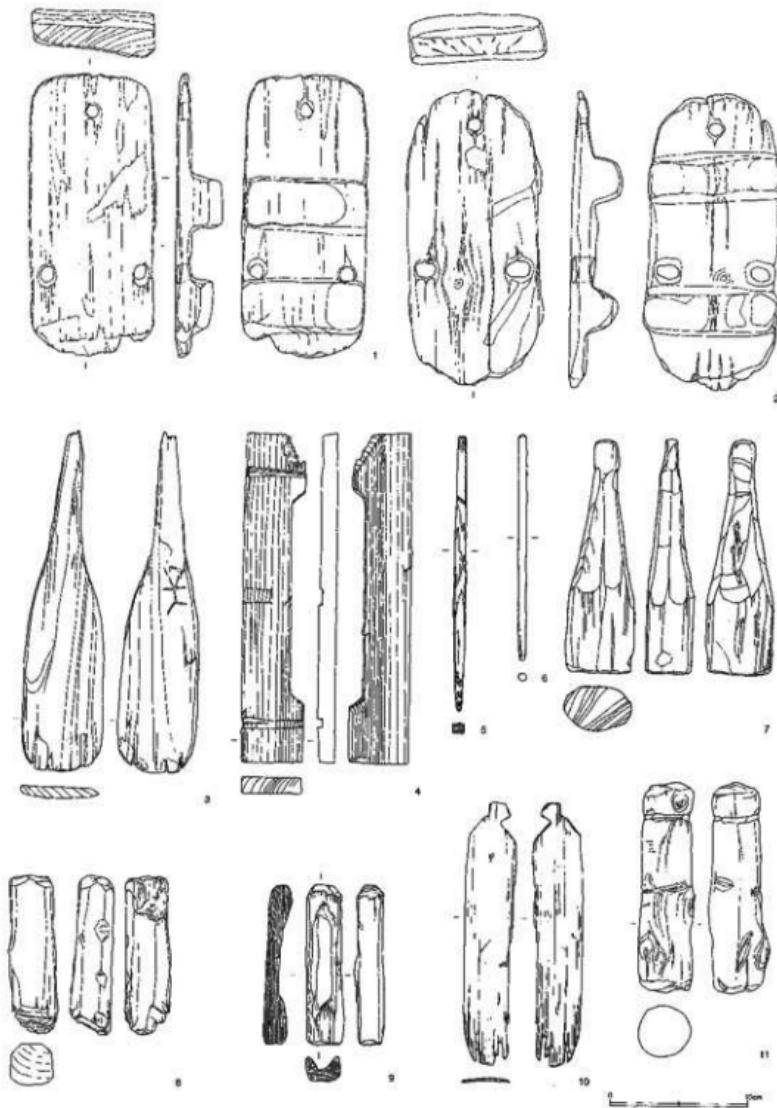
この他にも緑泥片岩は多数出土しており、その総数は約3200片に及ぶ。その大半が小片である。第109図に緑泥片岩の出土位置を示した。また表23は、緑泥片岩の出土個数と重量を、3 m × 3 m の小Gridごとに表わしたものである。小GridはGridを9つに分け、南東隅を1として順次北側に番号をふり、南西隅が7、北西隅が9となる。表中の重量は、小Gridごとの緑泥片岩の総重量を表わす。緑泥片岩は、第1号墳の周堀、第2号墳の周堀、中世の溝・井戸から出土しているが、特に第1号墳の内堀南側に集中している。第110図は、第1号墳周堀での遺物垂直分布図である。黒丸は埴輪片、白丸が緑泥片岩片、星印は中世陶器片である。垂直分布は、第1号墳の土層断面図の位置と合わせて作成した。垂直分布図を見ると、緑泥片岩片は、全体に認められるものの周堀上層に多く、中世陶器を包含する部分から出土している。従って、分布の中心は第1号墳の周堀覆土であるが、投棄されたのは、中世の時期が最も多いものと判断される。

第111図は、角閃石の分布図である。角閃石の場合も緑泥片岩と同様に、第1号墳内堀に集中が見られるほか、基壇状遺構周囲の第44号溝からの出土が多い。緑泥片岩と角閃石は、古墳の石棺あるいは石室材として使用されていたのは確実であるが、中世の時期に、それらの一部が転用されたり、細かな破片とされ、投棄されたことも確実である。

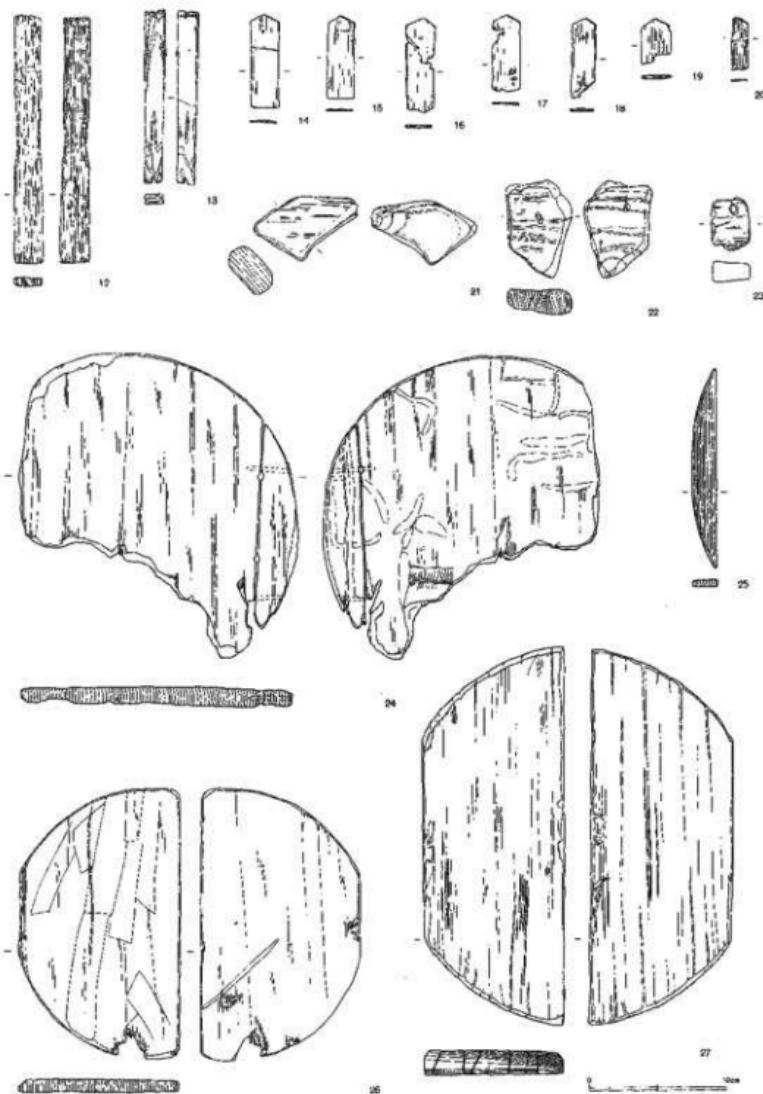
木製品

小沼耕地遺跡は、水田下に埋没していた遺跡であるため、木製品の遺存が良く、第44号・26号溝を初めとして、溝・井戸・上層から木製品が出土している。時期は中世以後と思われる。出土位置及び樹種は、第24表に示したとおりである。

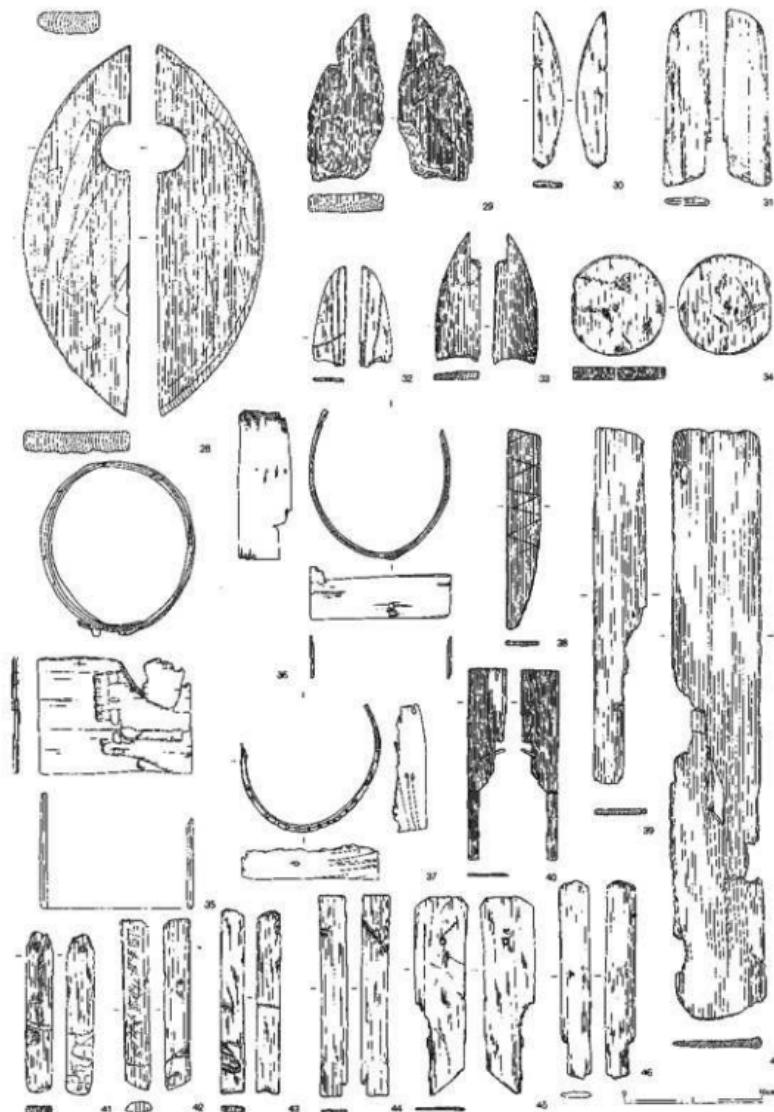
第112図の1は下駄である。第1号墳内堀覆土上層から出土したが、この部分では、確認面で第24号溝の一部が認められており、第24号溝の遺物である可能性もある。時期は中世あるいは近世である。形状は、隅丸の長方形で、歯は2枚で削り出しによるものである。2は、第14号井戸から出土した下駄である。形状は長方形である。歯は2枚で削り出しによる。中世の遺物である。3は杓子状の形をしたものである。側面を削り、一方を細くしている。片面に線刻が認められる。4は、コの字形をした板状の加工材である。片面は割れており、両端近くに木釘を刺した溝があり、一方は木釘が残されていた。中央にも、ほぞ穴状の削り込みがある。木釘の先端以下は欠損している。形・用途とともに不明である。第1号墳周堀覆土上層からの出土であるが、1同様、第24号溝の遺物である可能性があり、時期は中世か近世のいずれか定め難い。5と6は、第44号溝から出土した。5は、細い棒状の製品で、先端が細くなっている。断面は四角形である。6は、断面円形の製品で、やはり先端で細くなる。箸と考えられる。7は、小型の砧状の製品である。一方を削り、柄の部分をしている。断面形は長円形である。側面は叩いた形跡は無く、むしろ下面を使用しているものと思われる。第1号墳周堀覆土上層から出土したもので、中世の遺物である。8は、断面四角形にしたものの隅を、さらに削り面取りした棒状の製品である。下端は欠損しているが、上端は削り面取りしている。第44号溝から出土した。9は、両端を削った断面長方形の棒の一面を、抉っているものである。H-15Gridから出土したもので、時期不明である。10は、薄い板状の製品である。一端は両側面から三角形の切り込みが入れられ、他の一端は、丸く削られている。機織り具の部品の可能性が考えられる。第44号溝から出土した。11は、断面円形の棒の両端を切ったもので、片方の端部近



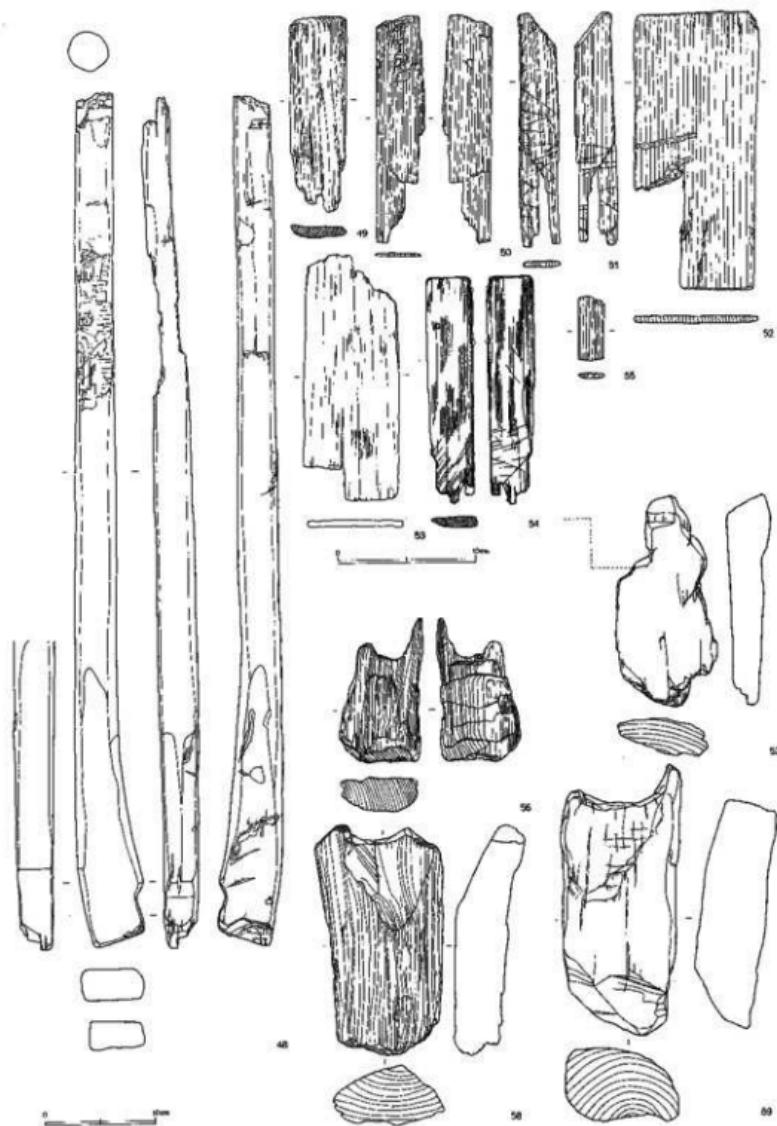
第112図 木製品(1)



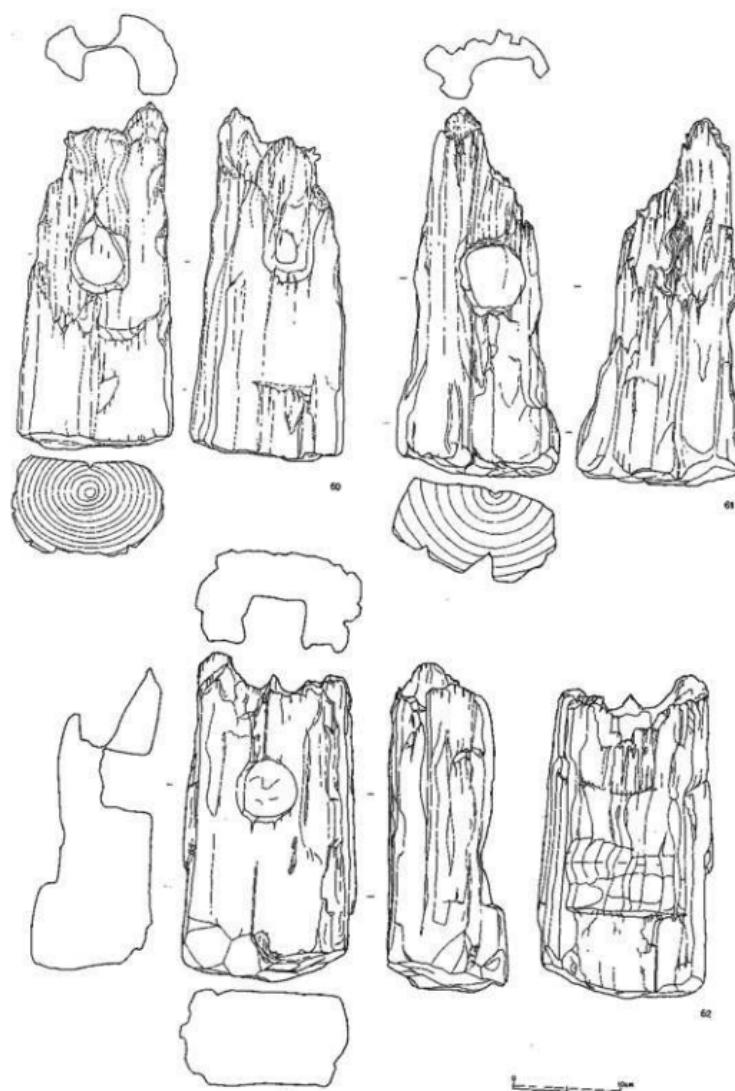
第113図 木製品(2)



第114図 木製品(3)



第115図 木製品(4)



第116図 木製品(5)

第24表 木製品一覧表(1)

No	形 状	出 土 位 置	出 土 遺 構	No	樹 種	サンプル No	本 取 り	備 考
1	下駄	F-10 №2	S S01周縁	1012	ネズコ	SOFK-29	割り出し	
2	下駄	B-2 №2	S E14	1028	クリ	SOFK-61	割り出し	
3	しゃもじ状	SD44 5区	S D44	1002	スギ	SOFK-23	斜め	
4	加工材	G-10 №420	S S01周縁	1029	ヒノキ	SOFK-36	斜め	木釘付き
5	はし状	D-6 №8	S D44	1007	スギ	SOFK-27	割り材	
6	はし	E-6 №39	S D44	1027	散孔材	SOFK-32	割り出し	
7	きぬた状	G-6 №2	S S01周縁	1006	コナラ節	SOFK-24	割り出し	
8	棒	D-6 №30	S D44	1023	モモ	SOFK-48	丸木	
9	棒	H-15 №32		1020		SOFK-55	薄い削材	中央えぐり
10	木箇状	SD44 5区	S D44	1003	ヒノキ	SOFK-43	柾目	
11	木垂	D-6 №38	S D44	1022	ヤマグワ	SOFK-42	丸木	八人ぼうず
12	板	G-6 №1107	S D26	1011	スギ	SOFK-28	柾目	中央割り有り
13	板	G-6 №1	S S01周縁	1018	スギ	SOFK-54	削材	両端に釘穴?
14	木箇状	F-7	S D26	1036	ヒノキ	SOFK-51	柾目	
15	木箇状	SD44 4区	S D44	1035	ヒノキ	SOFK-19	柾目	
16	木箇状	F-7	S D26	1038	モミ属	SGFK-9	柾目	
17	木箇状	F-7	S D26	1039	ヒノキ属	SOFK-20	柾目	
18	木箇状	F-7	S D26	1037	ヒノキ	SOFK-53	柾目	
19	木箇状	F-7	S D26	1041	モミ属	SOFK-10	柾目	
20	木箇状	F-7	S D26	1040	ヒノキ属	SOFK-33	柾目	
21	加工材			1174	アカシシ亞属	SOFK-4	柾目	農具の破片
22	加工材	E-6 №29	S D44	1025	ケヤキ	SOFK-45	柾目	農具の破片
23	加工材	E-6 №29	S D44	1024	ケヤキ	SOFK-41		穴有り
24	蓋	C-5 №80	S D44	1001	ヒノキ	SOFK-62	柾目	
25	曲物の底板	SD44 4区	S D44	1034	スギ	SOFK-21	柾目	
26	蓋	F-8 №936	S S01周縁	1013	ヒノキ属	SOFK-25	柾目	
27	蓋	C-9 №12	S D07	1005	ツガ属	SOFK-26	板目	うるし
28	蓋	C-9 №12	S D07	1004	ネズコ	SOFK-30	柾目	近世以後?
29	蓋	D-5 №19	S D44	1008	スギ	SOFK-11	柾目	穴あり
30	曲物の底板	H-8 №15	S E06	1026	ヒノキ	SOFK-47	柾目	うるし
31	曲物の底板	C-5 №40		1021	スギ	SOFK-56	板目	
32	曲物の底板	D-5 №19	S D44	1010	ヒノキ	SOFK-58	板目	
33	曲物の底板	D-5 №19	S D44	1009	スギ	SOFK-44	柾目	
34	曲物の底板	G-8 №16	S E07	1016	ヒノキ属	SOFK-60	柾目	
35	曲物側板	F-7	S D26	1042	ヒノキ	SOFK-46	柾目	
36	曲物側板	SD44 2区	S D44	1033	ヒノキ	SOFK-15	柾目	
37	曲物側板	D-6 №27	S D44	1019	ヒノキ	SOFK-34	柾目	
38	曲物側板	H-10 №578	S D26	1047	スギ	SOFK-49	柾目	
39	曲物側板	D-6 №121	S D29	1050	スギ	SOFK-39	柾目	
40	曲物側板	C-6 №25	S D44	1017	スギ	SOFK-52	柾目	木釘付き
41	板	SD44 2区	S D44	1032	ヒノキ属	SOFK-31	柾目	燃え残り
42	板	H-10 №773	S D26	1048	ケヤキ	SOFK-57	うるし	
43	板	C-4 №19	S D44	1044	ヒノキ	SOFK-15	柾目	
44	板	C-4 №31	S D36	1046	ヒノキ	SOFK-18	柾目	

No.	形 状	出 土 位 置	出 土 造 構	No.	樹 種	サンプルNo.	木 取 り	備 考
45	木篭状	F-7 №1	SD26	1014	ヒノキ	SOFK-12	柾目	穴あき
46	板	E-5 №42	SD44	1045	ヒノキ	SOFK-50	柾目	
47	曲物側板	K-9 №36	S K20	1057	ヒノキ属	SOFK-8	柾目	曲物
48	枠	D-5		1121	アカガシ属	SOFK-66	削り出し	農具の柄
49	板	D-8		1143	スギ	SOFK-5	斜め	近世以後?
50	板	D-6 №37	SD44	1015	ヒノキ	SOFK-13	柾目	穴あき
51	板	第1トレンチ東		1067	ヒノキ	SOFK-7	柾目	1068と同一個体?
52	板	C-9 №12	SD07	1051	モミ属	SOFK-38	斜め	近世以後
53	板	D-6 №140	SD29	1053	スギ	SOFK-14	板目	
54	板	第1トレンチ東		1068	ヒノキ	SOFK-6	柾目	1067と同一個体?
55	板	H-10 №773	SD26	1049	ケヤキ	SOFK-59	柾目	
56	加工材	H-10 №774	SD26	1113		SOFK		破片
57	加工材	B-3 №14		1136	クリ	SOFK-1	調材	破片
58	加工材	C-4 №56	SD34	1062	ヌルテ	SOFK-3	調材	
59	建築材	C-3 №15		1170	クリ	SOFK-91		燃えている
60	建築材	C-3 №12	SD36	1031	クリ	SOFK-64	丸木	ほぞ穴つき
61	建築材	C-4 №58	SD36	1030	クリ	SOFK-63	半割	ほぞ穴つき
62	建築材	C-3 №16		1106	クリ	SOFK-65	丸木	ほぞ穴つき

第23表 木製品一覧表(2) 磁板・柱・杭

断面形 △ A △ B □ C ○ D □ E ○ F

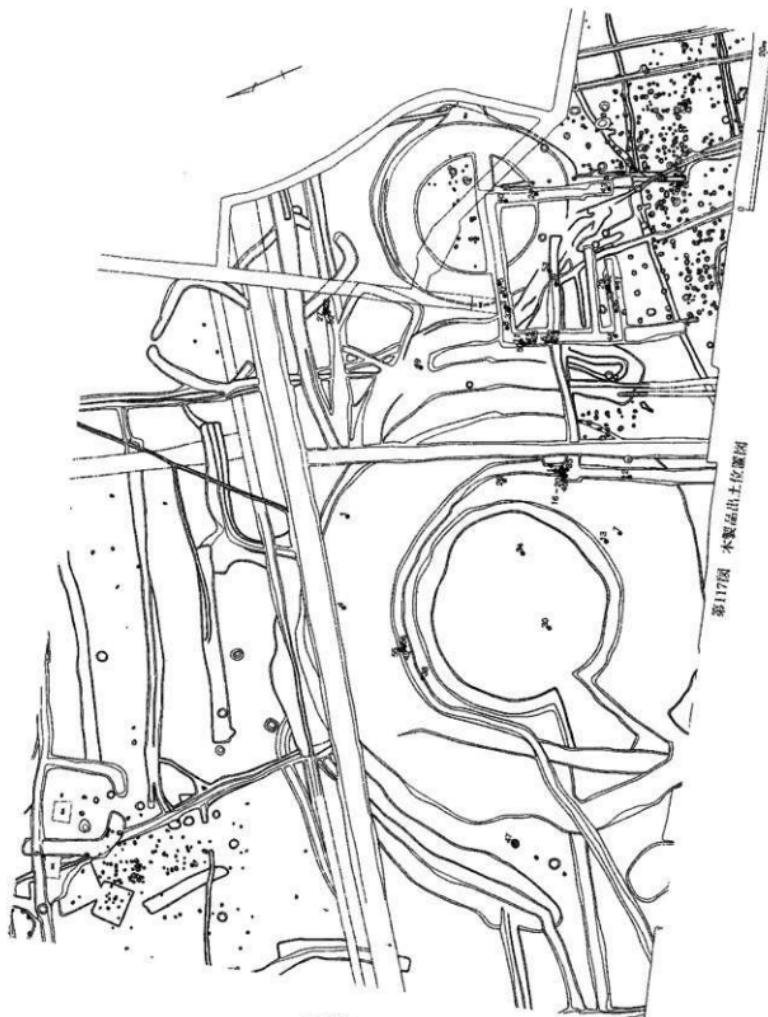
No.	形 状	出 土 位 置	法 量	No.	樹 種	サンプルNo.	断面	備 考
1	磁板	C-4 №51	32.5×12.0 φ12円周19	1165	クリ	SOFK-79	A	割材、両端に切口
2	磁板	C-4 №51	46.0×12 円周16.5	1151	クリ	SOFK-80	A	燃え痕有り
3	磁板		53×21.5×14	1159	ヤナギ属	SOFK-75	C	釘穴有り
4	磁板	C-4 №52	46.5×19×6 円周23.5	1103	クリ	SOFK-84		樹皮付き
5	磁板	D-4 №7	51 円周27.0	1158	クリ	SOFK-77	A	燃え痕加工痕有り
6	磁板	D-4 №18	43×15×0.6 円周21.0	1107	クリ	SOFK-70		割材両端加工痕有り
7	磁板	D-4 №17	36×16.5×9.5 円周23.0	1108	ヤナギ属	SOFK-72		割材両端切口有り
8	磁板	C-3 №11	51.5×24.5×70半周27.0	1090	クリ	SOFK-86	A	樹皮付き両端に切口
9	磁板	C-3 №8	48.0 円周30.5	1154	クリ	SOFK-78	A	両端に加工痕有り
10	磁板	C-3 №8	41×16×4.5	1155	クリ	SOFK-82	B	樹皮付き側面に削り
11	磁板	C-4 №25	52×21×10	1152	クリ	SOFK-74	B	樹皮付、両端に切口
12	磁板	C-4 №21	42×20×11	1105	クリ	SOFK-71		樹皮付、両端に切口
13	磁板	C-4 №23	66.0×18.5×12.5	1150	ヤナギ属	SOFK-87	C	釘穴有り四面加工
14	磁板		54×24×8	1164	クリクリ	SOFK-76	B	樹皮付割材両端加工
15	磁板		50 円周28.0	1153	クリ	SOFK-85	A	樹皮付燃え痕有り
16	磁板	D-4 №16	43×24 半周45.0	1094	クリ	SOFK-81		片方切口有り
17	磁板	C-4 №54	41×21.5×9.0	1089	ヤナギ属	SOFK-73		
18	磁板	C-4 №55	38.5×22.0×7.0	1088	クリ	SOFK-83		同一個体の破片14個
19	磁板	C-4 №54	24×16.5×21	1177	クリ	SOFK-68	B	割材上面加工痕

No	形 状	出 土 位 置	法 量	No	樹 種	サンプル材	断面	備 考
20	礎板	C-3 №8	27.5×26×5.5	1156	スギ	SOFK- 69		削材三角形に加工痕
21	礎板	D-4 №11	19×13×11.5	1178	クリ	SOFK-101	C	下端加工痕有り
22	柱	I-13 №1	51.0×11.0	1160	クリ	SOFK-107	D	燃え痕、下端に切入
23	柱	C-3 №6	41.0×14.0×11.5	1162	クリ	SOFK-108	E	燃え痕、下端に切入
24	柱	C-3 7-1	39.0×14.5	1166	クリ	SOFK-106	F	燃え痕、下端に切入
25	柱	D-4 №15	44.0×15.0	1167	クリ	SOFK-111	D	燃え痕、下端に切入
26	柱	C-3 №15	43.0×9.0	1169	クリ	SOFK-109	D	燃え痕、下端に切入
27	柱	C-3 №11	10.0×13.5	1095	クリ	SOFK-114	F	燃え痕、切口有り
28	柱	C-3 14-1	30.0×13.5×12	1163	クリ	SOFK-112	E	削材4、斜めに切口
29	柱	C-3 №9	26.0×7.0	1179	ヤナギ属	SOFK-100	D	樹皮付き下端を加工
30	柱	D-4 №26	24.0×9.0×15.0	1097	クリ	SOFK-102		切口有り、破片
31	柱	C-3 7-1	39.0×14.5	1161	クリ	SOFK-113	F	燃え痕、下端に切入
32	柱	B-3 №12	40.0×10.0	1168	クリ	SOFK-110	D	燃え痕、下端に切入
33	柱	C-3 7-2	39.0×28.0	1065	クリ	SOFK-104	F	端部斜めに加工
34	柱	B-3	26.0	1060	クリ	SOFK-103	D	燃え痕、下端に切入
35	柱	G-6 №4	19.0×15.0×4.5	1180	エノキ属	SOFK- 67	A	樹皮付
36	加工材	C-4 №44	22.0×5.5×3.5	1083	クリ	SOFK-999		下端に加工痕有り
37	柱	C-3 №11	10.0×13.5	1091	クリ	SOFK-105	A	燃え痕切口有り
38	加工材	I-14 №1	8.0×5.0×4.0	1115	クリ	SOFK- 97		破片4、柱か杭?
39	柱	D-4 №13	6.0×垂径12.0	1133	クリ	SOFK- 98		燃え痕加工痕破片4
40	棒	E-6 №39	23.5	1059	ブナ属	SOFK- 96	D	杭か?
41	杭	C-4 №13	13.0×3.0	1129	ヌルデ	SOFK- 94		斜めの切口有り
42	加工材	C-4 №56	18.0×9.5×4.5	1064	ヌルデ	SOFK- 90		加工痕有り
43	建築材	C-4 №56	22.5×6.0×4.0	1063	クリ	SOFK- 89		両端に加工痕有り
44	建築材	C-4 №58	24.0×6.5×4.5	1075	クリ	SOFK- 93		同一部材、他8点
45	加工材	F-6 №269	53.0×6.0×6.0	1172	クリ	SOFK-115	D	杭状
46	加工材	H-12 №4	31.0×4.5×4.5	1171	クヌギ節	SOFK-116	E	棒状、燃え痕有り
47	加工材	C-4 №52	12.0×7.0×6.0	1104	クリ	SOFK- 88		同一個体他2点
48	加工材	C-5 №10	11.0×3.5	1132	ヤナギ属	SOFK- 95		杭状の一端に加工痕
49	加工材	G-5 №295	10.2×0.5×22.0	1127	モミ属	SOFK- 2		燃え痕はぞ加工痕

くに全周する切り込みを入れたものである。この切り込みに縄をかけ、錐としたものと考えられ、むしろ、俵などを織る時に使用する木錐である。第44号溝から出土した。

第113図12は、細長い板状の製品で、ほぼ中央部の両側面が削られ細くなっている。用途は不明である。第26号溝から出土した。13は、細長い板状の製品で、両端の中央に切り込みが入れられたものである。用途不明である。第1号墳周堀覆土上層から出土した。14-20は、やや幅と長さが異なるものの、似た形態を示すもので、先端を両側面に向って斜めに切り、端部近くに小さな孔を開いたものである。非常に薄いものである。孔は中央ではなく、やや片寄っている。14-15は完形品と思われる。赤外線カメラで撮影したが、文字は認められなかった。孔に糸、あるいは細い棒を通して、束ねて使用したものか、あるいは7本塔婆である可能性も考えられる。15は第44号溝、他は第26号溝と第29号溝の交点から出土した。21は、農具の柄の一部と思われる破片である。全体にきれいで削られている。22は、農具の柄状の加工材の一部である。不部は欠損しているが、上端は不整

第17圖 木製品出土位置圖



形ではあるが面取りされている。端部近くに孔があけられているが、斜めである。23は、加工材の破片である。側面から見ると三角形を呈する。端部に孔があけられている。用途不明。22と23は、第44号溝から出土した。24は、円形の板材で、2枚の板を側面から木、あるいは竹釘で留めたものである。釘自体は失われているが、孔が残されている。また、合わせ目に2ヶ所、上下に通じる孔が認められ、何かを通して使用されたものと見られ、蓋と考えられる。25は、丸く削られた薄い板材である。曲物の底板と思われる。24・25は第44号溝出土である。26は、円形に削られた板材の一部で、桶、あるいは曲物の底板か蓋と考えられる。片面に漆が塗られている。第1号墳周囲覆土上層から出土した。27は、円形の板材の一部である。桶の底板か蓋と思われる。第7号溝から出土したもので、近世以後の遺物である可能性がある。

第114図28は、円形の板材の破片で、丸い孔があけられている。蓋である。第7号溝から出土したもので、27同様、近世以後の遺物である可能性がある。29は、円形の板材の一部である。底板か蓋と考えられる。第44号溝から出土した。30~33は、側面を丸く削った薄い板材である。曲げ物の底板と考えられる。31と32は曲率が一定していないため、長円形になるものと思われる。30は第6号井戸から、32と33は第44号溝からの出土で、31はC-5 Grid出土である。いずれも中世の遺物である。34は、円形の板材で、中央と端部近くに4ヶ所、計5ヶ所に孔があけられている。用途不明である。第7号井戸から出土した。

35から37は、曲げ物の側板である。35は上端の一部を欠くが、遺存状況は良い。側板は2重にされており、3重目に桜の皮で覆している。36も側板は2枚重ねられている。短軸の中央に孔が認められる。上部は欠失している。37は、側板の3方向に1つ、あるいは2つの孔があけられている。また上部の割れ口には、10数個の孔があけられている。蒸し器として使用された可能性が考えられる。35は第26号溝、36は第44号溝の拡張部分から、37は第44号溝から出土したものである。38から40は、薄い板材で、端部は折れている。38には片面に斜めの線刻が施されている。40には孔があり、そこに木釘が刺さっている。いずれも曲げ物の側板と考えられる。38は第26号溝、39は第29号溝、40は第44号溝から出土した。

41から43は、細長い板材である。41は端部に孔があいている。他の端部は焼けて欠損している。42は片面に細かい疵が認められ、両端部は折れている。43も両端部で折れている。41・43は第44号溝拡張部分から、42は第26号墳からの出土である。44は、非常に薄い板材で、端部は折れているものと見られ、曲げ物の側板の一部の可能性が考えられる。第36号溝から出土した。45は、薄い板材で、端部の両隅を斜めに削っており、孔が1ヶ所あけられている。下端は欠損している。木筒状の形態を呈するが、文字は認められなかった。第26号溝から出土したものである。46は板材である。両端は欠損している。第44号溝から出土した。47は薄い板材である。2片に割れており、一端は端面を残しているものと見られるが、他は欠損している。端面を残す側に1ヶ所孔が認められる。大型の曲げ物の側板と考えられる。第20号土壙から出土した。中世の遺物と考えられる。

第115図48は、農具の柄である。先端の下面は、くの字状に削り込み平坦面を取っている。両側面と上面も削り、平坦面を作っている。柄のうち、手を持つ部分については、断面はほぼ円形に作られている。上端は焼けていて欠損している。現存長約75cmである。上端に向ってやや細くなる。先

端部の端面を水平とすると柄の仰角は約70°である。振り降ろして使用する道具としては、角度がやや浅い觀がある。第43号溝底面直上から出土した。

49から55は、板材である。49は端部の一方に端面を残すが、他方は割れて欠損している。D-8 Grid出土である。50は非常に薄い板材である。両端部は欠損している。孔が1ヶ所認められ、曲げ物の側板の一部と考えられる。51は薄い板材であるが、両面に非常に細い刻みが付けられているものである。刻みは直線であるが、一定性を欠く。曲げ物の側板の一部である可能性がある。試掘溝からの出土であるが、中世の遺物と思われる。52は、欠損しているが両端部を残す板材である。第7号溝からの出土であり、近世以後の遺物である可能性がある。53は、一部に端部を残す板材である。第29号溝から出土した。54は一方の端部に切り口を残す板材である。他の端部と両側面も割れている。端部近くの側面には、2ヶ所で穴が認められる。両面には、51同様非常に細い線刻が認められるが、やはり一定性を欠くものである。あるいは曲げ物の側板の一部かとも思われる。試掘溝からの出土であるが、中世の遺物と思われる。55は、両端部とも焼けて欠損している、細長い板材の一部である。第26号溝から出土した。

56から59は、割り材の一部に、ほぞ穴状の加工が施されたものである。56は小型で、ほぞ穴状に削られた部分の幅は約2.5cmである。全体が焼けて炭化しており、燃え残りである。第26号溝から出土した。57は、両端・両側面すべて欠損していて大きさは不明であるが、一部にL字状の加工痕が認められる。B-3 Gridのピット内の出土であるが、中世の遺物と考えられる。58は、断面三角形の割り材の一部に、ほぞ穴状の加工が認められる。ほぞ穴の幅は約5cmである。また、ほぞ穴部に向かって斜めに材を削っている。第34号溝から出土した。59は、断面長方形にした割り材の一部を、ほぞ穴状に加工したものと思われる。ほぞ穴状部分の幅は約6cmである。端部は斜めに削り切られている。全体に火を受けており、特にほぞ穴状部分は炭化している。第36号溝から出土した。

第116図の60から62は、断面長方形の大型の割り材の端部近くに、ほぞ穴を穿ったものである。ほぞ穴は貫通しない。60は、幅約14.5cm×厚さ約9.0cmの角材である。端部はほぼ平坦に切っているが、削り面は幾重にもなっている。また下端部だけは人為的に焦がされている。下端面から約14cm離れた位置に、不整形にほぞ穴があけられる。ほぞ穴の上端は比較的直線的であり、方形を基調とするようであるが、下端はやや斜めの隅丸方形である。深さは約4cmである。ほぞ穴は5.5cm×6.0cmである。穴の中心から下端面までは、17.5cm前後である。60は裏面にもほぞ穴状の削り込みがある。ほぼ方形を成すものと思われるが、上端が欠損している為、ほぞ穴状部分の正確な形態は不明である。幅は約5cmである。下端面からの距離は中心と思われる部分で、約19.5cmである。

61は、幅約15.0cm×厚さ約9.0cmで、木のはぼ中心から半割りにした材を用いた角材である。下端面はほぼ平坦にしているが、やはり幾重もの削り面が認められ、人為的に焦がしている。ほぞ穴は、半分が方形、半分が円形を呈するもので、やや斜めになっている。大きさは6.0cm×7.0cmであり、深さは3.5cm以上である。下端面からの距離は、穴の上端で14.5cm前後、穴の中心で17.5cm～19cmである。

62は、幅約16.0cm×厚さ約9.0cmの角材である。下端部はやや斜めになっているが、削り面が幾重にもなり、人為的に焦がされている点は、60・61と同様である。ほぞ穴も半分は方形で、半分は円

形を呈する。大きさは上端で6.0cm×5.5cmである。深さは5cm前後を測る。下端面からの距離は、穴の上端で12.5cm~14.5cmで、中心部分で測ると14.5~18.0cmである。62の裏面は、下端面から7cm程離れた部分から、段状に削られている。段は1.0cm前後である。

60~62は、3点とも第36号溝から出土したものである。建築部材の一部と考えられるが、角材の大きさ、端部の切り口、ほぞ穴の形態、端部からほぞ穴までの距離、すべて似ている。同じ構築物に用いられたものと思われる。

第25表と図版39から図版42は、中世の掘立柱建物跡に伴うと思われる礎板・柱・杭・建築部材である。それ自体は製品ではないので図示しなかったが、法量と断面形、樹種は25表に示した。また表と図版の番号は一致している。

礎板は、第4号・第5号掘立柱建物跡に使用されていたものであり、計21点検出した。礎板は大型のものを用いたものが多いが、1つのビット内に小型の材を複数置いたものもある。礎石の断面形は、3種類に分けられる。1つは、片面が樹皮を付けたままの円弧で、他は割り口であり平坦になっている。直徑30cm前後の丸太の中央から角材を取り、その残りを使用したものを見ることがある。両端は斧状の工具により斜めに削り、切り離している。もう1つは、上記の円弧状の面の上部を更に加工し、平坦面を作っているものである。端部の切り口も同様で、斧状工具により斜めに切っている。他の1つは、断面形が長方形をしたものである。礎板として使用された角材は、他の礎板がクリが多いに対し、ヤナギ属が多く、礎板として作られたものではなく、廃材を利用したものと考えられる。

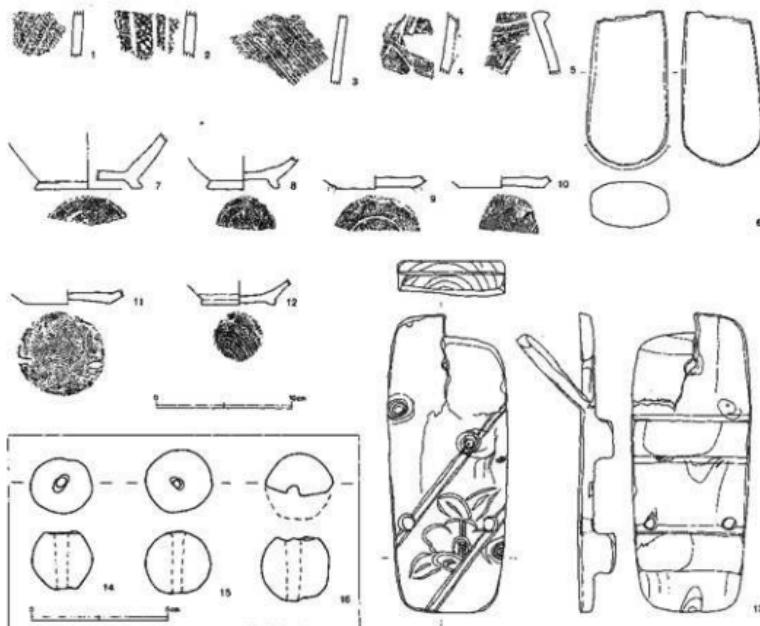
25から39は柱材と思われるものである。断面形は円形と方形がある。隅丸方形もあるが遺存状況の悪いものであり、方形か円形のいずれか一部が欠損して隅丸方形に見えるものである可能性が考えられる。柱材と思われるもののほとんどが、下端の切り口は、平坦面が幾重にも重なっているもので、斧状のもので切ったものと思われる。また、切り口は上部が焼けていないにもかかわらず焦げており、人為的に切り口を焦がしたものと考えられる。樹種は礎板同様、クリが圧倒的に多い。22と38は、I-13・14Gridからの出土で、調査区の北西側ビット群に属するものである。北西側のビット群では、明確な掘立柱建物跡は検出できなかった。柵列の杭である可能性もあり、出土遺物も無く時期も定め難い。

40・41・45・46・48の5点は、杭と思われるものである。柱材より細く、端部に切り口が認められる。樹種は、ブナ属、ヌルデ、クリ、クヌギ属、ヤナギ属と、すべて異なる種類である。46は、H-12Gridの調査区北西ビット群から出土したものであり、時期不明である。

42から44と47・49の5点は、加工材であり、建築部材の一部と思われる。42は破片である。43は、両端に加工痕が認められるが、建築部材の破片と思われる。44は、同一個体と思われるものが9片あり、建築部材の一部が削れたものと考えられる。47は、加工材の破片が3片に削れたものである。49は、ほぞ穴状の加工痕がある破片である。焼け残った建築部材の一部と思われる。建築部材の一部と思われる5点の内、3点はクリであった。礎板と柱だけではなく、他の部材にもクリが多く使用されたものと見られる。

(7) その他の遺物

第118図 1から5は、縄文前期～後期の土器片である。小沼耕地遺跡では当該期の遺構は全く検出されなかった。周辺からの混入と思われる。破片は小片で詳細は不明であるが、2は中期加曾利E式と思われる。3から5は後期壙ノ内式に属するものと思われる。6は、磨製石斧である。形態はやや弥生時代にみられる太形蛤刀石斧に似ていて側面が丸みをおびている。9～12は須恵器底部の破片であるが、やはり当該期の遺構は検出されなかった。13は、第21号溝から出土した下駄である。第21号溝は、昭和38年に終了した遺跡周辺の耕地整理により、最終的に埋められたと考えられる溝である。従って近世以後一近・現代に至るものを包含している可能性があり、他の木製品とは別にここで掲載した。14～16は土玉である。第1号壙周囲覆土中から出土した。



第118図 その他の遺物

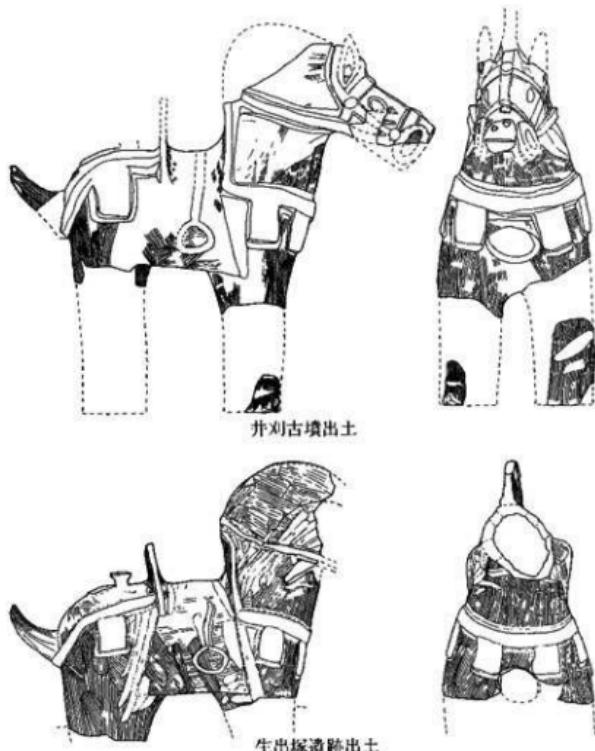
V. 結語

馬形埴輪について

小沼耕地遺跡出土の馬形埴輪は、胸繫あるいは尻繫の部分に、長方形の粘土板を貼り付けており、非常に希な飾りを付けた馬形埴輪といえる。長方形の粘土板は、杏葉を表現したものと思われるが、遺跡から出土する杏葉には長方形のものは無く、また長方形に近い形のものも希少である。あるいは、金属製品ではなく、有機質製の杏葉の存在の可能性を考える必要もある。

胸繫・尻繫に長方形の粘土板（杏葉）を付けた馬形埴輪の類例は、県内では鴻巣市生出塚遺跡と大宮市井刈古墳に認められるだけである。生出塚遺跡出土の馬形埴輪は、埴輪窯跡群出土品であるが、多数の馬形埴輪があり、その内の一個体に長方形の杏葉を付けたものが認められる。頭部と脚部を欠損している

が、胸部の残りは良い。胸繫の左右に二個づつ、尻繫の左右に一对の長方形の粘土板を貼り付けたもので、立體の表現は無い。鎧は輪鎧を表現したもので、雲珠は上端を平坦に潰した円柱状の粘土で表現しており、小沼耕地遺跡出土の馬形埴輪と全く同じ作りである。また鞍・障泥などの表現もよく似ている。井刈古墳出土の馬形埴輪は二個体あり、一個体は胸部の残りが悪く、粘土板の先端まで遺存していないが、胸繫に長方形の粘



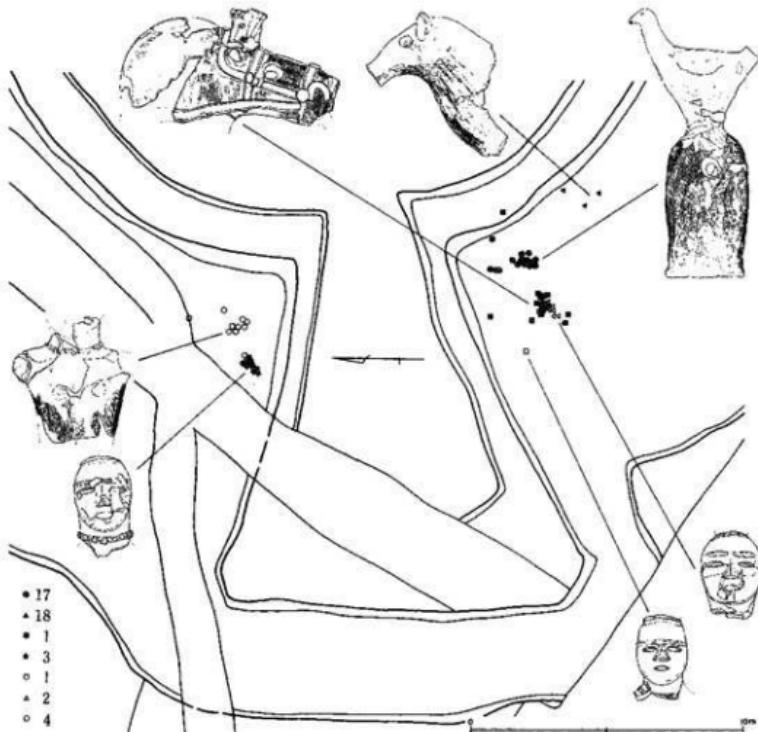
第119図 生出塚遺跡・井刈古墳出土馬形埴輪

土板が付き、鍾は輪鐘である。他の個体（第119図）は、脚部とたてがみを欠損している。胸繫には左右二個ずつ、尻繫には左右一対の長方形の粘土板を貼り付けたものである。鍾は輪鐘である。頭部は筒状にした粘土の上に逆U字形に粘土板を貼り付けた形をしており、鼻孔は円形の刺突、口は工具により一直線に切り込まれている。頭部の成形、及び整形と面繫の表現方法は、小沼耕地遺跡出土の馬形埴輪と全く同じといってよいものである。

小沼耕地遺跡と井刈古墳出土の馬形埴輪は、生出塚埴輪窯跡群で生産されたものと考えられ、しかも、ほぼ同時に、同一工人によって製作された可能性も多いに有り得る。今後、この馬形埴輪のように特徴的な形象埴輪の個体を選択的に抽出することにより、埴輪の流通範囲について考察することもできよう。

埴輪の配置について

埴輪は第1号墳から出土したものであるが、築造当時に樹立された状況で検出されたものは全く無く、築造当時、埴輪がどのように配列されていたかは明瞭にし得ない。しかしながら、周堀覆土



第120図 形象埴輪（人物・動物）出土位罫図



第121図 形象埴輪(質)出土位置図

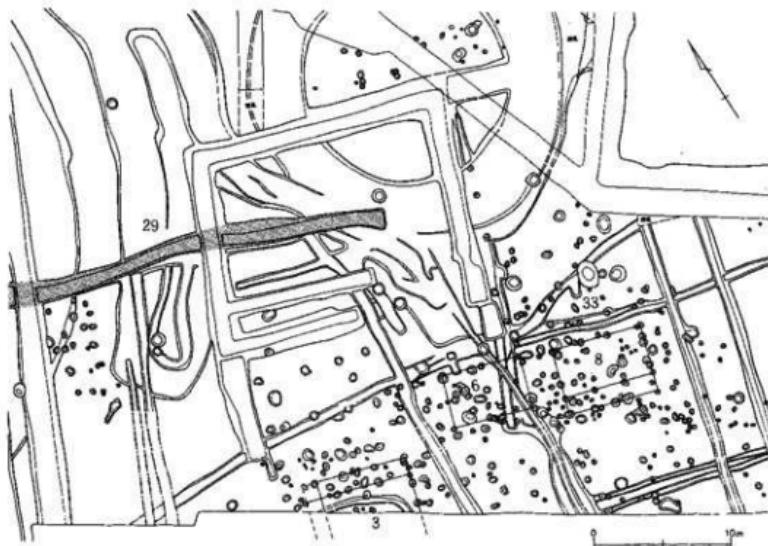
中から出土した埴輪を器種ごとに分布図を作成したところ、分布の仕方に傾向が見られることも確かである。周堀覆土中に含まれる一片、あるいは形象埴輪の小片をもって、その樹立位置を復原するのは不可能であり、非論理的といわざるを得ないが、分布からの全体的な傾向と、倒壊した状況にある埴輪片からの位置復原は、ある程度可能である。

まず円筒埴輪についてであるが、第35図は円筒埴輪の底部を残す個体の出土位置図である。出土位置を見ると、後円部の北側では、くびれ部付近を除くと中世の溝である第26号溝覆土から出土したもの以外は、周堀の覆土から出土したものは全く無い。また、くびれ部北側では集中が密であるのに対し、南側は少なく、しかも後円部側に偏在する。第42図に示した口縁部内面にヘラ記号をもつ個体の分布図でも、全く同じ分布域を示す。

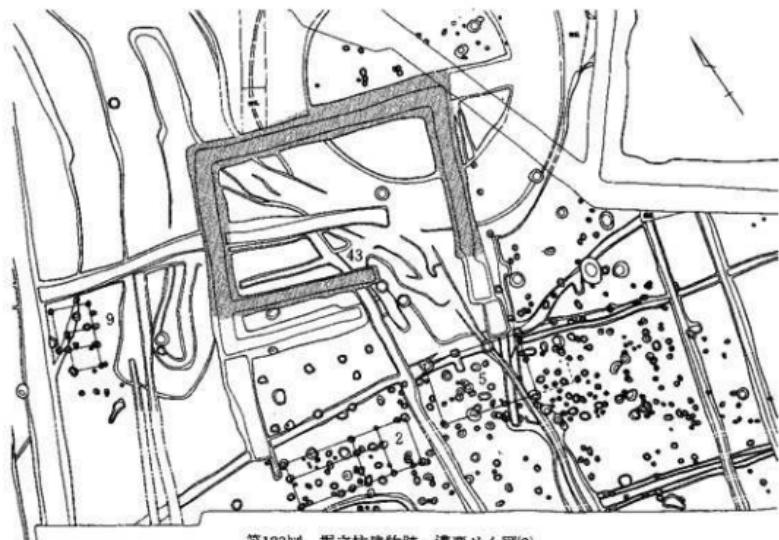
朝顔形円筒埴輪は、第40図に主なもの出土位置を示した。個体数も少ないが、後円部南側だけに認められ、点在している。

形象埴輪についてであるが、第62図にその出土位置を示した。その内、比較的残りの良いもので同一個体になり得ないものを第120図と第121図に示した。形象埴輪片は、くびれ部付近を除き、墳丘の北側にはほとんど分布していない。第26号溝の覆土を除けば、わずかに數片が認められるだけであり、円筒埴輪と同様である。

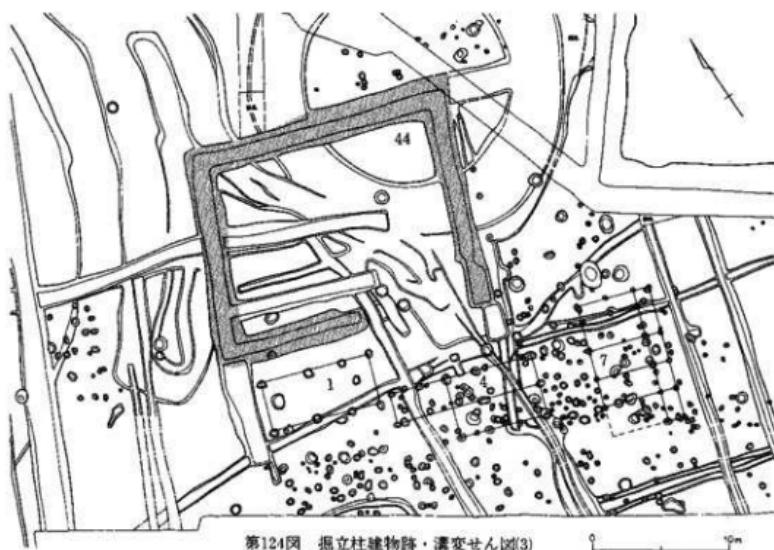
人物埴輪は、手や腕等の小片はいくつか散在して認められるが、大型の破片は、くびれ部の北側・南側ともに集中して分布しており、なおかつ前方部寄りに認められる。



第122図 振立柱建物跡・溝変せん図(1)



第123図 挖立柱建物跡・溝变せん図(2)



第124図 挖立柱建物跡・溝变せん図(3)

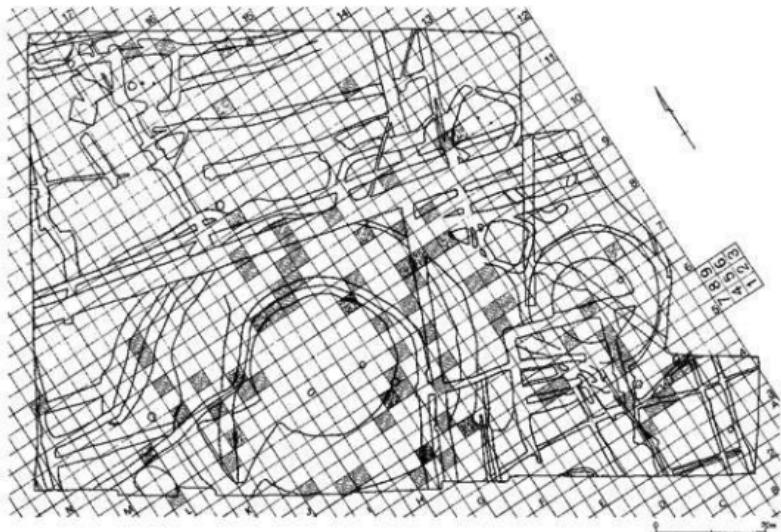
馬形埴輪は、人物埴輪と、その分布域はほとんど同じである。やはり小片はやや散在している。ほぼ完形に近い水鳥埴輪は、くびれ部のコーナー付近に倒壊した状況で出土している。また頭部だけの他の個体も、ほぼ同じ位置から出土したものである。その他の動物のうち猪形埴輪は、くびれ部の後円部側から出土したものである。他の大あるいは鹿と思われる動物埴輪の破片は、小片のためか、やや広範囲に分布するが、くびれ部の後円部側に集中することが認められる。

盾形埴輪は、後円部の南側に広く分布しているが、くびれ部近くに大型の破片がやや集中している。家形埴輪は、後円部の南側に点在しているが、數片ではあるが後円部北側からも出土しており、また、破片の数も少なく、分布の傾向から樹立された位置を推定するには難がある。

以上から、埴輪の配置をあえて推定すれば、くびれ部付近を除いて、後円部の北側には埴輪は樹立されず、後円部の東側から南側にかけては円筒埴輪を樹立し、その中に間隔を置いて朝顔形円筒埴輪と盾形埴輪を樹立したものと考えられる。後円部南側のくびれ部寄りには、円筒埴輪と盾形埴輪の他に、犬・鹿と思われる動物埴輪を置き、その一群の最もくびれ部寄りに猪形埴輪が置かれたものと考えられる。くびれ部のコーナー部には水鳥埴輪を置き、前方部には馬を混じえた人物埴輪群が向側に立てられ、前方部前面と北側くびれ部コーナー付近から後円部にかけて、円筒埴輪を立てたものと考えられる。

中世の遺構について

基壇状遺構は、拡張しており、明らかに二時期が考えられる。また基壇状遺構下にも溝が存在しており、そのうち第29号溝は中世のものである。他の第35~37・40号溝も中世の遺構であるものと



第125図 緑泥片岩重量分布図

思われるが、掘立柱建物跡との切り合いか有り、時期的に古いものであることが認められる。

掘立柱建物跡は、大きく分けて四群に分かれて構築されている。第1～3号掘立柱建物跡、第4～6号掘立柱建物跡、第7・8号掘立柱建物跡、第9号掘立柱建物跡である。第1～3号掘立柱建物跡では、第1号が基壇状造構の拡張後の南辺の溝と軸を同じ方向に取っており、溝の端部とも接っているため、この拡張後の建物と考えられる。第2号と第3号掘立柱建物は重複しており、同時に存在し得ないが、直接ピットの切り合いか無く、新旧関係は不明である。更に第2号掘立柱建物は、隣接する群の第4号掘立柱建物とも重複している。第4～6号掘立柱建物跡は、第4号掘立柱建物跡の礎板が第6号のピット上に乗っており、第4号掘立柱建物跡が新しいといえる。第5号と第6号掘立柱建物跡は、直接切り合いか無いため確定し得ないが、第4・5号掘立柱建物跡に礎板を採用しているのに対し、第6号にはそれが無いことを考えると、第6号掘立柱建物が最も古いものと見ることができる。また、礎板の遺存状況は第4号掘立柱建物が良く、礎板上に柱の痕跡も認められたことから、この群では、第6号、第5号、第4号の順に建てられたと考えるのが妥当であろう。なお第6号掘立柱建物跡は、第33号溝に沿う形で建てられており、第33号溝が伴う可能性がある。第33号溝は覆土上に第5号掘立柱建物の礎板を乗せており、その時期には機能を失っていたものと考えられる。第7・8号掘立柱建物跡は、直接ピットの切り合いか新旧を判断できなかつたが、第8号掘立柱建物跡が第6号掘立柱建物跡と同様、第33号溝に沿う形で建てられているのに對し、第7号掘立柱建物跡は第33号溝上に建てられている。また第8号掘立柱建物は、第5号掘立柱建物と重複している。以上のことから、第8号が第7号掘立柱建物跡よりも古いものである可能性が大きいと考える。

第9号掘立柱建物跡は、一棟だけ離れており、規模も小さい。位置的には第29号溝に伴う可能性があるが、基壇状造構築後も第29号溝の西半が機能していたことも考えられ、時期は特定できない。

以上の内容と、建物の位置関係、建物の軸方向を考慮に入れたうえで、時期別に溝と掘立柱建物の配置を推定したものが第122図～第124図である。溝・基壇状造構が三時期に分けられ、また掘立柱建物跡も三時期に分けられるため、第Ⅰ期から第Ⅲ期に分けて示した。全ての建物を同時に建て替えたとは考えにくく、Ⅲ期としたものがⅠ期に、あるいはⅠ期の建物がⅡ期に存在する可能性が考えられる。また第9号掘立柱建物はⅠ期～Ⅲ期まで存在した可能性も無いわけではなく、時期区分は、あくまでもある特定の時点での配置の推定復原である。

中世の遺物について

上部に建物の存在が考えられる基壇状造構とともに、掘立柱建物跡は調査区の南東側に集中するが、中世の遺物は、造構の集中区に限らず、第1号墳の北側を巡る第26号溝と、その溝に両された南側の古墳周囲覆土中から多く出土する。これは、第26号溝・第29号溝・基壇状造構の周囲を巡る第44号溝に両された南側部分全体が、中世の主な生活域であったことを示している。

また、古墳周囲覆土中から出土した綠泥片岩の多くは、中世の時期に投棄されたものである。第106図には中世陶器片の出土位置を、第109図には綠泥片岩の出土位置を示した。両者の分布域はほとんど同じであるが、特に綠泥片岩は周囲に集中している。また、中世の井戸、上塙からの出土も

多い。

第125図は3m×3mの小Gridごとの緑泥片岩片の平均重量の偏り合を示したものである。淡いトーンは平均よりも重い小Gridであり、濃いトーンは著しく平均よりも重い小Gridである。これを第109図と比較すると、平均より重い、あるいは著しく重い小Gridの多くは、前述した中世の主な領域の外側にある。平均よりも重いものは、傾向として破片が大きいものであり、逆に平均を下まわるものは、数量は多くとも小片が多いことを示す。従って緑泥片岩片の分布域の中心である第1号墳南側周堀は、細片が非常に多いことを示している。換算すれば、大型の緑泥片岩片は領域外に投棄され、小片は域内に残されている傾向を示すものである。緑泥片岩片の中には、明らかに古墳時代の石棺・石室材も含まれているが、一方、板碑の破片や他の製品も含まれている。これらの状況を総合すると、第1・2号墳の石棺・石室材として使用されていたものを、中世の時期に利用し、何らかの製品に再加工したものと思われ、加工時の廃材が領域内に残されたと見ることが妥当と考える。

小沼耕地遺跡で検出された中世の遺構・遺物は、13世紀後半から14世紀前半のものが中心である。検出された常滑の大甕の押印の中に、鳥を丸く形どったものがある。鶴丸紋は、鎌倉幕府に納めた製品に押されたものとされており、これが鶴丸紋であるとすれば、幕府と深く関わる武士層の居館であった可能性が考えられるのである。

参考文献

- 小島清・『飯治谷・新田口遺跡Ⅱ』 埼玉県戸田市遺跡調査会報告書 第2集 戸田市遺跡調査会
1990
- 鴻巣市史編さん室 『鴻巣市史 資料編1考古』 1989
- 榎森紀己子 『稲荷塚古墳周辺確認調査報告』 大宮市文化財調査報告 第23集 大宮市教育委員会
1987
- 瀧瀬芳之 『小前田古墳群』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第58集 財團法人 埼玉県埋蔵文化
財調査事業団 1986
- 谷井 雄他 『奥の山古墳 瓦塚古墳 中の山古墳』 埼玉古墳群発掘調査報告 第7集 埼玉県教
育委員会
- 日本貿易陶磁研究会 『貿易陶磁研究 No.2』 1982
- 長間孝志 『金井遺跡 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第86集 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調
査事業団 1989
- 宮崎由利江 『埼玉県内における馬形埴輪の消長』 国學院大學 考古学資料館紀要 第5輯 国學院
大学考古学資料館 1990
- 山崎 武 『牛出塚遺跡』 鴻巣市遺跡調査会報告書 第2集 鴻巣市教育委員会 1981
- 本報告書をまとめるにあたっては、下記の方々にたいへんお世話になった。心から御礼を申し上
げる次第である。（敬称略・順不同）
- 村田健二 昼間孝志 富田和夫 鈴木孝之 黒坂慎二 田中広明 浜野美代子 瀧瀬芳之
宮瀬文子 岩山明広 植木智子 山崎えり子 長谷川清美 長島紀代子 関口広子 小松和子
泉 美智子 松井紀代子 小島明美 常木成子 今井三千代 日高 慎 森 ひさえ
筑井玲子 西本恵子

付 編

埼玉県騎西町小沼耕地遺跡から出土した木製品の樹種

能城修一（森林総合研究所木材利用部）・鈴木三男（金沢大学教養部）

埼玉県北埼玉郡騎西町に位置する小沼耕地遺跡から出土した木製品の樹種同定を行った。当遺跡は大宮台地北部の、河川により分断された細長い台地上に立地している。木製品112点のうち111点は、鎌倉時代末から室町時代の上壇状遺構のまわりの構、および同時代の掘立柱建物跡から出土したもので、残りの1点は近代のものである。おもな出土遺物には、蓋や曲物などの容器類、木札状のもの、および礎板や柱根などの建築材があげられる。樹種同定用の標本は、それぞれの遺物からカミソリを用いて徒手切片を作成し、それをガムクロラールで封入して作成した。それぞれの標本にはSOKF-1からSOKF-116の標本番号を付した。同定用の標本は金沢大学教養部生物学教室に保管されている。以下にはまず、それぞれの樹種の木材解剖学的な記載をし、その顯微鏡写真を図版1-6に示して、同定の根拠を明らかにした。

1. モミ属 *Abies* マツ科 図版1:1a-1c(SOKF 38).

垂直・水平樹脂道とともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部は量おおく明瞭である。樹脂細胞はふつう認められない。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2~3個。放射柔細胞の末端壁には单壁孔が著しく、結節状を呈する。

2. ツガ属 *Pinus* マツ科 図版1:2a-2c(SOKF 26).

モミ属によく似た針葉樹材で、垂直・水平樹脂道とともに欠く。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部は量おおく明瞭である。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2~3個。放射柔細胞の末端壁には单壁孔が著しく、結節状を呈する。放射組織の上下縁には放射仮道管が存在する。

3. スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 図版1:3a-3c(SOKF-69).

垂直・水平樹脂道とともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部は量おおく、年輪界は明瞭である。晩材部付近には樹脂細胞が散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、ほぼ水平の大きな孔口をもち、1分野にふつう2個存在する。一般に保存状態は良好で、分野壁孔は認めやすい。

4. ヒノキ *Chaeyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図版2:4a-4c(SOKF-62).

垂直・水平樹脂道とともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部は量くないが、年輪界は明瞭。晩材部には樹脂細胞が年輪界に平行に散在する。分野壁孔は中型のヒノキ

型一トウヒ型で、斜めに開いた孔口をもつ。一般に保存状態は良好で、分野壁孔を確認しやすい。

5. ネズコ Thuja standishii (Gord.) Carr. ヒノキ科 図版2:5a-5c(SOKF-22).

水平・垂直樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部はやや量おおく明瞭。晩材部には樹脂細胞が年輪界に平行に散在する。分野壁孔は中型のスギ型で、1分野に2~3個分布するが、分野壁孔は見つけにくい。

6. ヤナギ属 Salix ヤナギ科 図版2:6a-6c(SOKF-72).

やや小型で丸い管孔が単独あるいは2~3個複合して多数散在する散孔材。道管の直径は年輪界にむけて徐々に減少する。道管の穿孔は單一。放射組織は単列異性で、道管との壁孔は数多く、縦の巣状を呈する。

7. クリ Castanea crenata Sieb. et Zucc. ブナ科 図版3:7a-7c(SOKF-104).

大型で丸い管孔が年輪のはじめに数列集合し、晩材部では小型で薄壁の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は單一で、道管内にはチローシスが認められる。木部柔組織は不規則な接線状で、ときに大型の結晶が認められる。放射組織は単列同性である。

8. ブナ属 Fagus ブナ科 図版3:8a-8c(SOKF-96).

小型で丸い管孔が年輪界にむけて径を減しながら多数散在する散孔材。晩材部では管孔の密度も減少し、木部柔組織がいびつな接線状に配列する。道管の穿孔はほぼ單一で、ときに細い道管で階段状。放射組織は同性にちかい異性で、単列のものから十数細胞幅まである。

9. コナラ属クヌギ節 Quercus sect. Aegilops ブナ科 図版3:9a-9c(SOKF-116).

大型で丸い管孔が年輪のはじめに1~2列ならび、晩材部ではやや小型で厚壁のまるい管孔が放射方向に配列する環孔材。道管の穿孔は單一。木部柔組織は晩材部でいびつな接線状。放射組織は同性で、単列のものと複合状の大型のものとからなる。道管と放射組織との壁孔は横状。

10. コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinns ブナ科 図版4:10a-10c(SOKF-24).

コナラ属クヌギ節に於ける環孔材。年輪のはじめには大型で丸い管孔が1~2列配列し、晩材部では小型で薄壁の管孔が放射状・火炎状に配列する。道管の穿孔は單一。木部柔組織は晩材部で、いびつな接線状。放射組織は同性で、単列で小型のものと複合状で大型のものとからなる。

11. コナラ属アカガシ亜属 Quercus subgen. Cyclobalanopsis ブナ科 図版4:11a-11c(SOKF-66).

中型で丸い厚壁の管孔が放射方向の帯をなして配列する放射孔材。道管の穿孔は單一。木部柔組織は不規則で幅のせまい帶状。放射組織は同性で、単列のものと複合状で大型のものとからなる。道管と放射組織との壁孔は横状。

12. エノキ属 Celtis ニレ科 図版4: 12a - 12c(SOKF-67).

中型で丸い管孔が年輪の初めに集合し、晩材部では小型で薄壁の管孔が接線方向の断続的な塊をなして配列する環孔材。道管の穿孔は單一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で、8細胞幅くらいに達し、不完全な精細胞をもつ。

13. ケヤキ Zelkova serrata (Thunb.) Makino ニレ科 図版5: 13a - 13c(SOKF-57).

大型でやや角張った管孔が年輪のはじめに1列にならび、晩材部では小型で薄壁の管孔が集合して断続的な帯状に配列する環孔材。道管の穿孔は單一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で数細胞幅、上下縁辺の細胞にはしばしば大型の結晶が認められる。

14. ヤマグワ Morus australis Poir. クワ科 図版5: 14a - 14c(SOKF-42).

やや大型で丸い管孔が年輪の初めに2~3列配列し、晩材部では小型で薄壁の管孔が数個~十数個集合して散在する環孔材。道管の穿孔は單一で、小道管の内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性で数細胞幅、単列部は1~3細胞幅くらい。

15. モモ Prunus persica Batsch バラ科 図版5: 15a - 15c(SOKF-48).

やや小型で丸い管孔がほぼ単独で年輪のはじめに数列集合し、晩材部では小型で丸い管孔が放射方向に連なる傾向をみて散在する半環孔材。ときに障害ゴム道が認められる。道管の穿孔は單一で、内壁にはらせん肥厚が認められ、しばしば褐色の物質がつまっている。放射組織は異性で1~数細胞幅、背が比較的たかい。

16. ヌルデ Rhus javanica L. var. roxburghii (DC.) Rehd. ウルシ科 図版6: 16a - 16c (SOKF-90).

大型で丸い管孔が年輪のはじめに数列集合し、晩材部では小型で薄壁の管孔がはじめは放射方向に数個複合し、年輪界付近では木部柔組織とともに不規則な帯状につらなる環孔材。道管の穿孔は單一で小道管の内壁にはらせん肥厚が認められる。

17. 散孔材一種 Diffuse porous wood 図版6: 17a - 17c(SOKF-32).

小型で角張った管孔が単独、あるいは2個ほど放射方向に複合して散在する散孔材。道管の穿孔は多数の横棒からなる階段状。木部柔組織散在状。放射組織は異性で数細胞幅。道管と放射組織との壁孔は小型で交互状。

以上のような形質が認められるが、若い部分であることもあって同定には至っていない。

木製品総数112点のうちには17の分類群が認められた(表1)。ここではそれを製品群ごとに集計して、樹種選択の傾向を検討する。なお、それぞれの製品の樹種は第24・25表に示してある。全体としては、木札状のものや容器類および板では、割裂性にすぐれたスギやヒノキなどの針葉樹の使用

がおおく、礎板や柱などの建築材ではクリが圧倒的に選択されている。

木札状の木製品はすべて極目ではヒノキおよびヒノキ属が多いが、モミ属も用いられており、当地で作成されたものも含まれていると考えられる。曲物はスギとヒノキがほぼ半々であるが、蓋ではさらにスギやネズコなども用いられており、蓋は当遺跡付近であまり樹種をえらばずに作成されていたようである。礎板では耐朽性および耐湿性にまさるクリが多用されているのはうなずけるが、不朽しやすいヤナギ属が用いられているところが奇異である。柱材やそれ以外の建築材にもクリが多用されていることから考えて、クリ材が不足していたとは思われないので、特殊な用途か儀礼的な用法ではないかと推測される。

関東地方における中世の木製品の樹種同定はあまり行われておらず、比較すべき資料は見あたらない。縄文時代から古代にかけては、埼玉県大宮市の寿能泥炭層遺跡（鈴木ほか、1984）や埼玉県行田市的小敷田遺跡（能城・鈴木、1991）、あるいは東京都中野区の北江古田遺跡（鈴木・能城、1987）の例にみられるように、縄文時代まで多用されていたクリにかわって、弥生時代以降はコナラ属クヌギ節が優占的に用いられるようになる。しかしながら当遺跡の木製品は、中世になってふたたびクリが優占的に使用されるようになったことを示しており、今後はこうした傾向がこの付近だけのものなのか、あるいは関東地方全域に認められるものなのかを検証していくことが必要である。

引用文献

- 能城修一・鈴木三男、1991、木材化石群集、「小敷田遺跡」、埼玉県埋蔵文化財調査事業団。
鈴木三男・能城修一、1987、北江古田遺跡の木材遺体群集、「北江古田遺跡発掘調査報告書(2)」、506-556、東京都中野区・北江古田遺跡調査会。
鈴木三男・能城修一・植田弥生、1984、加工木の樹種、「寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編—」、699-724、埼玉県教育委員会。

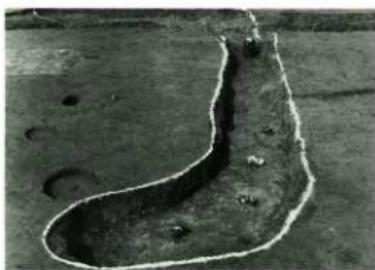
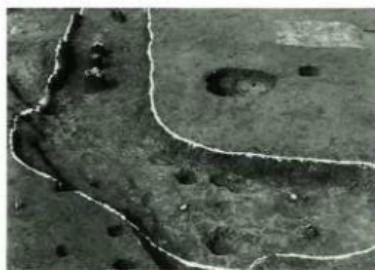
表1. 小沼耕地遺跡から出土した中世の木製品の樹種

樹種名	札状	蓋	曲物	下駄	礎板	板	柱	建築材	加工材	その他	合計
モミ属	2					1			1		4
ツガ属		1									1
スギ		1	4		1	6				2	14
ヒノキ	5	1	5			6		1	1		19
ヒノキ属	2	1	1			2					6
ネズコ		1		1		1					3
ヤナギ属					3	1	1		1		6
クリ				1	14	1	15	7	5		43
ブナ属									1		1
クヌギ節								1			1
コナラ節										1	1
アカガシ属										1	1
エノキ属				1							1
ケヤキ					2			2			4
ヤマグワ										1	1
モモ										1	1
スルデ								2	1		3
散孔材										1	1
合計(極目)	9(9)	5(4)	10(8)	2	19	20(13)	16	7	14	9	111

図 版



第1号方形周溝墓



第1号方形周溝墓遺物出土状況

図版 2



第3号方形周溝墓（西から）



第3号方形周溝墓（北から）

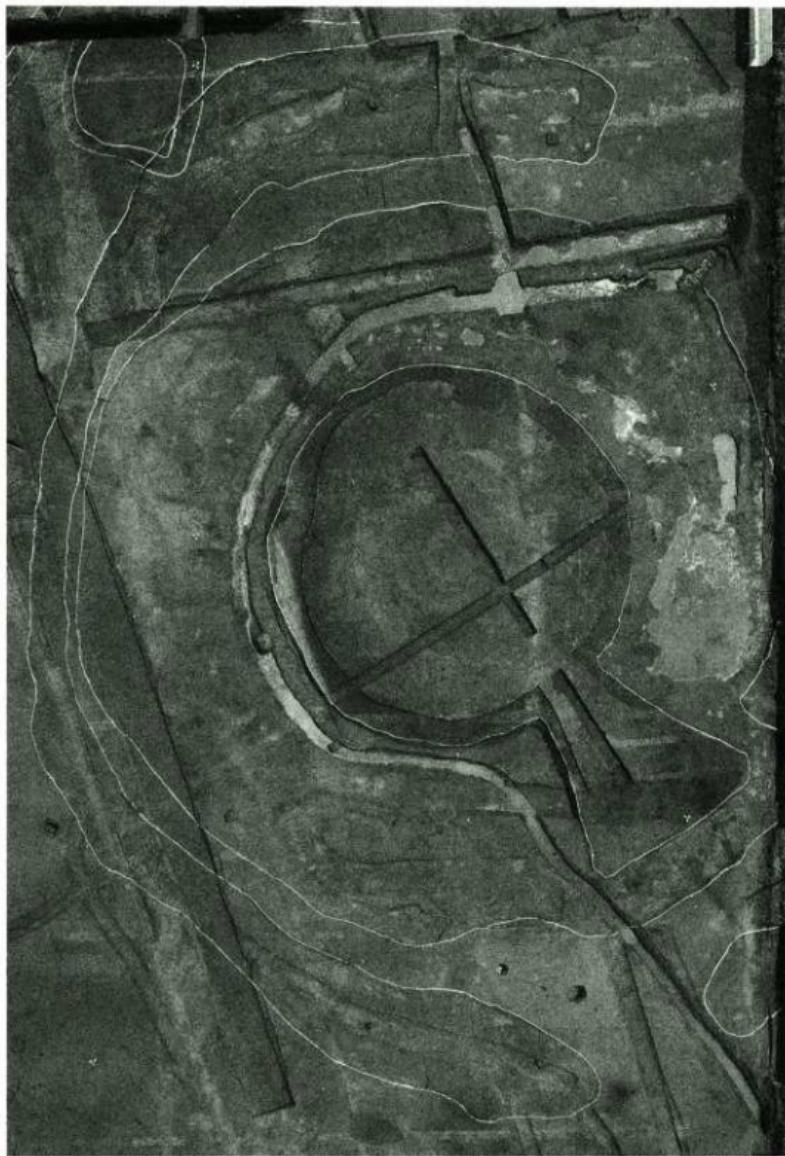


第4・5号、方形周溝墓



第4号方形周溝墓遺物出土状況

图版 4



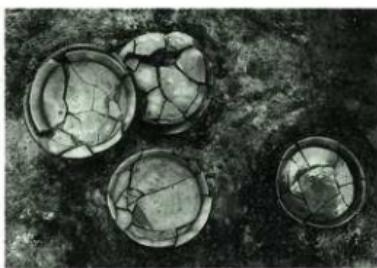
第 1 号 墓



第1号墳(西から)



第1号墳土師器出土状況(1)



第1号墳土師器出土状況(2)



第1号墳形象埴輪(馬)出土状況



第1号墳形象埴輪(鳥)出土状況

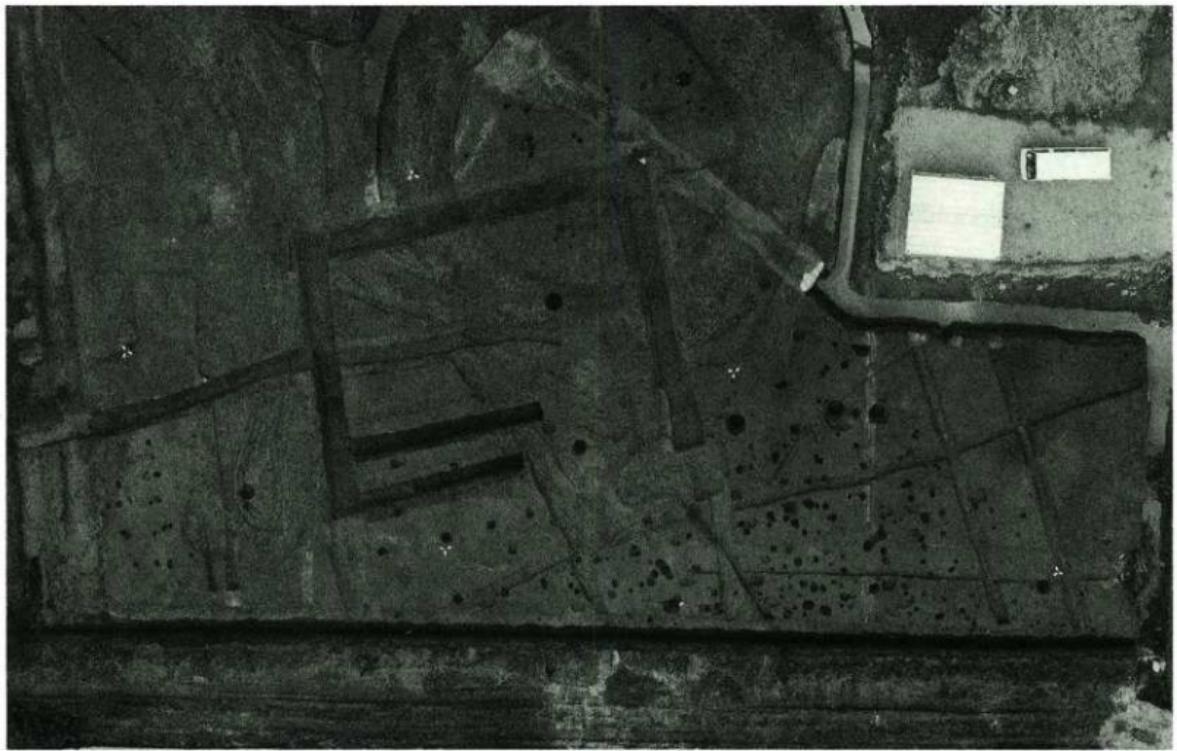
图版 6



第1号墳形象（猪）出土状况



第2号墳



調査区南側航空写真

図版 8



基壟下の造構（東から）



基壟下の造構（西から）



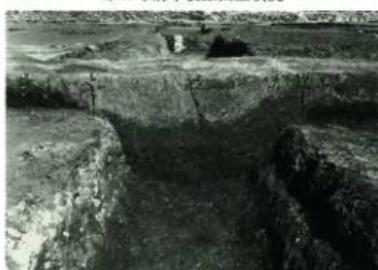
第14号井戸木製品出土状況



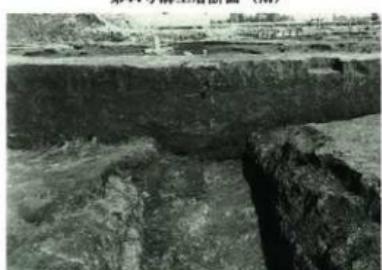
第43号溝木製品出土状況



第44号溝土層断面（南）



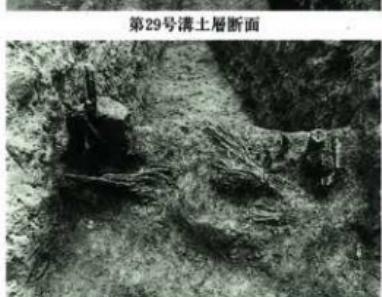
第44号溝土層断面（北）



第29号溝上層断面



第43号溝土層断面



第43号溝上層堆状遺構



第43号溝下層堆状遺構

図版 10



第1号掘立柱建物跡



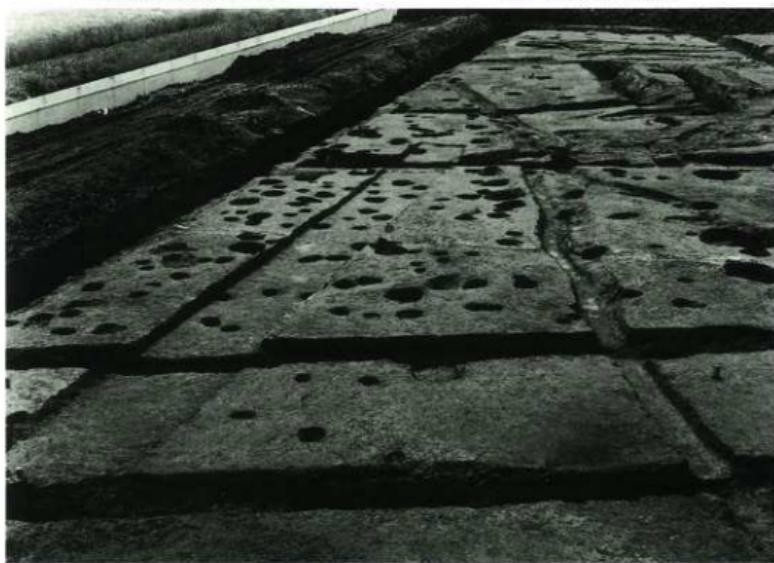
第4・5号掘立柱建物跡



第1号井戸木製品出土状況



第4・5号掘立柱建物跡



調査区南側ピット群



SR 1-1



SR 1-3



SR 1-4



SR 1-5



SR 1-8



SR 1-6



SR 1-7



SR 1-9



SR 1-10



SR 1-11

方形周溝墓出土遺物(1)

図版 12



SR 3-2



SR 3-1



SR 4-5



SR 4-1



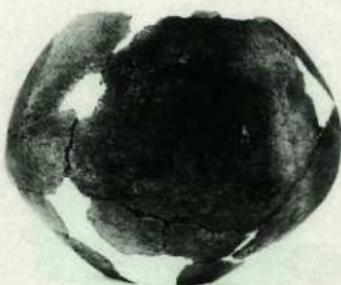
SR 4-2



SR 4-4

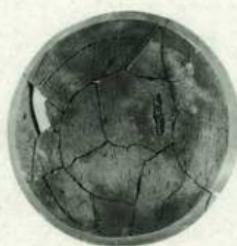


SR 5-1



SR 5-6

方形周溝墓出土遺物(2)



SS1-1

SS1-2



SS1-4



SS1-5

SS1-3



SS1-6

第1号墳出土遺物(1)

图版 14



SS1-7



SS1-8



SS1-9



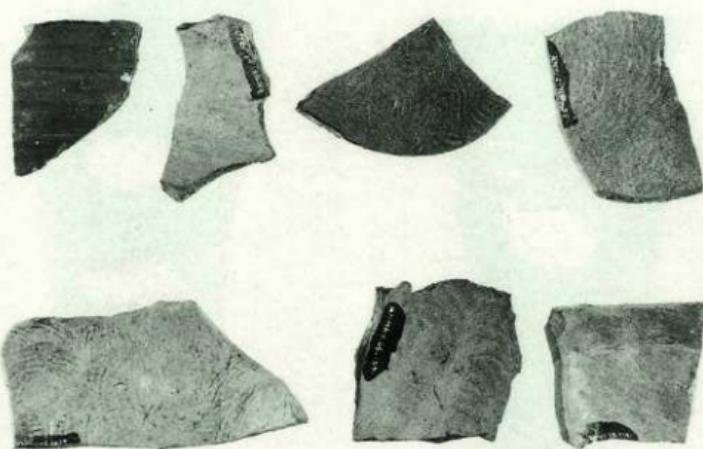
SS1-10



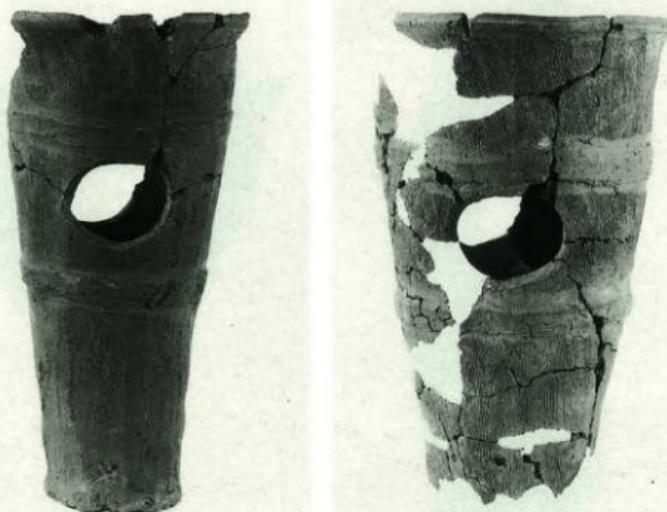
SS1-12



第1号墳出土遺物(2)



第1号墳出土遺物(3)



1
第1号墳出土円筒埴輪(1)

2

图版 16



3



4



77

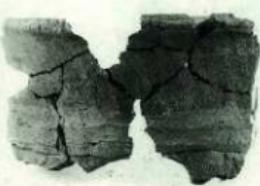
第1号填出土圆筒埴輪(2)



35



21



32



36



27



28



45



52

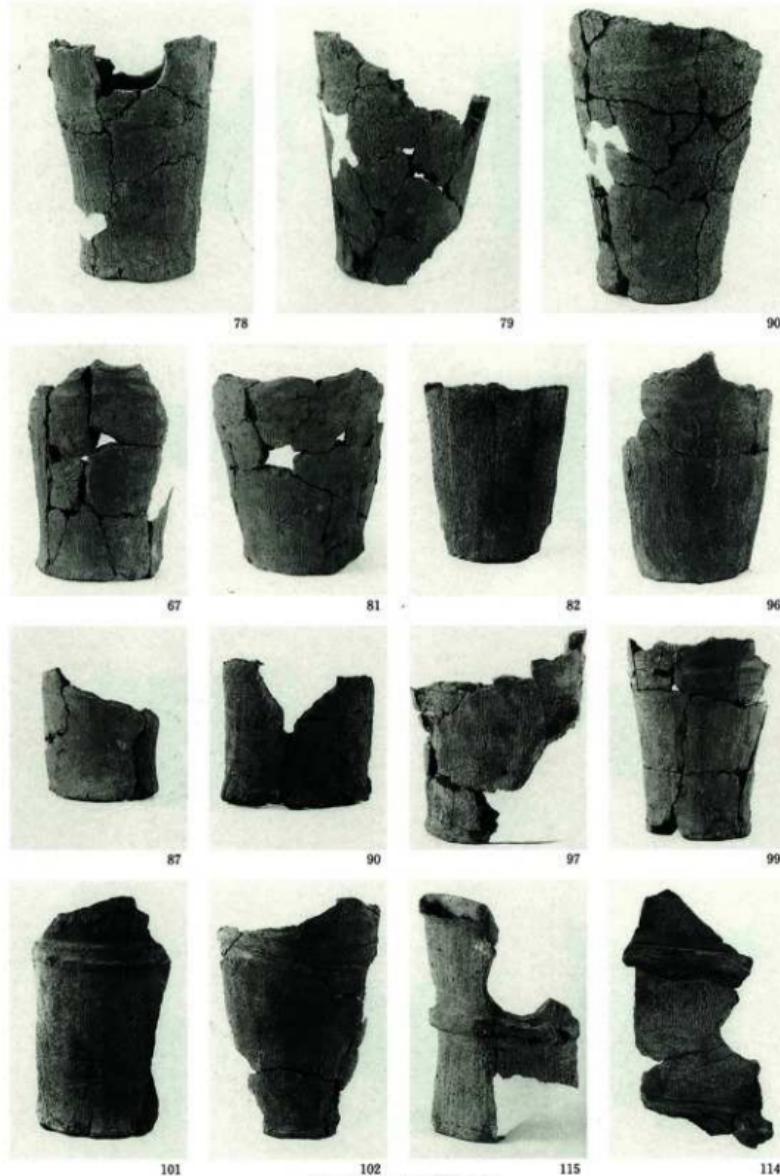


第 1 号 墓出土円筒埴輪(3)

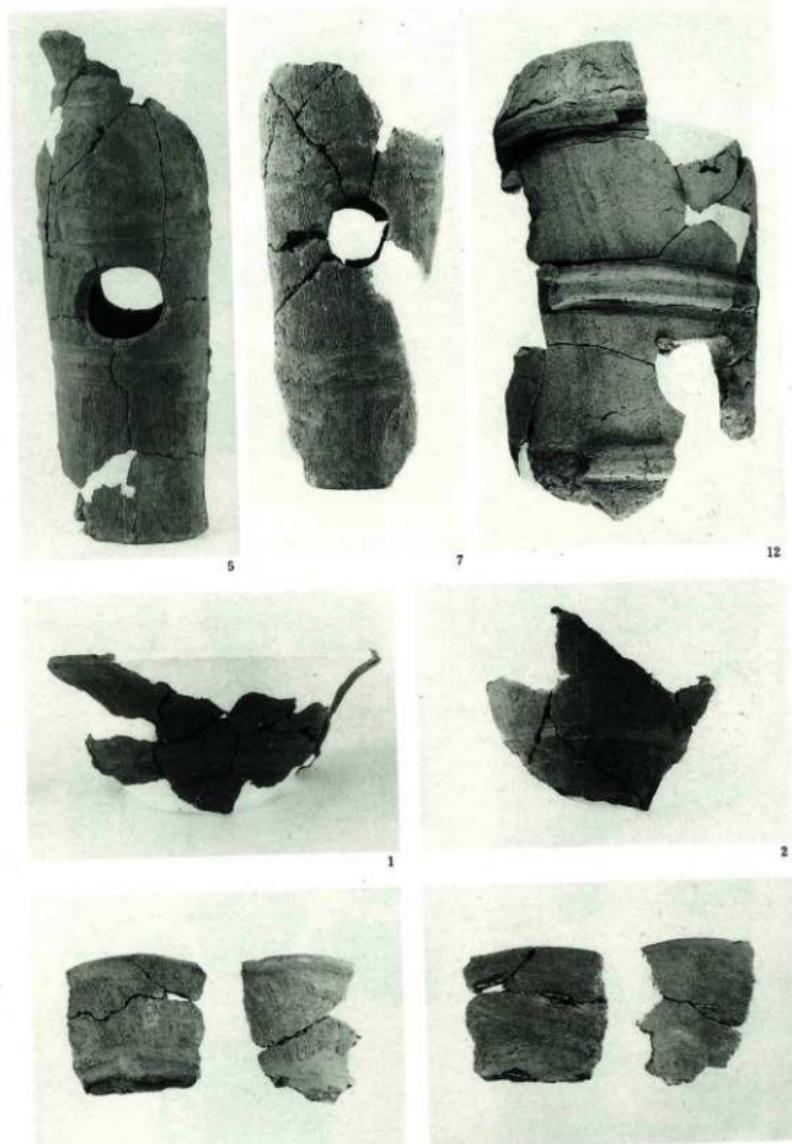


72

图版 18

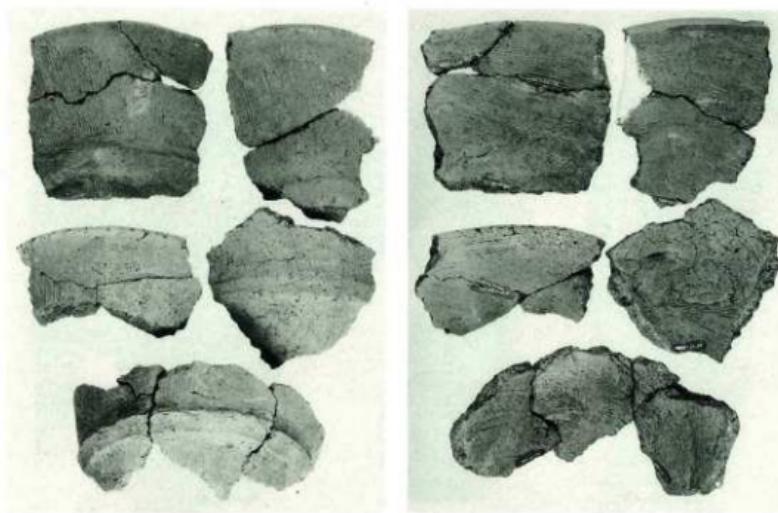


第 1 号 墓出土凹筒埴輪(4)

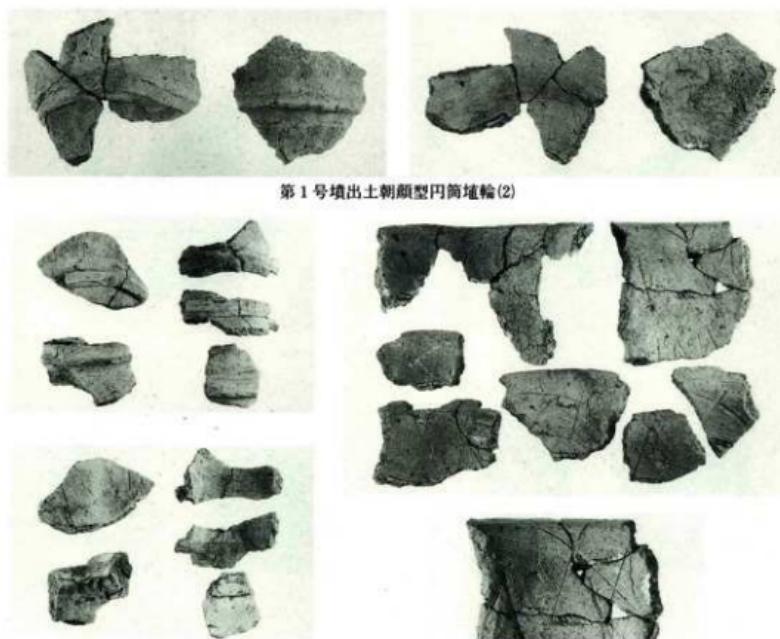


第 1 号 墓出土 朝顔型円筒埴輪(1)

図版 20



第1号墳出土朝顔型円筒埴輪(2)



第1号墳出土朝顔型円筒埴輪(3)

ヘラ記号のある円筒埴輪



1

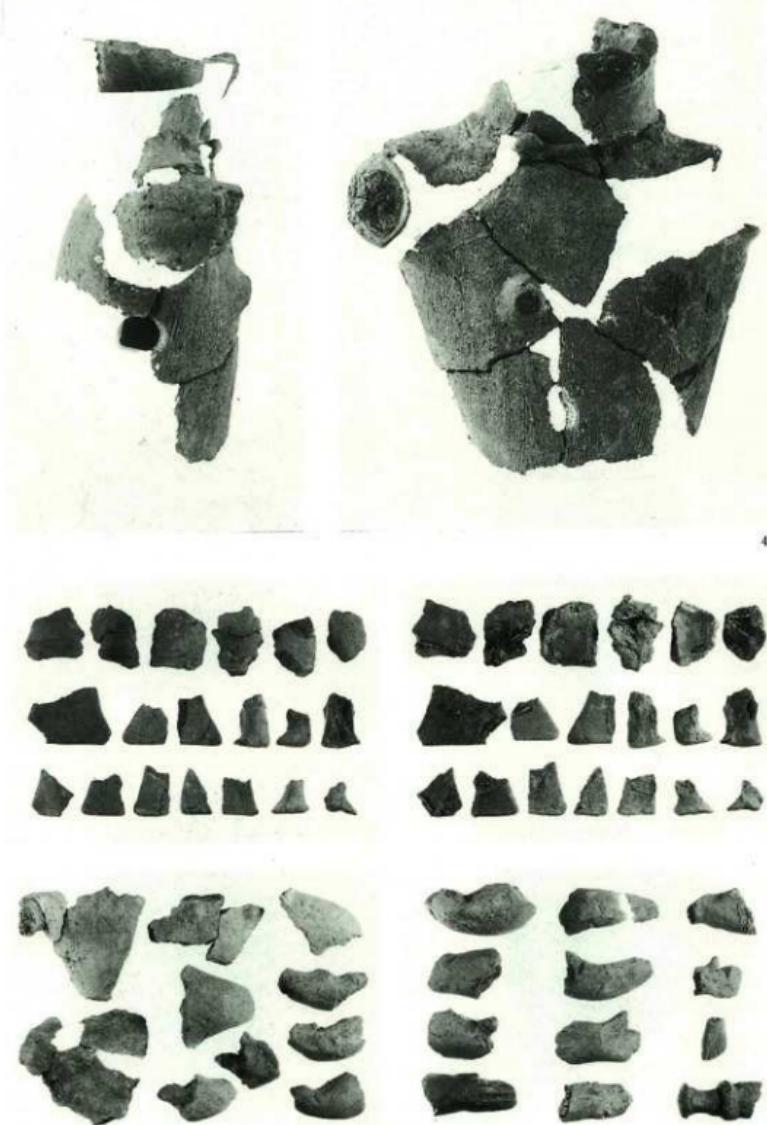


2

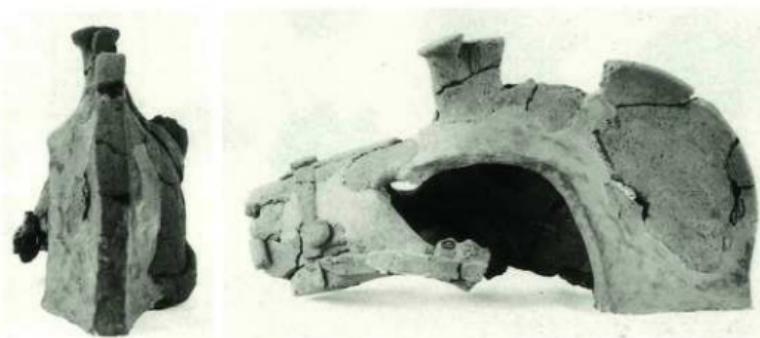


3

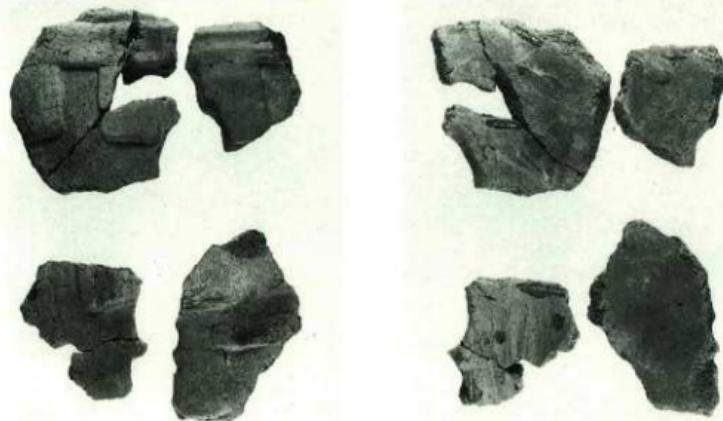
第1号墳出土形象埴輪（人物1）



第1号墓出土形象埴輪（人物2）

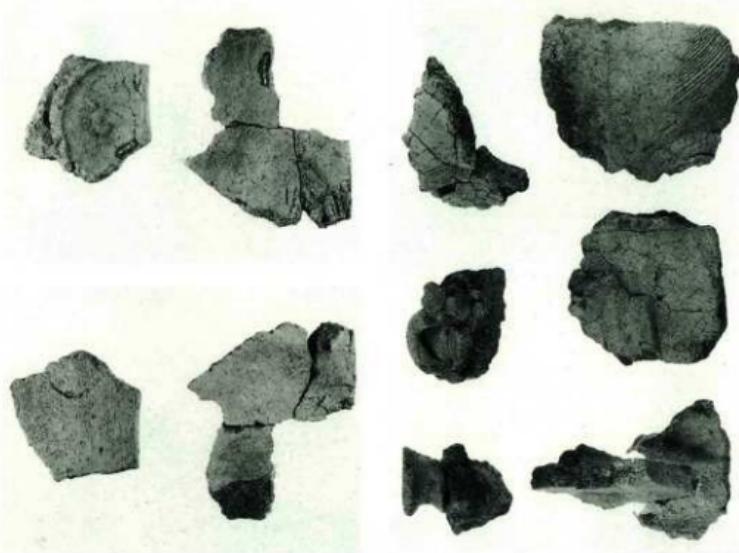


1



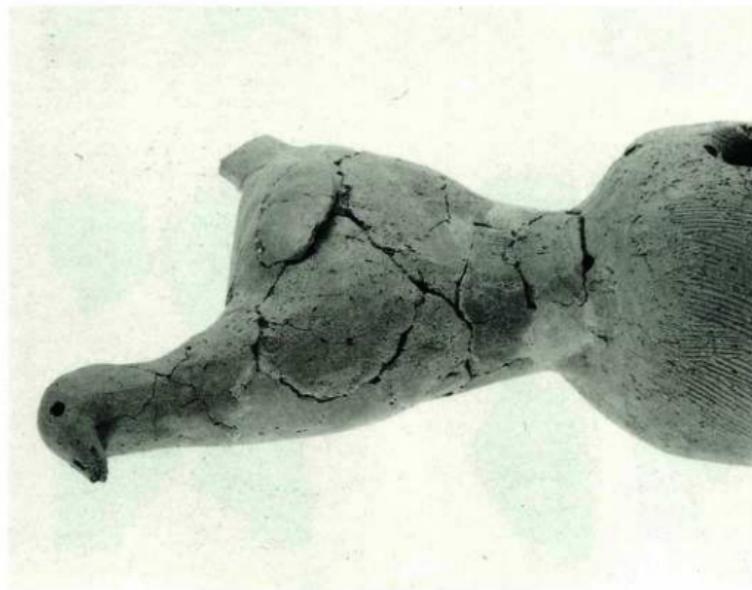
第1号墳出土形象埴輪（動物 1）

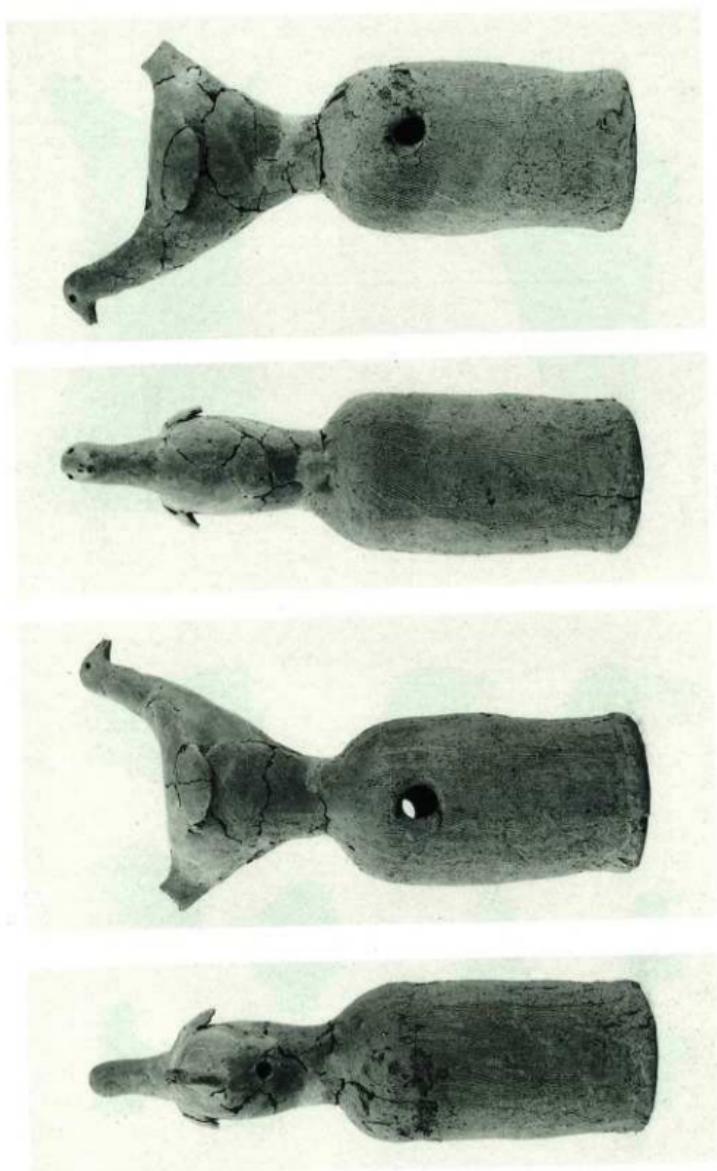
図版 24



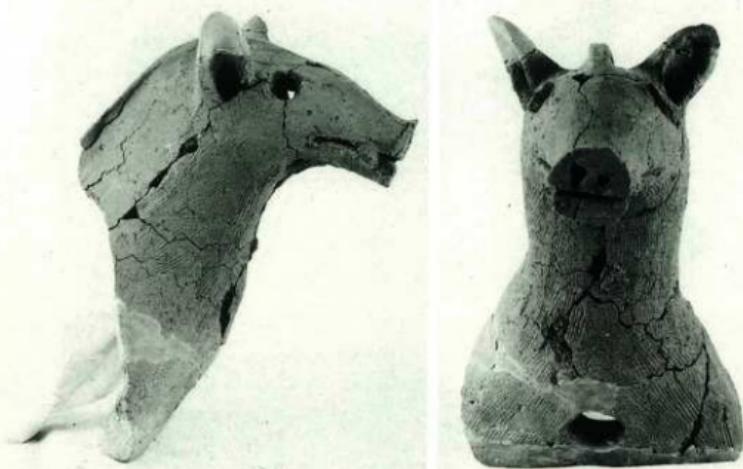
第1号墳出土形象埴輪（動物2）

17

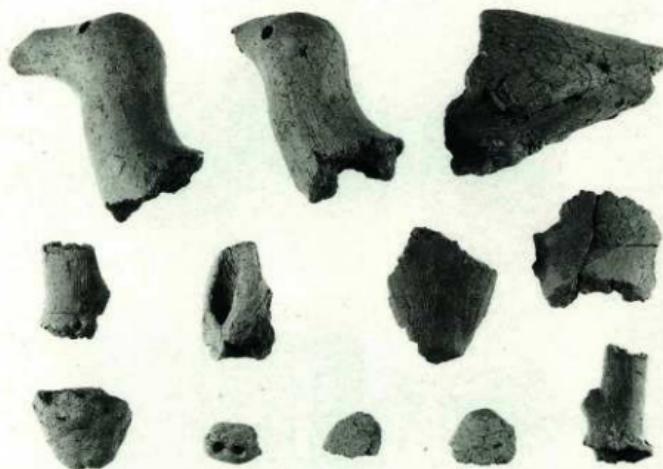




第1号墳出土形象埴輪（動物3）



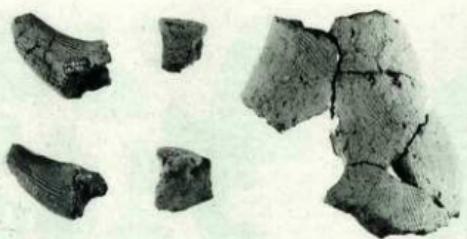
18



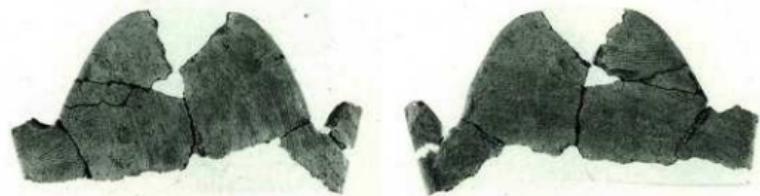
第1号墳出土形象埴輪（動物4）



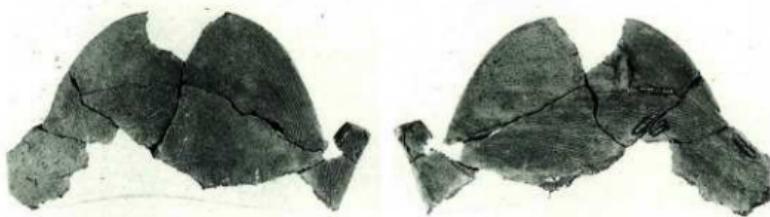
18



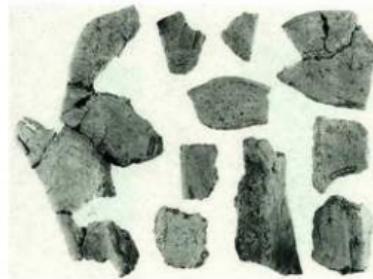
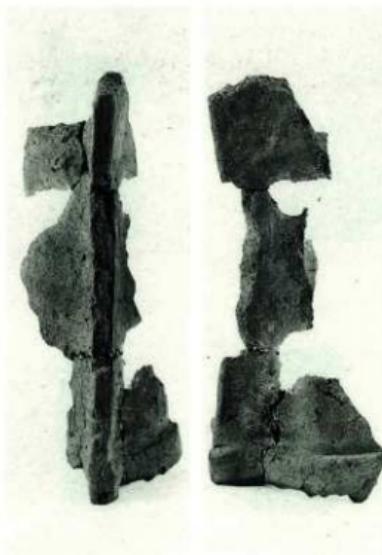
第1号墳出土形象埴輪（動物5）

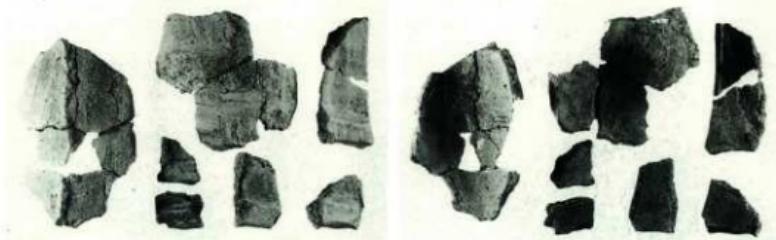


1

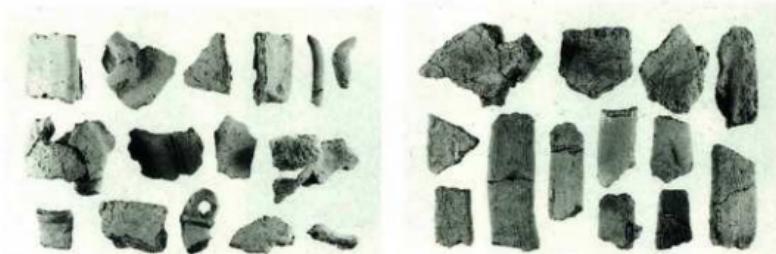
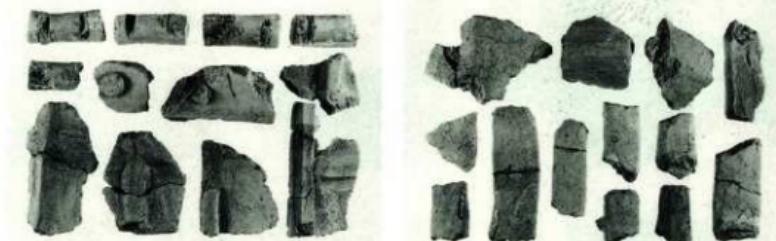


2





第1号墳出土形象埴輪（盾2）



第1号墳出土形象埴輪（その他）



SS2-1



SS2-2

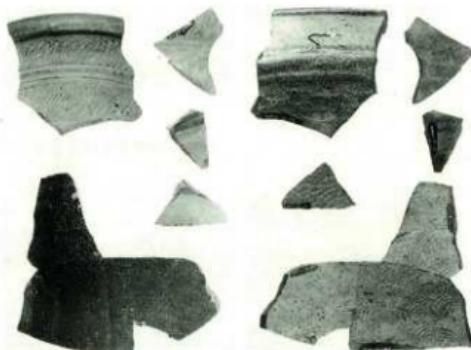
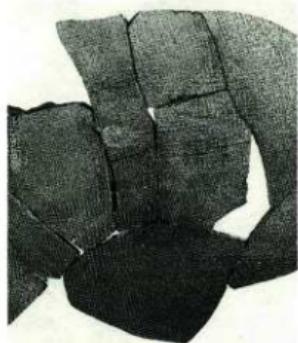


SS2-3

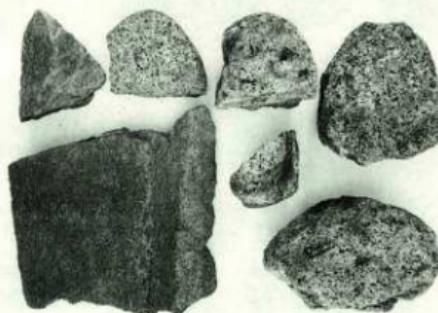


SS2-4

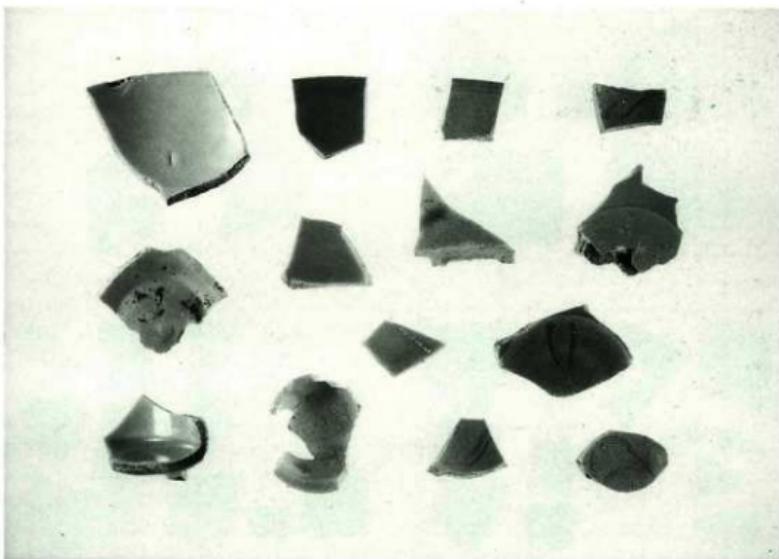
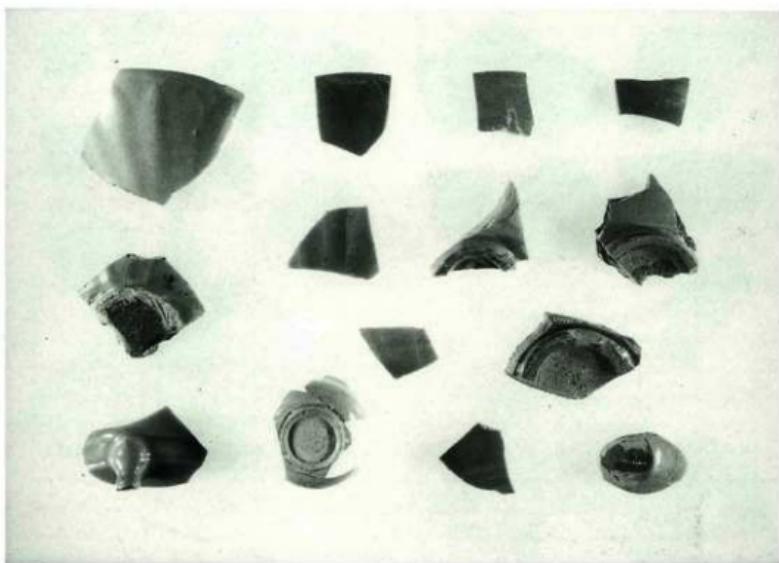
第2号墳出土遺物(1)



第2号墳出土遺物(2)

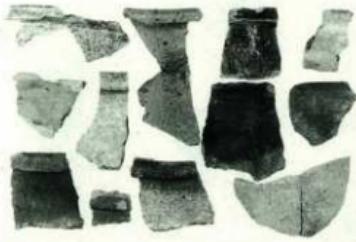
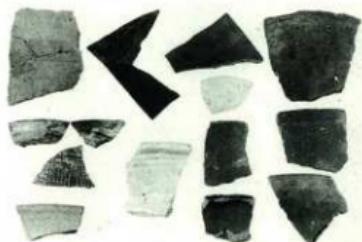
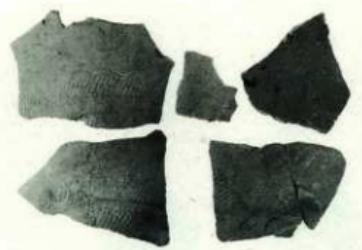
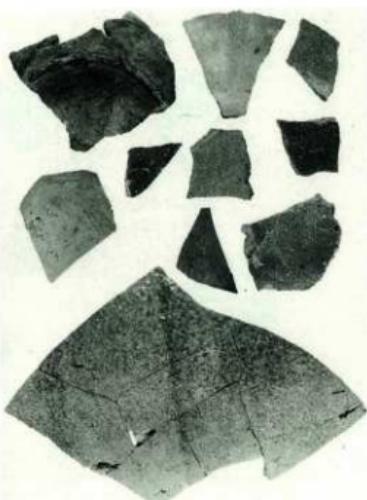
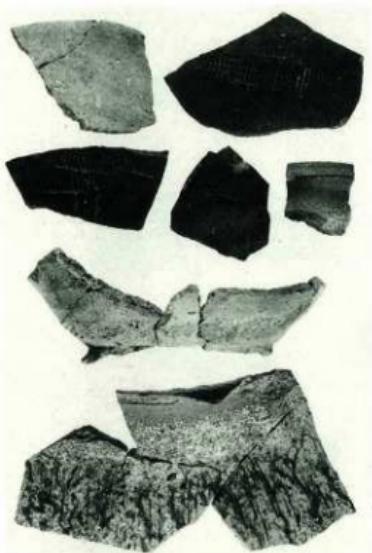


石棺・石室材

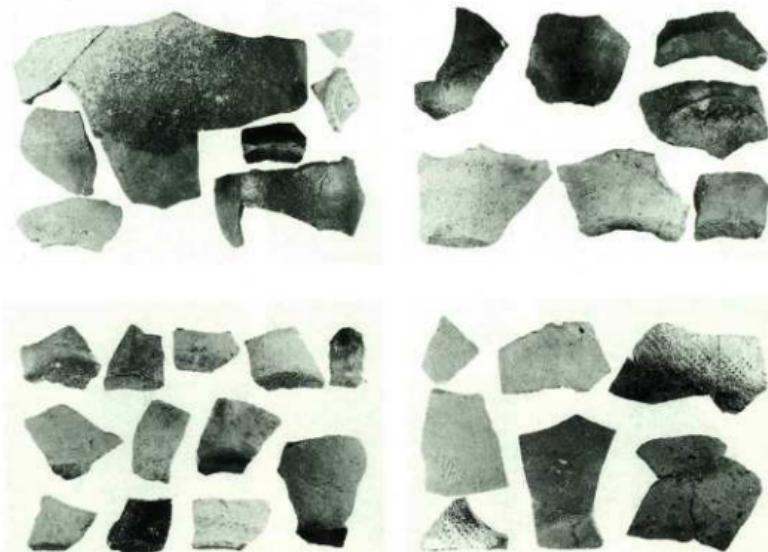


青 磁

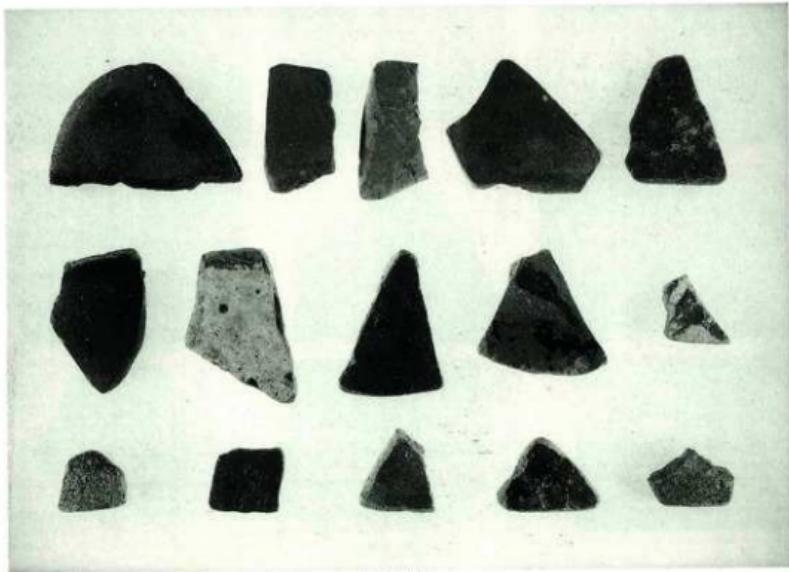
図版 32



中世陶器(1)

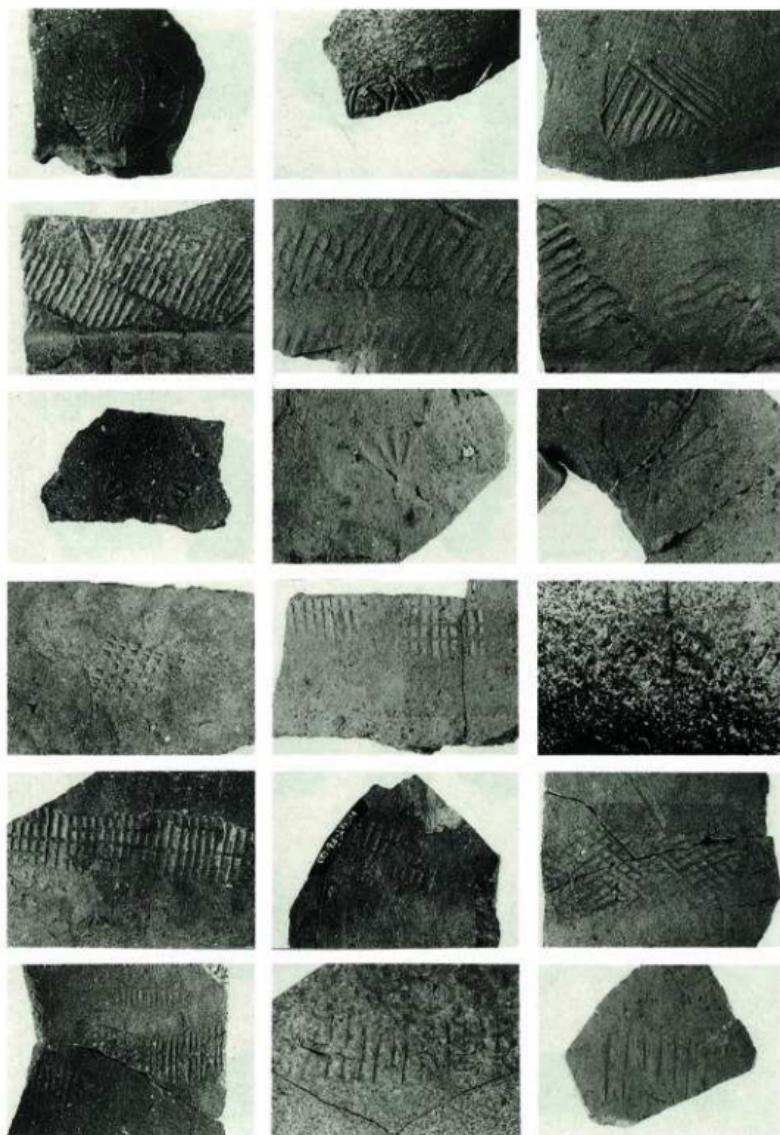


中世陶器(2)

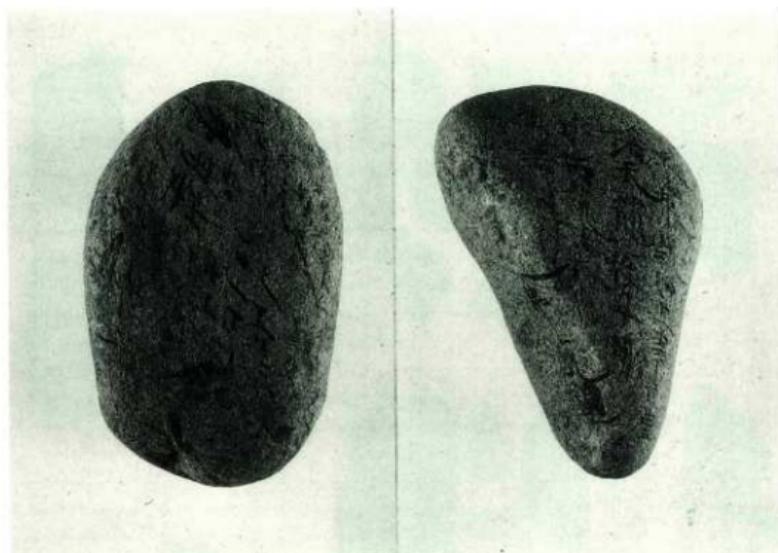


転用陶器片

図版 34



中世陶器押印

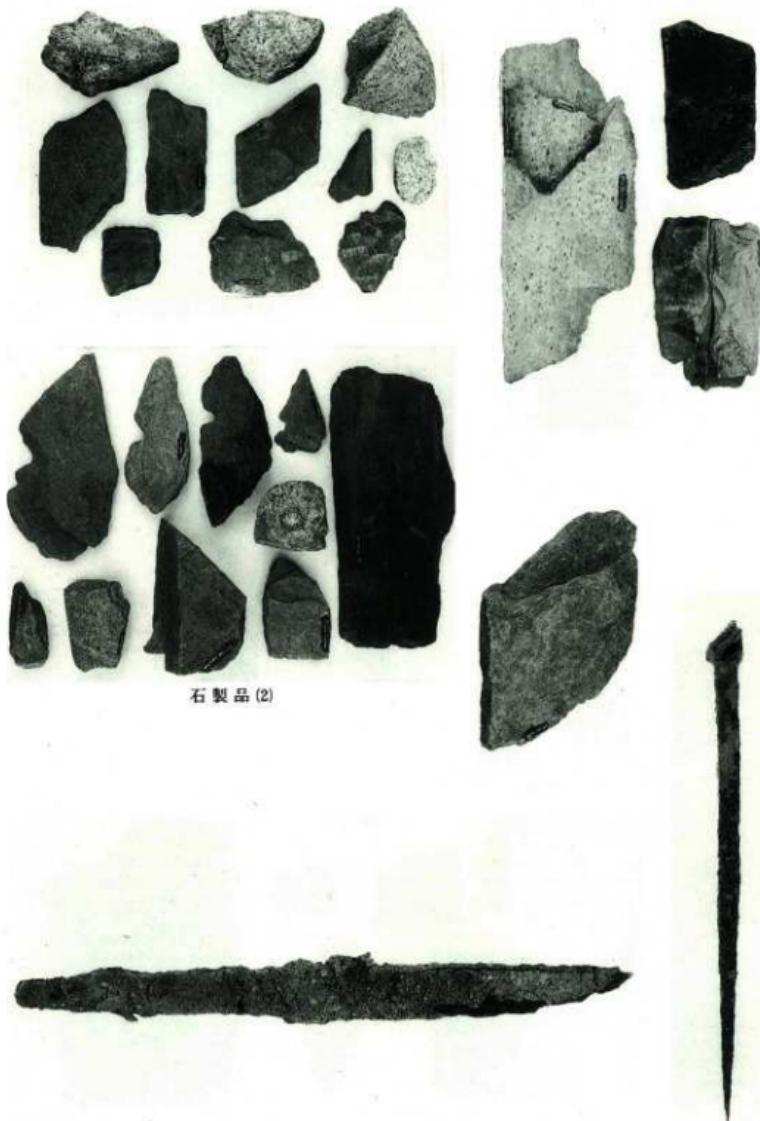


墨書石



石製品(1)

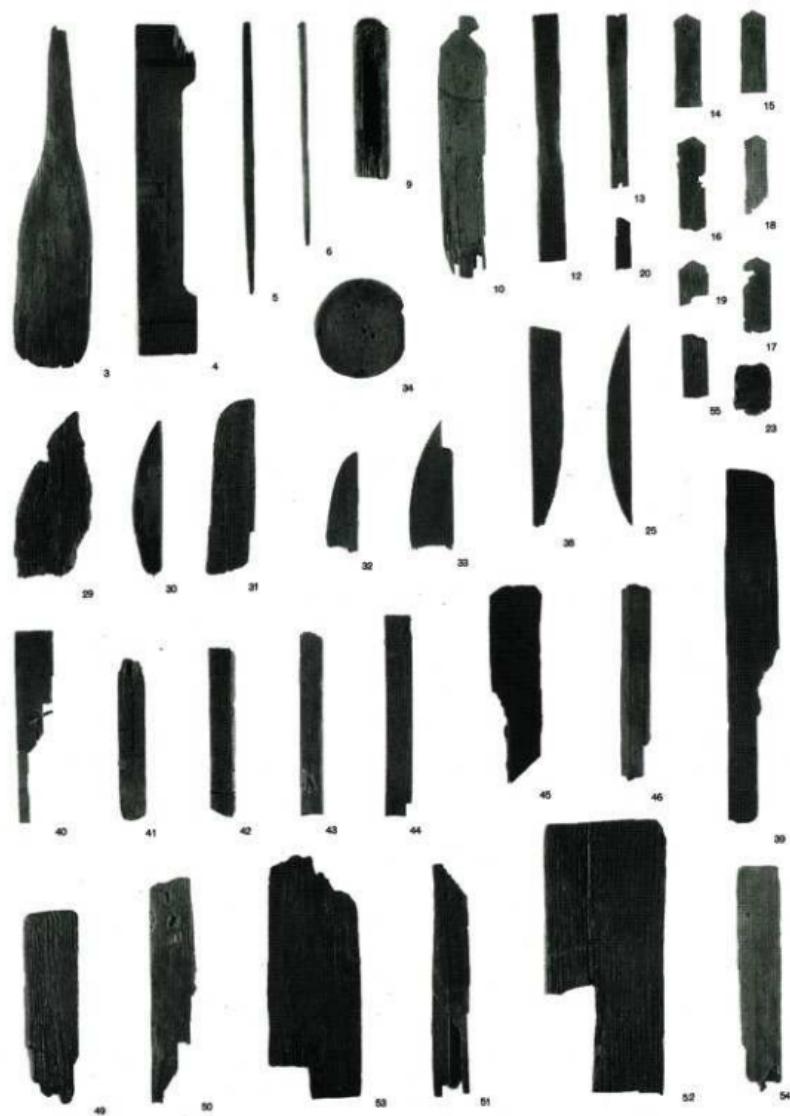
図版 36



石製品(2)

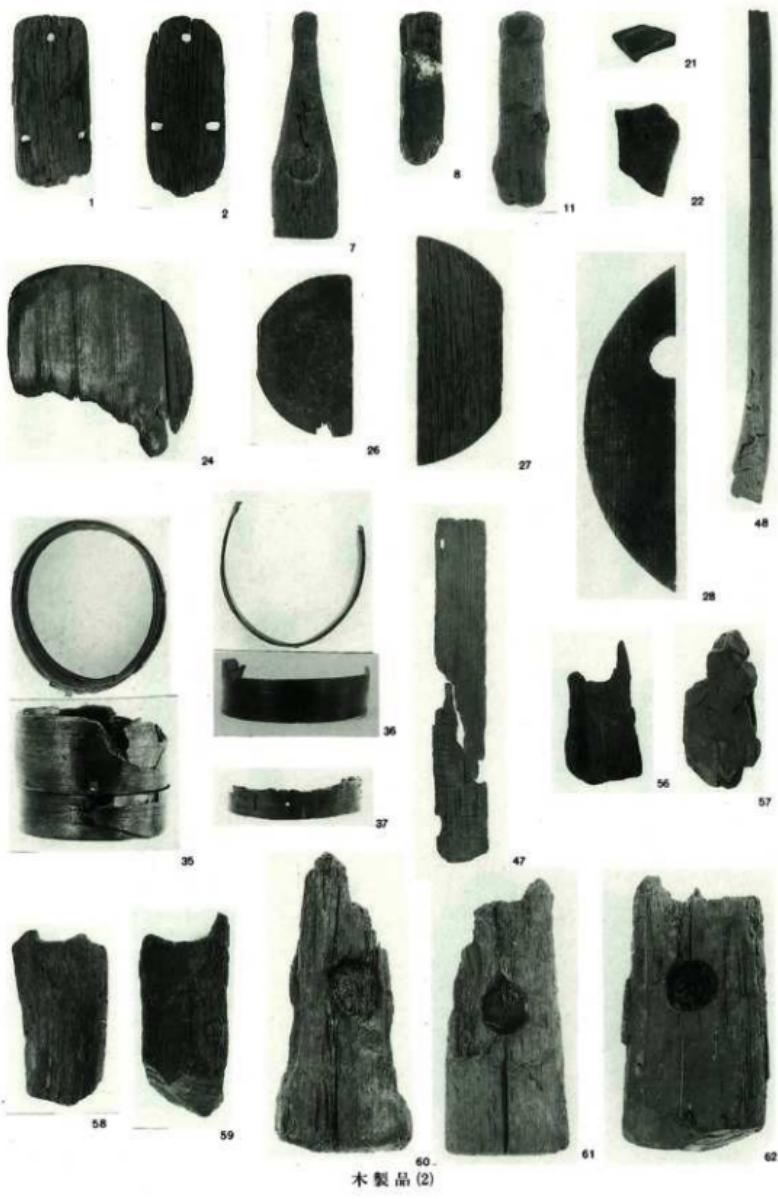
鉄製品

図版 37

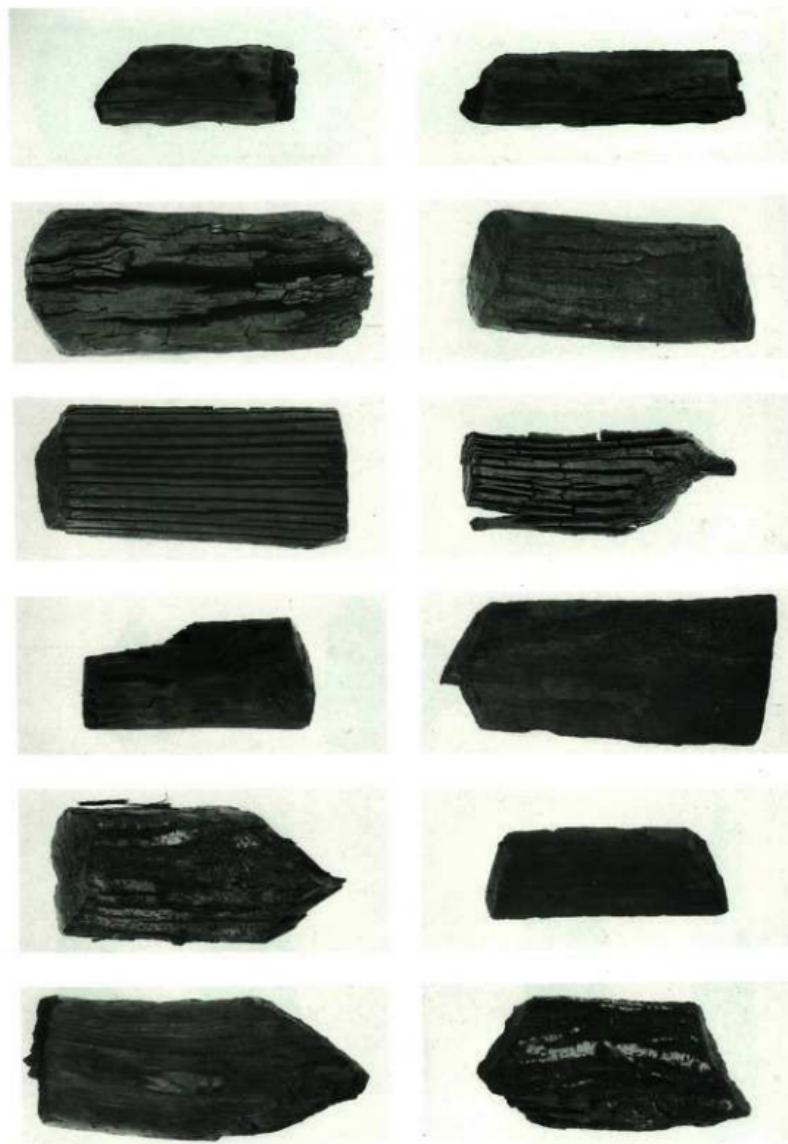


木製品(1)

図版 38



木製品(2)



木製品(3) 碕板

図版 40



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26

木製品(4) 础板・柱



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41
木製品(5)柱・杭

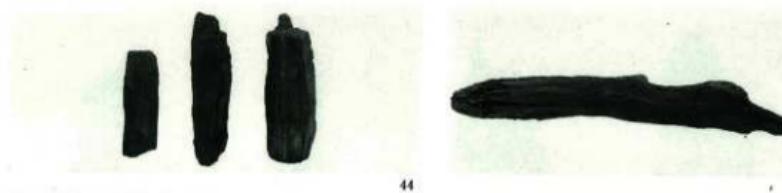


42



43

図版 42



44



46



木製品(6)加工材



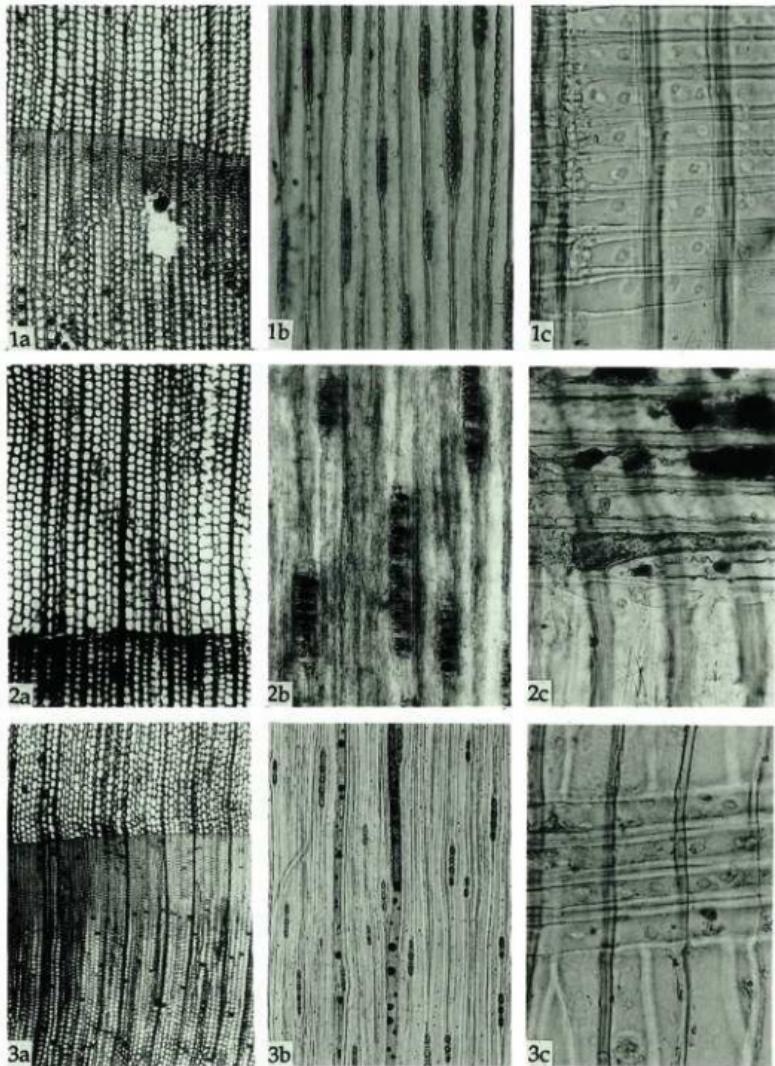
48



種子



その他の遺物

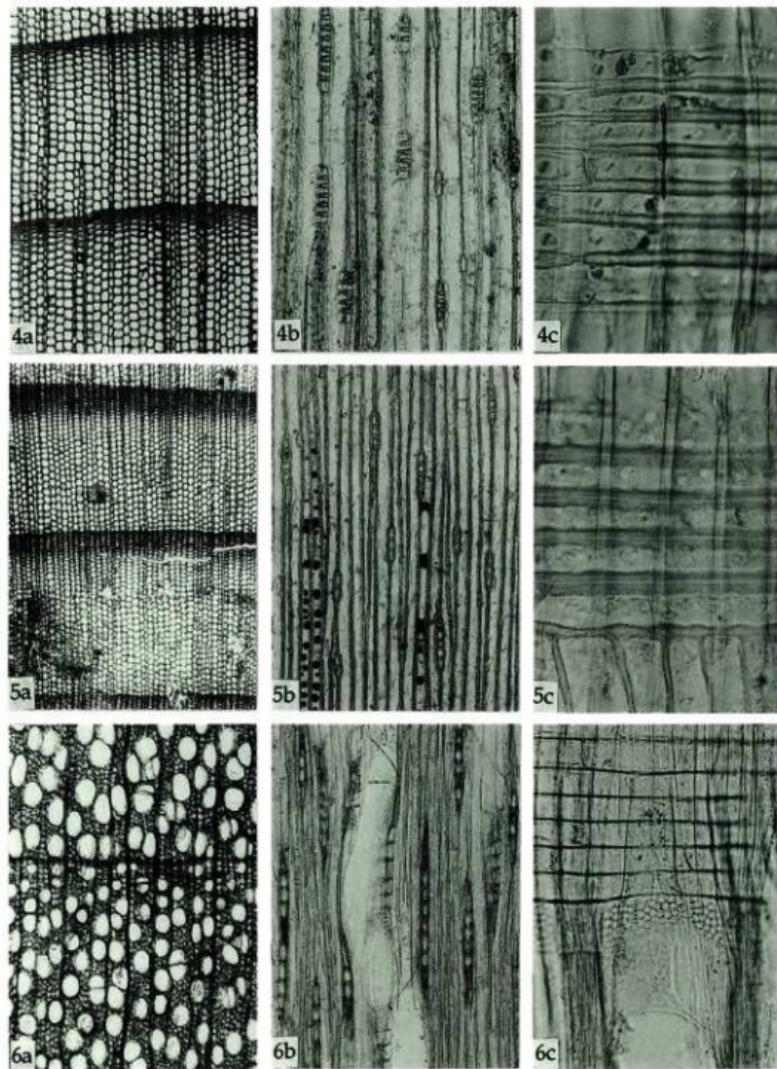


図版 1 小沼耕地遺跡出土木製品の顕微鏡写真(1)

1a-1c:モミ属(SOKF-38)、2a-2c:ツガ属(SOKF-26)、3a-3c:スギ(SOKF-69)

a:横断面×40、b:放射断面×100、c:接線断面×400

図版(付編) 2

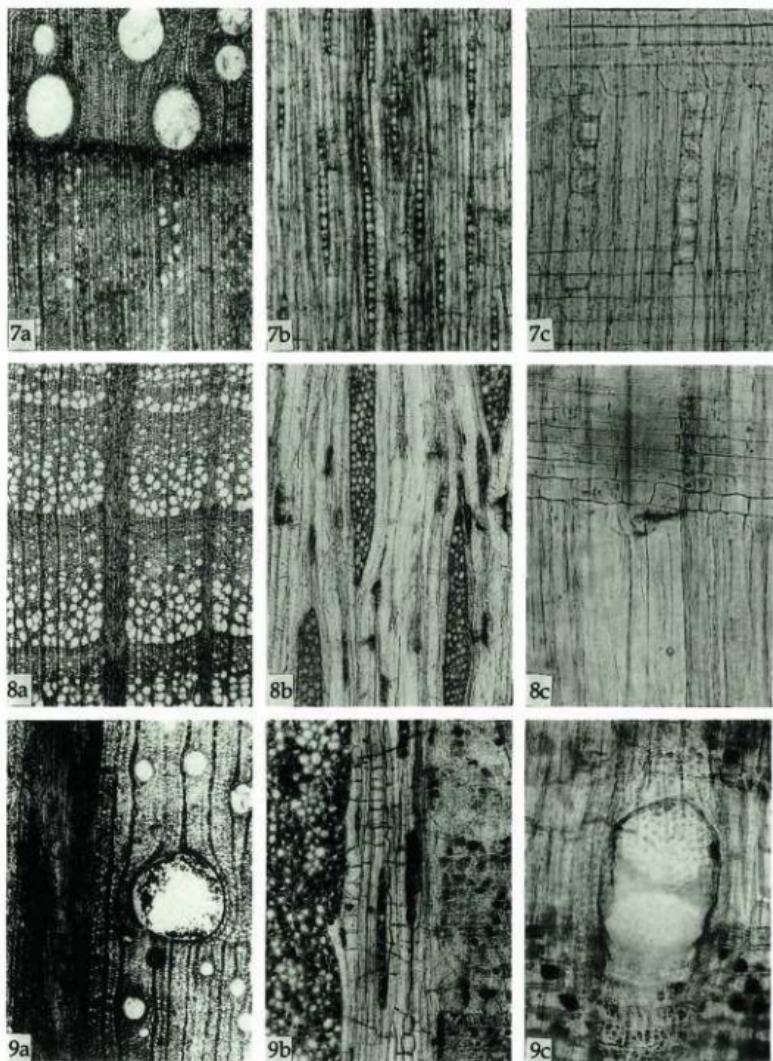


図版 2 小沼耕地遺跡出土木製品の顕微鏡写真(2)

4a-4c:ヒノキ(SOKF-62)、5a-5c:ネズコ(SOKF-22)、6a-6c:ヤナギ属(SOKF-72)

a:横断面 b:放射断面×100、c:接線断面×400(4,5)×200(6)

図版(付録) 3

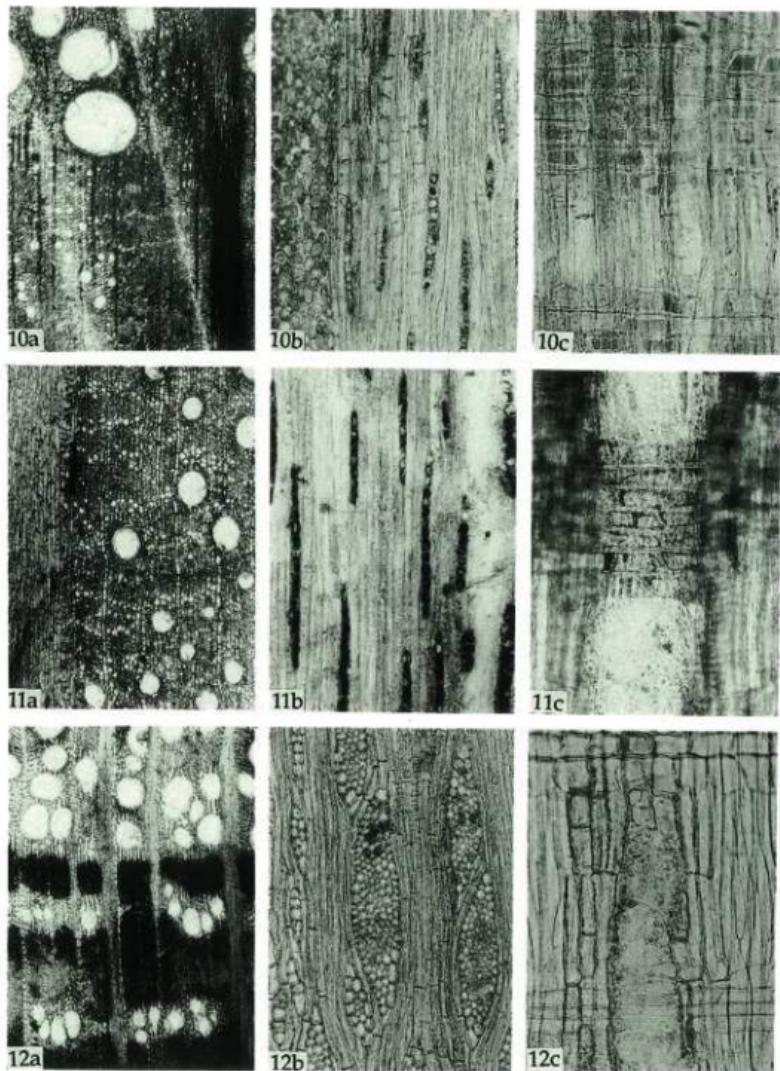


図版 3 小沼耕地遺跡出土木製品の顕微鏡写真(3)

7 a-7 c : クリ (SOKF-104)、8 a-8 c : ブナ属 (SOKF-96)、9 a-9 c : コナラ属クヌギ節 (SOKF-116)

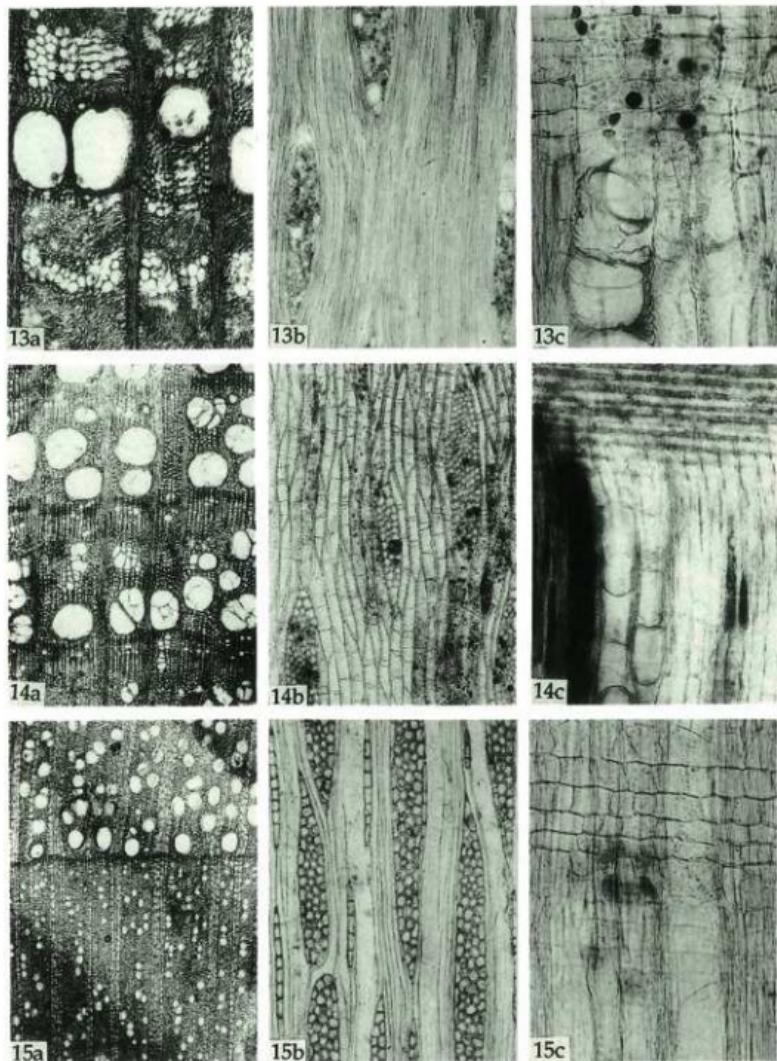
a : 横断面×40、b : 放射断面×100、c : 接線断面×200

図版(付編) 4



図版 4 小沼耕地遺跡出土木製品の顕微鏡写真(4)

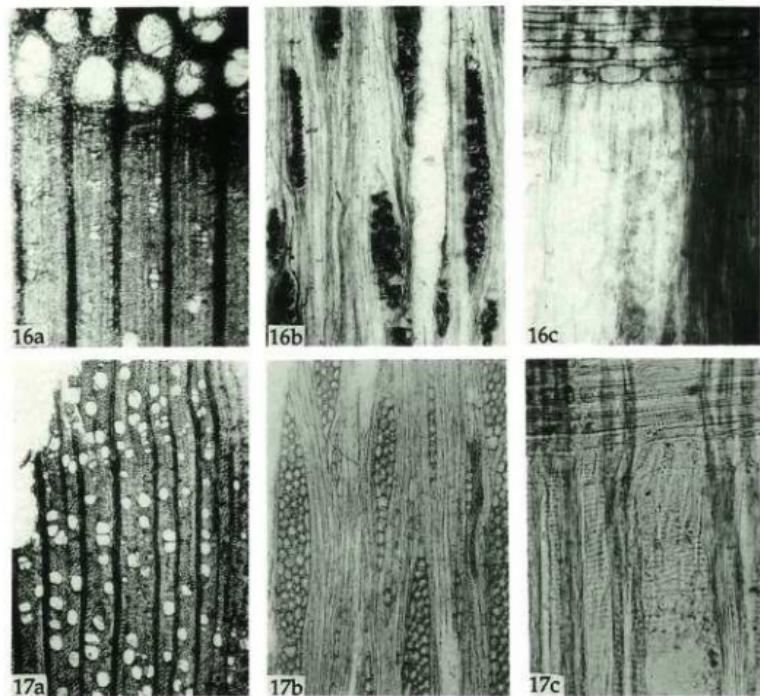
10a-10c : コナラ層コナラ節 (SOKF-66)、11a-11c : コナラ属アカガシ亜属 (SOKF-66)、12a-12c : エノキ属 (SOKF-24) a : 横断面×40、b : 放射断面×100、c : 接線断面×200



図版5 小沼耕地遺跡出土木製品の顕微鏡写真(5)

13a-13c : ケヤキ (SOKF-57)、14a-14c : ヤマクワ (SOKF-42)、15a-15c : モモ (SOKF-48)
a : 横断面×40、b : 放射断面×100、c : 接線断面×200

図版(付編) 6



図版 6 小沼耕地遺跡出土木製品の顕微鏡写真(6)

16a-16c : ヌルテ(SOKF-90)、17a-17c : 散孔材一種(SOKF-32)

a : 横断面×40、b : 放射断面×100、接線断面×200

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第100集
県立騎西養護学校関係埋蔵文化財発掘調査報告

小沼耕地遺跡

平成3年3月25日 印刷
平成3年3月30日 発行

発行 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884
電話 0493-39-3955
FAX 0493-39-3579

印刷 誠美堂印刷株式会社